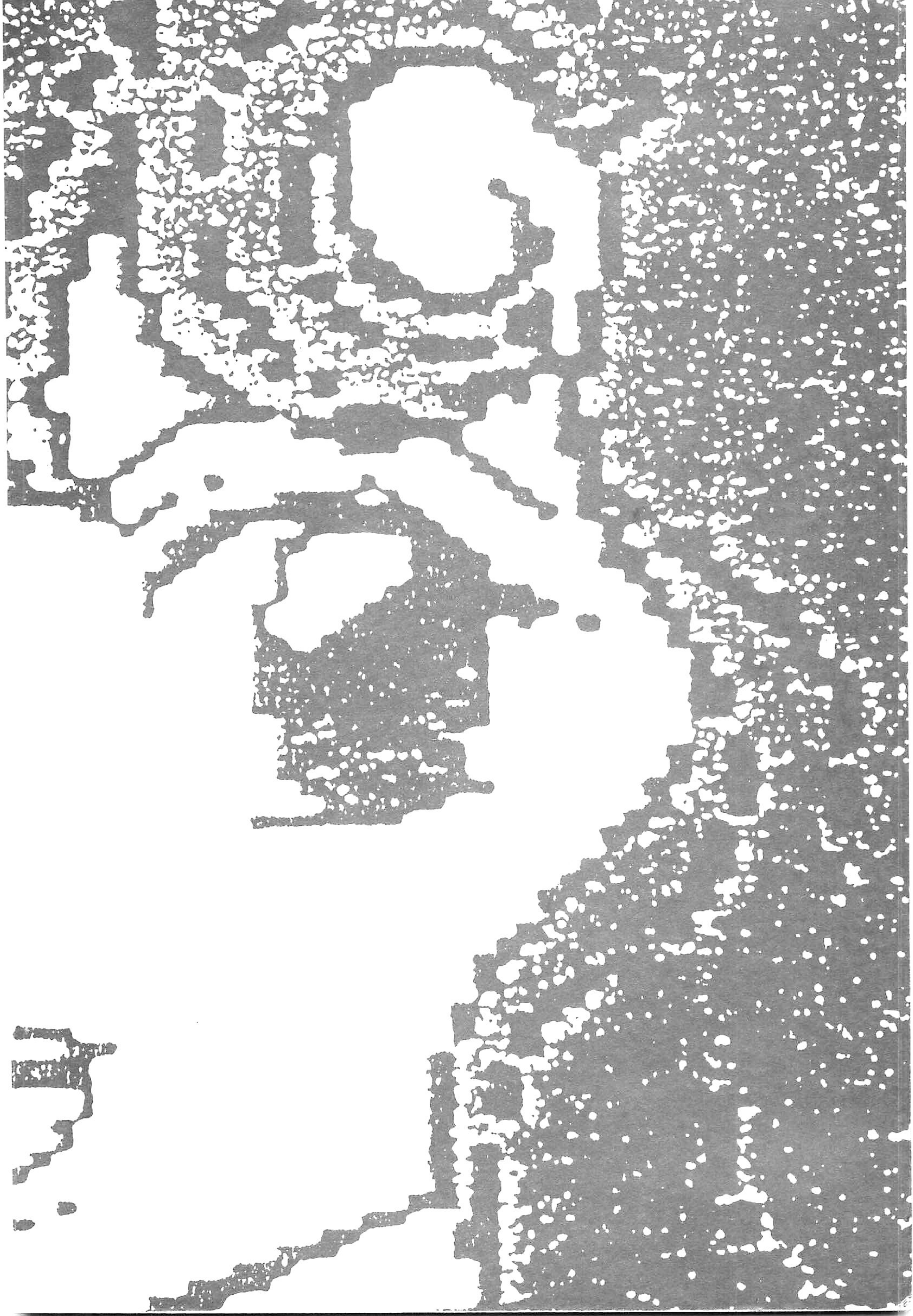
別冊宝島104

おたくの本

「おたく」は、'80年代が生んだ、高度消費社会を読み解くキーワードである！

ハッカー、ロリコン、やおい、デコチャリ、コミケ、カメラ小僧、ゲーマー、アイドリアンなどなどの知られざる生態！

別冊宝島104

おたくの本

「おたく」は、'80年代が生んだ、
高度消費社会を
読み解くキーワードである。

おたくの本

ハッカー、ロリコン、やおい、デコチャリ、コミケ、カメラ小僧、
ゲーマー、アイドリアン
などなどの知られざる生態！

INTRODUCTION

「おたく」を知らずして'90年代は語れない！

幼女殺人事件で突然大衆メディアに浮上した「おたく族」なる言葉。大新聞や週刊誌によると、「おたく族」とは「アニメやマンガのファンで、ファッションや恋愛に興味のない暗い青少年」ということになる。これを翻訳すると、「わけのわからないことをやっている、薄気味の悪い、社会的意味のない奴ら」ということになる。あなたもきっと、そう思っているはずだ。

だが、それは間違っている。徹底的に、間違っている。まず、

「おたく」とは「おたく族」ではない！

「おたく」の現場に近い人ならばけっして「おたく族」なんて言葉は使わない。「おたく族」というのは「太陽族」と同じくくだらない風俗用語にすぎない。

この本でやろうとしているのは、「おたく族」という若者風俗のルポなんかじゃない！

本来、「おたく」という語は、「おたく」によって作られ、「おたく」のなかだけで定着したものである。それまでのマニアとかコレクターという言葉では表現しきれない何かを自分のなかに抱えていた彼らは、それの呼び名を求めていたのだ。だから、

「おたく」とは、マニアとかコレクターのことではない！

現実のなかで生活するには働かなければならない。仕事をするには、価値観の違う他者とも関係しなければならない。世間の他者と接するためにはきちんとした服装をしなければ相手にされない。ましてや結婚するためには、完全に違う人類である異性ともうまくコミュニケーションしなければならない。このようにして生きている個人の趣味はただの趣味でしかない。マニアであっても、別の価値観を持つ他者と関係性をもてる人は「おたく」とは呼ばれたりはしない。

「おたく」は八〇年代以前にはいなかった！

世間(リアル・ワールド)の価値観を捨て、独自の世界に忠実に生きるには、かつては大変な孤独と生活の困難を背負う決意が必要だった。しかし、八〇年代の高度消費社会では、必要以上の豊かさが生きるための労力を軽くし、生活を重視する必然性がなくなった。価値観は多様化し、肥大した。そうして、同じ価値観を持つ人どうしの「場」ができていった。そのなかでは他者と関係する苦労をする必要はない。だから、

「おたく」は孤独ではない！

「場」と言ったところで、実際に会合を開いて人に会ったりする必要もない。テレビや電話、パソコン通信といったメディアが自然環境と化した今では、たとえ失語症であっても常に「世界」との連帯を感じていられるのだ。そして、

「おたく」は成熟しない！

誰もがみな青春の一時期に「世界」と自分の違和感に悩む。それを乗り越えることを成熟と呼ぶ。だが、自分と同じ幻想を共有する「場」があれば、その「場」こそが本当の世界であり現実なのだと思いこめば、成熟する必要がなくなる。この本では、ロリコンと呼ばれる「おたく」特有の嗜好が実は「男になりたくない」願望の現われだったことをつきとめた。架空の美少女という共同幻想の「場」を得ることで、少年たちは生身の女性と無理につき合う必要がなくなった。そして、成熟を不要にするこの「場」の磁力こそ、「おたく」の正体なのだ！

「おたく」とは、「場」にとらえられた状態を示す言葉だったのだ！

こうして構造(システム)は「おたく」を培養した。現代思想家たちはなぜか誰も「おたく」に気づいてないようだが、「おたく」こそはポスト生産社会を読む鍵(キー)に違いない。この本はそういう視点のもとに、「おたく」の記号生成と消費の現場に直接斬り込んだ日本で初めての試みである。心臓の弱い方は御遠慮ください。

さあ、いくぞ！

別冊宝島編集部

別冊宝島一〇四号　おたくの本

目次

INTRODUCTION
おたくを知らずして90年代は語れない！……2

PART❶おたくの現場

ゲーマー超人伝説
異能戦士たちの聖戦！……成沢大輔　10
ゲームセンターは前人未到の領域を目指すエリートたちの修験場だ！

アイドリアン
C級アイドルに人生を捧げた聖職者！……古橋健二　24
アイドルがヒトからモノになったとき、マニアが生まれた！

アクション・バンダー
汚れなき無差別テロ！……永江朗　40
NTTも警察も手玉にとるハッカーたちが集う謎の雑誌『ラジオライフ』！

カメラ小僧
パンチラと生写真に賭けた青春！……永江朗
鉄壁のガードを破り、不可能な盗写に挑戦するスナイパーたち！ 54

俺たちのデコチャリ
子どもたちの神殿！……松田融児
恐竜的進化の末、走る機能を失った自転車こそ至上の美だ！ 66

コミケット
世界最大のマンガの祭典！……米沢嘉博
十二万人を集め、億の金が動く同人誌即売会のインサイド・ストーリー！ 75

僕が「おたく」の名付け親になった事情……中森明夫
「おたく」命名第1号の原稿を全文採録！ 89

PART ② おたくという第三の性

ロリコン、二次コン、人形愛
架空の美少女に託された共同幻想！……土本亜理子 102

やおい族
美少年ホモマンガに群がる永遠の少女たち！……梨本敬法 116

キラキラお目々の氾濫……藤田尚 127
ロリコンとやおい族に未来はあるか!?……上野千鶴子 131

PART ❸ おたくという生き方

おたくに死す 殉教者・富沢雅彦へのレクイエム……千野光郎 138
アイドリアン日記 24時間フル回転のマニアック・ライフ 150
僕と右翼とプロレスおたく……岩上安身 154
彼女にキーボードがついてたら 一人ひとりを「世界」の支配者にする、パソコンという魔術……桝山寛 166
おたく少年は学校ではどうしているのか? 現役中学教師が教育の現場で見た「おたく」……河上亮一 178

注目すべきおたくたちとの出会い……みうらじゅん 184
泉麻人、京本政樹ほか、おたく道を究めた先達のお宅訪問!

おたくの事件簿……朝倉喬司 194
大雪山謎のSOSから練馬警官刺殺まで、平成の世を騒がせた「おたく」たち!

PART 4 おたくと高度消費社会

おたくの「場」を読む!……井筒三郎 208
雑誌投稿欄や伝言板に見る、おたくたちの裏のネットワークの磁力

代々木駅らくがきコーナーの謎 222

おたくの誕生……小浜逸郎 224
マニアはいかにして「おたく」になったか?

おたく産業は巨大なブラックマーケットだ!……河内秀俊 239

高度消費社会に浮遊する天使たち……浅羽通明

筆者紹介……272

表紙立体イラストレーション＝野崎一人
表紙コンピュータ・グラフィックス＝スタジオ・ハード
表紙撮影＝富山義則
本文写真撮影＝平山法行　本文写真提供＝共同通信社
本文イラスト＝永野のりこ＋征矢直行
表紙・本文デザイン＝中山銀士　協力＝加山佳津子
本文図版＝柳真澄

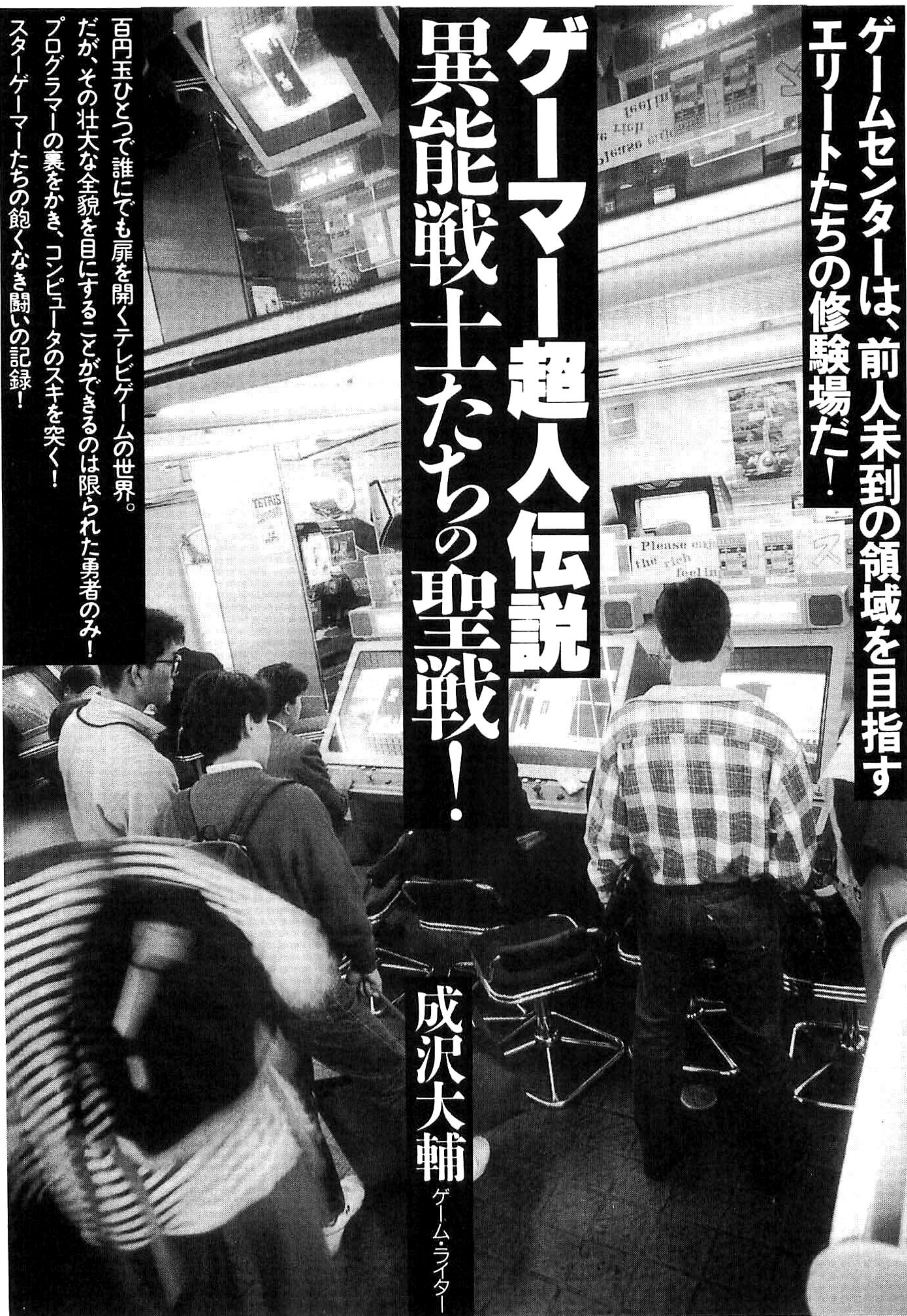
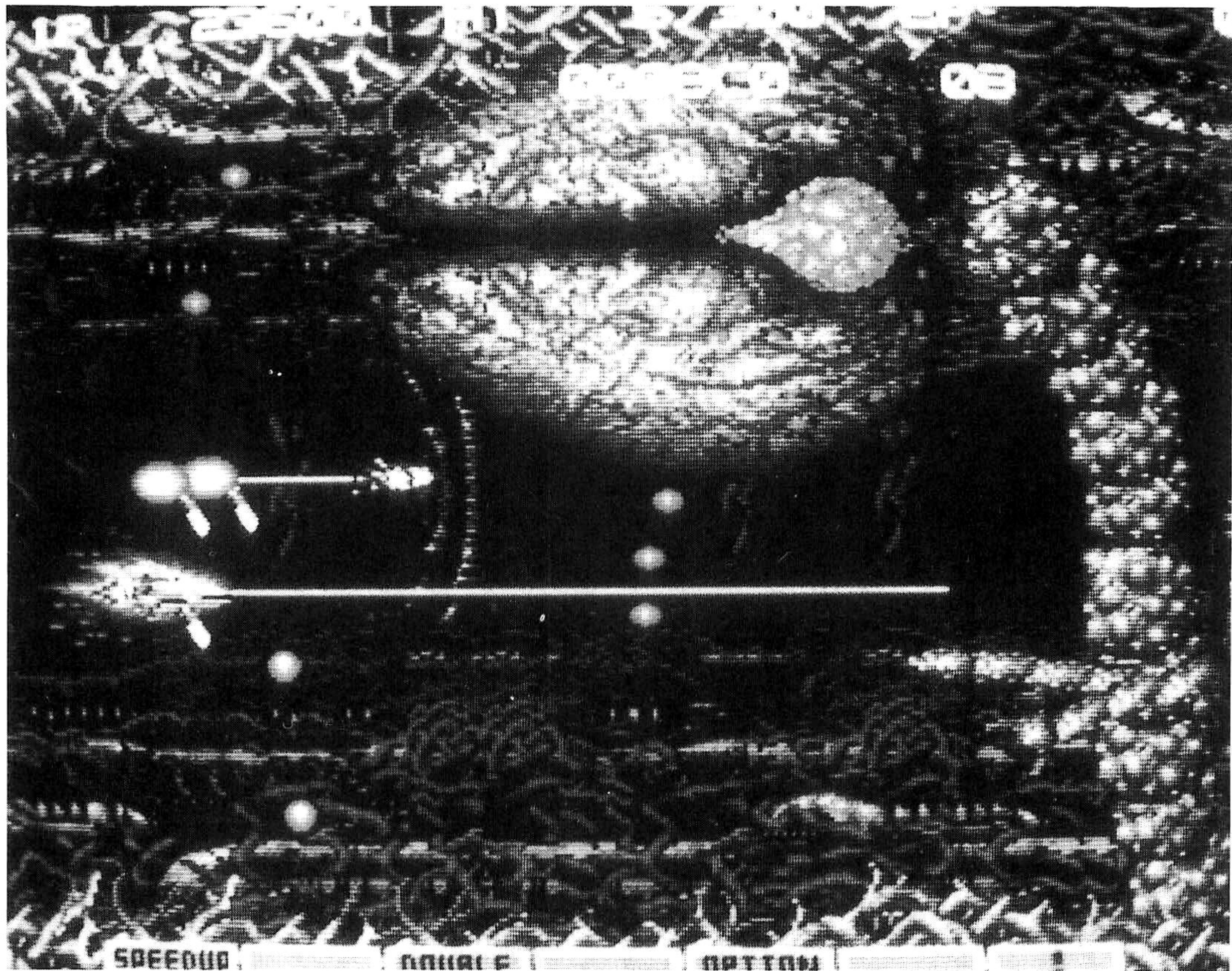
PART①

おたくの現場

ゲームセンターは、前人未到の領域を目指す
エリートたちの修験場だ！

ゲーマー超人伝説
異能戦士たちの聖戦！

成沢大輔
ゲーム・ライター

百円玉ひとつで誰にでも扉を開くテレビゲームの世界。
だが、その壮大な全貌を目にすることができるのは限られた勇者のみ！
プログラマーの裏をかき、コンピュータのスキを突く！
スターゲーマーたちの飽くなき闘いの記録！

最新のビデオゲーム「グラディウスIII」（コナミ）のグラフィック

「ゲーセンかぁ、俺も昔はインベーダーで五万点出したこともあったなぁ」

そんな気分でサラリーマンが、飲んだ勢いで繁華街のゲームセンターをのぞいたとしよう。

七、八年ぶりに見るテレビ・ゲームは驚くべき進化をとげていた。小学生の息子が自宅でやっているファミコンとも格段の差だ。グラフィックの色は、フルカラー。背景やメカニックは油絵のように緻密で、そして美しい。テレビ・アニメよりもはるかにリアルな世界だ。それに、入口近くにドンと置かれた巨大なゲーム機（筐体）は、数年前まで航空会社の訓練学校にしかなかった3D（三次元）コンピュータ・グラフィックスによるシミュレーター・マシンだ。

少年たちが自由自在に操るゲーム画面を横から見ていると、サラリーマン氏も、まるで、ハリウッド製のSFX映画のなかに入り込んでしまったような錯覚にとらわれる。そして「これはスゴイ」と、百円玉を取り出して手近のゲームの前に座る。反射

神経には自信がある。
　ところがだ。トリッキーに動き回る敵が圧倒的な数で押し寄せ、画面上には敵弾が散乱する。その数は昔やったインベーダーの数十倍！　サラリーマン氏の戦闘機のストックは三機ともアッという間に全滅する。
　茫然自失のサラリーマン氏を少年が無言で押し退ける。少年は敵と敵弾の複雑な動きをあらかじめ全部知っているかのように優雅に自機をコントロールし、無駄弾も撃たず、次々に難関をクリアしていく。それも無表情で。
　サラリーマン氏は気づいた。ゲームの壮大な世界には、選ばれた人間だけしか体験できない領域があるということに。
　しだいに他の少年たちがその周りに集まって来る。彼らも無言でゲームを見つめる。

◆◆◆◆◆◆◆ ゲームに目がくらんで

　一九七九年にタイトーから発表された『スペースインベーダー』は社会問題になるほど大ヒットした。シンプルさゆえに、ちょっと遊ぶだけで誰もが二、三面目まではクリアできる。そのとっつきやすさが、主婦から小学生までをゲームセンターに集めた。
　そして、こんなゲームファンのなかから、特殊なテクニックを考案する者が出現してきた。敵と隣接すると敵弾がすり抜けるバグを利用しての「ナゴヤ撃ち」はテレビでも紹介された。また、画面上方に時折出現するUFOを撃破するとき、二十三発目のビームで撃つとボーナス得点が高くなることを発見した。ゲーマーは、そのゲームを素直に遊ぶだけでは飽き足らず、プログラマーの裏をかく、という別の遊び方を見つけ出したのである。ゲーム・マニアの誕生だ。
　平石彰央（現在二十三歳）も友達に誘われてプレイしてインベーダーの魅力に取りつかれ、ブラウン管上に繰り広げられる宇宙戦争の新鮮な感覚にのめり込んでいった。
「死ぬほど好きだったわけじゃないけど、ずいぶんやったよ。半日かけて十万点を出したこともあったっけ」
『スペースインベーダー』での十万点といえば、当時のゲームファンからすれば夢のような数字であり、平石はヒーロー扱いされた。だが、彼は『スペースインベーダー』の衰退とともにゲームから離れていった。
「中学の後半と高校時代はプラモ作りや読書ばっかりしてた。ゲームセンターへはときどき行ってたけど、そんなに熱中したことはなかったなあ」
　やがて大学受験に失敗した彼は、高田馬場にある予備校に通うようになった。そこで彼の人生を変える一軒のゲームセンターと出会うのである。キャバレーとピンクサロンとファッションヘルスが立ち並ぶ「さかえ通り」という路地にある「ゲームブティック」という店だ。
　ゲームメーカー・ナムコの直営店であるこの店は、当時都内でも屈指のゲームマニアが集まる店として知られていた。店内には各ゲームの最高得点を記したハイスコアボードが貼り出され、マニアたちはそこに自分の名前が載ることを目指してプレイを

高田馬場ゲームブティック

していた。その異様な熱気に魅かれた平石が常連になるのに時間はかからなかった。のめり込んでいなかったとはいえ、ゲームの腕には自信があったし、何よりもそのハイスコアボードに名前を載せてみたかったのだ。午前中は予備校に行き、午後は授業をサボってゲームセンターで二~三時間プレイして家に帰るという生活が続いた。

「ブティックで知りあった仲間とゲームの話をしているのも楽しかったけど、仲間うちで自分よりうまいやつがいるのが癪だった。特に自分がこれだと思ってやりこんだゲームに関してはね」

そんな気持ちでゲームに臨んでいたから常人のはるか上を行くスコアを出して他の常連ゲーマーたちと争っていた。『ASO』というゲームではボタンを叩く右腕の肘から先を痙攣させ、腕の輪郭がぼやけるほどの速さで弾を撃ち、敵を一瞬にして全滅させる荒技を編み出した。『マイコンベーシックマガジン』なるゲーム誌のハイスコアコーナーで全国のトップスコアに輝いたこともあった。

「ブティックの近くの安い定食屋や立ち食いそばなどで食費を切りつめ、浮いたお金をゲームにまわしてたからねえ。ちゃんと予備校には行っててわりとまともな成績を取ってたから親も文句言わなかったし」

ゲームの世界にドロップアウト

そんな生活がほぼ毎日続いた。予備校での勉強とブティックでのゲーマーと二つの生活を使い分け、バランスをちゃんと取ったおかげで、二浪することなく武蔵工業大学に合格した。しかし、こんどは予備校時

代のようにうまくバランスを取ることはできなかった。建築科に入学したのだが、あまりにも授業が忙しく（？）ゲームセンターへは二日に一回程度しか行けなくなってしまったのだ。しかも実践的な授業を期待していたものの理論ばかりで、自分の望むクリエイティブな要素はなく、しだいに大学から遠ざかるようになっていった。そして一年後、大学を中退した。

「自分の考えていた授業と違いすぎていたからね。だからできなかったし、やる気もなかった。親はうるさかったけど、自分の道は違うところにあるって押し通しちゃった」

中退すると同時に巣鴨にあるゲームセンターで店員のアルバイトを始めた。「キャロット巣鴨店」という店で、「ゲームブティック」と同じくナムコの直営店である。予備校を離れてからブティックへは行かなくなり、巣鴨のほうへ行くことが多くなっていたからだ。

大学時代のアルバイトはファミコン誌のゲーム解析（ゲームを解き、攻略法を探す）などだったが、専属になって拘束されるのを嫌ったため、不定期にしか稼ぐことができなかった。しかしゲームセンターの店員となれば話は別だ。安定した収入があるうえに、仕事場にはゲームしかない。タダでプレイすることはしなかったが、早番のときは仕事が終わってそのままプレイ、遅番のときは仕事の始まるちょっと前に行ってプレイしたり、他のゲームセンターへ行ったりと、まさにゲーム漬けだった。おかげでゲームの腕は向上し、レーシング・シミュレーターものの『コンチネンタルサーカス』や『パワードリフト』などで全国トップの座を射止めた。

今はゲーム関係会社の社員になったが、自由になる時間がわりに多く、アルバイトの頃と変わらぬ情熱でプレイし続けている。酒はほとんど飲まない。タバコも吸わず、恋人をつくる時間などまったくない。日夜仲間を上まわるスコア、全国トップのスコアを出すためにひたすらプレイし続けているのだ。

「ゲーム以外の趣味はとりたててないなあ。ちょっと麻雀やるぐらいかな。でもゲームやってるほうがいいね。新しいゲームが出るでしょ、その中身が見たくなるんだよね。それがいいゲームで、奥が深ければ深いほど知りたくなる。開発者が出してきた挑戦を受けて立つといった気持ちかなあ。負けると悔しいから。あと全国トップのスコアを出すというのも大きな目標だよ。やっぱり気持ちいいよ、全国トップは」

そんな簡単に全国トップが取れるものだろうか。私はそのコツがあるのかどうか、ストレートに聞いてみた。

「もちろんいろんな条件があるよ。まず第一に自分に究められるゲームであるかどうかが絶対条件だね。そして全ステージのクリアを目指す。クリアしなくちゃハイスコア争いなんてできやしないから」

平石は「アウトラン」という入れこんだゲームでは一日一万円をつぎこんだこともあったが、最終的には全国トップを取った。

「将来のことはあんまり考えたことがない

なあ。ゲームを作ってみたいとか、営業のほうの仕事もやってみたい気はするけど今はやってみたいとは思わないしね。もっともっと熱中してゲームがやりたいし、やりたいことさえできればそれでいいからね」

二十代半ばになるとゲーマーとしての能力は落ちてくるという。反射神経や集中力が追いつかなくなってくるのだ。平石もあと何年かすれば自分の肉体的限界からゲーマーを引退するときが来るかもしれない。そのとき平石はどんな道を歩むのか……。

マニアを狂喜させた「隠れキャラ」

平石が本格的にゲームにのめり込む二年前の一九八三年、ナムコが『ゼビウス』という画期的なゲームを発表した。素晴らしくリアルで美しいグラフィックも当時としては驚異だったが、『ゼビウス』のポイントは、その多重構造性にあった。

まず「隠れキャラ」。『スペースインベーダー』のプログラマーは、二十三発目にUFOを撃つと高得点になるという規則性に気づく者が出てくることをまったく予想していなかったというが、『ゼビウス』はそれを意識的に仕掛けた。何もない地表のあちこちに秘密のキャラクターを隠したのである。もちろんそんなことは少しも宣伝せずに。

偶然、隠れキャラを発見したゲーマーは狂喜した。それが口コミで（ゲーム専門誌はまだなかった）またたく間に広がり、全国のゲーマーは隠れキャラの場所や出し方を熟知しようと、『ゼビウス』にのめりこんでいった。

さらに、もうひとつの多重性とは、そのゲームの背景に「物語」が隠されていることだ。『ゼビウス』の開発者は当時ナムコの社員だった遠藤雅伸。『ガンダム』のスタッフが生んだSFアニメ映画『伝説巨神イデオン』に触発された彼は、『ゼビウス』制作の前に、まずゼビウス星の物語を創作した。その星の文化や政治、言語体系までを完璧に設定し、壮大なるゼビウス世界を構築したのだ。そして、その物語のなかの一エピソードが、『ゼビウス』というゲームである。

そうした背景世界の構築度の高さが、純粋なシューティング・ゲームとしての完成度を高くしていた。同じ『ゼビウス』でも、その表層だけで遊ぶ普通の客と、その背景や隠れキャラなどの「裏世界」を知るマニアとでは別のゲームをしていることになる。しかも、その両方を満足させたのだ。

かくして『ゼビウス』は『インベーダー』以来の大ヒットとなり、細野晴臣は『ゼビウス』のBGMをレコード化し、中沢新一は「ゼビウス論」を著すなど、文化人までをまきこんでいった。

そしてその頃、マニアの間には一冊の同人誌とひとつの噂が流れた。

ありえない終末を求めて

田尻智（現在二十四歳）は『ゼビウス』の登場が自分の青春の大きな部分を占めて

いるという。それは『ゼビウス』で田尻が味わった悲哀が大きな要因になっているからだ。

　中学生の頃、『スペースインベーダー』と出会った彼は、その魅力にどんどん引き込まれていった。もともと親に反発して家には居たくなかったのと、薄暗い中に光るブラウン管が好きだったという田尻だが、『インベーダー』の出現によりゲームマニアの道に入った。

「親に反発してゲームセンターばかり行ってたもんだから不良少年扱いでしょ。で、成績は悪くなかったけど素行不良だったから学校からもよく思われてなかったし。体制や権力側から睨まれていたんだよね」

　田尻のゲームマニアとしての資質は変わった方向に向いていた。ハイスコアを出すためだけの一過性のプレイだけでなく、自分のプレイしたゲームを体系的に分類するのである。

「僕はいろんなものを整理してコレクションするのが好きなんですよ。だからインベーダーの場合でも、当時いろいろなメーカーが出した五十種ほどのインベーダーを全部プレイして、『あのメーカーのインベーダーはUFOの出るパターンが違う』とか『あのメーカーのはよくない』なんていってましたね」

田尻智が創刊したゲームフリーク

　もちろんプレイの腕もかなりのもので、特にアメリカ製の『ミサイルコマンド』というICBMを迎撃するゲームなどはいつまでたっても終わらないほど究め尽くしてしまったほどだ。

　そのようにしてゲームマニアの道を進んでいった田尻の前に『ゼビウス』が登場したのは、田尻が『ゲームフリーク』というゲームミニコミ誌を創刊した頃だった。田尻も『ゼビウス』の神秘的な魅力のとりこになり、一千万点のカウンターストップスコア（これ以上カウントできない限界最高点）までやり込んだ。その頃である。田尻が「ゼビウス」に関する不思議な噂を聞いたのは。

〝『ゼビウス』にはあるパターンにそってプレイしていくとゼビウス星が出現し、そこへ進むとゲームは終局へと向かう〟。

　これは根も葉もないただのデマであり、ほんとうは最終16エリアをクリアすると7エリアに戻り永遠にループしてゲームは続

くのだが、リアリティのあるその噂を信じ込んでしまった。『ゼビウス』の持つ神秘性も多分に手伝ったのだろう。

田尻の終末探しが始まった。自分であらゆるパターンでプレイして探し求めるだけでなく、ゲームセンターで仲間たちに声をかけ、終末に関する情報について聞き回ったのだ。その結果、『ゼビウス』に終末が存在するという噂は二週間足らずの間に全国のマニアの間に広まってしまった。あるはずのないゼビウス星を求めてマニアたちはプレイし続けた。だがプログラムされていないものが出てくるはずはない。そのうちマニアたちは開発メーカーのナムコに電話して、終末に関する情報を問い合わせるようになった。もちろん遠藤雅伸の耳にも入った。

自分の作ったゲームが、ありもしない噂をたてられていることに我慢ならなかった遠藤は開発者のメッセージとして『マイコンベーシックマガジン』の付録・「スーパーソフトマガジン」に反論を掲載した。

〈あるゲームフリーク（この場合はゲームマニアの総称である）が「ゼビウス」に終末があるなどといっている。そんなものは断じて無く、私は非常に迷惑している。変な噂には惑わされないで下さい〉。

その記事により終末探しは鎮静化したが、田尻は噂を流した張本人にされてしまった。彼とて被害者の一人なのに。

スターゲーマー「うる星あんず」

『ゼビウス』の噂が流れ始める数カ月前、一冊の同人誌があるゲームマニアの手によって作られた。『ゼビウス　一千万点への解法（通称ゼビ本）』と受験参考書風のタイトルがつけられたこの同人誌は、現在のゲーム攻略本の先駆けとなったものである。著者は大堀康裕と中金直彦の二人。大堀は平石が「ゲームブティック」を知る前からの常連マニアで、ハイスコアボードにはつねに何らかのゲームでその名が記されていたスターゲーマーである。ゲームネームは「うる星あんず」。当時の人気アニメ『うる星やつら』の大ファンだったからだ。

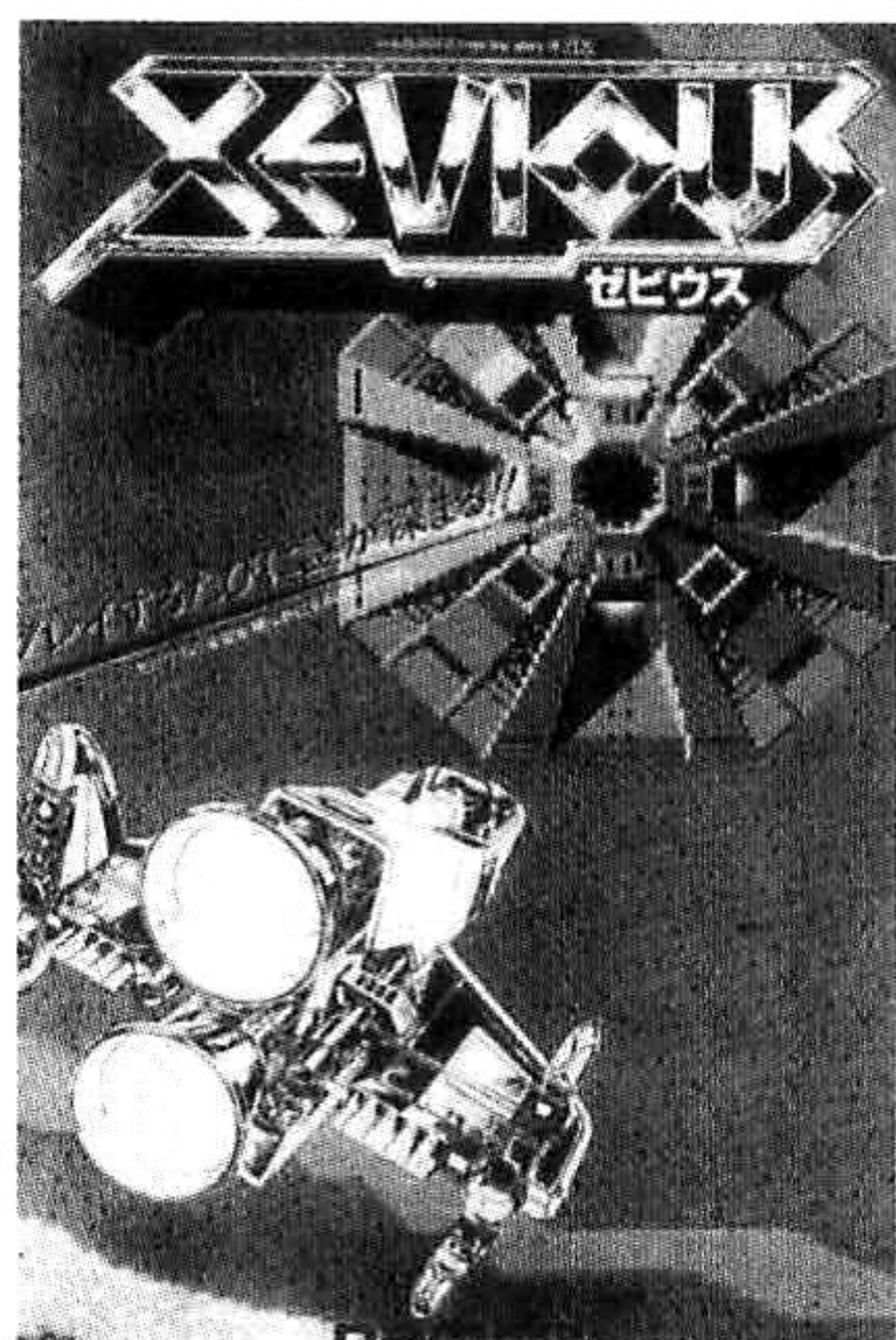
大堀も『ゼビウス』の魅力に取りつかれ、一千万点のカウンターストップスコアを目指してプレイしていたマニアの一人だったが、誰よりも早く到達してしまった。ほかのマニアたちは大堀に敬意を表し、クリアの教えを請うようになった。その数があまりにも多かったので、これを同人誌にすれば売れるに違いないと判断したのだろう。

ゼビ本はゼビウス攻略に悩むマニアたちの間で絶賛された。敵キャラの名前と細かな解説、隠れキャラのソルやスペシャルフラッグの出し方、エリア別の攻略インフォメーションマップ、ＢＵＧなど、詳細を究めていた。最初のうちはコピーを綴じただけの薄っぺらなもので、大堀が出入りしていたゲームセンターに置いたのだが、常連がコピーを取って流通させてしまったのでオフセット印刷で出し直すことにした。オフセット版の製作は田尻の「ゲームフリーク」。『ゼビウス』の噂騒動がマニア間に広

がる前のことであり、「ゲームフリーク」の活動が軌道に乗り始めた頃だった。

オフセット版ゼビ本は大ヒットした。全国各地から通信販売の申し込みがひっきりなしに寄せられ、マニアたちがつねにゼビ本を横において『ゼビウス』をプレイしている姿が各地で見られた。売れた総部数は五千部以上、大堀はその利益で「旨いものをいっぱい食べた」とのことである。やがてゼビ本は細野晴臣の手にも渡ったというのだから、その完成度の高さは推して知るべしだろう。

田尻と大堀、二人のトップクラスゲーマーの連携はゼビ本だけだった。噂でダメージを受けたとはいえ、田尻の作った同人誌はゼビ本が参考になったのか、きわめて信頼性の高い攻略本としてその名を広めていった。会誌に見られる内輪性を排除した実用に耐えうる同人誌作りで「ゲームフリーク」は全国区の人気同人誌の地位を確立した。

反対に大堀は自分の腕を生かしてメーカー内部の人間と仲良くなったり、ほかのマニアたちを自分の仲間に引き込んだりと、もっぱら内輪方面に人脈を広げていった。

攻略本のはしりとなった同人誌「ゼビ本」

こんなエピソードがある。「ドルアーガの塔」というゲームでの出来事だ。『ゼビウス』を超えるものを、と期待されていた遠藤雅伸が満を持して発表したのが『ドルアーガの塔』だ。これは『ゼビウス』からシューティングの要素を排して、隠れキャラなどの「裏ワザ」だけを強調したものだった。つまり完全にマニアだけに向かって突きつけた挑戦状なのだ。

主人公ギルを操作して六十階建ての塔を騎士や魔法使いなどの敵を倒しつつ昇っていくゲームだが、各階に隠された宝物を取っていかないと五十九階にいる敵のボス、ドルアーガを倒すことはできない。この宝箱の出し方が異常なのだ。特定の敵をすべて倒すなんてのは簡単なほう。ジョイスティックを右方向に三回まわすとか、1プレイヤースタートボタンを押すとか、常識外れの隠し方がなされているのである。このため、一般のファンはほとんど手を出すことができなかったが、マニアたちはクリア一番乗りを目指してプレイし続けた。みごと一番乗りを果たしたのは都内の大学生六人のグループで、期間は一カ月、かかった費用は二十万円（百円で二千回分）に及んだ。客をマニアだけにしぼっても充分商売になったということか。

大堀も一番乗りはならなかったが、せっせとクリア目指してプレイに励んでいた。やっとクリアした頃、まだ他のマニアたちは苦しんでいた。ある日、大堀がプレイしているのを見たマニアたちがそのプレイを見つめていたときのことである。クライマックスを迎えもうすぐラストというとき、

「テトリス」（SEGA）

大堀はいきなり二面を切り取った段ボール箱（蛍光灯の反射よけにゲームセンターが用意したもの）をブラウン管の上にかぶせてしまったのだ。ギャラリーたちにクリアの方法を盗まれないようにだ。段ボール箱を外したときにはすでにエンディングメッセージが流れていた。驚くマニアたち。しかし負けてはいられない。次回に大堀が段ボールをかぶせたとき、彼らはテープレコーダーをスピーカーに当ててプレイ音を録音した。そして、その音から、何歩歩いたとか、剣を出して攻撃しただとかを推測したとのことである。

事実、大堀のプレイは人に見せてお金を取るほど鮮やかで、私が見た『ダライアス』というシューティングゲームでは、いちばん最後の敵のボスとの戦いのときにわざとやられて自機の残りを最後の一機だけにして、せっかく増やした武器やバリヤーをすべて捨てて裸になったうえでやっつけるという演出を見せてくれた。その腕が買われて『ファミッ子大作戦』なるテレビ番組に「師範代大堀」という名前でレギュラー出演していたこともある。

現在、田尻はゲーム関係のライターだが、長年ゲームとつきあってきた知識とノウハウを生かして作ったファミコンゲーム『クインティ』がヒットし、ゲームデザイナーとしても活躍中である。大堀もゲーム攻略記事のライターだったが、今はあるゲーム関連会社に入り、そこでビデオの制作やゲームの開発に携わっている。同世代の方向性の異なるスターゲーマーが二人とも作る立場に回ったとは、何とも興味深い。

「黒の試走車（テストカー）」を狙え

平石、田尻、大堀の三人はマニア間のネットワークを大切にするという点で一致している。ゲームマニアは他人より少しでも早く新しいゲームの情報を仕入なければならない。だからゲームマニアは特定の誰かと反目することはあっても、全体からつまはじきにされるようなことを嫌う。

田尻のサークル「ゲームフリーク」でこんなことがあったそうだ。地方の見ず知らずのマニアから電話があり、ゲームフリークの事務所に遊びに行きたいという。田尻は相手の話しぶりから何となく暗そうなやつだな、と思ったが、まあいいだろうとOKの返事をした。果たしてそいつはやって来た。

「来たのはいいんだけど、何にも話をしないの。話しかけてくれれば答えようと思っていたんだけど、事務所に上がって名前を言ってから一カ所にずっと座ったきり黙りこくっちゃって、しかも座った場所を動かないの。暗いやつだな、と思ってほっといたんだけど何時間かそのまま黙りっ放し。ようやく帰るってんでほっとしたら、帰り際に『また来ます』だって。あんときは心底もうカンベンしてくれと思ったね」

うまく人とコミュニケーションが取れなくとも、ゲームの情報は欲しがるマニア心理の極端な例だろう。

しかし情報の流通には弊害も隠されている。特に新製品情報である。

通常、ゲーム会社は新製品の発売前に「ロケテスト」と呼ばれる試験を行なう。発売前のゲームを一定期間、ゲームセンターに設置してプレイヤー数、売り上げ、プレイ時間のモニターを行なう。そして、その結果によってゲームデザインの変更や、難易度を決める。ロケテストのゲームは発売済のゲームと違い、タイトル画面にメーカー名が入っていなかったり、インストラクションカード（操作方法などの説明が書かれているカード）がカラーコピーだったりするのですぐ見分けがつく。

マニアたちはロケテストの情報を特に大事にする。理由はひとつ。ロケテストでプレイしておけば、正式発売されたときに他の人よりも早くクリアすることができるからだ。新しく入ってきたゲームを他人は四苦八苦してプレイしているが、自分はこんなの当然だよという顔をしてクリアする。ギャラリーの視線が自分に集まるのを感じる。マニアにとって至福の瞬間だ。

だが、ロケテストで究めてしまうプレイヤーがいたらメーカー側はどうするだろうか。ゲームの難度を上げてしまうだろう。かくして一般ファンにはとてもついていけない難しいゲームになってしまう。このパターンは数多く、かつては田尻もやってしまったことがある。

「『テディボーイブルース』ってゲームが神保町のゲームセンターでロケテストされたんですよ。そのときに、メーカーの人間がチェックしてるのにクリアしちゃったんだけど、その後新発売されたら難易度が上がっているんだよね」

大堀も何度となくやったという。

マニアとメーカーのいたちごっこでゲームはどんどん難しくなっていくというわけだ。

勝負は限界最高点（カウンターストップ）からはじまる

『テトリス』というゲームをご存じだろうか。もとはソ連製のパズルゲームで、パソコンから火が付き、ファミコン、ゲームセンター用ゲームへと移植された最近の大ヒット作である。七種類のブロックを落として隙間を埋めていくという、きわめて単純なゲームだ。しかし単純さゆえに実に奥が深く、マニアと一般ファンの心を同時につかみ、ここ数年で最高のヒット作となった。誰でも考えつきそうなのに、誰も作ら

なかった。ソ連のゲームが、グラフィックやサウンドなど表面上の派手さばかり追いかけていた日本のゲーム界に大きな波紋を投げかけたのである。

『テトリス』のすごさは『インベーダー』以来十年ぶりにサラリーマンたちを引き込んだことにある。たいていのサラリーマンは『テトリス』を始めると一コインだけで席を立つことはない。ゲームオーバーになるたびに次々とコインを投入していく。他のゲームでは見られない光景だ。客は新しいゲームが出ればいちどはプレイしてみるものの、自分には向かないと見れば二度とプレイすることはない。ほとんどのゲームがそのようなマニア重視のものばかりのなかで、『テトリス』は明らかに異なっていた。ステージ1は普通の人たちにも遊ばせてあげるけど、ステージ2以降はマニア専用だよ、という態度のゲームではなく、ずっとプレイしててもいいけどすこーしずつ難しくしていくから頑張ってね、という優しい声が聞こえてくる。

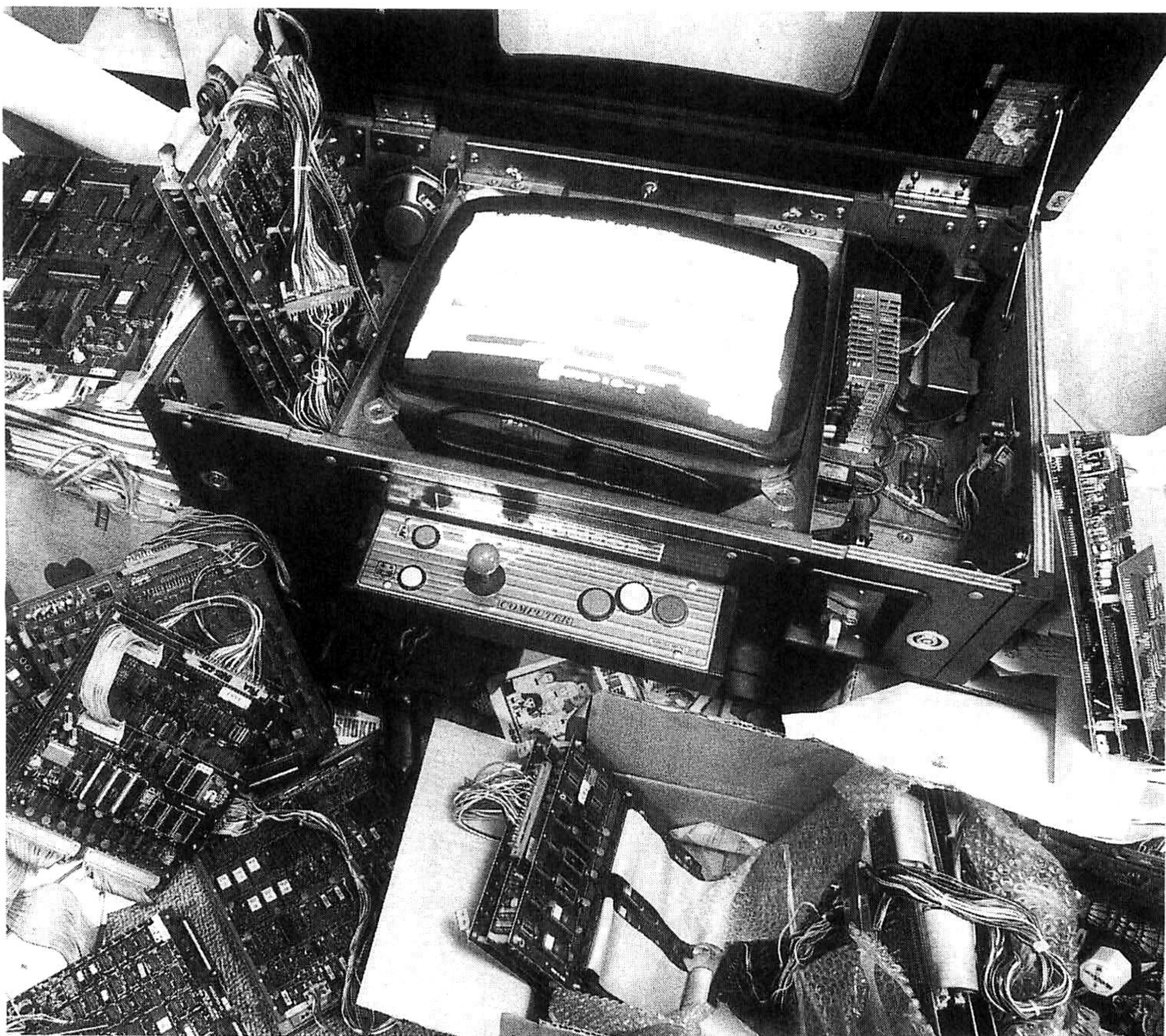
マニアたちも『テトリス』にはまった。だが、たんに高得点を目指したのではない。『テトリス』はカウンターストップスコアが九十九万点に設定されているため、マニアたちの腕をもってすればハイスコアを出すのはさほど難しいことではない。だからハイレベルなマニアになると、わざとめちゃくちゃに落としていき、ゲームオーバーぎりぎりのところでまともにプレイし始めたり、不可能と思える隙間にブロックを押し込める技を編み出したりして、本来のゲーム性に独自の楽しみ方を加えてプレイを行なうようになっていった。

アパートの一室に巨大ゲーム

これらの自己顕示型のマニアに加え、ここ数年の間に新しいタイプのマニアが出現した。基板コレクターたちである。

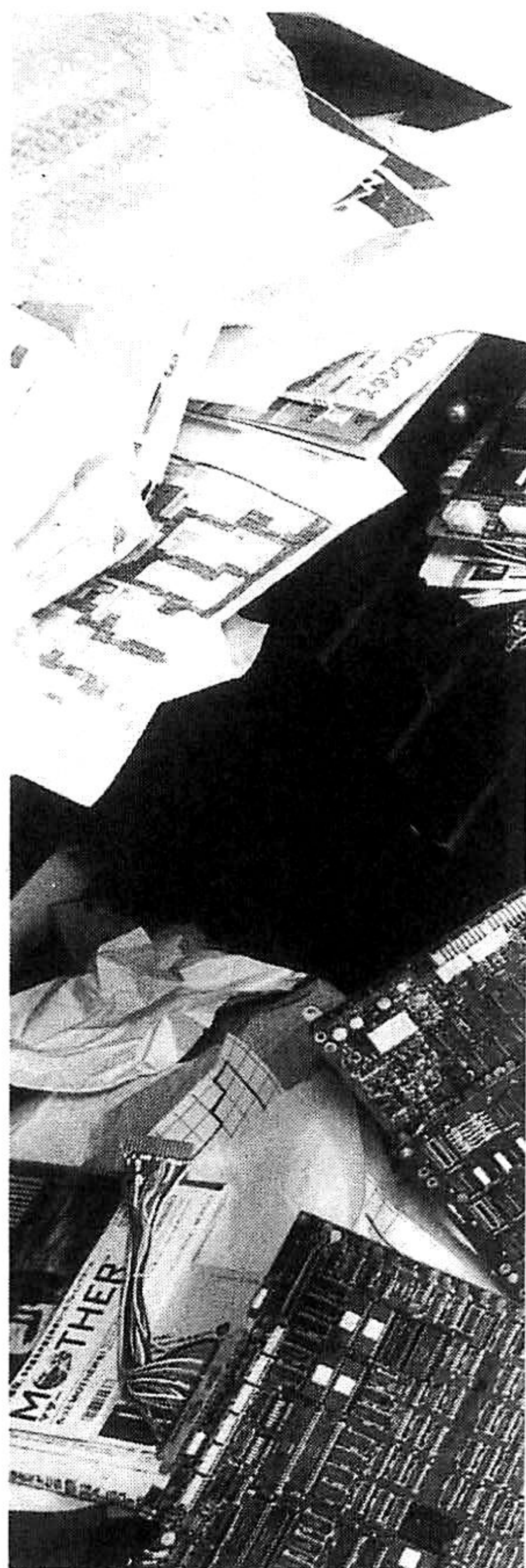
ゲーム機は通常、筐体と基板に分けられる。筐体とはモニターやコントロールパネルなどの外側部分、基板とはLSIが敷きつめられたコンピュータ・ボードのこと。ファミコンのカートリッジと同じように、基板さえ替えればひとつの筐体でさまざまなゲームを楽しむことができる。これらは基本的には業務用なので、そこいらのコンピュータ・ショップでは売ってない。中古基板の専門業者が扱っている。

よほどの人気ゲームでないかぎり、発売から数カ月たてば売り上げはガクッと落ちる。すると新製品の基板に入れ替えて売り上げの回復を図る。お払い箱になった基板は中古業者に売られる。そこにマニアが目をつけたのだ。売り上げが落ちた基板は当然安い。定価十五万円以上する基板が二カ月後には半額以下になるなんてことはざらだ。筐体にしたって古めのそれなら三〜四万出せば家庭で使うには耐えられる。コレクターが増えた今ではテレビにつなぐためのアダプターも発売されている。それにも増して、新製品のサイクルが早いこの業界、たとえ好きなゲームがあったとしても、急に跡形もなく消えてしまうことも珍しくな

あるゲームマニアの部屋。床に散らばっているのがゲームプログラムを記憶したコンピュータ基板

い。そうなると置いてある店を捜し出すか自分で買って家庭でプレイするしかないのだ。

何を隠そう、私も自分が好きだったゲームを中心に二十五枚ばかり基板を持っている。しかしコレクターとしては田尻が断然上だ。古いゲームばかり百二十枚ほども集めている。

『ジャイロダイン』のロケテスト版や『イスパイアル』、『ごんべえのあいむそうり』など、今買っとかなくちゃ二度と手に入らなくなるマイナーなのが中心です」

また、コレクターではない実用本位型の基板購買層もいる。新製品を発売直後に買って徹底的に遊び、飽きたら業者に売り払ってまた新製品を買っていくのだ。これはどちらかというと金持ちの道楽的ニュアンスが強いが、なかにはちゃっかりしている者もいて、売り払う前に懇意にしているゲームセンターに個人的にリースして、しっかり元を取ることもあるらしい。これらのコレクターの極限例は体感ゲームを購

入することだろう。人間が中に乗れるようになっている大型のドライブゲームなどである。

漫画家のもりやねこは二年ほど前に空戦型体感ゲーム『アフターバーナー』を買った。「当時、単行本が出たんでけっこう金銭的に余裕があったんです。それなら好きだった『アフターバーナー』を買おうと思って。大きいほうはさすがに無理だったんで、小さいシングルクレードルタイプのほうを四十万円で買いました。ワンルーム、四畳半ぐらいのアパートの一階に住んでいたんですが、部屋の三分の一ぐらいのスペースを取られました。それはべつに苦にならなかったんですが、左右の家から文句が来まして。やばいな、と思って夜は控えるようにしたんですが、こんどは昼間に大家から電話がありまして、左の部屋から苦情が来たって言うんですよ。ＢＧＭのボリュームは絞っていたんですけど、筐体を左右に振るときのモーターの振動が響いたらしいんですよね。で、その直後に故障しまして、それが二回目だったもんだからもういいやと思っちゃって。結局、買って一カ月の間遊んで、三カ月ほっといて売っちゃいました。二十五万ぐらいだったたかな」

たしかに体感ゲームは臨場感があるし、ジェットコースター感覚で遊べるが、アパートで遊ぶには少々大きすぎたようだ。

ゲームマニアは将来もあまり変わることがないように思える。少しでも高いスコアに挑む、先の画面を見てみたくなるという感情は変わりようがないからだ。そこに仲間がいれば競争心が生まれ、能力の限りを尽くしてほかの人より高いところに行きたいと思うのは当然だろう。

ただ、ハイスコア至上主義とは違った楽しみ方も生まれてきている。専門誌『ゲーメスト』には毎月読者から送られてくるミニコミ誌紹介のコーナーがある。田尻の作った「ゲームフリーク」のような本格的攻略誌は稀で、ゲームに登場するキャラクターを使ったパロディ漫画やイラスト、ゲーム評論など、プレイするだけではない、べつの楽しみ方を模索しているようだ。ゲームの内容が高度化し、グラフィックのディテールが細かくなるほど、そのディテールひとつひとつのマニア的な読み換えが可能になっていくのではなかろうか。

かくして今日も元気にマニアたちは百円玉握りしめて、戦いの世界へ没入していくのだ。

アイドリアン C級アイドルに人生を捧げた聖職者！

アイドルがヒトからモノになったとき、マニアが生まれた！

美空ひばりが死に、中森明菜が手首を切った。
「ザ・ベストテン」が、「夜のヒットスタジオ」が、「紅白歌合戦」さえもが終わろうとしている。
ヒットチャートはロックに乗っ取られ、歌謡番組は滅んだ。
戦後が生んだ国民的共同幻想たる歌謡曲解体の後、
ブラウン管に登場しないアイドルは、マニアだけのための商品となった！

古橋健二
コラムライター

「アイドル・マニアの取材ですか～」と僕はひとりで呟いていた。そもそもいい齢をした大人がアイドルを夢中になって追いかけているなどという編集者の話そのものが信じられなかった。

ところが、資料として渡されたある雑誌の記事には、アイドル・マニアのこんな発言が載っている。「シャーロック・ホームズの熱狂的なファンや研究者がシャーロッキアンと称して、ひとつの探究の世界を持っているように、われわれも〝アイドリアン〟と称し、独自の探究の世界を作り、それを〝アイドル道〟として極めたい」と。しかも彼は、三十一歳の重厚長大型トップ企業のエリートビジネスマンなのだ。僕はそんな作り話のような記事の真偽のほどを確かめたい一心で取材をはじめたのだった。

彼からは間違いなく道を究めた者の匂いが漂っていた

その日、足立文化会館は異様な熱気に包まれていた。

新人アイドル歌手・河田純子がステージに現われるやいなや、待ってましたとばかりに四百ミリや五百ミリの巨大な望遠レンズをつけたカメラの列がいっせいにフラッシュを発光する。さらに、そのフラッシュの光で一瞬明るくなった会場の後方からは、「フゥレ～」という応援団の掛け声にも似た独特の嗄れ声が場内に響き、その声に唱和する形で十数人の鉢巻き姿の若者が立ち上がって、「フゥレ～、フゥレ～、純ちゃ～ん」「ガンバレ～、純ちゃ～ん」の大合唱を繰り返す。

モータードライブ付きのカメラが発する「カシャ、カシャ、カシャ」というシャッター音とフラッシュの放列、そして親衛隊の手拍子と耳をつんざく〝純子コール〟。それらが重なり合う騒然とした場内では、彼女の歌はもちろん、バックに流れるテープの伴奏すらほとんど聞き取れない。

これがビッグ・アイドルのコンサートなら、僕だって驚きはしない。しかし、ステージで歌っているのは、一般にはまだほとんど知られていない駆け出しのアイドル歌手。しかも、彼女は足立区の綾瀬警察署が主催した〝足立区交通安全の集い〟にゲストとして招かれ、余興として持ち歌を三曲ほど披露しているだけのことなのだ。

当然、会館を埋めつくしている参加者も、アイドルのコンサートなどとは無縁の人々ばかりなのである。そこで、大半のおじさんやおばさんは、いったい何が起こったのかと会場の後方を振り返り、そこに叫んだり踊ったりしている鉢巻き姿の奇妙な若者たちの姿を見つけては、物珍しそうな顔つきで、隣の人に耳打ちしたり笑い合ったりと、要するにステージそっちのけで〝親衛隊〟ウォッチングを楽しんでいる。

僕の隣に座っていたおばさんなどは、あまりのカメラマン（彼女の目には大きな望遠レンズを持っている数十人の若者たちがみんなカメラマンに見えたのだろう）の多さに目を丸くして、「河田純子ってそんなに有名なんですか？」と質問してきたほどだった。

そんななか、より子細に場内を見回してみると、そこにはカメラ小僧や親衛隊とはもちろん、どう見ても、一般の参加者とも違う五十人ほどの若者がいる。年の頃は、見た目では十代の終わりから二十代後半までの男たち。座席に座って河田純子にひたすら熱い視線を送っている奴もいれば、思い出したように手拍子を打っている奴らもいる。さらには、一緒に来たと思われる三、四人の仲間と雑談をしながらステージを眺めている連中。あるいは、アイドル雑誌のページを捲りながら手帳に何やら書き込んでいる奴……。

彼らこそが今回の取材の対象である〝アイドル・マニア〟なる人種に違いない。そう確信した僕は、そのなかでもいちばん年齢の高そうなS氏に目をつけた。恰幅のいい体軀にジーンズとポロシャツを着込んで通路脇からステージ上をじっと観察するようにみつめている彼からは、間違いなくその道を究めた者の匂いが漂っていた。

新人じゃあ遅すぎる！ターゲットはデビュー前

イベント終了後にふたりの連れとともに待ち合わせの喫茶店に現われたS氏は、財布からあさぎ色の名刺を取り出すと、慣れた手つきで僕の前に差し出した。「メロディライン・幹事長」――それが彼の名刺の肩書だった。右隣に座ったF氏の名刺には「あいどる倶楽部STAFF」の文字。さらに、左隣のT氏は、「『アイドリアン』のスタッフです」と語った。そして、その聞き慣れない三つの名称がアイドル・ミニコミ誌の誌名であることを、僕ははじめて知ったのだった。

目の前に置かれた『あいどる倶楽部28号』はミニコミ誌であるにもかかわらず、オフセット印刷でしかもカラー表紙。まずはその豪華さにビックリさせられ、表紙を開くと、今度は異様に細かい活字がビッシリ詰まっていることにまたビックリ。そして、はじめてアイドル・ミニコミなるものを見た僕は、その内容のマニアックさにも驚かされた。

たとえば、特集記事では、〝徹底比較・マガジンガールVSモモコクラブ〟と題して、美少女グラビア雑誌から誕生した数十人のアイドル（西村知美や斉藤由貴など、これらの雑誌から誕生したアイドルは多い）を事細かに比較検討し、各雑誌のプロモーション戦略の特徴も含めて、八〇年代の雑誌系美少女の系譜を十四人のライターがなんと十九ページにわたって詳細に分析している。

しかし、これでもまだ一般人にはわかりやすい方なのだ。同誌のメインターゲットは、あきらかに全国各地での新人オーディションやコンテストのチェックに向けられている。つまり、そこで論じられているのは、デビューはおろか、所属事務所さえまだ決まっていないような日本各地のアイドル予備軍なのだ。そして、フツーの会社員であるF氏（二十七歳）は、その取材のために九州にまで足を運んでしまうという極

めつけのオーディション・マニアでもある。
それではS氏のマニアたるゆえんは何かと言えば、それは文句なしに、アイドル・レコードの収集である。千枚を超えるシングル盤と六百枚にのぼるLP。しかも、すごいのは枚数だけではない。デビューシングルから欠かさずに買うのがマニアの条件だと語るS氏は、八〇年以降に出たアイドル歌手のレコードはほとんど発売と同時にリアルタイムで買っている。
そして、ルーズリーフ用紙を使って歌手ごとにレコード番号、A面のタイトルと作詞、作曲、編曲者名、さらにはB面の曲目を記入して整理する。こうしておけば、レコードレビューやアイドル評を書くときに、作詞者や作曲者の変還もわかるし、タイトルを年代順に並べて見ただけでも、「いろいろなことが見えてくる」というわけだ。
さらに、三人目のT氏は、アイドルが出演するテレビ番組をビデオに録るのが趣味という二十九歳のやはり会社員。所有するビデオデッキは三台。一台は録画用。残りの二台で必要な部分だけをダビングして保存しておく。目下保存しているテープは五百本。編集されて凝縮した内容だけにこの数は相当にスゴイ。
というわけで、それぞれに得意分野が違う三人だが、それでも彼らに共通しているのは、何らかの形でアイドル・ミニコミ誌に関わっていることだと言える。そして、そんな彼らのために〝アミケット〟なるものが今年の八月に東京ではじめて開かれた。アミケットとはアイドル・ミニコミ・マーケットの略。つまり、アイドル・マニアがつくる同人誌を一堂に集めて展示即売会をしてしまうという企画なのだ。
初回とあって参加数は二十二団体とまだまだ少ないが、土曜日の午後、およそ五時間にわたって延べ四百人からの若者を集めて大盛況のうちに行なわれたのだった。しかも、ミニコミの売り手も買い手もすべて男ばかり。見た目には、四対六の割合で学生よりも社会人の方が多く、年齢層で言えばほとんどが二十代。なかにはすでに不惑を迎えていそうなオジサンもいたという。
出展された雑誌は、東大、早稲田、慶応などの〝大学歌研〟（歌謡曲研究会）がつくるオフセットのミニコミ誌からはじまって、

コピー誌に毛の生えたような社会人マニアの同人誌、さらにはパソコン通信による読者からの投稿を売りものとするカラー表紙にグラビア付のミニコミ誌などなど、雑誌の形態からその特徴までじつに多様な広がりを持つ。

S氏によれば、アイドル・ミニコミ誌の歴史は、ちょうど十年前の一九七九年に創刊された歌謡曲批評誌『よい子の歌謡曲』にはじまり、現在では、全国のマニアが個人的に発行しているコピーミニコミ誌を含めると、その数は百誌にも及ぶというじつに「奥の深い世界」なのだ。

しかも、このアミケットを企画したヒットチャート誌『オリコン・ウィークリー』の垂石克哉さん（三十五歳）自らが、「これからは、アイドル・マニアもお気に入りのアイドルの衣装をつけてコスチュームプレイを楽しむ時代だ」などと言うわけで、これはやっぱり相当にスゴイ世界であることだけは間違いない。

九月二十日現在、本年参加イベント数二百九十

アイドル・マニアは、大きくは、〝書斎派〟と〝現場派〟に二分される。S氏のように、主にレコードやテレビの歌謡番組を通してアイドルにアプローチし、レコードレビューやアイドル評を書いてミニコミ誌に投稿するのが書斎派なら、現場派の代表は〝イベント・マニア〟である。彼らは、マイナーアイドルのキャンペーンやイベントに足しげく通い、生身の（？）アイドルにふれることに生き甲斐を見出す人種であるらしい。

数日後、イベント・マニアのひとりである横山一さん（仮名）に話を聞くことができた。横山さんは、都内の某私立大学演劇科の四年生で、現在二十四歳。グレーっぽい綿パンにデッキシューズという、ごく〝フツー〟の若者らしい格好で待ち合わせの喫茶店に現われた。

まずは今年に入ってから見たイベントの本数から聞いてみよう。

「昨日の九月二十日現在で、二百九十本です」

しかし、一月一日から九月二十日までは、どう数えても二百六十三日しかない。

「一日一本というわけではないんです。私たちマニアの間では、〝イベントのハシゴ〟と呼んでますけど。土・日だと一日に二、三本はありますから……」

というわけで、横山さんが大学に入学してから三年ちょっとで見たイベントの数は、およそ九百本。今秋の就職面接では、「学生時代に何をしてきたのか？」という面接官の質問に、「イベント九百本、延べ千六百人のアイドルを見てきました」と豪語して、見事大手レコード会社への就職を決めたこの世界の達人である。

横山さんによれば、〝イベント〟と総称されるものは、おおよそ次の五つに分類される。まずは、新人アイドルのデビュー・キャンペーン。ふたつめが、新曲発表キャンペーン。三つめが、テレビ・ラジオの公

表1　イベントマニア横山一さんのスケジュール表より

日付	時刻	内容
8／21（月）	9:30	A放送一次面接　赤坂
	12:30	Aレコード一次面接　日本橋
	17:00	円谷優子　ラジオ短波公録　虎の門
	18:00	中山忍コンサート　渋谷公会堂
8／22（火）	10:00	B放送一次面接　四谷
	17:00	増田未亜　本サイン会　池袋パルコブックセンターリブロ
8／23（水）	9:00	東京を出発
	13:30	C放送二次面接　大阪吹田
	16:00	小高恵美　新曲キャンペーン　尼崎つかしんチャーチスクエア
	22:00	帰京
8／24（木）	9:00	Bレコード一次筆記　市ヶ谷
	13:00	田中律子・清水香織　ラジオニッポン公録　横浜ジョイナス
	15:00	D放送一次面接　虎の門
	18:00	生稲晃子コンサート　中野サンプラザ
8／25（金）	9:10	Cレコード一次面接　赤坂
	14:00	田山真美子　デビューキャンペーン　池袋サンシャインシティー噴水広場
	18:00	西村知美・小林彩子　文化放送公録　後楽園遊園地野外劇場
8／26（土）	11:00	山中すみか　新曲キャンペーン　横浜そごう屋上
	13:30	A出版一次筆記　渋谷
	18:00	ＢＡＮＡＮＡ　イベント　原宿バナナ園
8／27（日）	9:45	Dレコード一次面接　護国寺
	11:40	Bレコード一次面接　市ヶ谷
	14:00	ＢＡＮＡＮＡ・西野妙子・青木愛・松尾和美　ニッポン放送公録　川崎アゼリア
	17:00	里中茶美　新曲キャンペーン　池袋サンシャインシティー噴水広場

※8/27日のBレコードの面接は、前日の11:40 の指定だったが、山中すみかを観たいためにこの日変更してもらったもの。

開録音・録画。そして、冒頭の〝交通安全の集い〟のようにアイドルがゲストとして招かれる狭い意味でのイベント。最後がコンサートやライブである。

そして、新人アイドルのデビューキャンペーンの場合には、純粋に本人の資質を確かめに行く。レコードと生歌との違い、ジャケットや雑誌の写真と実物との落差、さらには本人のMC（歌の合間のお喋り）などがチェックのポイントとなる。

あるいは、〝公録〟の場合には、常連や身内のノリを楽しむ。ちなみに、僕が見学させてもらったラジオの公録番組では、実際の放送ではカットされてしまう部分が抜群に面白かった。司会者とマニア（常連）との息の合ったやりとり、司会者の突っ込みに窮するアイドルの戸惑い。さらにはクイズ・コーナーで前に出たときにさり気なくゲストのアイドルと握手をしてしまったり、場合によっては、休憩時間に直接アイドルと話をすることもできる。これはやっぱり「オイシイ」。

さらに、狭い意味でのイベントの場合は、たとえば、一日警察署長でアイドルが婦人警官の制服を着たり、父の日のイベントではなぜかアイドルにその場で目玉焼を焼かせたりと、通常のキャンペーンでは見られないアイドルの姿が楽しめる。

というわけで、マニアにとってはそれぞれに楽しいイベントなのだろうが、僕としては、やはりアイドル・イベントの醍醐味とは何か、それが知りたい。そこで、思いついたのが、これまで見たイベントのなかでいちばん感動したイベントはどれかという質問だ。

ウーン、と一声唸った横山さんは、そこではたと天井を見上げてしばらく考え込んでいたが、そのうち「やっぱり、アレかな〜」と呟きながら、渋谷で行なわれたあるイベントの話をはじめた。

「神崎聖子っていう子がいるんです。〃モモコクラブ〃出身の高校生で、まだデビュー前なんですけど、我々マニアの間では有名人なんですね。実は、その子が第一回国民的美少女コンテストでグランプリをとった例の藤谷美紀ちゃんと同じ高校の同級生なんですよ…」

話が長くなりそうなので要約すると、その日のイベントに神崎聖子がゲスト出演していた。藤谷美紀は彼女と大の仲よしなので、ほかの同級生の友達と一緒に何人かのグループで見に来ている。そして、神崎聖子の歌の番になると藤谷美紀も含めて同級生の子たちがみんな前の方に出てきた。そこでは横山さんたちが〃パンーパパン・ヒュー〃の四拍子のおニャン子ファンノリ（パンーパパンと手を叩き拳を高く挙げて飛び上がる）で踊っていた。するとその姿

に触発された藤谷美紀もいっしょにおニャン子ノリで声援を送り出した。

「横を見たら、藤谷美紀ちゃんがいっしょに踊ってるなんて……」

そう呟くと、彼はそのときの情景を反芻するかのようにまたゆっくりと天井を見上げた。それまでの冷静な解説口調とは打って変わって、いかにも嬉しそうにそのときの様子を話すその至福の表情に、僕ははじめてアイドル・マニアの心に触れたような気がしたのだった。

それにしても、年に数百本のイベントを見るマニアの目に、いったいアイドルはどのように映っているのだろうか？ 某ラジオ番組の公開録音のあと、司会者によって〝常連ズ（ジョーレン）〟と呼ばれていた五人の若者たちに近くの喫茶店で話を聞くことができた。僕はさっそくその日の公録のゲストだった川越美和について彼らに質問してみることにした。

川越美和は、この十月十日にはじまった「時間ですよ　平成元年」（ＴＢＳ）に八代目のマドンナ役で出演している。〝ゴクミ顔〟のなかなかの美少女である。ところが、彼らから返ってきた答えは、公録の最中に彼女の可愛いさにすっかり見惚れてしまった僕にとっては、およそ思いもよらない内容のものだった。彼らにとってアイドルはすでに論評の対象でしかなかったのだ。

最初のひとりがオリコンチャートでの彼女のレコード順位の上がり方の不自然さを指摘したかと思えば、今度は隣の奴が、レコード会社がＮＥＣアベニューであることを根拠にこう言った。

「あそこは、営業が〝針のナガオカ〟なんで営業面が動かないのがわかってますから、相当ＮＥＣの本社とあと彼女の所属事務所で動いてるんですよ。だから、ＮＥＣがメーカーの力をフルに使って、新人賞とかも裏で手を回してるんじゃないですか。そういう仕掛けがハッキリ見えちゃうアイドルは、マニアは嫌いなんですよ」と。

結局、「川越美和はＮＥＣ本社が適当に押すだけで私たちにはどうでもいいんです」というのが彼らの結論になってしまうのだ。

あるいは、その日、たまたまデビューキャンペーンで来ていた新人アイドル歌手Ｙについては、「アイドルとしての将来性はない」と即座に断定してしまう。

それでも、あるいはそれだからこそ、川越美和とＹが並べば、彼らは文句なしにＹの方につくのだと言う。マニアにとっては、そのアイドルがマイナーであればあるほど「コストパフォーマンスが高い」というマニアックな心理が働くのだ。

つまりこういうことだ。今でこそ超売れっ子のＷＩＮＫも、つい一年前にはキャンペーンをしても十数人しか人が集まらず、レコードを買って握手会に参加するのは五、六人という時代があった。その五、六人が目の前にいる彼らであり、そして、ＷＩＮＫの名前が売れ出して間近で気軽に見ることができる存在でなくなれば、もう彼らにとってのＷＩＮＫは終わっているのである。

ファンの顔なんて覚えてくれなくていいんです

しかし、イベント・マニアとは反対に、ひとりのアイドルに強い思い入れを持って、そのアイドルを一途に追いかけている人々もいる。

ここでは、そうした〝個別アイドル思い入れ〟タイプの代表である某国立大学三年生の青木昇さん（仮名・二十一歳）を紹介してみたい。彼が熱愛する（？）のは、テレビドラマやバラエティー番組でも活躍する中堅どころのキャラクターアイドルN（仮名にするのは、「Nちゃんに迷惑がかからないように」という青木さんのたっての願いによる）。そして、青木さんは「Nちゃんが読んで面白がってくれればいい」と、ほぼ四カ月おきに手書きのマンガミニコミ誌『N』（B6判、三十二ページ）をつくり、イベント会場で彼女に直接手渡している。

その内容は、彼女がDJをつとめるラジオ番組での発言を中心に、各地のイベント、テレビや雑誌での様子をネタにした一ページずつのコマ割りマンガ。さらには、青木さんが足を運んだ各地のイベントの様子をカット入りで解説した〝おっかけ日記〟。それに、〝N語録〟なる彼女にまつわる事柄事典。試しに〝れこーど〟と引くと、「①自分のはほとんど聴かないんだって。で、歌詞を忘れるのか。②Nちゃんがいなくたって針をレコードに落とせばそこにはNちゃんの世界が創り出される」とあった。

関西の田舎町に住む彼が、今年の五月から八月の末までの四カ月間に足を運んだNのイベントは全部で二十二回。そのうちの半分は東京を中心とした関東のイベント。それ以外にも西は山口から北は栃木まで、新幹線や夜行列車を駆使したその行動範囲は相当に広い。

しかし、彼は、「今日も元気でやっているかな」と様子が見たくてついつい足が向いてしまうだけなのだと言う。テレビやラジオで姿を見たり声を聞くだけではどうしても不安なのだ。そして僕が、青木さんの顔は彼女も覚えているんでしょ？　と聞けば、彼は語気を強めて「ファンの顔なんて覚えてくれなくていいんです」と、セリフ覚えの悪いNのことを心配して溜め息をつくのだった。

やっぱりファンの心理とはこうでなくてはいけない！　僕は〝マニア〟と〝ファン〟とはかくも違うものなのかと、なかば感動しながら彼の話に相槌を打っていた。ところが意外なことに、この青木さんこそが、仲間うちでは「マニアのなかのマニア」と呼ばれる存在であったのだ。

青木さんのマニアとしての出発点は地図マニアである。幼稚園のときから地図を眺めるのが好きだった彼は、小学校一年のときにすでに詳細な日本地図や世界地図を描き、しかも自分で地形模型をつくって遊んでいた。そして、二年生になると今度は、自分で描いた日本地図の上に経線緯線を書き込み、NHKラジオの気象通報を聞きながら天気図をつけはじめた。しかも、天気

表２　青木さんの投稿職人としてのデータ一覧

青木さんは、なんと雑誌への投稿で月に３万円も稼ぐ投稿職人でもあった

雑誌タイトル	~86.10	~87.4	~87.10	~88.5	~88.12	~89.7		ハガキ代
ボム 86.2	20 1 1	47 12 23	43 11 24	34 4 5	27 3 6	30 6 10	201 8.0 37 69	総投稿数 内採用数 賞金合計額（単位千円）
ダンク 86.7~	14 2 13	32 2 6	23 0 0	13 1 3	16 0 0	22 4 16	120 4.8 9 38	
スコラ 86.8~	8 2 4	11 3 6	2 0 0	0 0 0	0 0 0	8 6 12	29 1.2 11 22	
テレビジョン 86.8~	6 1 2	3 0 0	0 0 0	0 0 0	3 2 4	3 2 4	15 0.6 5 10	
平凡パンチ 86.9~	14 2 6	27 7 21	20 5 15	7 1 3	2 0 0		70 2.8 15 45	
GORO 86.10~	2 1 1	8 2 5	4 0 0	2 1 2	6 3 6	17 8 16	39 1.6 15 31	
オリコンウィークリー 86.2~	78 30	68 24	50 20	48 22	29 16	38 21	311 12.4 133	
投稿写真 86.11~		10 3 9	3 0 0	4 1 3	7 2 6	4 1 3	28 1.9 7 21	
Hot Dog 86.11~		15 2 2	8 1 1	4 2 2	3 0 0	29 11 11	59 2.4 16 16	
プレイボーイ 86.11~		7 1 7	5 0 0	6 0 0	7 2 10	24 5 25	49 2.0 8 42	
微笑 87.11~				8 4 8	9 4 8	17 8 16	34 1.4 16 32	
アクションカメラ 89.2~						8 2 6		
モモコ 89.2~						2 2 4		
ネバネバ×ギブアップ 89.4~						4 3 6		
ベスト						5 1		

図の描き方は、当時の愛読書だった百科事典の気象の項を読んで我流で覚えたものである。ちなみに、現在でもその習慣を続けているという彼が、これまでに描いた天気図の総数はおよそ七千枚にのぼる。

さらに、小学校の三年生になると、これに事件事故のスクラップが加わる。新聞の社会面や三面記事の事故報道を見つけると、詳細な道路マップの該当箇所に×印をつけ、そこに事故の概要を記す。たとえば、「某年某月某日、タンクローリーが○○の踏切に突っ込み、死者○名」といった具合だ。

そして、中学時代のあだ名が「天才君」。今で言えば、雑学の大家ということにでもなるのかもしれないが、彼の頭には、百科事典や医学書、さらには理科年表などで得た膨大な知識が詰まっていた。そして、家で見るテレビと言えば、ＮＨＫのドキュメント番組。さらに高校に入ると天気図を描ける能力を買われて山岳部に入り、およそ俗世間とはかけ離れた仙人のような生活を送っていた。

ひとつだけ象徴的なエピソードを紹介しておけば、松田聖子がデビューした当時ちょうど中学生だった彼は、同級生たちが盛んに話題にしているその名前を聞いて、隣のクラスに新しい女の子が転校してきたに違いないと勘違いした。そして、ＰＴＡの会員名簿にその名前を書き加えようと、友達に松田聖子の住所を聞こうとしてクラ

スじゅうの笑いものになったのだという。
　そんな経歴を持つ青木さんがなぜアイドルに夢中になってしまったのか?
　たいした受験勉強もせずに地元の国立大学にストレートで入学した彼は、それまでの「クソ真面目で堅物」という自分に貼られたレッテルが嫌になって、イメチェンを図ろうとする。そして、彼の目に「今いちばん軽いもの」として映ったのがアイドルだった。
　しかし、そこでも彼はマニアックだった。アイドル雑誌を買いはじめた彼は、その本に載っているアイドルの名前、そのデビュー曲、さらには生年月日などの詳細なデータを、まさにカタログ的な知識として覚え込んでしまう。こうして入学一年目の冬を迎える頃には、彼の頭の中はマイナーアイドルのデータで一杯になっていた。
　それがきっかけで、大学のアイドル研究会に誘われた彼は、そこで、ファンの人たちのアイドルを想う熱い心に触れることによって、はじめて人間愛(?)の世界に目覚めることになる。同好の士の存在があってはじめて、アイドルNと巡り合うことができたのだと青木さんは言う。
　そして、彼は変わった。それまで実用書ばかりを読んでひたすら知識を詰め込むことに快感を覚えていた青木さんは、アイドルNとの出会いによって身の回りにあるさまざまなものに感情移入ができるようになった。そして、それまでは自分が楽しめばいいと思っていた事柄でも、相手が楽しんでくれることが何よりだと感じるようにもなった。
　それが宗教的な愛の境地なのか、はたまたいわゆる恋心というやつなのかは僕には判断のしようもないが、青木さんにとって、アイドルNが「人生の中で出会った大切な人」であることだけは間違いない。

アイドルが人からモノになったとき
マニアが生まれた

　これまでアイドル・マニアの典型として〝書斎派〟と〝現場派〟、さらには〝個別アイドル思い入れ〟の三つのタイプを取り上げてきたわけだが、それぞれのタイプはもちろん整然と区別されるわけではない。書斎派もあるときはイベントに足を運び、イベント・マニアのなかにもミニコミ誌に投稿する人々は多い。さらに、〝○○命!〟といった個別アイドルの熱烈なファンであっても、同時にマイナーアイドルのイベントに頻繁に顔を出していたりする。
　その意味では、アイドル・マニアである彼らにとっては、アイドルにアプローチする多様な方法が存在するだけなのだ。そして、そのアプローチの仕方には、本稿で取り上げなかったものもたくさんある。
　たとえば、アイドルの出演するテレビCFを徹底的にチェックしている連中もいれば、脇役で出演している子役の姿を一人ひとりチェックする〝子役マニア〟と呼ばれる人々も存在する。そして、彼らがつくるオフセットミニコミ誌には、子役である小学生の女の子へのインタビュー記事もあれば、さらには〝劇団系美少女の傾向と対策〟

表3　ある“子役マニア”のビデオ録画番組一覧

月日	時間	番組名	出演子役	
8/20（日）	6:00～6:30	「新1.2.3.と4.5.ロク」（フジ）	小林由佳、今崎美帆	
	8:00～8:30	「機動刑事ジバン」（テレ朝）	南風見恵子	
	9:00～9:30	「魔法少女ちゅうかないぱねま！」（フジ）	田京恵	
	10:00～10:30	「仮面ライダーブラックＲＸ」（ＴＢＳ）	上野めぐみ	
8/21（月）	12:45～13:00	「家庭の問題」（ＴＢＳ）	田京恵	※1 連続ドラマ月～金
	13:00～13:30	「夏色の天使」（ＴＢＳ）	小川範子、森沢なつ子	
	13:30～13:45	「夏色怪談」（ＴＢＳ）	田山真美子	
	19:00～19:30	「あっぱれさんま大先生」（フジ）	東郷恵利香	
8/24（木）	17:00～17:50	「パオパオチャンネル」（テレ朝）	茅野佐智恵	
8/25（金）	17:00～17:50	「パオパオチャンネル」（テレ朝）	安達祐実	
	21:00～21:45	「素敵にドキュメント」（テレ朝）	〃	
8/26（土）	18:00～18:25	「高速戦隊ターボレンジャー」（テレ朝）	湯原弘美	
	22:04～23:56	「叫んでも……聞こえない！」（日テレ）	三野輪有紀	

※この表を提供してくれたＹさん（20歳・私大理工学部３年）の場合、ビデオの標準モードで録る子役が、「パパは年中苦労する」（ＴＢＳ）でその可愛さのとりこになった吉村涼（11歳・白鳥座所属）をはじめ５人。３倍速（テープの回転速度が遅いので画質が落ちる）で録る子役が20人前後。もちろん好みの新人がいつ出てきてもいいように子役出演の可能性のある番組はすべていったんビデオに録画していることは言うまでもない。ちなみに、Ｙさんはドラマの流れのなかでの芝居を重視する“演技派”子役マニアなので、お目当ての子役が出た番組はすべてノー編集で保存している。

などと銘打って、子役一人ひとりについてはもちろん、総体としての子役界の現状と将来展望などということが真剣に論じられていたりもする（もちろん対象は女の子だけだ）。

さらに、アイドルのテレホン・カードを何百枚も持っている奴がいるかと思えば、街角に氾濫している美少女もののポスターを片っ端から集めて、それがいったいどこの誰なのかを徹底的に調査している連中もいる。そして、もちろん彼らは同時並行でそれ以外のさまざまなアプローチも楽しんでいる。

それにしても、アイドル・マニアと総称される彼らは、いったいいつ頃から出現しはじめたのだろうか？

かつて、アイドルのファンとは、そのアイドルが大好きで、ファンクラブに入ったり、レコードを聞いたり、コンサートに行ったりしたものではなかったのか。ところが、アイドル・マニアたちは、まるで業界人のようにアイドルを相対化し、こちら

が驚嘆するほどの豊富なデータを駆使して、まさにアイドル総体を語っている。

　いったい君たちは、いつからそこにいるのか？　当の本人にその生誕の秘密を聞くのは愚問だとは思いつつ、僕は彼らにその疑問をぶつけてみた。相手は、イベント・マニアのところで紹介した〝常連ズ〟の五人組である。ところが、彼らは、さも当然のことのように、自らの誕生の経緯を語りはじめたのだった。

「〝おニャン子クラブ〟からですね」とひとりが言った。そのデビューは八五年である。

「おニャン子の出現がアイドルとファンとの関係を変えたんです。それまでの対人関係を対物関係に変えてしまった。要するにアイドルが経済商品になったんです。アイドルは、今や広告媒体用のただのモノなんです。人間であって人間でないみたいな……」。

　つまり、こういうことだ。かつてファンの側からのアイドルに対する思い入れは、一対一の対幻想であり、その意味で対人関係だった。ところが、今では、アイドル自体がモノをつくりだすモノになってしまった。すなわち、キャラクターグッズとしてのレコードを産み出す素材であり、テレビCMや広告ポスターの素材にすぎない。アイドルは擬似恋愛の対象から、消費の対象に変わったのだ。

　では、なぜ〝おニャン子クラブ〟からなのか？

　フジテレビが「夕やけニャンニャン」という番組のなかで、〝フツー〟の女子高生をアイドルに仕立てることによってつくり出した〝おニャン子クラブ〟は、総勢五十名を超える集団アイドルであった。しかも、番組内の「ザ・スカウト／アイドルを探せ！」なるコーナーでは、次々と新しいメンバーが誕生する。これでは、ファンの側は否応なく各メンバーを比較検討し、一人ひとりを相対化することを学ばされてしまう。そのことが、〝誰をイチ押しする〟といったことはあるにしても、〝○○命！〟のような形でのアイドルとの対幻想を壊す方向に拍車をかけた。

　そして、いっぺんに何人ものアイドルのレコードやキャラクターグッズを買うファン層を掘り起こした。ちなみに、おニャン子クラブのレコードの売り上げは、八七年

の秋に解散するまでのわずか二年間で、シングルが千三百万枚、ＬＰが六百万枚。ビデオや本などを含めた〝おニャン子商品〟の総売り上げがおよそ四百億円。まさに「日本芸能史上最大のヒット商品」と言われるほどの驚異的な記録だった。

　さらに、アイドル歌手が新曲のキャンペーンで全国のイベント会場を回る、〝キャンペーン・握手会路線〟が確実に定着するのもこの頃である。そのことは、それまでテレビやコンサート会場で遠くから眺めることしかできなかったアイドルを、デパートの屋上で間近に見ることもできれば、自分のカメラに収めたり、握手をして言葉を交わすことさえも可能な存在にした。

　こうして、アイドルとファン（マニア）との距離は、限りなく近づいてしまう。

　それにもかかわらず、あるいはそれゆえにか、かつてアイドルに憧れていた中高生たちは、今や〝プリンセス・プリンセス〟や〝渡辺美里〟といったロック歌手たちに憧れ、まさに彼女たちをかつてのアイドルのように崇拝している。そして、より身近な存在になったマイナーアイドルには、マニアのオジサンたちだけがファンとして残った。

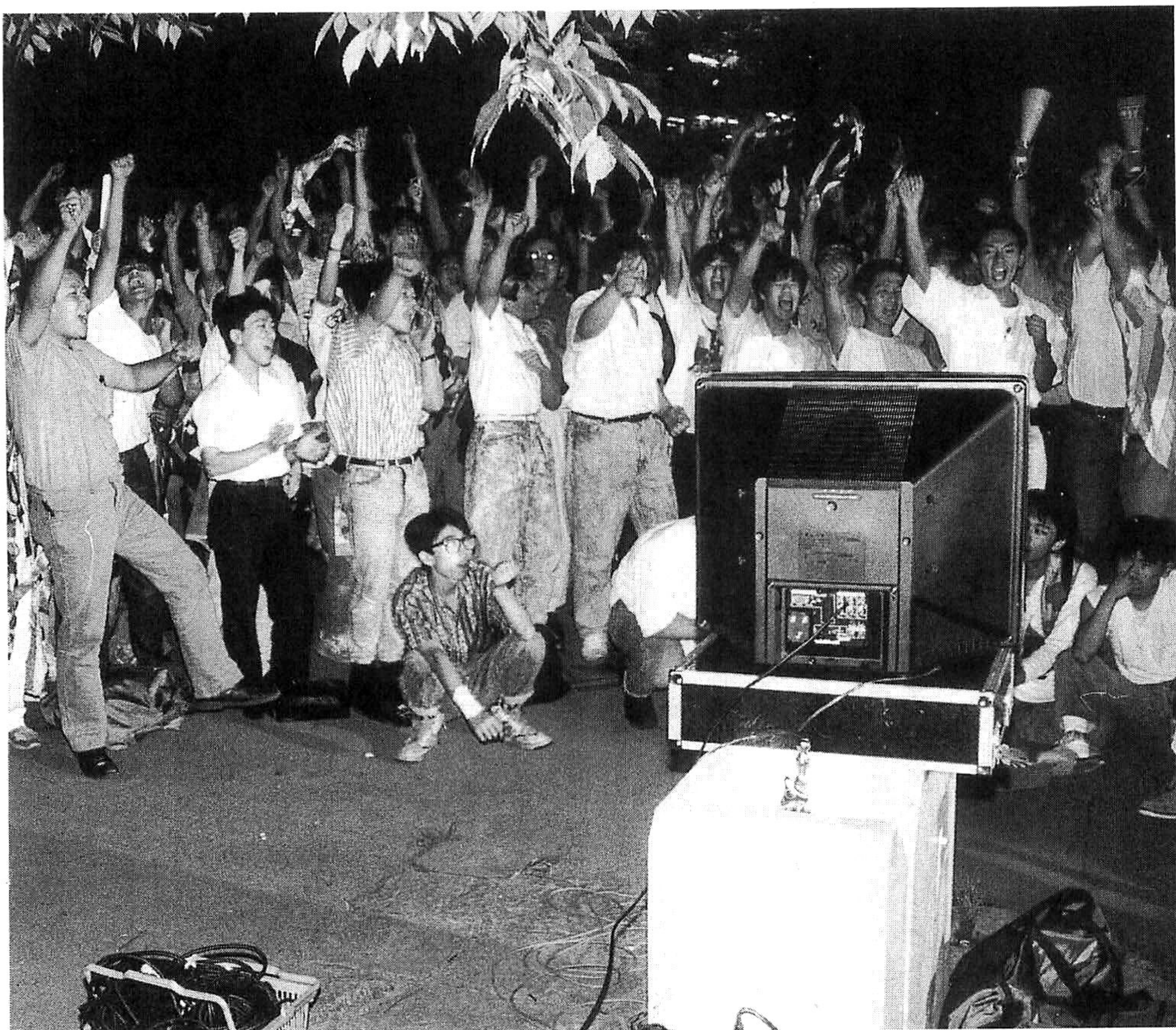
　それにしても、自らを〝ビョー人〟と呼び、しかも自分たちの誕生の経緯すらもマニアックに対象化して分析してしまう彼らはいったい何者なのか？

　ひとりは東工大の学生で二十歳。もうひとりが明大の四年生で二十四歳。さらに二浪の予備校生がひとり。それに二十五歳のフツーの会社員がひとり。そして、最後のひとりは、なんと国家公務員の上級試験に合格した某省キャリア組の二十三歳だと言った。国家官僚がアイドル・マニアであってはいけない法はないけれども、これはやはり常識的には驚いていいことだと思うのだ。

秋の夜空に〝パンーパパン・ヒュー〟

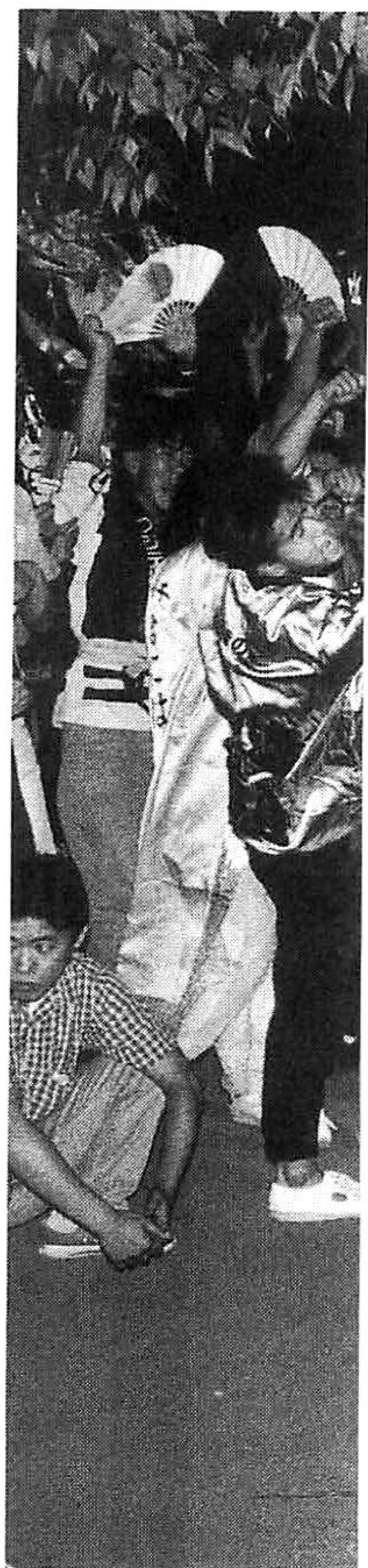
　九月も後半に入ったある日の夜。代々木公園の一角にある小さな広場には、日本全国から三百人ほどの若者が集まっていた。彼らの前にあるのは二九インチの一台のテレビと二台の小さなスピーカー。そして画面には、ちょうど二年前のその日にすぐ脇の代々木体育館で行なわれた、〝おニャン子クラブ〟のファイナルコンサートのビデオが流れている。

　画面に登場する一人ひとりのおニャン子たちの姿に拍手喝采が起こり、彼女たちの涙ながらのお別れの挨拶に「ガンバレ！」の声援が飛ぶ。そして、曲のイントロがはじまるやいなや精一杯の声を張り上げて、歌い、踊る。そんな彼らの姿を見ている限り、その熱気と興奮がテレビの小さな画面に向けられたものなのだとはとうてい信じられない。

　そもそも目の前に映っているファイナルコンサートのビデオは、すでに市販され、誰もが簡単に買えるものなのだ。おそらくはここに集まっているすべての若者が所有し、その細部に到るまで鮮明に頭の中に焼

きついているものに違いない。それなのに彼らはなぜわざわざこの地に集まって、いつもと同じビデオを見なければならないのか?

この日のために、札幌から飛行機で駆けつけた十九歳の電機修理技師もいれば、休暇をとって兵庫から新幹線でやって来た二十三歳の郵便局員もいる。京都から来た二十六歳の会社員もいた。もちろん、その大半が東京周辺から集まった二十歳前後の若者だとしても、そこには、イベント・マニアが追いかける生身のアイドルさえもいない。

いったい彼らはそこで何をしようとしているのか?

『オリコン・ウィークリー』の読者投稿欄に掲載されたこのイベントの開催を告げる主催者からの手紙には、「おニャン子を、また自分がおニャン子のファンであったことを忘れないためのイベントです!」とあった。そして同じく新潟県のある読者からの手紙には、「二年前の自分を探しに来

ないか」とも記されていた。

主催者の若者たちのなかには、全国十一カ所で行なわれた解散コンサートを追いかけるために、専門学校を中退した奴もいれば、それまで勤めていた会社を退職した若者もいる。そして、参加者のなかには、おニャン子からのソロデビュー組を追い続けるために休暇を自由にとれる職人への道を選んだ二十歳の石工もいた。

さらに、おニャン子解散後二年が過ぎた現在でも、自主的に組織されている〝おニャン子サークル〟と呼ばれるいくつかのグループが存在する。しかも、その会員数は総計でおよそ千人にものぼり、彼らは独自のネットワークで日頃から交流を深めている。

彼らにとっておニャン子クラブとは何だったのか？　イベント・マニアの〝常連ズ〟が語ったように、おニャン子は単なる経済商品であったのか？　だとすれば、今、目の前で踊っている彼らは、いったい何にこだわってわざわざ全国から集まって来ているのか？　おニャン子に対する彼らの思い入れは何に支えられているのか？

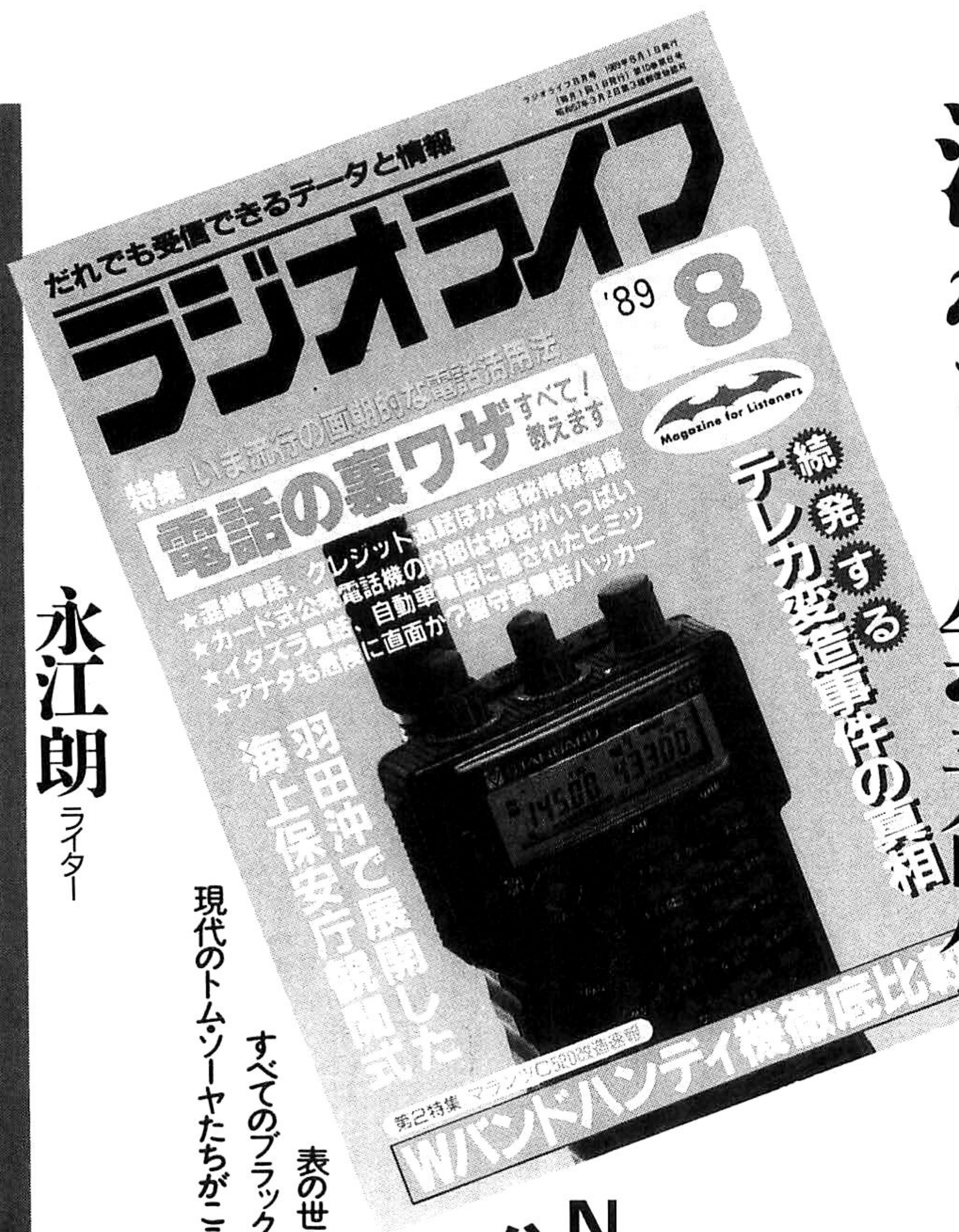
正直なところ、僕にはわからないことが多すぎる。しかし、ただひとつ言えることは、クサい言い方ではあるけれども、彼らにとっては、アイドルと同じぐらいに仲間が必要だということなのだ。それは、何もおニャン子ファンだけに限らない。イベント・マニアが、イベント会場でお互いの顔を見出したときの何かホッとしたような笑顔。書斎派の人々がミニコミ同人たちとアイドル談義に花を咲かせているときの嬉しそうな顔。仲間うちで見せる彼らの嬉々とした表情を見るたびに、僕には、アイドルに媒介されたマニア同士の関係こそが、アイドル・マニアの行動を支えていると思われてしかたがなかった。

そして、彼らを観察することを止めて、その輪の中に一歩入ってしまえば、そこには突き動かされるようなエネルギーに満ちた〝もうひとつの別の世界〟が確実に存在する。アンコール曲では参加者全員が隣の人の肩に手を回して、まるでお互いの存在を確かめ合うように静かにからだを揺すっていた。それは、ちょうど閉塞した現実から脱出しようとした二十年前の若者たちがバリケードの内側に見た世界と同じものなのではないのか。

しかし、今、目の前で肩を寄せ合っている若者たちは、二十年前と同じ鍵で別世界の扉を開けることはできなかった。彼らにとっては、アイドルこそが時代を映す鏡であり、同時に別世界への扉を開く鍵であったのかもしれない。

そんなことを考えながら僕は、いつしか彼らの輪の中で夜空に向かって拳を振り上げていたのだった。

〝パンーパパン・ヒュー！〟

アクション・バンダー
汚れなき無差別テロ！

NTTも警察も手玉にとる
ハッカーたちが集う
謎の雑誌『ラジオ・ライフ』！

表の世界にゃ住みあきた！　世界のウラの裏を探険し、
すべてのブラックボックスをこじ開けて遊ぶ
現代のトム・ソーヤたちがここにいる！

永江朗
ライター

わが家で長年愛用している電話のかけ方。
相手先の電話番号の末尾が1か2で終わるときは、ダイヤルの代わりに1なら一回、2なら二回、フックを軽く叩く。4531なら453まではダイヤルを普通に回して、最後に一回チョンとフックを押す。これでその通話はタダになる、はずである。実はその確証はない。ただ、電話取付けに来るNTTの人はこうして電話するので、タダなんじゃないかと推測しているだけだ。

ハッカーたちのバイブル

もっと確実なタダがけテクニックを知りたい人は、『ラジオライフ』という月刊誌の特集記事「電話の裏ワザすべて教えます!／いま流行の画期的な電話活用法」をご覧あれ。
たとえばクレジット電話の利用法。大手企業が契約しているクレジット電話に勝手に相乗りしてしまう。かけ方は「121+3+登録電話番号+暗証番号+相手の電話番号」。この登録電話番号と暗証番号がわかれば全国どこからでもタダ電話がかけられる。登録電話番号は電話帳に載っている企業の代表電話が使われることがほとんど。問題は暗証番号捜しだが、会社所在地の番地なんかを使うことも多いらしい（ちょうどキャッシュカードの暗証番号を生年月日にする人が多いように）。
うまく暗証番号が見つけられれば、いつでもどこでも他人の金で電話がかけられる魔法の電話が手に入ったことになる。
もっと大胆なタダがけ方法もある。公衆電話の受話器の蓋を外し、スピーカーをフックにすりつけると通話可能状態になる。最近は蓋を外しにくくしている公衆電話もあるらしいが、銅線の一本もあれば大丈夫。キーのない車を盗むときと同じだ。もっとも、直結式のタダがけはカード電話ではできない。
そういう「電話のタダがけ」だのを一所懸命研究しているのが自称電話ハッカーたちだ。ハッカーというと電話回線を通じて企業や軍部のコンピュータに侵入する人を指すのが一般的だが、そのノウハウはもともと電話ハッカーから引き継がれたものだ。その発祥は一九五〇年代のアメリカにまでさかのぼる。たとえば伝説的ハッカー、キャプテン・クランチは、お菓子（クラン

改良型(?)公衆電話タダがけ装置

L1
L2
回線側
電話機側
10D-1を4本

わずか千円以内でできる電話タダがけ装置の回路
（図版はすべて「ラジオライフ」より）

チ）のオマケの小さな笛の音が、国際電話回線のゲートを開く信号と同じパルスなのを利用して、笛ひとつで世界じゅうを駆けめぐった。

西ドイツのハッカーが筑波の研究所のコンピュータに侵入した事件があったが、彼らにしてもマジメに日本までの通話料を払ったはずがない。電話タダがけはハッカーの基本である。

そしてこの『ラジオライフ』という雑誌こそわが国のハッカーたちのバイブルなのだ。

自動販売機は路上の金庫だ！

毎号、無線機の写真をアップにしただけの味もそっけもない表紙と誌名からは、ただの無線マニアの健全雑誌にしか見えない。しかしざっと記事の見出しを並べるだけで、そのむやみやたらな面白さはご理解いただけよう。

・「公衆電話からポケベルまでNTTまるごとタダ活用法」
・「絶対にバレない盗聴器の仕掛け方／他人のプライバシーで遊んじゃおう」
・「憧れの覆面パトカー製作法」
・「これが高速タダ乗り券だ！／原寸大公務自動車証明書」
・「日本を憂うあなたに贈る究極の自衛隊度チェック」
・「警察内部資料・被疑者写真撮影の手引きを極秘入手」
・「スピード違反なんか怖くない？　駐車違反、交通検問から逃れる㊙テクニック」
・「非合法無線のウラの裏」

……このほか、毎年いちど、「裏RL／電波から風俗までをスルドク乗っ取るアブナイ情報まとめて公開！」という小冊子の付録がつく。この「裏」にばかり向かう興味はファミコンやビックリマン・シールの「裏ワザ」「裏ワールド」捜しと似た、オモチャ感覚だ。見出しだけ見ると、左か右の過激派機関誌かと思ってしまうが、読めばそこにはなんの思想もない。ようするにこれは昔なつかしサンスターの「スパイ手帳」の復活なのである。

たとえば今や誰もが使っている留守番電話。『ラジオライフ』を参考に、これでスパイごっこをしてみよう。外から他人の留守電を操作して遊ぶのだ。つまり電話の機種と暗証番号さえわかれば、電話で自由に他人の留守録内容を聴いたり、消去したりできるのだ。

しかも最近流行の多種機能電話で、受話器をフックした状態でもモニターできる機種なら、そのまま盗聴器にもなる。おしゃれな電話のある部屋でエッチなんかしてると、知らないうちに自分の主演するエロテープが出まわりかねない。

テレホンカードの使用度数を変更するのも面白い。カード電話は、電話機がカードの磁気で記録されたデータを読み、書き込むマシンでしかない。ジャンク屋（パソコンなどの中古マシンを売っている店）で中古カード電話機を手に入れて、パソコンとデータを読むマシンを繋げば、テレホン

今日からオレも探偵だ!!

今、爆発的大人気の探偵七つ道具を揃えると、君も探偵になれる!!
その秘密は探偵手帳にある。その探偵手帳は調査の**イロハ**初歩的ノウハウが、わかりやすく詳細に説明されています。今現在全国小中高校生からプロの探偵社の方々にも大好評で多数のプロ探偵士が使用されています。(約47社114名の探偵士)

探偵七つ道具
1．探偵手帳一式
2．特殊無線一式
3．護身機具一式
4．探偵双眼鏡
5．探偵センサー
6．探偵録音機
7．探偵カメラ
合計　78,900円
1回～30回の分割可
各社信販利用できます。

プロの探偵用服装一式

探偵ズボン	40,000円
探偵ベスト	35,000円
探偵スーツ	60,000円
探偵ブーツ	30,000円
探偵ベルト	20,000円
探偵Ｙシャツ	20,000円

＊上記の製品には超小型カメラ、超小型録音機、超小型センサーが内臓されています。(改造費込)
＊改造されている事は、絶対にわかりません。

写真提供・探偵社

金田一探偵社
03 (576) 5566

『ラジオライフ』のへんな広告その①
探偵パンツというのも作るといいと思う

カードに記録された磁気データの「読み書きの仕方」が簡単にわかる。この電話機のプログラムを変えてやれば、たちまち電話はカード度数変造機だ。

ところでジャンク屋で売られている中古のカード電話は十数万円もする。プログラムの解析に必要なマシンもそろえるとかなりの金額になる。苦心の末、ハッキングの方法を編み出したところで、儲かる電話料金なんてたかが知れている。彼らはお金のためにハッカーをやってるわけではない。NTTはこれらの電話ハッカーをまるで凶悪犯罪のように目の敵にしているが、伝言ダイヤルにはまって月に何十万円も電話代の請求がきてしまう高校生や、それで売春に走ってしまう少女たちを食いものにしているNTTよりはタチがいい。

もちろんハッカーの標的は電話だけではない。「システム別課金情報ハッカー術」という特集では、各種プリペイド・カードの磁気データ読み取りテクニックから電力メーター、バーコード、中古車の走行距離計、ホテルのテレビの2チャンネル放送や冷蔵庫までを扱っている。なかでも「五百円玉の代わりに韓国の五百ウォン玉を使う」などの裏ワザを紹介した記事の「自動販売機は路上に置かれた金庫だ」という題にはワクワクさせられる。『ラジオライフ』を読んでいると、つまらないはずの管理社会が急につけこむスキだらけに見えてくる。

王様は裸じゃないか

それにしてもこの面白さはいったいなんなんだ、というわけで編集部を訪ねてみた。取材に応じてくれた羽根田新氏は副編集長だが、まだマニア少年の面影を残す青年だった。

「初めは深夜放送リスナーのための普通の雑誌だったんです」

『ラジオライフ』の創刊は八〇年七月。しかし創刊号に掲載した「誰が聴いてもいい警察無線」という特集が雑誌の運命を変えた。もともと警察無線は誰でも聴けた。し

かし一般にはそういう電波は聴いてはいけないもの、という暗黙の了解がある。それを初めて雑誌で「誰でも聴ける」「法律違反ではない」と明言してしまったのだ。

裸の王様が裸であることに気づいた子供たちはもう止まらない。彼らはつぎつぎに社会のあらゆるシステムを裸にし始めた。『ラジオライフ』には毎号、警察をはじめ、消防、自衛隊、現金輸送車、タクシー、自動車電話などの無線周波数が掲載されている。それらの電波を「アクション・バンド」、傍受することを「ワッチ」という。こういうアクション・バンダーは現在、全国に百万人近くいるという。

無線機と言っても今は、子供のおこづかいでも買える。ハンディ受信機なら三万円ほどだ。これらはちょっとした改造で受信可能範囲が拡がる。改造するためには昔は内部の回路に手を入れなければならなかったが、最近のものは「隠しコマンド」といって、特定のボタンを特定の順序で押せばリミッターが解除できる。メーカーはこの改造方法をカタログにも取扱説明書にも一切書いていない。買っただけでは方法はわからないし、一般のアマ無線雑誌も取り上げない。その知る人ぞ知る改造方法をおおっぴらに書いてしまったのも『ラジオライフ』だ。

天皇の心電図をワッチせよ！

現在、警察無線はデジタルになってしまったため、市販の受信機をいくら改造しても聴くことはできない。秘話機能といって電波に混ぜてある信号がわからないと、ただの雑音にしかならないのだ。『ラジオライフ』の当面の目標はこのデジタル無線解読である。後発のライバル誌『アクション・バンド』もデジタル攻略競争に名乗りをあげているので油断できない。

『ラジオライフ』が一躍有名になったのは、警察無線の傍受やテレカやオレンジカードの変造などの際のマスコミによる報道によってだ。まるで大犯罪を犯しているかのようにマスコミは書き立てた。だが、笑ってしまうのは、マスコミも「とんでもないマニア雑誌」と糾弾しながら、「デジタル無線の解読機はありませんかね、あれがないと情報収集がしづらくて」なんていう電話を『ラジオライフ』にかけてくる。張っている家のコードレスホンや自動車電話は聴けないかというような問い合わせもくる。

天皇の下血のときは、「天皇の身体と心電図などの機械との間は無線で繋いであるはずだ、その無線を傍受することはできないか」というマスコミ関係者からの相談もあったそうだ。どうも宮内庁の発表するデータは自分たちの入手したものと違う、あれは加工していい加減なことを言っているようだ、そのウラを取りたい、ということだそうだ。マスコミにとっても『ラジオライフ』は必読書になりつつある。

自動車電話傍受は初歩の初歩

無線マニアは「おしゃれとは縁がなく、

色白で太っている。髪は長めで眼鏡をかけて、ちょっとうつむきかげんで足早に歩く」典型的おたくタイプが多いと聞いていたが、会ってくれたW君（二十五歳・コンピュータ会社勤務）はそれとは大きく違った。痩せているし、DCっぽいスーツを着て健康的に日焼けしている。

W君がこの世界にのめり込むようになったのは五年ほど前から。それまでは海外のラジオを聴くBCLマニアだった。BCLに物足りなくなってきて無線の傍受をするようになった。無線を聴き始めた頃は自動車電話の傍受に夢中になった。

芸能人関係に自動車電話ユーザーは多い。あとは、テレビ関係の人間の会話。五木ひろしの結婚式のようなときはたくさん電波が飛び交い、裏話を聞ける。

選挙前には買収の話とか、納税申告シーズンになると脱税の話が交わされたりする。もっとも、たとえ警察や税務署が傍受してたところで盗聴内容そのものは証拠にはできないが。

自動車電話のシステムは、自動車電話と通話の相手がダイレクトに電波で繋がっているわけではない。間にステーションとなるNTTの基地局が介在する。自動車電話の傍受は、自動車電話から出ている電波を聴くのではなくて、自動車電話に電波を送る基地局の電波を聴く。だから東京を中心とした関東近県の会話のほとんどは動かずして聴くことができる。ただし、自動車の移動の範囲によって、電波を送る基地局が移るため、周波数が変わる。それでも彼らは必死になって周波数を追っかける。

電波マニアのコミケといわれるハムフェアに参加した『ラジオライフ』の読者

河合その子は品が悪かった！

自動車電話を普通の人はただの電話だと

思っている。まして、クルマの中は密室で、ほかに誰もいないから普通の電話よりもさらにヤバイ会話ができる。しかし自動車電話は無線であり、受信機さえあれば誰でも聴けてしまうものなのだ。

「アイドルではどんなコの電話を聴いたことがあるの?」と聞くと、「うーん。言っちゃっていいのかな」とためらいながら、おニャン子くらぶの河合その子の会話の様子を教えてくれた。電波法は電波の発信に関しては厳しい規制があるが、受信については ほとんど自由だ。しかし、通信内容をバラすと法に触れる可能性もあるらしい。

W君が聴いたのは「彼女の全盛期でしたね」というから、かなり以前のことになる。会話の相手はレコーディング関係のスタッフだったらしい。一時間以上のその長電話は品の悪い喋り方なので、最初は本当に河合その子とは信じられなかったそうだ。おニャン子のほかのメンバーの悪口などを言いながら、自分のことを「その子」と呼んでいたらしい。W君は絶対言わないのだが、この長時間の会話を実は録音していたらしい。そのテープが存在することはウワサとしてはかなり有名だ。

ほかにもW君は、飲みに出かけたチェッカーズがほかのメンバーを呼び出してるところとか、高井麻巳子の会話なども キャッチしている。自動車電話の傍受を始めた頃はほとんど毎日一日じゅう聴いていたようだ。

「敵機来襲! 緊急発進(スクランブル)!」

航空無線は大きく分けて民間航空機と軍用機があり、軍用機も自衛隊と米軍でそれぞれ周波数が違う。入門は周波数が公開されている民間機から聴き始めるが、マニアになると軍用機の無線傍受にハマっていく。

自衛隊無線でも訓練飛行用とスクランブル発進の周波数は違うし、そのバンドも広いので、スクランブル発進の際の交信を傍受するのはなかなか難しいらしい。また、傍受に成功したマニアが雑誌などに周波数を発表すると、自衛隊のほうでもすぐに周波数を変更してしまう。

べつに戦争をしているわけでもないのに軍用機の間でそんなに面白い交信があるのかとも思うが、領空侵犯などによるスクランブル発進は年間七百回もあるそうで、「本気になって基地の交信を聴いていたら、スクランブルは必ず聴ける」(W君)。本当の領空侵犯はめったにないが、それに近い状態でも基地からソ連機にあてての英語とロシア語での警告が楽しめる。

閣僚などが海外から成田に到着した際などはヘリで自衛隊市ケ谷駐屯地に移動することもあるが、その際の交信も受信できる。「どこで飛んでいるかわからないように暗号を使ったりしてますね。誰を乗せたかなんていう交信はないけど、日程とかを見ればわかりますから」

警察無線の場合も同じだが、軍用無線では特殊用語が使われる。初めのうちはその用語が何を意味するのかはまったくわからないが、何度も聴いているうちに、突然意

味が読めてくる瞬間がある。このコードの意味が読めた瞬間の快感がものすごいものらしい。

W君は軍用機の写真を撮るのも好きで、基地祭、航空祭などにも出かける。この夏も休みをとって、米軍機を撮るために沖縄に一週間滞在した。基地のフェンスのまわりで戦闘機と基地との交信をチェックしながら、離着陸を毎日撮影していたそうだ。W君は沖縄以外にも、会社の休みがとれると受信機片手に戦闘機を見に全国の基地に出かける。W君が日焼けしていたのは、全国の基地のフェンスをめぐっているからで、けっしてテニスやサーフィンで焼けたものではなさそうだ。

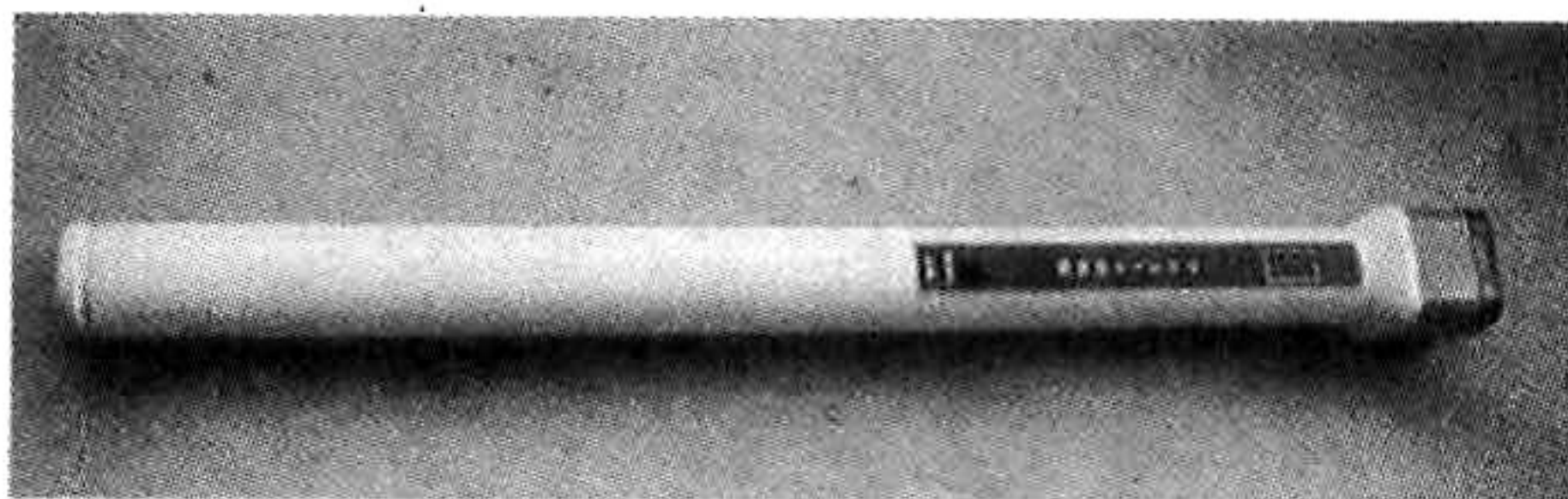
123便の捜索、「なだしお」の捜索などのときは受信機にかじりつきだ。「行ったって、電波がはっきり聞こえるぐらいしかメリットないから…」と現場を見たいという欲求はわかないようだ。「それよりも家で無線を聴いてたほうが迫力ありますよ」

警カラーガード隊　り

『ラジオライフ』の人気連載、森伸之の「婦人警官制服図鑑」

おまわりさんが大好き♡

『ラジオライフ』を見ると、無線の情報だけでなく、警官や消防士、自衛隊の写真、はては警察内部の重要書類のコピーの投稿、読者が自作したパトカーまで登場している。「今月の婦警さん」という連載では街角やイベントで読者が撮影した婦人警官の写真が掲載され、『女子高制服図鑑』で知られる森伸之のイラストと「これはクラクラします」といった制服批評が付いている。カラーガード隊という婦警のバトントワラーの存在はここで初めて知った。当然、超ミニである。

『ラジオライフ』読者の興味が警察などの

赤電話の料金箱のカギ。どこから入手したのだろう。もし合えば、ゴッソリ電話料金が手に入る⁉

完全匿名希望の某氏が持参したアルコール検知器。警察庁御用達！

これはアブナイ‼ 福岡県警採用通知書だ。

昭和61年12月、山陰本線余部鉄橋から転落した列車「みやび」が使用していた本物のテールマーク。どうやって入手したの？

拳銃ケースに手錠ホルダー。拳銃以外はすべて本物。「警視庁」の刻印が打たれている。

福島公安25さんの腕章コレクション。ペディ参加者に大ウケだった。

広島市内の松井さんが持ってきた暗証番号解読機。ポケコンとカードリーダーを組合せて自作した。これはスゴイ！

↑ペディションに読者が持ち寄った自慢のコレクション。キャッシュカードの暗証番号解読機がスゴイ

装備や書類へと移ったのは、警察無線のデジタル化で傍受が不可能になったからだ(署活系の無線は今もアナログだが、これはローカルなので面白くない)。

毎月開かれる「ペディション」という『ラジオライフ』読者の集いは、今まで全国八十カ所をまわっている。読者はそこに自分のコレクションを見せびらかしに来る。本物の警察手帳、自衛隊の砲弾、警察官の拳銃(ニューナンブ)の箱、パトカーの取扱説明書……。自作のパトカーもやって来る。そんなものがどうして民間人の手に入るのかというと、ちゃんと売ってるのである。通販の広告が『ラジオライフ』にはいっぱい出ている。

地元警察もペディションに目をつけて、遠くから覆面パトカーで監視することもある。そんな日には読者たちは大喜びで、覆面パトカーはたちまちマニアに囲まれ、記念写真をバシャバシャ撮られる始末。

信号機から旭日のマークが消えた！

ペディションには「鉄ちゃん（鉄道マニア）」も来るが、変わったものでは「余部鉄橋事故の転落車両のヘッド・マーク」なんてものまであった。現場から取ってきたとでもいうのか。

『ラジオライフ』は、「立入り禁止突破作戦」と題して、火事や事故現場などの検問を破って中に入るためには、新聞配達のふりをすれば警察は通してくれる、という記事を載せたことがある。するとつぎつぎと読者から指摘が舞い込んだ。ミニサイクルではいかん、ミニサイクルで配達するのは赤旗と聖教新聞だけ、六時をまわったら新聞の量を減らさないと不自然、新聞配達は絶対ジーパンははかない云々……。

警察と『ラジオライフ』のイタチごっこがまた面白い。覆面パトカーはこのアンテナで見分けられる、という記事を載せたら警察は全パトカーのアンテナを取り替えるし、パトカー模造に必要なフロント・グリルの旭日章のエンブレムは、信号機のコントロール・ボックスについてるやつを型取りして複製すればよい、と載せたら東京じゅうの信号機からあのマークが全部消えてしまった。ウソだと思うなら確かめてみるとよい。

たんなるガキのイタズラのために天下の警察がふりまわされる。左翼の闘争でさえこんな痛快なことはできなかった。

調書や指名手配書などの外部からは入手不可能なものを投稿してくる常連の何人か

データブック'89

警察

警察指定書式を公開!! これが緊急逮捕手続書だ

警察官の使用する公式書類には、いろいろなタイプが存在します。これらを総称して「警察指定書式」といい、一日の勤務すべてがこの指定書式によって厳しく管理されているのです。勤務日報から緊急逮捕手続書まで1枚1枚ていねいに、そしてフォーマットどおり作成されていきます。なおここで紹介する指定書式は、

原寸大 これが高速タダ乗り券だ!!

公務自動車証明書

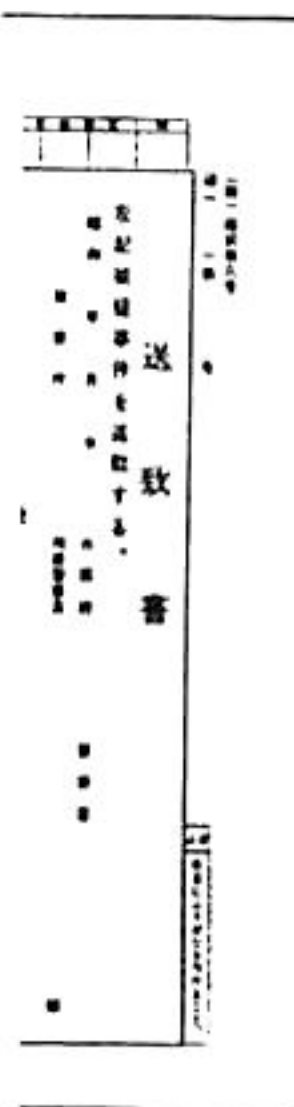
発行番号	第　　　号
通行年月日	昭和　年　月　日
道路名	自動車道
通行区間	ＩＣから　ＩＣまで
乗車責任者 職・氏名	
自動車 登録番号	
用務	

この自動車は、公務自動車であることを証明する。

昭和　年　月　日

発行者　埼玉県警察本部警務部警務課長

注意事項

1　この証明書は、高速道路に入るとき、必ず入口ゲートで収受員に提示し、無料通行券を受け取ること。

「くれぐれもコピーして使用しないように」の但し書き付きで掲載される警察内部書式の数々

は間違いなく現職の警官だという（そのての投稿をインサイダー投稿と呼ぶ）。

羽根田氏も警視庁に行ったとき、『ラジオライフ』が置いてあるのを見た。警察のイベントなどの取材に行くと、おえらいさんに「このあいだの記事はちょっとひどいなあ」なんてニヤニヤしながら言われるそうだ。

誰でも作れる覆面パトカー

覆面パトカーの模造をやっているX君は非常に警戒心が強い。彼との連絡方法も仲介人に伝言を頼んで、X君からの電話を待つしかない。電話での声は明るいし、言葉遣いも礼儀正しいが、直接会ったあとでも「申しわけないが、住所や氏名、電話番号は教えられない」と言う。なんだかこっちもイケナイことをしているような気分になってくる。しかし、インタビュー場所には女の子連れで現われて、マニアは女とつき合えない、という神話をあっさり覆した。

X君の現在の車ギャランは三台目。車を買い替えるたびにその車種にあわせた改造を行なってきた。ギャランの前に乗っていたのはアコードだが、これが『ラジオライフ』で紹介されてから、覆面パトカーの模造ブームが起こった。いわばX君がパトカー「もどき」の火つけ役だ。

最近はブームなので、ふだんX君が走っていても改造パトカーに遭遇することが多くなった。二年ぐらい前までは絶対覆面パトカーには存在しない車種というのがあったが、『ラジオライフ』でそれを特定して以来、それまで有り得なかったような車種も警察が使い始めたので本物と見分けはつきにくくなったが。

X君は小学生の頃からPチャンと呼ばれる警察無線を聴いていた。なんと昔はテレビの微調整で聴けた、というのだ。三年ぐらい前に覆面パトカーを見て、これなら簡単に模造できると、この「趣味」に入った。もっともPチャンのほうは、デジタル化されてからは聴かなくなってしまったそうだ。

しかし、覆面パトカーの模造というのもわけのわからない世界だ。なにしろ覆面パトカー自体が一般の人にはわからないようにできているのに、それの模造というのはますますわからない。「もどき」と呼ばれる彼らの楽しみは、マニアのあいだと警察にしかわからない（よく覆面パトカーはナンバープレートが違うといわれるが、まったくのデマ。ナンバーだけじゃ見分けはつかない）。

X君のパトカーには「寒川神社」「鶴岡八幡宮」のステッカーが貼ってあるが、これもパトカーには地元の神社関係のステッカーが貼ってあることが多いからだ。通信機の上にはタオルがかけてあるが、これもポイント。貼ってある乗務する警察官向けの注意書きステッカーは、なんとワープロで自作した労作だ。どこから入手したのか、警察学校の卒業記念タオルまでがぶら下げてある。交通整理に使うニンジンと呼ばれる赤色の信号灯も何気なくリアシートに置いてある。

警察車両にはあまり高級なグレードのも

X君はこのパトカーの撮影のあと、高らかにサイレンを鳴らして走り去った！

のは使われない。X君は自分の車のグレードが高すぎるので、わざわざ前後のバンパーを低いクラスのバンパーに替えた。

「けっこうお金がかかったでしょう」と聞くと、「みんな金額のことをまず聞きたがるんですよね」と嫌な表情をチラと見せた。

X君のパトカーを悪徳業者の部品で作ると何百万にもなるそうだが、

「でもそうした部品は会社が不法に横流しをしているわけじゃなくて、民間人でも合法的に手に入れられるものばかりなんですよ。それを売ったり買ったりすることはぜんぜん違法じゃない。でも昔は簡単に手に入った覆面パトカーの部品が最近急に手に入りにくくなりました。警察から業者にプレッシャーがかかったんではないでしょうか」

とX君は言う。

X君のギャランはエンジンのチューンナップをしていないが、彼によると「本物のパトカーもしてないんですよ。世間でよく言うパトカーは速いっていうのは迷信。パトカーはいろんな装備品を百キロぐらい

積んでいるので、同じ車種だと、パトカーのほうが一般車より遅い」のだそうだ。

拳銃以外、手に入らないものはない

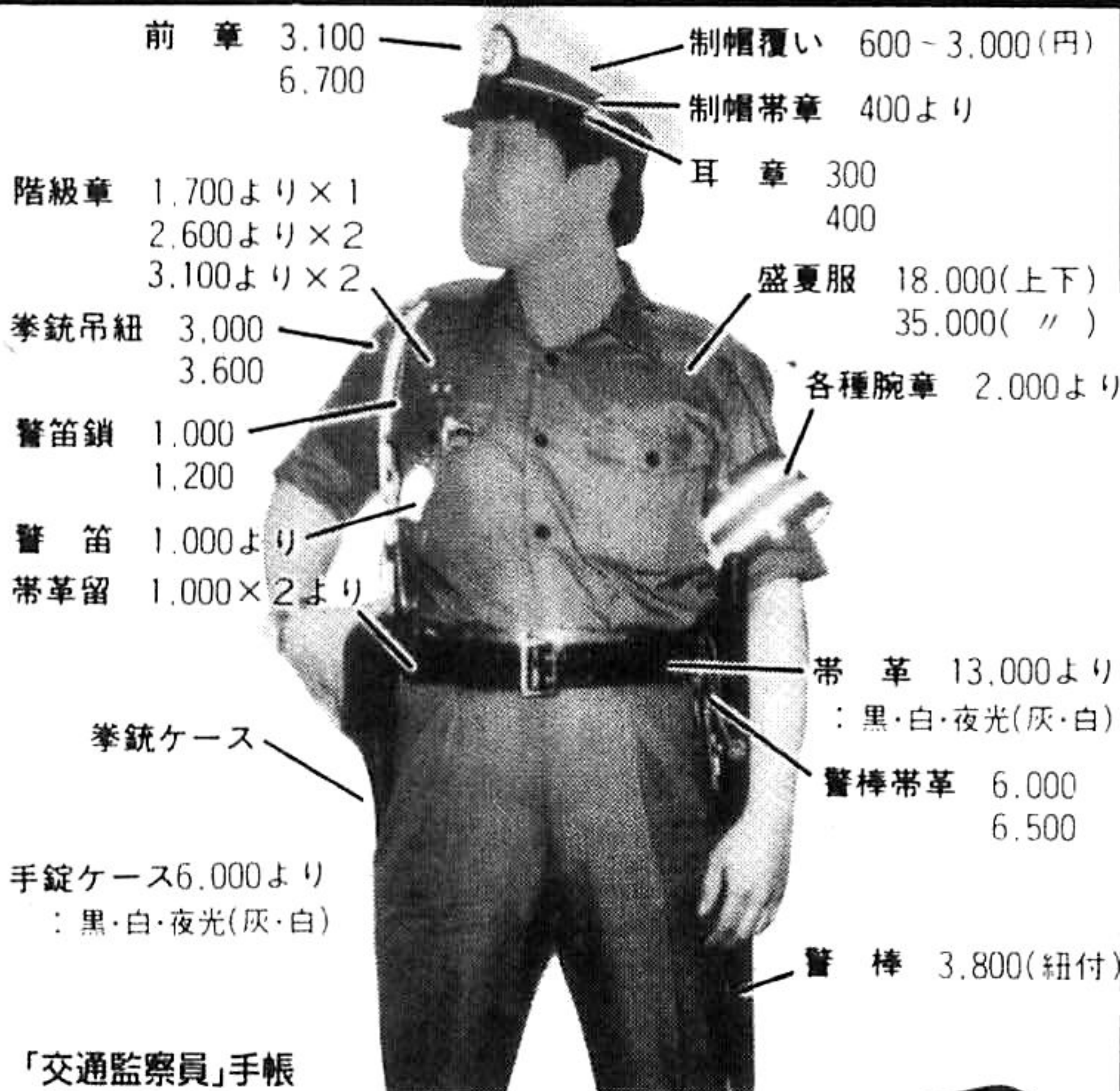
なんと彼は毎朝このパトカーで通勤している。走っていて本物の覆面パトカーと出くわすこともよくあるらしい。大丈夫なのかな。「挨拶をされることもありますよ。僕の車は良くできているので」。もしかすると、本物の覆面パトカーに同僚と間違われることが彼の快感なのかもしれない。覆面パトカーという警察内部でしか通じない一種のコードを、車の模造によってハックしているといえる。

服装などで不審をいだかれて職質されたり、本物の覆面に追いかけられることもあるそうだが、ふだんは路上駐車しても、まわりの車はチョークでマークされたりステッカー張られたりしてるのに、X君のギャランだけ何もされなかったりする。

回転灯を点けて走ることはほとんどないという。「それは最低のモラルですから。やっちゃうと収拾がつかなくなる。面白くはあるんだけど」。それでも道が混んでいるときはニンジンを出して列に割り込んだりということはしているようだ。

彼自身は「マニアが集まるようなところは好きじゃない」「こういう趣味の人たちって好きじゃない」と言う。マニア特有の、ひとつのことにのめり込んで自慢し合ったり、相手の欠点を得意そうに指摘するようなのが嫌いなのだそうだ。

「マニアが持ってたりするものは簡単に手に入るものが多いんですよ。自慢に聞こえちゃうと嫌だけど、ぼくらのグループでは手に入らないのは拳銃ぐらいですよ。あとは手錠であろうと、警棒であろうと、制服

官・公庁備品・被服・電装品
掲載商品以外にも多数在庫あります
前章 3,100 6,700
制帽覆い 600～3,000(円)
制帽帯章 400より
階級章 1,700より×1 2,600より×2 3,100より×2
耳章 300 400
盛夏服 18,000(上下) 35,000(〃)
拳銃吊紐 3,000 3,600
各種腕章 2,000より
警笛鎖 1,000 1,200
警笛 1,000より
帯革留 1,000×2より
帯革 13,000より：黒・白・夜光(灰・白)
拳銃ケース
警棒帯革 6,000 6,500
手錠ケース6,000より：黒・白・夜光(灰・白)
警棒 3,800(紐付)
「交通監察員」手帳
第一回製作分、在庫謹少の為、品切間近
【なお、商品購入の際には
マニアの憧れ、散光式パトライトを超特価
(赤・青)(青・青)の2タイプ有り
限定販売
¥68,000
全長1200mm 重量17kg
スライド式マウントで取付簡単(適応幅＝1110～1240mm)

「ラジオライフ」のヘンな広告その② ちなみに覆面パトカー用の回転灯は一個一万円ぐらいから

であろうと、お金さえ出せば手に入れられるルートを知っている。今は無理だけど、少し前なら本物の白バイだって新車で買えたんですよ。だからそんなものを自慢するのってね……」

X君の「自慢するわけじゃないけど」と断わりながら、自分のハックの成果を見せてくれるあの控え目な身振りと、覆面パトカーの模造という、普通の人にはまったく見分けがつかない（意味がない）行為を厳密に行なうということには、なにか通じるものがある。

資本主義社会というファミコン

社会システムを維持、管理するための警察や消防、軍隊の電波。距離と時間との関係を無意味にした電話。対人コミュニケーションを一切省いた自動販売機。そしてキャッシュレス時代の要となるプラスチック・マネーやプリペイド・カード。資本主義の高度化はそれを支えるシステム自体を限りなくブラックボックス化してしまった。このブラックボックスの存在をいちいち気にしていては「健全な市民生活」は営めないけど、『ラジオライフ』の情報オタクたちは資本主義のブラックボックスをつぎつぎとこじあける。

ハッカーに対抗するために、システムをさらに強化すればいいとシステム側は言うだろう。しかし、近代のシステムとは「より便利に」という指向である。そして「便利」とは、よりハッキングしやすくなるということなのだ。

貨幣社会はあらゆるものの価値を貨幣に換算する世界をもたらした。プラスチック・マネーはこの貨幣を電気信号に変えた。こうした高度資本主義は、市民社会の共通了解に全面的信頼をおくことによってのみ支えられているにすぎない。そんな「表」の世界は、裏から見れば何の実体もない幻でしかない。システムはスタートした時点から、その終わりが見えていたのだ。

警察機構やNTT、軍隊といった国家と資本の合体した巨大なシステムを、ひとりの個人のほんのちょっとした知恵でほころびだらけにしてしまう熱意と快感は、もしかしたら二十年前の全共闘の快楽と似ているのかもしれない。あのときあったのは本当は革命への希望なんかじゃなくて、ただ目の前のシステムを右住左住慌てふためかせるゲームの快楽だったはずだ。

『ラジオライフ』の投稿欄には毎月読者の職質体験談が載っている。「職質されたい人のためのアブない機関誌」というテーマで、中核の『前進』や第四インターの『世界革命』など多数紹介されたりすることもある。そこには右翼民族派の『ゼンボウ』まで混じっている。この、右でも左でも、とにかく警察に目をつけられれば嬉しいという感覚は、それで得られる金銭的利益がどんなに少なくても全力を注いでハッキングする感覚と等しい。ハッカーたちの目にはプラスチック・マネーの社会は情報という迷路でつくられたファミコン・ゲームにしかすぎないのだ。

カメラ小僧
パンチラと生写真に賭けた青春！

鉄壁のガードを破り、不可能な盗写に挑戦するスナイパーたち！

プロも買えない高級機材を駆使して、パンティやアイドルに肉薄する少年たち。
彼らを生み出した投稿写真誌の裏側と、異常な進化をとげたそのテクニックを初公開！

永江朗
ライター

このたびお見合いで婚約したY氏（二十九歳）は悩んでいた。そして、結婚前にどうしても彼女に本当の自分を知ってもらうべきだ、と決心した。

彼はレオタードのバトン・ガールの大股開き写真にかけては日本一のマニアだったのだ。

ある日、ついに彼は言った。

「実はぼく、あなたの思ってるような人間じゃ、ないんです。ほんとうは……」

「いいの！」彼女は彼の言葉を封じた。

「あなたのそういう謙虚さが好きなの……」

せっかく決心したのに言いそびれて、結局、彼は未だ告白できずにいる。

竹下通りの「生写真」は誰が撮る？

私が勤めていた東京・浅草のファッションビルROXでは月に何回かアイドルの新曲発表会や握手会が行なわれていた。イベントのある日はいつも朝から、カメラバッグを肩から下げた少年たちがビルの前に集まる。イベントが始まる時間が夕方からであっても、カメラ小僧と呼ばれる彼らは、ハンバーガーを片手にビルの階段に何時間も座り込んで一眼レフカメラや望遠レンズを見せ合いながら、何時間でもひそひそと話を続けている。ビルに勤める女の子たちは「クサイ」とか「気持ち悪い」とか言ってカメラ小僧たちを気味悪がっているのだが、たしかにカメラ小僧たちの発散する雰

囲気にはタダならぬものがあった。
週末の原宿。歩いている人の平均年齢が平日に比べて一気に七～八歳も下がるこの街では、駅前や竹下通りの露店で一枚百五十円のアイドル生写真が売られている。生写真というのは、オフィシャルなブロマイドとしてではなく素人が撮った写真。普通のＤＰＥ屋で手にするのと同じということで生写真というらしいが、ナマという言葉は妙にエロチックだ（『若奥様の生下着』という有名になった本もあったっけ）。遠い存在であるはずのアイドルが、「生写真」という言葉のなかでは生身の肉体を感じさせる。商品として売られているが、事務所の許可を得ているわけでもなく、肖像権その他からみれば非合法の商品だ。しかし、この生写真と、あのＲＯＸの階段で何時間もおとなしく座っていたカメラ小僧たちとがダイレクトに結びつくなんて考えてもみなかった。
それに思い至ったのは、何年かぶりで投稿写真誌を見てからである。
投稿写真誌のグラビアのアイドルたちは、相変わらず、パンチラやパンモロ（つまりモロに見えてる）を繰り広げている。それは、事務所とベッタリのメジャー系アイドル誌や健全テレビではけっして見ることのできないものだ。
この手の雑誌は優れた投稿に対して賞金やテレホンカードを贈る。最高三万円という賞金は、なるほどＲＯＸの階段の少年たち（といっても十八、十九歳は越えていた）にはそこそこ高額かもしれない。そして、この投稿少年たちから、露店の生写真撮影家が生まれるのである。

パンチラ史に残る最初の一枚

最初の投稿写真誌は白夜書房の『写真時代ジュニア』だ。その編集長、末井昭氏はあの『写真時代』で、荒木経惟氏を全面にフィーチャーして、写真と雑誌史上に一時代を築いた人だが、彼は投稿写真雑誌の元祖でもあったことになる。
アイドル・パンチラの歴史を切り拓いた偉大な一枚は『写真時代』に掲載された河合奈保子のそれだった。実はこれ、この『別冊宝島』の版元のＪＩＣＣ出版局が昔出していたアイドル雑誌『ＢＯＯＭ』のほうが先だった！　立教高校で五百円で売られていた生写真を手に入れて『ＢＯＯＭ』が載せたものを、複写して転載したのだと末井氏は言う。
「あれは値打ちもんだった（笑）」
それでもある部分真剣に写真を考える雑誌だった『写真時代』に対し、徹底的に遊ぶことを目指して創刊したのが『写真時代ジュニア』だった。
「全部ウソの世界にしようと思った」
投稿ページも全部ヤラセで作って、読者が撮ったように見せよう、というその発想は、陰毛が写るとヤバイなら陰毛のほうを剃ってしまえ（被写体を修正するこの手法はエロ本の革命だった）という末井氏らしい発想だ。
ところが冗談のつもりの投稿欄に、本当

に読者から写真が殺到してしまった。しかもそっちのほうがずっとヘンで面白かった（ことおたくに関しては、メディアとおたくとどっちが先に仕掛けたのかわからないことが多い）。

『写真時代』にも写真の持ち込みはあったが、彼らはプロ志向のアマチュアだった。彼らの作品と、アイドル追っかけのカメラ小僧のパンチラ写真は決定的に違っていた。

「大人の写真は撮る側の意思とか表現だとかを考えてしまうけど、子どもはとにかく見たいものにストレートにいっちゃう」

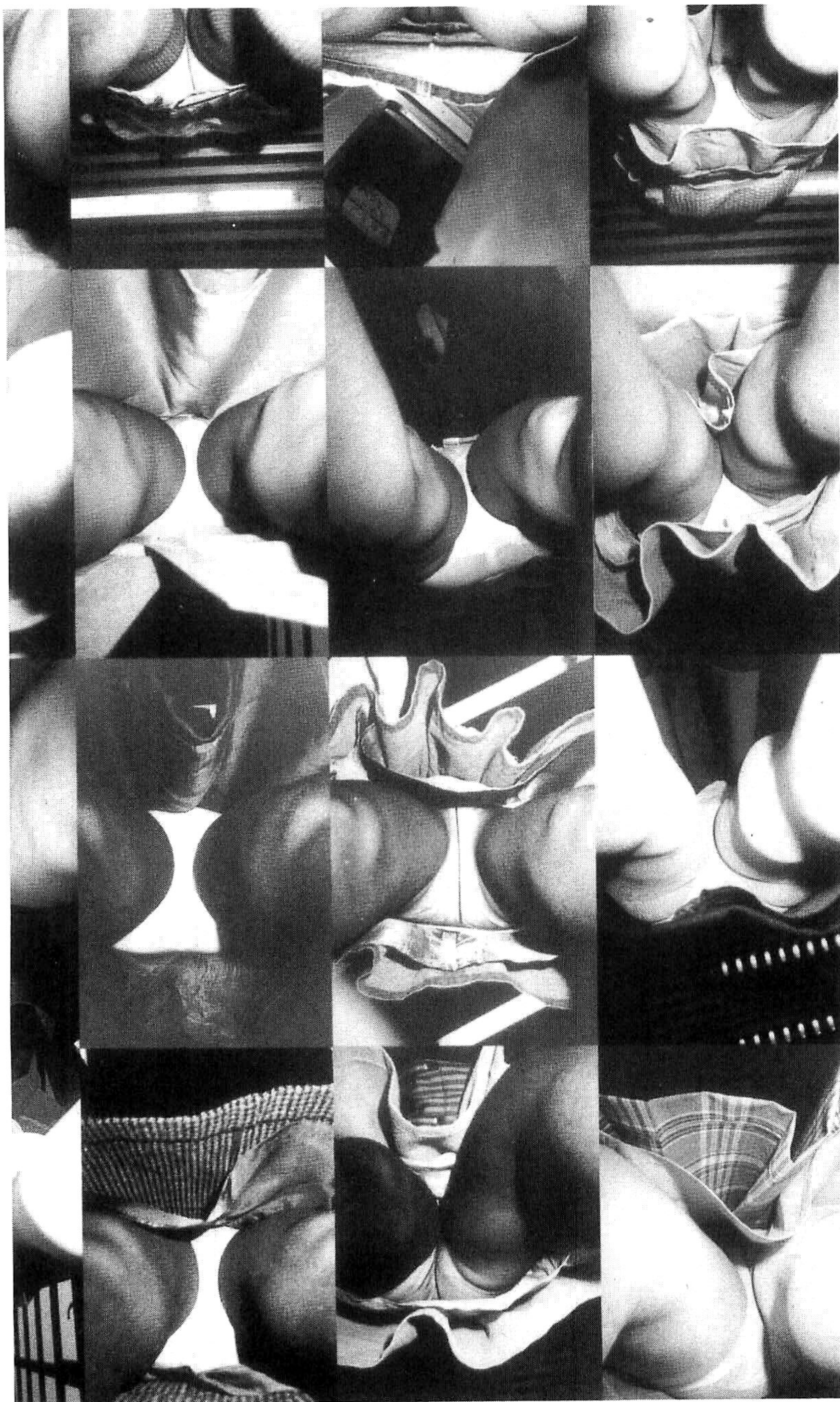
末井氏たちも彼らのエネルギーには腕組みせざるをえなかった。

「写真時代ジュニア増刊／スーパー写真塾」より

「パンモロは天皇である」

カメラ小僧の出現の背景として、投稿誌の誕生と、もうひとつ欠かせない要素にカメラの機能の発達と低価格化ということがあった。だれでも簡単に撮れて失敗のないバカポンカメラ（バカでもポンニチでも撮れる）が、子どもでも小遣いをためれば買えるようになった。ストロボ内蔵のバカポンカメラの存在抜きには、パンチラ写真は成立しなかった（なにしろスカートの中は真っ暗だから）。

ストロボの威力を最大限に利用して投稿写真史に名を残しているのが大阪の「聯合

「スーパー写真塾」より、聯合通信のパンモロ投稿写真

通信」というペンネームの、当時十九歳のカメラ小僧である。彼は毎月大量の写真を白夜書房に送ってきた。聯合通信が撮っていたのはアイドルのパンチラではなく、まったく普通のOLなどのパンティだった。テクニックはいたって簡単。当時大学生だった彼が、学校の行き帰りに利用する駅のエスカレーターで、スカートを穿いた女性の足もとにカメラを置いて撮るというものだった。

この聯合通信の写真はパンチラどころかパンモロ(!)。真下から正確に股間を写している。当然写っているのは股間と太腿のみ。すべて同じ構図である。それぞれの写真の何が違うかというと、それはスカートの色や柄であり、パンティの色や柄が違うだけという世界。これはスゴイ。ほとんどミニマル・アートだ。いちどパンモロと後ろ姿写真付きというバリエーションをやったことがあるが、「それは邪道だ」という意見が読者から寄せられた。

被写体の肉体や人格ではなく、とにかくパンティだけに執着していくこの熱意は何だろう。下着フェティシストは存在するが、彼らはその下着が汚れていれば汚れているほど興奮する。下着に密着していた女性器の痕跡に欲情するのである。しかし聯合通信の写真にはパンティの向こうの女性器に欲情するというなまなましさがない。あくまで即物的にパンティだけを目指している。パンモロは何に欲情しているのだろう。その疑問は、当時の末井氏にもあった。とにかくこの写真は今までの写真論では考えられない「事件」だった。評論家の上野昂志はこの欲望の空虚な対象を「パンモロは天皇だ」と結論づけた。

「東急屋上はパンチラにいい」

パンチラ写真を撮る子どもたちは気が弱くて生身の女の子には臆病なくせに、カメラを持つとものすごく大胆になる。代々木公園で踊るローラー族の女の子たちの股間を専門に撮っているカメラ小僧たちもいた。ローラー族はリーゼントに皮ジャン、スリムのジーンズのケンカっ早い少年たちなわけで、パンチラを撮るには彼らのガードをかいくぐらなければならない。それでも、しゃがんだ女の子のパンティが経血で汚れているという写真までものにした。

「裸零」という青森の投稿写真マニアは甲子園の写真が専門だった。彼は写真を真下から撮ることを誇りにしていた。チアガールがベンチとベンチに足を広げているその間から撮る。バックは青空！　女子高生の股間のスケベさ以上に、青空のバックと黄色やオレンジの原色の衣裳とのコントラストが、写真として新鮮だった。本人は警察にも何度か捕まったことがあるという暗い青年だった。会ってみると、自分の写真にいかに価値があるかということを延々としゃべった。「マニアは自分の作ったものにものすごい自信がある」(末井氏)。

アイドル・パンチラを撮るために高価な望遠レンズをそろえるカメラ小僧たちも登場するようになった。やがて彼らの間に

「東急本店屋上は風が良くてパンチラを撮りやすい」というような情報が流通するようになる。投稿写真誌とは別のところでカメラ小僧のネットワークができあがっていたらしい。

単純に女のパンティが見たいなら高価なカメラをそろえる必要はない。女が欲しければ高校生でも金さえ払えばカラダが買える。だがカメラ小僧には、あくまで写真でパンチラを撮ることにアイデンティティがある。かといって芸術に走るわけでもない。生身の女性よりも、自分が撮影したフィルムのなかの女性にエロスを感じる。写真を撮るという行為にエクスタシーを感じていると同時に、写真のなかに（二次元的に）閉じ込められたパンティにしか欲情できないのかもしれない。

ニッポン一のバトン野郎

八四年、『写真時代ジュニア』増刊として『スーパー写真塾』が生まれ、より投稿カメラ小僧向けになって月刊化された。いっぽう、サン出版からも『セクシーアクション』という投稿写真誌が出た。これは馬場憲二のベストセラー『アクションカメラ術』の影響下にあるもので、ブルマー姿の少女写真などが多く、撮り手も中年のスケベ親爺中心。風呂場や更衣室の覗き写真は編集部のヤラセだった。しかしサン出版系列の考友社出版から『スーパー写真塾』の対抗誌として、同じ八四年に創刊された『投稿写真』は実売三十万部に伸びてトップに躍り出た。

冒頭で紹介したバトン・ガール写真のＹ氏は、『投稿写真』創刊時からのメイン・ライター。『女子高バトン娘くらぶ』というバトン・ガール研究の著書もある（この本は宮崎勤の部屋にあった）。

「バトン写真にかけては日本一だと思う」

と、Ｙ氏ははにかみながらも自負する。

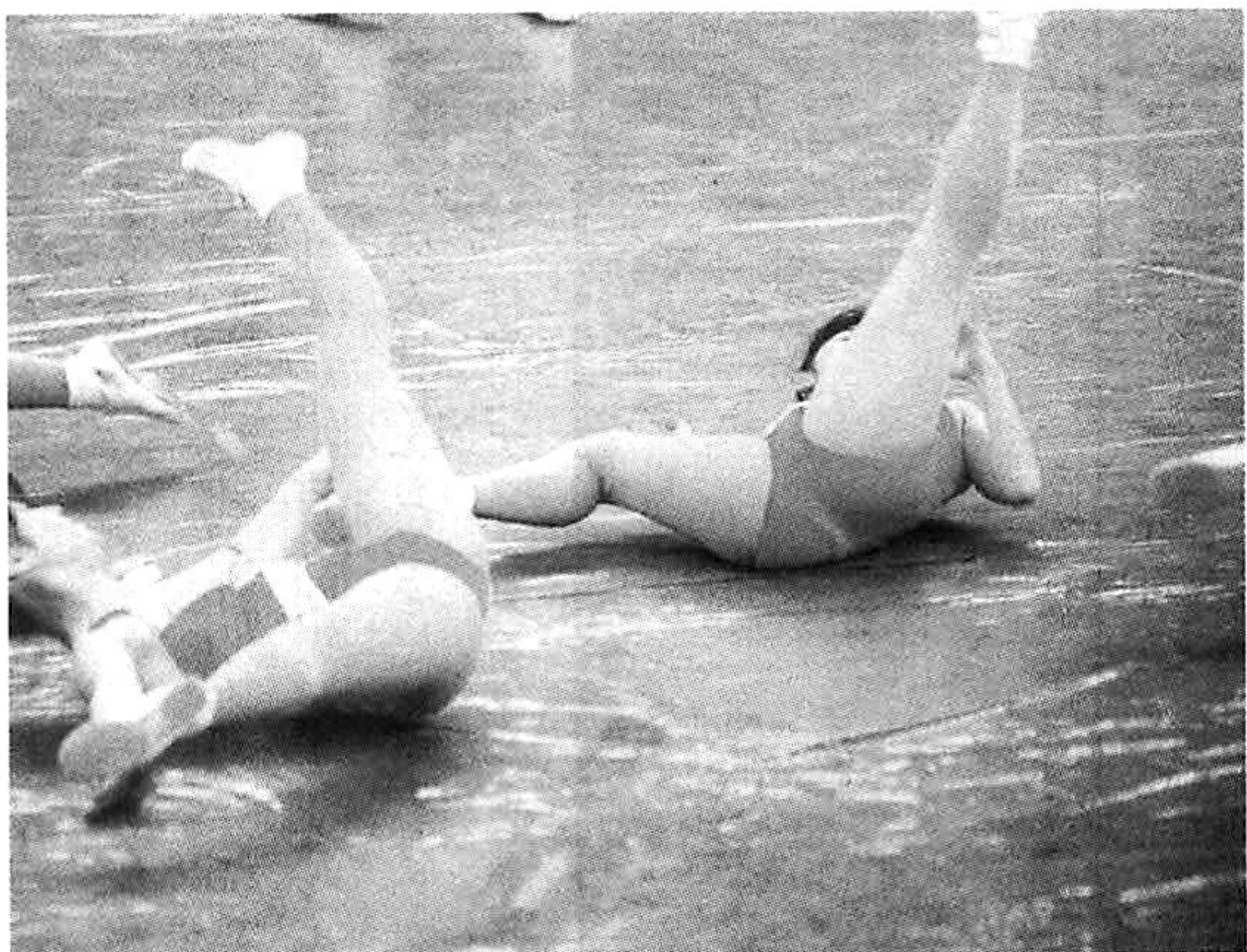
バトンにとりつかれたきっかけについて、

「東京に出てきて偶然、区民祭りのパレードに出くわした。僕の田舎じゃあんなものはなかった。生まれて二十年目、女の子が裸同然のレオタードを着て街の真ん中で踊ってるのを見たら一発でイカレてしまった」

それまではなんの興味もなかったカメラを買いに走った。女の子をまともに見ることもできなかった純情青年が、カメラを手に入れた瞬間から、猛然と被写体に迫るようになる。

「カメラという凶器が僕を変えたんです」

何台ものワープロやパソコン、オーディオ機器、壁にはレモンエンジェルのポスター（レモンエンジェルは同名のアニメの二次商品として作られたアイドル三人組で、パンチラを初めから売り物にしている）。

Y氏のバトン写真コレクションより

そういうものに囲まれた仕事場で、Y氏は『投稿写真』の歴史を語る。その口調は淡々としていたが、突如、押し入れを開けるとザクザク出てくるバトン写真の山！　ごく普通の女子高生がレオタード姿で体をくねらせているその写真群は変になまなましく、大量に見ているうちになんだか気分が悪くなってきてしまった……。

一時は興隆をきわめたバトンや新体操、チアガールのパンチラ写真は、警備の強化などから現在は下火だ。

創刊当初は「カメラBOYの悪漢マガジン」のキャッチ・コピーで過激にけしかけていた『投稿写真』も、現在では「カメラBOYのアイドルマガジン」とキャッチを変え、ちゃんと事務所を通したアイドル記事中心になった。部数も今ではかなり落ちたらしい（それでも投稿写真誌五誌で各平均十五万部、合わせて五十万から七十万部というのは出版界では無視できない数だ）。

そしてカメラ小僧たちもパンチラ投稿を卒業し、アイドルの顔をアップで撮って売るほうに移行するのである。

生写真でセフィーロが買える

P君は最近までアイドル生写真のカメラ小僧をやっていた青年。現在二十歳ということだが、インタビューの場には新車のセフィーロで現われた。P君の友人が耳打ちするところによると、写真で儲けた金で即金で手に入れたそうだ。もっとも、カメラ小僧の肩書きじゃローン組めるわけないけどね、と笑っていたが。カメラ小僧組織の規律は厳しいらしく、内情を暴露した者には制裁が加えられるらしい。P君の態度も慎重だった。

P君のきっかけはプロレス写真。プロレスが好きで、会場で写真を撮っているところを生写真業者に見つかった。「なにやってんだよ」と取り上げられ、写真を見た業者から「これ売り物になるから、こっちに流してみないか」と持ちかけられた。アイドルを撮るようになったのも生写真業者の意向だった。プロレスもアイドルも元締めは一緒なのだ。

全国で三つある生写真の元締め業者が、関東に五十人、関西で五十人ぐらいのカメラ小僧を使って生写真を撮らせる。業者の買い取り値は、フィルムごとだったり、数コマだけ切って渡したり、下敷きになったりポスターだったりで違う。一枚百五十円

で売っている生写真の相場は、だいたいプリント一枚につき八円か九円。

「光GENJIの場合はひとコマ五万枚ぐらいだったから、ひとコマ売れると五十万近い金になる。一本のネガに使えるコマがたくさんあればものすごい金になる」

なるほどキャッシュでセフィーロが買えるはずだ。

「働いてる奴なんていませんよ。もちろん学校も行かないし。朝の六時から夜中までスケジュールいっぱいですから。アイドルのイベントは土日しかないけど、平日はテレビ局なんかを追っかけてますから」

儲けた金を出し合って五、六人でマンションを借りてそこに寝泊まりする。

「タコ部屋ですね（笑）」

原宿で売られるアイドル生写真

「カメラは使い捨て、キセルは常識ですよ」

いちばん知りたかったのは、彼らが年々厳しくなるというコンサートのカメラ規制を、どうやってかいくぐるのかということだ。

「カメラ持ち込めない会場はありませんね」

冬ならカメラを背中に固定して、その上からロング・コートをはおる。そして大きなカバンを持って行って、それを入口のチェックに見せる。そっちは囮だ。夏は薄着になるので、手ぶらで入って内側から非常口を開け、ドアの外に待機していた仲間からカメラを受け取る。または事前に会場に入り込んでトイレの掃除用具入れにあらかじめ隠しておく（映画『ゴッドファーザー』のピストルの隠し方を思わせるワザではないか！）。

レコード大賞などのときはもっと堂々と、「取材です」と名刺を出して入場し、取材席から思う存分撮りまくる。
「ありもしない雑誌の名刺作るんですけどね」と言うが、実在の新聞などの名をかたることもあるのだろう。
高く売れるとはいっても、光GENJIなどの男性アイドルの場合はやりにくいだろう、女装でもするの？と聞くと、
「それはデマですね。会場に来たそこらの女の子つかまえて人垣を作ってもらって紛れちゃえばいいんですよ。あとで生写真あげるって言えば、たいてい協力してくれますよ」
入ったらシートに深く身を沈めて、立っている前の客の体の間からレンズを突き出す。

「とにかく入っちゃえばこっちのもんだから」

もし見つかってもフィルムだけ抜いてカメラは放り投げてしまえばいい。真夏に恒例の大磯ロング・ビーチのイベントは、ステージがプールの中央なので観客はとうぜん裸。カメラは発見されやすいが、そしたら潜って脱出する。濡れてパーになったカメラは躊躇せずに投げ捨てる。イベントが終わるとプールの底には点々とカメラが沈んでいる!?
カメラ小僧が使うのは二百ミリから三百ミリの望遠レンズだが、早いシャッター・スピードで撮るために高価な明るいレンズを使う。バレにくいコンパクトな反射式望遠もよく使う。安売り店で買っても一式数十万円はする。
「もう機材は使い捨てですね。フィルムさえ確保すれば何倍も儲けられるから」
なんとも豪快な話だが、どうやらカメラ小僧専門に盗品を流すルートがあるらしい。去年、仙台でカメラ小僧が捕まったことがあった。彼らのカメラは製造番号を削った盗品ばかりだった。使ったら絶対捨ててくれる、という信頼感があるので、売るほうも安心して市価の五分の一ぐらいで捌いているという。
カメラ小僧はアイドルを追って、日本全国どこにでも行く。その交通費はどうしているのか。
「いやあ、日本じゅうどこでも入場券で行けちゃう世界ですから（笑）」
カメラ小僧には〝鉄ちゃん（鉄道マニア）〟あがりが多い。彼らのなかにはあらゆる駅のハサミを持ってる子もいる。キセルのテクニックはお手のものというわけだ。日本じゅうの駅の改札突破法のマニュアルまで流通しているそうだが、
「静岡駅だけはヤバイですね」
カメラ小僧が不正乗車で大量にパクられた事件があったらしい。
それにしても聞けば聞くほどスゴイ話だ。使い捨てカメラよりも、これだけの智恵をこんなことに使ってることのほうがもったいない気もするが。

商売のアイドルと本気のアイドル

カメラ小僧の間で伝説のように語られて

いる少年（?）がいる。この道かれこれ十年というS君は現在二十五、六歳。先頃、彼は「生涯一カメラ小僧宣言」なるものをしたという。しかし彼は、今ではもう現場でシャッターを押すことはない。都心にかまえたマンションの一室で、会場への侵入方法、カメラの持ち込み方法などの作戦を指揮し、全国各地にカメラ小僧を派遣する。最近では手ぶらで入って、会場の後ろで腕組みして見ているだけだ。

若くして大金を手にして、学校にも行かないカメラ小僧たち。じゃあ、ふだんその金と暇を何に使っているのだろう。

「追っかけですよ」

え？　それじゃ同じじゃない。

「本当に好きなアイドルは撮れないですよ。イベントに通ってるとアイドルや事務所に顔覚えられちゃうし、そうなると生写真が流れたとき、アイドルにバレちゃう。アイドルには嫌われたくないでしょ。商売のアイドルと本気のアイドルは分けてます」

「あだ」というアダルト・ビデオ・ギャルの専門の追っかけもいるが、そんなものは売れないので、まったくの趣味となる。

その「生涯一カメラ小僧」S君も、渡辺美奈代を追っかけてハワイまで行ってしまうが、彼女の写真だけは商売にできないらしい。

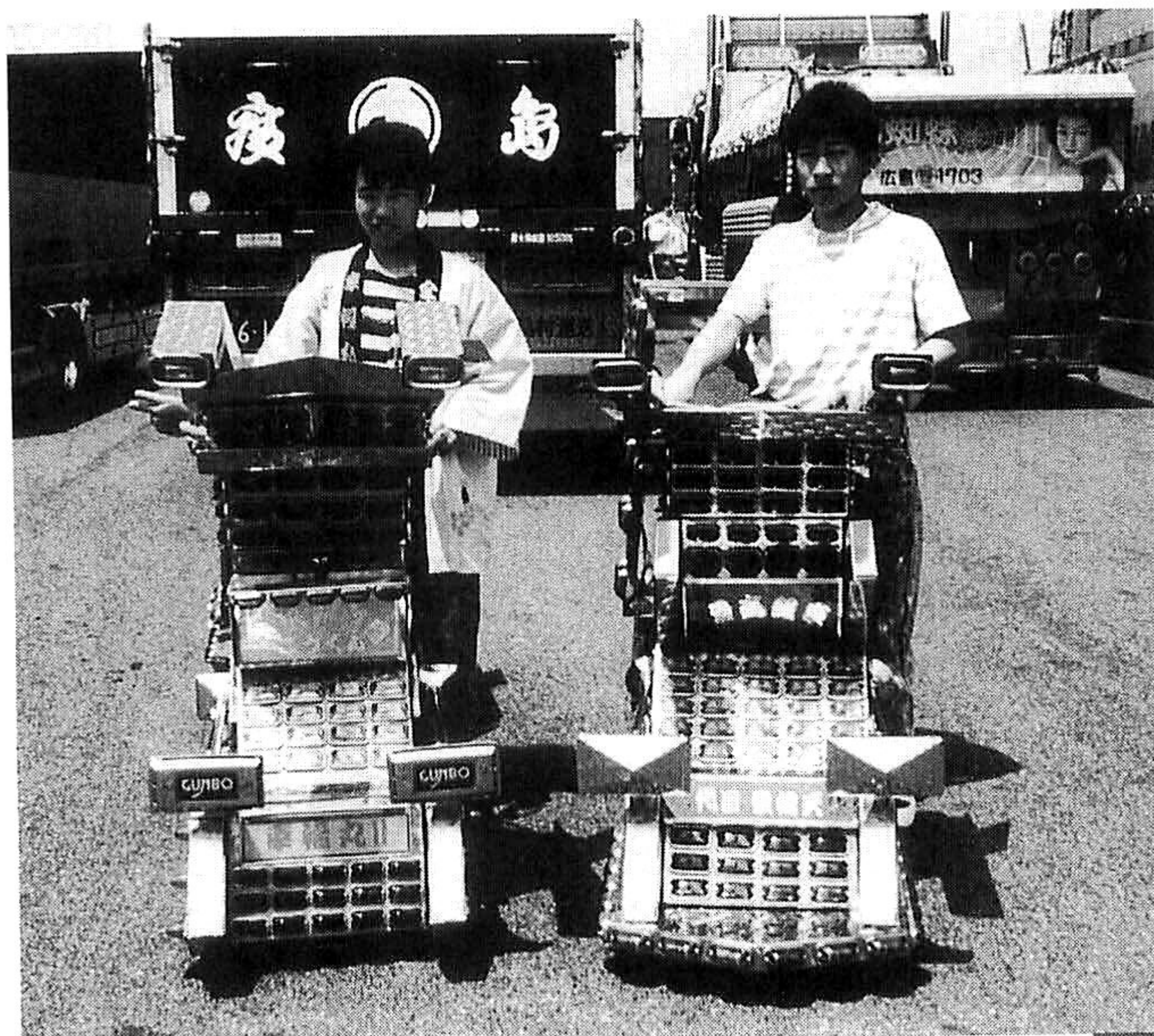
もちろん恋人のいるカメラ小僧はほとんどいない。盗写のときに発揮されるあれだけの過激さはどこに行ってしまうのだろう。

三次元へのリハビリテーション

アイドルの写真がひとコマ何十万円にもなる世界。しかしその世界にいつまでも溺れていては、とP君はカメラ小僧を引退し、現在ビデオのアシスタントをしている。カメラのテクニックを生かした仕事は、と尋ねたのだが、ネガフィルムしか使ったことのない彼らには写真の基本的な知識やテクニックはなく、プロカメラマンへの道は厳しい。だいいち、敬語の使い方さえ知らないのだから。生涯一カメラ小僧宣言のS君は例外で、二十代になるとほとんどの小僧たちは「このままではイケナイ」と焦りはじめる。

これは日本一のバトン小僧Y氏にも共通している。まだ婚約者に自分のオタクぶりは知られていない。バトントワラーの写真の山を前に、「こういう自分を治したい」という声には悲痛なものがあった。

レンズの向こう側の女は見慣れているのに、生身の女とはうまくコミュニケーションできない彼ら。カメラ小僧が女の子とつきあったりしないのは、「毎日アイドルを見ているので目が肥えてるからね」とP君は言うが、それだけとは思えない。カメラというメカ＝身体の延長の機能の発達が、身体そのものを空洞化するのだろうか。

ファインダーの中の二次元ではなく、現実の三次元の女性とちゃんと視線を合わせてコミュニケーションできるようになるのかどうか。彼らが現実社会に適応できるかどうかはそこにかかっている。

俺たちのデコチャリ子どもたちの神殿！

走る機能を失った自転車こそ至上の美だ！

トラック野郎ごっことして出発したデコチャリは、いつの間にかそれだけで独立したジャンルとなり、一般常識から遊離して暴走する美的価値体系は、ついに怪物を作りあげた！

松田融児 ライター

さて、ここ数年来、小学校高学年生から中学生にかけての世代で、″DC″が流行している。″DC″と言っても、デザイナーズ・ブランドのことでもなければ直流電気でもない。いったい″DC″とは何か？

正解は″デコチャリ″だ。別名を″アート・チャリ″とも言うので″AC／DC″と呼ぶべきなのかもしれないが、まぁそんなことはどうでもいい。″デコレーション・チャリンコ″というそのフルネームが示すとおり、飾り付けた自転車のことである。が、その″飾り″方がナミじゃない。何がどうナミじゃないのかは、右に掲載した写真をご覧いただくしかないだろう。

ね、凄いでしょ？　ナンかこう、見ててどういう反応を示したらいいのか困っちゃうでしょ？　先生に言いつけてやろうかと思うでしょ？　夜道で見たら怖いでしょ？……し、しっかりしろ、眠ったら死ぬぞっ、オイッ！

究極のDCは、走れない

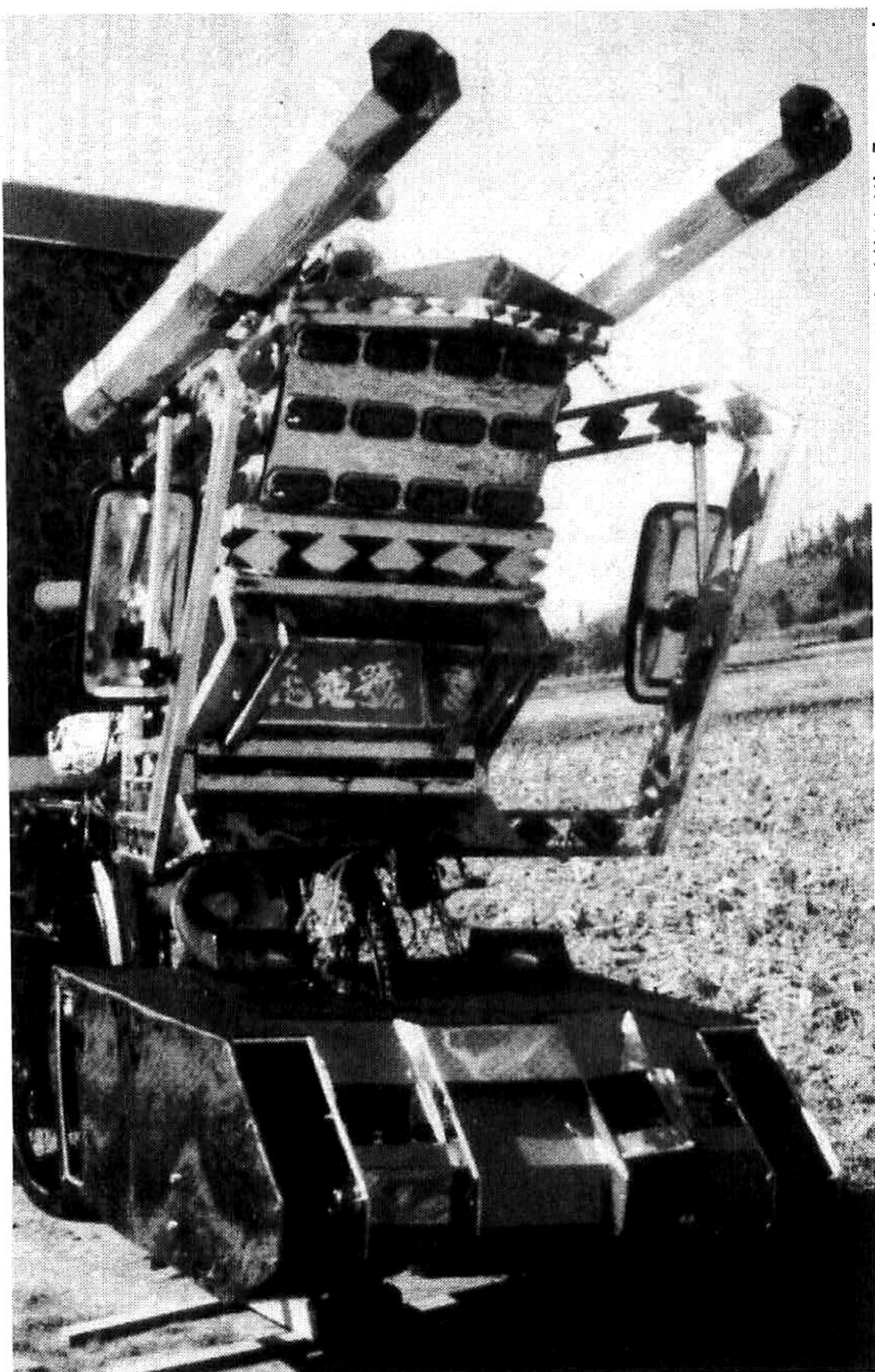
興奮のあまり言葉が乱れてしまったが、ここで若き改造マニアたちの手によって生み出される恐るべき改造チャリンコの標準的な装備について解説しよう。

①ベースとなる車両は通称″ママチャリ″。いわゆるお母さんのお買物チャリンコだ。スポーツタイプの自転車が使われないのは、ステアリングヘッド部からサドルにかけてフレームパイプが走っているために、後述する″リヤキャリア″を大型化した場合の乗降性が確保できなくなるためだ。ママチャリに次いで多いのが三輪タイプのもので、ごくまれには50ccのスクーターやスリーター（ピザなどのケータリングサービス業に使われている、あの三輪原チャリ）をベースにしたものも見受けられる。

②フロント部のハンドル前に付いている箱は″シートデッキ″と言う。内部にはエアホーン（長距離トラックなどに装備される大音響のもの）用のエアボンベやコンプレッサーが内蔵されている場合が多い。

③荷台部分に設置された箱″リヤキャリア″には思い思いのイラストがペイントされたり、「人知れず　男街道一直線　夜の桜の木の下で　見事に散ってみせましょう」「吹雪を越えて人肌の温もり待つあの街へ」「命短し恋せよ乙女」といった″キメ台詞″が書き込まれる。後部には言わずと知れた円形のテールランプ″ケンメリテール″（スカイラインのトレードマーク）が4～12連装され、内部には電装品稼動のために重い自動車用バッテリーが搭載されるのが常だ。そう、″飾り″をきわめたDCはそのすさまじい重さのために、走ることすらできない、完全なオブジェと化す。そしてそれこそ究極の美なのだ！

残念ながらDCは都心ではあまり見かけられない。いわゆる″チバラギ（千葉・茨城）″″イサチカ（茨城・埼玉・千葉・神奈川）″といった東京近郊に分布しており、そのほかにもなぜか三重県と滋賀県に多いそうで

ある。
たしかに美意識なんて人それぞれだし、それがロゴスの領域に近づくほどに他人には理解し難いものになっていくという理屈はわかるつもりだ。それにしてもDCの放つ観音力はハンパじゃない。
何を隠そう、DCは十年以上も前から存在しており、「トラック野郎」全盛時にすでにそのブームはあったらしい。現に僕は今を去ること八年前に実物のDCを目撃した経験がある。最初は神輿（みこし）かとも思ったが、祭りのシーズンではない。そのうえ、その物体は一面が鏡様の輝きに満たされているのだからますますもって正体不明である。噂には聞いていたが、よもや実存するなどとは思っていなかったので、さっそくその晩の夢に出てきてウナされた記憶がある。夢の中でのそれは、あたかも「未知との遭遇」のマザー・シップのようだった。

「カミオン」（芸文社）読者のデコチャリ写真

走るガウディ、デコトラ

まずはDC再流行のきっかけとなった〝アート・トラック〟についての解説から始めなければならないだろう。果たして〝アート〟なトラック、とはいったい何なのか？　その昔、一世を風靡した映画「トラック野郎」はご存知かと思う。早い話、あの映画に出てくるような〝飾った〟クルマをアート・トラックと呼ぶのだ。あの手の改造したトラックの歴史は意外に古く、草分け的なものは二十年以上も前から存在していたそうだが、二年前をピークに第二次ブームが全国規模で盛り上がり、現在はやや沈静化しているそうだ。
アート・トラック情報誌『カミオン』編集部の神保氏は語る。
「ウチが創刊したのが五年ほど前なんですが、〝アート・トラック〟はその時に作った造語なんです。それ以前はデコレーション・トラック、略称でデコトラという呼び

方が一般的だったんですが、もっとそれっぽい呼び方はないかということで……」
〝アート〟とはまた大きく出たものだが、実際、ガウディもオカモト先生も裸足で逃げ出すのではないかとおぼしき爆発的芸術トラックである。嘘だと思ったら全国各地で日祝祭日に開催される「チャリティー（中古パーツなどを即売し、収益を交通遺児に募金する）撮影会」へ足を運んでみればいいし、その筋の専門誌である前出の月刊『カミオン』や『トラックボーイ』を読んでみてもいい。最近公開されたアメリカ映画「ブラック・レイン」にも二台ほど出演している。

　要するに、DCは自転車をベースとしたアート・トラックのレプリカントなのである。DCの〝シートデッキ〟はアート・トラックのキャビン（運転席）上を飾っているもので、リヤキャリアはパネルバンの荷台を表現している。そのほかの装備類もアート・トラックのスタンダードフィギュアを形成するのに欠かせないパーツだし、〝〜丸〟式のネーミングもカーTVや無線機などを装備するのもアート・トラックからの継承事項である。

トラックに群がる小中学生

DC少年が実物のアート・トラッカーから継承しているのはその改造手法だけではない。〝デコトラ〟時代からアート・トラック時代への変化においてもっとも大きかったのは、そのベース車種を大型車に限らなくなったこと（実際、軽トラをベースにアートしているのも存外に多い）、そしてその創作活動がクラブ単位で行なわれるようになったことだそうだが、DC少年たちは組織化の点をも忠実に継承しているのだ。正確な数字は算出困難だが、全国でおよそ二百以上のDCクラブが組織されていると目されている。

『カミオン』『トラックボーイ』両誌はDC自慢の投稿写真ページやクラブ員募集コーナーを設けているが、毎月かなりの数の投稿が寄せられるという。実際、この手の雑誌はその購読者のうち二〜三割をDC少年が占めているのだが、とくに『トラックボーイ』はその傾向がより顕著で、誌面構成を見ていても、ルビの多さなどから若年層をターゲットにしていることがハッキリとわかる。アート・トラックのブームがピークだった二年前には、この二誌以外にも『トラッカーズマッコイ』『アートコンボイ』といったトラック雑誌があったほか、トラック専門の漫画雑誌（三号で休刊したが……）まであったそうだ。

　話は変わるが、『コロコロコミック』という雑誌をご存知だろうか？　小学館が発行している小学校低学年層向けのコミック誌なのだが、実際にはミニ四駆やビックリマンシール、ファミコン、プラモなどのMONO情報誌となっており、掲載されているのもオモチャをテーマとしたマンガがほとんどだ。座標軸こそ違え、『トラックボーイ』もそのポジショニングは同様だろう。あたかもそれは、三十代サラリーマンに

とっての『日経トレンディ』や『DIME』に該当するがごとき、と言っては言い過ぎだろうか。

「ある意味ではそう言えるかもしれませんね。あくまでトラッカーのための情報誌として編集していますが、全体的な傾向からどうしてもDC少年を意識しなくてはならない部分があるのは確かです」(『トラックボーイ』藤田編集長)

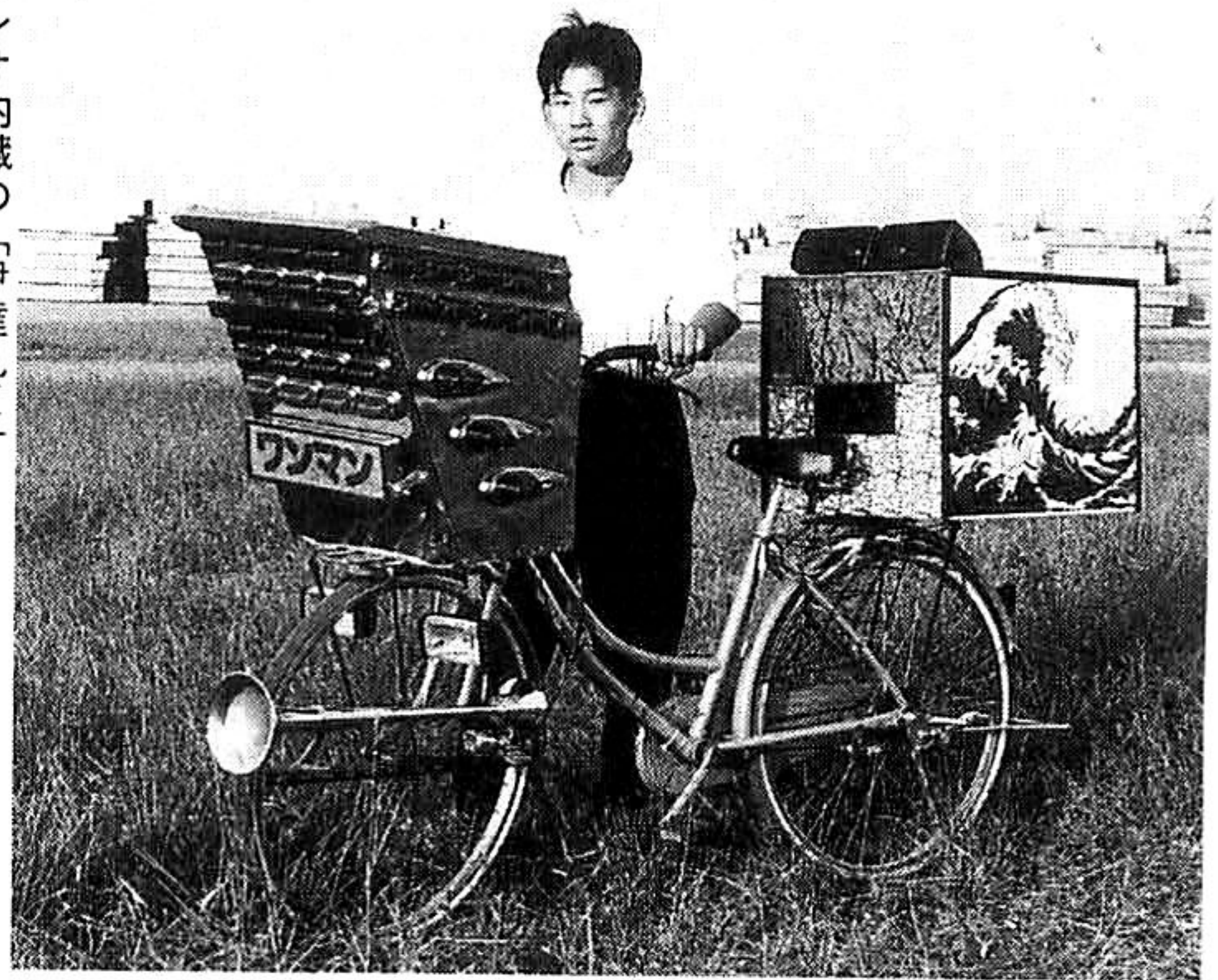
その昔、就学児童の読む雑誌と言えば『小学○年生』や『科学』『学習』といった総合誌に相場が決まっていたはずだ。なぜならば、過剰な金銭をもたない小学生は〝趣味〟などをもっていなかったからホビーマガジンなどありえなかったからだ。ところが今や子どもも大人並みに消費をもって〝蕩尽〟する時代となった。そしてDCという立派な趣味をもつ小中学生にとってのクラスマガジン的スタンスから発行されているのが『トラックボーイ』なのである。思えばこれはファミコンブーム以降に顕著な現象だが、驚くべきはその部数で、コンスタントに十五～二十万部を数えているそうだ。

「都市部ではそうでもないんですが、地方の少年たちにとってDCはかなりポピュラーなホビーで、部数的にも圧倒的に地方の方が出ますね。理由ですか？　やっぱり都会の子はDC以外にもいろいろ遊びがあるからなんでしょうねぇ。学校が休みになると地方から編集部に遊びに来る子がいるんですけど、素朴というか礼儀正しくておとなしい子が多いですよ」(神保氏)

DC少年たちを語るうえで欠かせないのがラジコンとプラモである。どちらのトラッカー雑誌にもDCと共に改造トラックプラモのページが設けられており、ほとんどのDCクラブは「DC&プラモ」のクラブになっていることも重ねて伝えておこう。どうやらDC少年にとってのチャリンコはけっして乗りまわすためのアウトドア用品でなく、〝トラック・アートを再現するための より大きな素材〟にすぎないというのが真相らしい。

「僕が子供の頃、スーパーカーブームがあったんですけど、DC少年ってあれとまったく同じノリなんですよ。トラッカーの名刺を集めたり写真を撮ったりして、それを友達と交換するのはスーパーカーの時も同じでしたよね。DCに乗って学校に行って先生に没収された、なんて話も聞きます」(神保氏)

「こんなの重くて乗ってらんないよ」

取材を進める過程で何人かのDC少年と直接会って話を聞く機会があった。珍しく都内（とは言ってもウォーターフロントの埋立地だが……）で催されたアート・トラックのチャリティー撮影会にただひとりDCを持ち込み、リヤキャリア内に2連装したカーステからフルボリュームでボン・ジョヴィの曲を流していた千葉県のタロウ君（十四歳・中二）の愛車〝伊達丸II〟は渋目にキメたマーカー類がポイントで、シートデッキ内にエアホーン用のタンクを

ステレオ内臓の「伊達丸II」

内蔵するため、重すぎてフロントに専用スタンドを嚙ましておかないと立つことすらできないというシロモノだ。さぞかし改造費がかさんだろうと思いきや、友達の父親が自動車解体・中古部品販売業を営んでいるためにパーツの入手には困らない、と明るく笑いながら言い放った。

今日はここまでどうやって来たの？　まさかコレに乗って来たんじゃないよね。

「地元のトラッカー・クラブ〝龍北船団〟Bグループの人のトラックに積んで来てもらったんだ。定員オーバーになっちゃうから僕は電車で来たんだけど」

Bグループって言うと？

「龍北船団のなかで、トラックとデコチャリ両方やるクラブがBグループ」

なんでDCやるようになったの？　アート・トラックのどこが好きなの？

「小さい頃からトラック野郎とか好きで、友達に誘われて撮影会に行ってから自分でもやろうと思って。隣町に龍北の会長が住んでて、よく走ってるとこ見てたし。夜光ってるのがカッコイイ」

撮影会にはよく来るの？

「月に一、二回。大きいイベントとか近所でやるヤツはなるべく行くようにしてるよ」

なんで伊達丸〝II〟なの？

「伊達丸っていうのはけっこう有名なDCで、近所に住んでる今十六歳の人が乗ってたんだけど、引退したから名前を譲ってもらったんだ」

お小遣いは月にいくら貰ってる？

「七千円」

コイツにはどのくらいかかってる？

「う〜ん……七〜八万かなぁ。マーカーなんかはチャリンコで一時間くらいのカーショップで買うんだけど、バッテリーとかカーステとかは友達んチから安く買ったり貰ったりしてるからそんなにはかかってない」

ひょっとしてコレって普段のアシに使ってるの？

「まさか！　撮影会ン時だけだよ。こんなの重くって乗ってらんないよ。普段は普通のチャリンコに乗ってる。これは誕生日にお父さんにプレゼントしてもらったんだ。二万円でお釣りがくるようなヤツ」

やっぱり将来はトラッカーになりたいの？

「うん。バリバリに飾ってガンガン稼ぐんだ」

タロウ君が言うには、「DCは目立つのが快感」だそうだ。これはほかのDC少年たちも口を揃えて言っていた点であり、また実際のトラッカー諸氏も、表現を選びな

がらも最終的にはやはり「目立ちたい」から飾っていると語っていた。このご時勢になんと単純明快な、いっそすがすがしいとすら言える姿勢と思想ではないか。うん。

「最初は恥ずかしかった」

『トラックボーイ』誌にクラブ員急募の呼びかけを出していた静岡県のカツヤ君（十五歳・中三）に会いに行った。運悪く東名高速の大渋滞に引っかかってしまい、約束の時間に大幅に遅れてしまったのだが、やっとの思いでたどり着いた沼津ICからお詫びの電話をかけると、「今からでもかまいません」と元気な返事が返ってきた。

　君のチャリは何ていうの？

「愛桜（めござくら）丸って言います。今ので三台目なんですけど、技術の授業の夏休みの自由製作で作った一台目が〝黒船丸〟で、二台目からはこの名前です」

　自分で考えたの？

「一台目はそうです。〝愛桜丸〟の方は、兄が乗っていたトラックが〝出世桜丸〟という名前だったので、桜の文字を入れようとして考えていたら兄がつけてくれたんです」

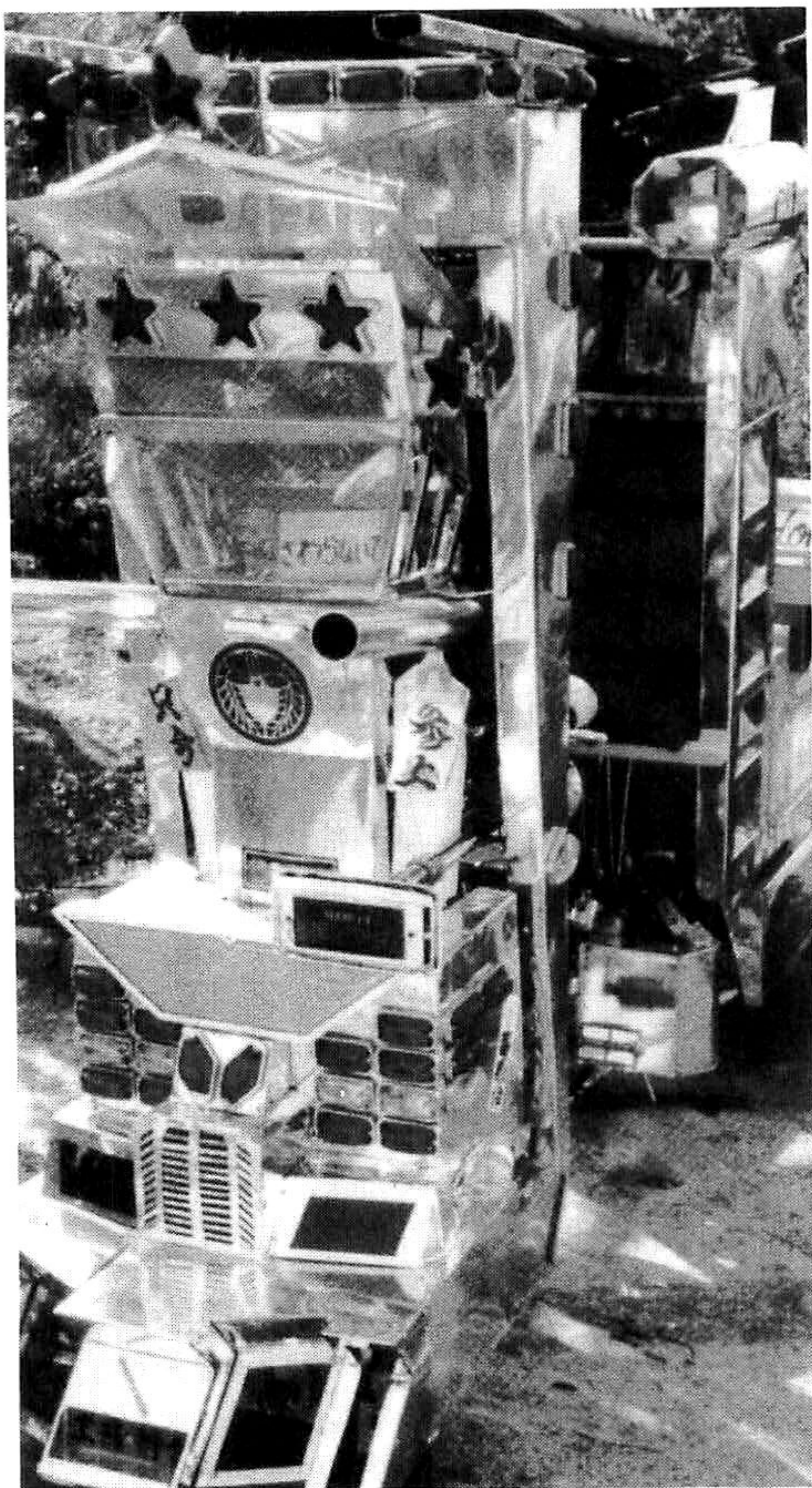
　お兄さんがアート・トラックやってるんだ？

「今はもう飾ってないんですけど。もともと父がトラックを使う仕事をしていて、手伝うようになった兄が地元の〝全国司（つかさ）会・静岡支部〟の人と知り合ったことがきっかけでそのトラックを飾り始めたんです。そのうちに僕も撮影会に連れて行ってもらって、その時はDCのこと全然知らなかったんですけど、チャリをトラックみたいに飾ったらどうなるのかな、と思ってやり始めたんです」

　じゃあ、お兄さんの影響が大きいんだ。

「そうですね。ホントのこと言うと、最初のうちは少し恥ずかしかったんですけど。今DCに付いてるTVも兄からもらったものだし、時々お小遣いをくれたりもしますから（笑）」

　今まで三台で改造にどのくらいかかった？

「カミオン」読者のデコチャリ写真

「五～六万くらいだと思います」

トラック以外のクルマとかバイクも好き？

「はい。もうすぐチャリは引退なので……」

え？　高校生になると引退なの？

「そうなんです。だから司会DC部門の次の会長を急いで探さなくちゃならないんですよ」

じゃ、次はバイクに乗るんだ？

「はい。ゾクふうに飾って乗ろうと思ってます」

ゾクやるの？

「いえ、ゾクに入るつもりはないんです。ああいうふうに飾ろうと思っているだけで……」

で、その次はトラックだ。やっぱり飾る？

「(力強くうなずきながら)そうですね」

乗用車を買ったとしても飾る？

「いえ、乗用車はなるべく高いヤツをノーマルで乗ろうと思ってます」

なんで乗用車は飾んないの？

「チャリもそうですけど、ふだんのアシに使うにはノーマルがいちばんですよ……」

カツヤ君はDCに限らず工作全般が得意で、当日着ていた司会のネーム入りジャンパーも自作したもの。パーツの製作方法を聞いていてもなかなか凝ったもので、学校でも技術の成績は良いそうだ。「そのほかは全然ダメですけど」と付け加えるのは忘れなかったが。

無意識のうちに暴走する価値観

そのほかにも茨城、群馬、埼玉のDC少年数人に話を聞いたのだが、DCそのものの爆発加減から期待されるようなブッ飛んだ性格の子はひとりもいなかった。自分が彼らの年齢だった頃を考えると、本当に素直な〝良い子〟ばかりだったのである。「万引きしたことある？」と聞いた途端、顔を真っ赤にして泣きそうになりながら怒り出してしまう子までいたほど、と言えばおわかりいただけるだろうか。

唯一、川崎でDCクラブを結成しているアキオ君（十五歳・中三）にはちょっと違った感じを受けた。彼はスクーターをベースにしているのだが。DC……と言っても当然無免許で……。飾り方も神輿チックなものではなく、ケーニッヒやゲンバラといった過激派チューナーの手によるベンツの改造車をほうふつとさせるものだ。

コレってベンツ目指してるでしょ？

「ハア。やっぱァ、オトコはベンツっスよ」

トラックは好きじゃないの？

「小学生の頃は好きだったけど、もう飽きたから。今はバイクとゾク車しか興味ないっス」

ムメンで乗って大丈夫？

「ラクショーっスよ。自分のセンパイらもみんなムメンで乗ってましたから。オマワリに追っかけられたってブッチ（振り切ること）すりゃイイんスよ」

将来は何になりたいの？

「自分、これでも成績はいいんで、大学に

入って医者か政治家にでもなってビシバシ儲けようと思ってます（笑）」

CHARINKO GRAND PRIX RANKING

俺たちのチャリ

元師印の場合　バリマシ・トレーナー
大将印の場合　バリマシ・Tシャツ
中将印の場合　バリマシ・ゴールドステッカー
少将印の場合　バリマシ・ステッカー

●みんなの写真を大募集●キミの走りや自慢のチャリの写真にくわしいコメントなどをそえて送って下さい。

大将　奈良県●太田孝司　中将　鹿児島県●前原清志　少将

『バリバリマシン』（平和出版）より

……川崎という土地柄、と言ってしまえばそれまでだろうが、旨そうにラークマイルドをくゆらせるアキラ君からは他のDC少年が持っていた純朴な情熱のようなものは感じられず、しっかりと明るく醒めていたのがなんとも面白いところだった。

さて、ここでは話をDCに限ったが、改造チャリのバリエーションはほかにも数多くある。たとえば〝コゾー〟ことバイクで峠道を攻めるローリング族連中から圧倒的な支持を受けている『バリバリマシン』誌には〝俺達のチャリ〟と銘打ったページが毎月二ページで連載されており、例によってカゴ付きのママチャリや子ども用チャリンコを駆ってヒザを路面に擦りながら（これはコゾー連中にとってのメルクマールである）コーナーを攻めたり、大空に向かって大ジャンプするイガグリ頭の少年たちの勇姿が掲載されている。彼らの場合は改造マニアに近いのだろうが、チャリンコを、〝あるメタファー〟を構築・具現化していく素材として使っているという意味においてはDCとは同義だろう。

ある知人はDCを見て、「日本人の美意識を野放しにしておくと、結局は金閣寺ができてオシマイだなぁ」と名言を吐いた。神社仏閣のごときかの造形は日本人のDNAにインプットされ、脈々と息づいている〝宿業〟が成せる主張だというのが彼のDC評である。これは言い得て妙だ。撮影会という〝ハレ〟の舞台でのお披露目のためにコツコツと作り上げられるDCは、だからその内部にひとりずつの神様を宿らせた神輿なのかもしれない。

しかし僕が何よりDCに感動を覚える点は、チャリンコが本来持っていた「乗り物」という機能を喪失させるに至った若き改造マニアのアナーキーな創造力である。これはけっして〝破壊〟ではない。ひょっとするとすでに〝改造〟の領域をも超越してしまったのかもしれない。そう、まさに新しい〝アート〟が生まれたのではないだろうか！　まったく無意識ほど恐ろしいものはない。

コミケット 世界最大のマンガの祭典

米沢嘉博
コミックマーケット代表

十二万人を集め、億の金が動く
同人誌即売会のインサイド・ストーリー

かつてはマンガを描き続けるためにはプロになるしかなかった。
だが同人誌界というオルタナティブな市場が定着してしまった今、
描き手たちは永遠にアマチュアのまま生き続けることができる！

共通言語としてのマンガ

まず、わかってもらわなければならないのは、同人誌とは自己表現のためのメディアであり、コミケットとはそうした同人誌を一般に向けてアピールする場であるということだ。二十年前ならいざ知らず、マンガは低俗な子どものための娯楽である、などと斬り捨てる人はもういないだろう。手塚治虫によって体系化され、物語を語るのみならず、あらゆるテーマを扱い、メッセージさえも伝達することができるようになったマンガは、若い世代（といっても上は四十歳代半ばから下は小学生までを含む）にとって、もっとも慣れ親しんだ、しかも手軽な表現なのである。

　子どもたちの多くが、マンガを描く。紙と筆記用具さえあれば充分なそれは、読むということの学習によって、たやすく行なうことのできる表現である。本物とエピゴーネンとに区別される〝芸術〟と違い、マンガは模倣から始まる。なぜなら、マンガとは、語るための方法だからだ。語りたいものがある時、あるいは語りたいという欲求がある時、彼らは、自分の好みのスタイル（絵・ｅｔｃ）を用いて、マンガを描くのだ。

　体系からはずれた真のオリジナリティでは、語りたいものを伝えにくい。半ば言語に似た、マンガ表現の方法は、それゆえに、見た目には亜流の氾濫と映るだろう。だがしょせん、マンガにおけるオリジナリティとは、絵のクセや語り方の差異でしかない。そして、マンガにおけるプロとアマの差は、テクニックの差であり、商品性の有無であり、チャンスにめぐまれたかそうでないかの差なのである。

　子どもの落書きであろうが、ベテランの職人芸によるそれであろうが、どちらも「表現」という点では同じだ、とまでは言わないにしても、マンガとは、表現したいという欲求の表出なのである。そして、マンガを描くことをおぼえた子どもたちは、語りたがるのだ。ペン先から生まれていく世界に、自らの想像力が形になっていく興奮に、物語ることの悦びに、夢中になるのだ。やがて、これらのマンガは、必要最低限のレベル、つまり、人にモノを伝えることができるだけの体裁を整えてゆく。

　しかし、それが商業作品として売れるかどうかはわからない。マンガは、表現であるのと同じぐらいの意味で商品でもある。こうした、マンガの持つ特性をまずわかってもらえないと、同人誌やコミケットの意味は、わからないかもしれない。――戦後世代は、マンガという語るための方法を与えられたことによって、ひとつの自己表現の手段を手に入れたのだ。それは、金もかからず、個人作業ででき、しかも、宇宙や時間という巨大なテーマから、日常のレポートまで、あらゆることを扱うことを可能にしたのである。

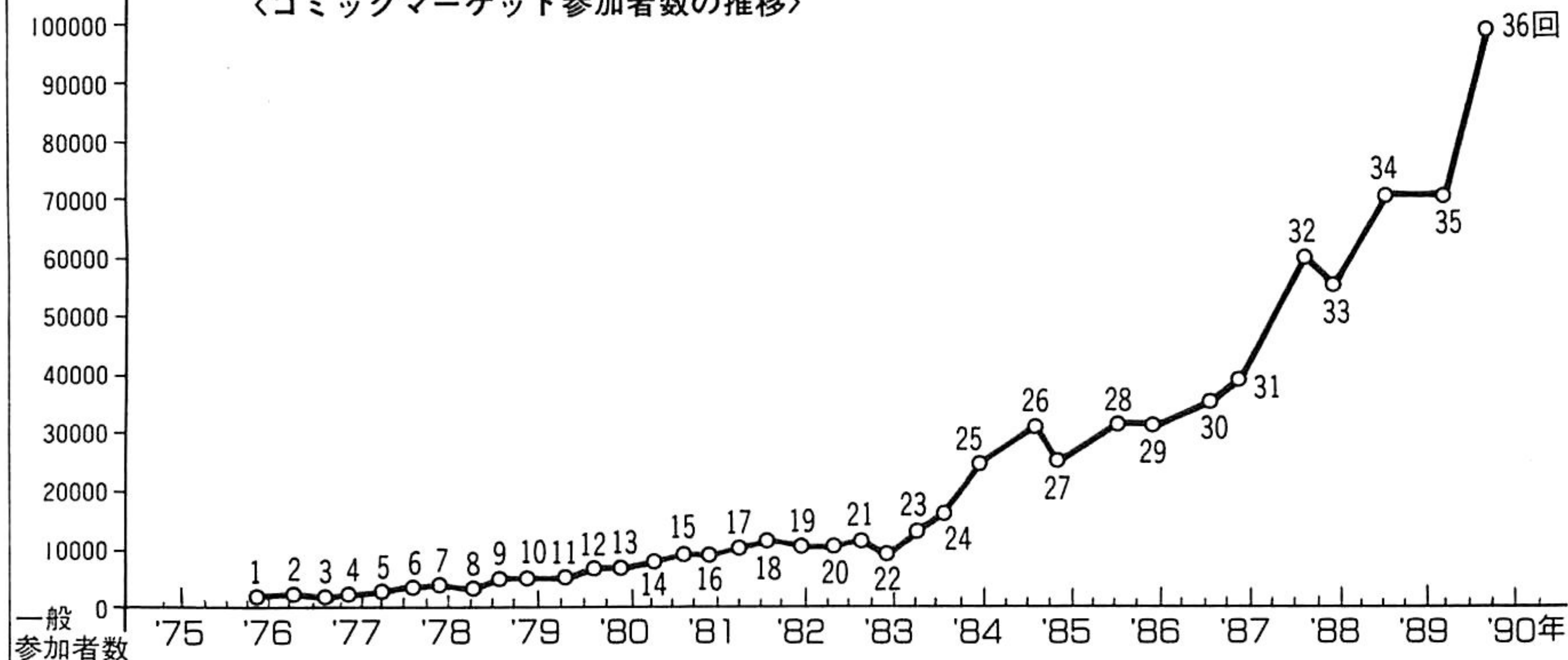
　ただ、ここで「自己表現」「メッセージ」という言葉の持つ意味を、昔風の矮小なイメージで捉えてほしくない。それは、反原

発や反戦、反天皇といったものから、愛やリビドー、趣味やこだわり、気持ちいいとか悪いとかの感覚、面白いこと……までありとあらゆるものを含んでいる。自分が面白いと思ったことを、他人に伝えて面白がってもらう、心地良さの共有……それらは、メッセージであると共に、コミュニケーションでもあるだろう。そうした、マンガを通じて行なえるすべてが、この「自己表現」のなかには含まれている。

マンガ同人誌の始まり

マンガ同人誌は、その発生時、つまり石森章太郎や赤塚不二夫がはじめた頃には、プロへの習練の場であり、肉筆回覧誌という形態だった。それは、六〇年代末頃まで続く。同人誌は、文字通り同人の内部のもので、現在のように不特定多数に向けて出されるようなものではなかった。ガリ版は、マンガを印刷するのには向いていなかったのだ。

〈コミックマーケット参加者数の推移〉

一般参加者数（0〜100000）　'75 '76 '77 '78 '79 '80 '81 '82 '83 '84 '85 '86 '87 '88 '89 '90年　（1〜36回）

それが変化しはじめるのは、七〇年あたりのミニコミブームの頃だ。コピー機や簡易軽オフの登場もあって、大手サークルのなかには、オフセットで同人誌を作り、一般に向けて頒布するというところも出てくる。そうして、同人内でも、コピー誌を一部ずつ配布できるようになり、個人で同人誌が所有できるようになったわけだ。こうした状況のなか、七五年に、混迷するマンガ状況の変革を求めたマンガ批評集団「迷宮」によって、実践活動のひとつとしてコミックマーケットがはじめられるのである。

大手出版社による週刊誌とわずかの月刊誌しかなかった時代である。デビューの場は限られていたし、オイルショックの影響も残っていて、本は薄かった。人気連載しか単行本化されず、毛色の変わったマンガはけっして載ることはなかった。難しいテーマや語り口、流行から外れた絵柄は、すべて同人誌臭いマンガとして、出版社から斬り捨てられる時代だったのだ。

そうした作品を発表し、読者にアピール

する場は同人誌しかなかった。商業誌の枠を超えた新たなマンガの可能性と出会える場は、本当に同人誌しかなかったのである。七四年から七七年にかけての同人誌界には、たとえばいしいひさいちがいた。彼の「ohバイト君」の笑いは、まだ同人誌内のものだった。他にも、柴門ふみ、さべあのま、高野文子、高橋葉介、高橋留美子、高口里純、めるへんめーかー……。みんな初期のコミケットの同人誌の描き手たちだ。彼らのような異色の才能には、まだ同人誌という場しかなかったのである。

ひそやかな始動

コミケットの理念と目的は次の通りだ。

「マンガやアニメおよびその周辺ジャンルにおける表現の可能性を追求する場としての同人誌、それを一般に向けてアピールする場がコミケットであり、場の確保を通じて、描き手たちの営為を充分に反映させていくことを目的とする。それは新たな可能性を求める人々が作品と出会える場を恒久的に用意していくことだ。プロや既成の物にはない新しい形でのマンガ、アニメの展開を結実させてゆくためのファン活動、創作活動を行なう人たちのために、出会いを通じて刺激を与えていく活性剤の役割を果たすことが必要である。また、参加者はすべて同じ立場に立つことで、平等にコミュニケーションできる状況を創り出すこと。それは人間、メディア、作品すべてが『表現』であることを前提とした、十全なる交流であらねばならない……」

こうして、七五年十二月、虎ノ門消防ホールにおいて第一回コミックマーケットが開かれた。参加サークル数三十二、入場者数六百人。それが始まりだったのである。

アニパロ、コスプレ、ロリコン

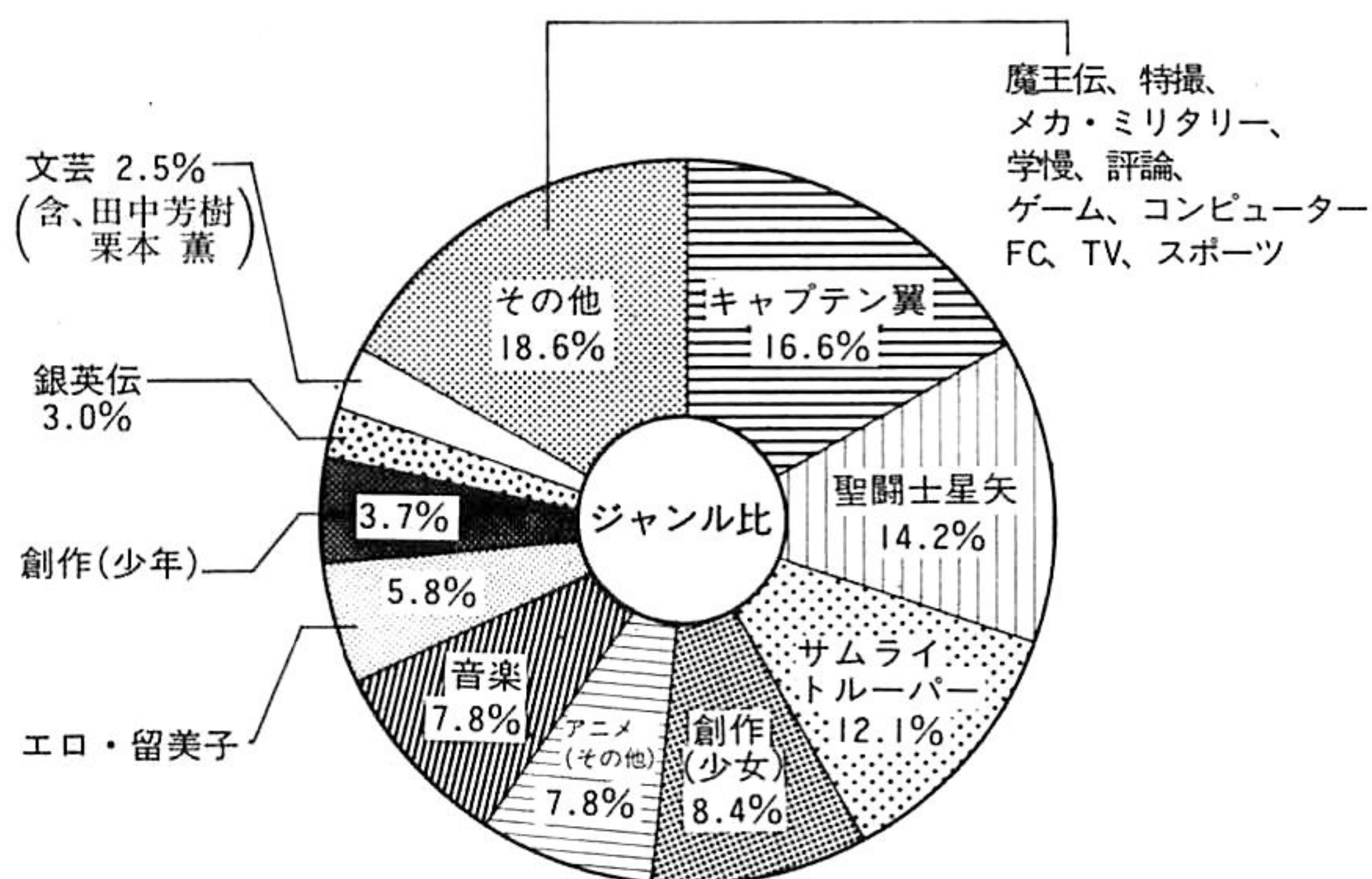
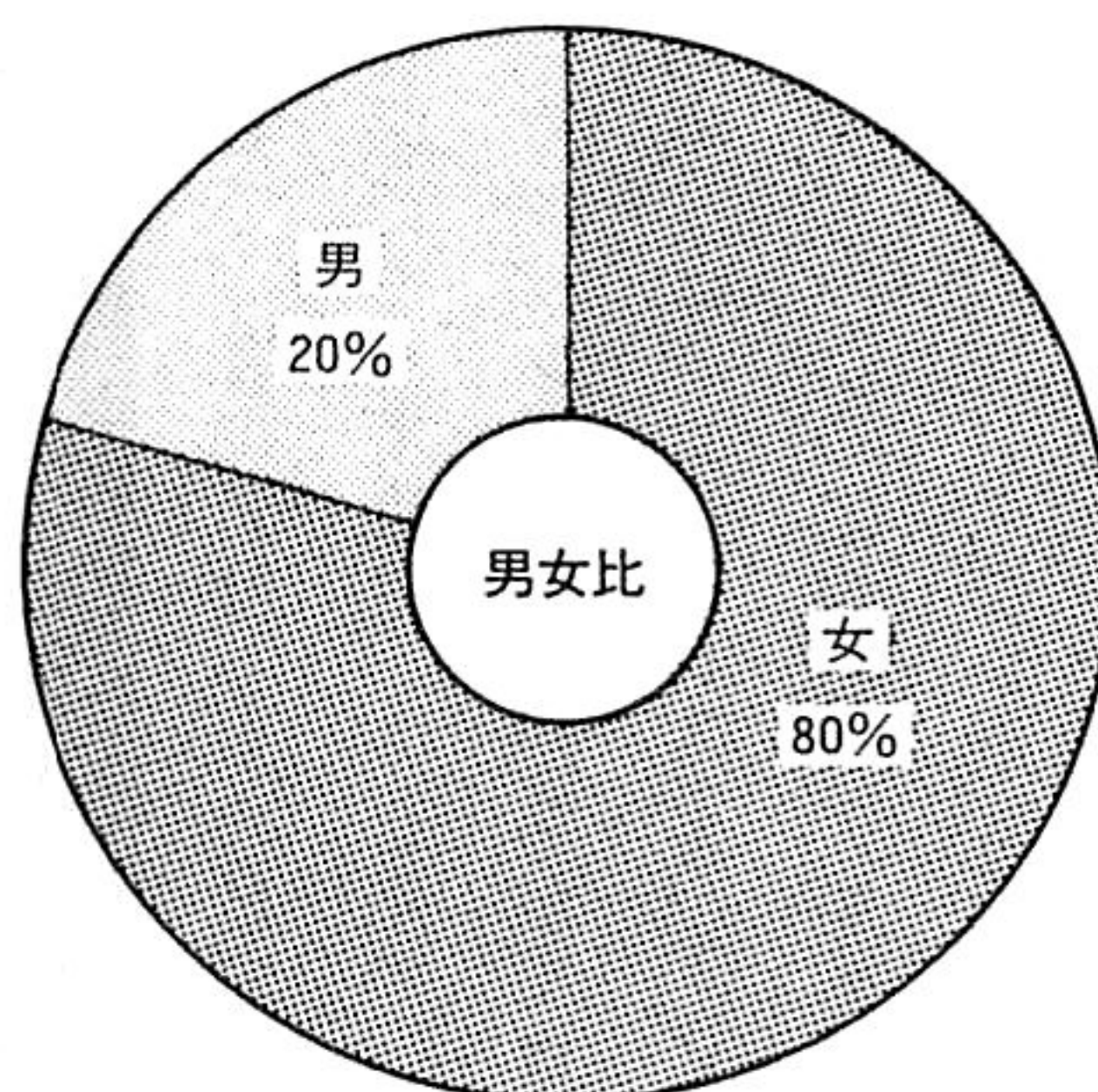
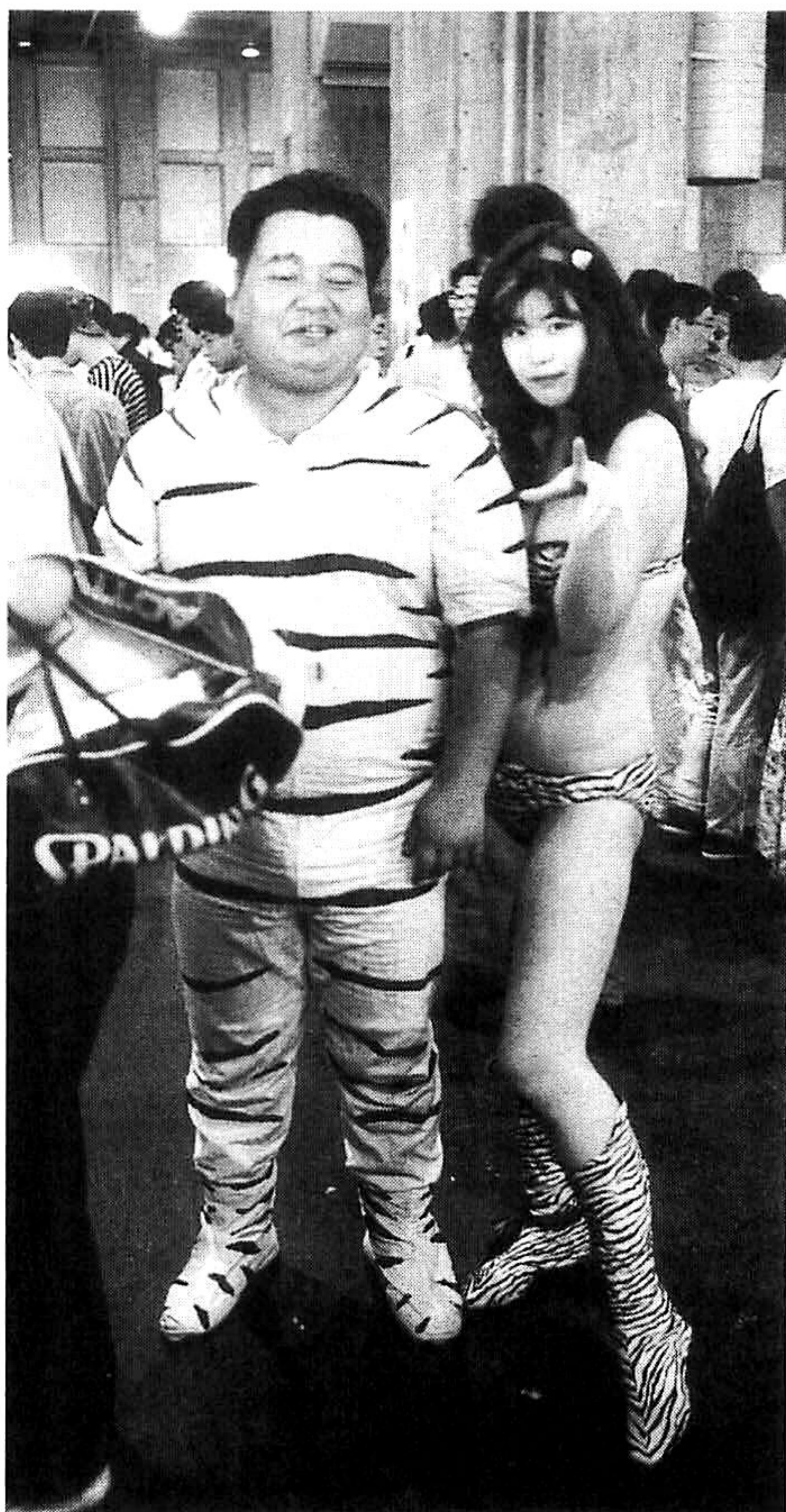
コミケットは当初、萩尾望都、竹宮恵子といった「24年組」少女マンガの人気もあって、十代の女の子が入場者の八割を占めていた。そして回を追うごとに、サークル数は増加し、一般も増えていった。こうしたなかで、同人誌界という、インサイドゆえの人気テーマとして浮上していったのがパロディである。人気のあった「ポーの一族」「宇宙戦艦ヤマト」などの長編パロディはかなり売れた（といっても五百から七百部だが）。その他、耽美派やロック系の少女マンガ、ファンタジーやSFといったジャンルも多かったようである。

七七年には百サークルほどになり、会場を大田区産業会館に移す。この頃、巷での「ヤマト」「ガンダム」のアニメブームが同人誌界に入ってくる。しかしアニメという、フィルムを作る形での創作は、金銭、人員面で難しい。コミケットでは同人誌という形をとることもあって、研究派、ファンクラブ派、そしてパロディマンガ派という三つの流れをとった。そのなかで、主流となっていたのが、アニメのパロディマンガ、いわゆるアニパロである。女の子によって描かれるそれは、当時流行だった

「ボルテスV」のプリンス・ハイネル、「ガンダム」のシャア少佐、といった美形悪役キャラクターを主人公にしたり、彼らに同性愛を演じさせたりと、後の「やおい」の原型ともいえるものであった。

大田区産業会館のラストになる七九年末のコミケット13は、二百九十サークル、四千人という規模に脹れあがっていた。この頃、コミケット出身者による『JUNE』(サン出版)や『PEKE』(みのり書房)などのマイナー誌の創刊があり、ニューウェーブブームと名付けられることによって初期同人誌の描き手たちがそこでデビューしてゆく。また、少女マンガ誌でも、同人誌作家の取り込みが始まった。この頃のコミケット参加団体内訳は、創作(オリジナル)マン研二百、FC(ファンクラブ)、研究会系四十、アニメ系五十といったところである。

八〇年に会場は川崎市民プラザへ。ここでの開催は二年間だが、第十七回のコミケには四百サークル、八千人を集めるようになっていた。この時期コスプレ(コスチューム・プレイ)という新しい動きが顕在化してくる。つまり、好きなマンガやアニメのキャラクターの扮装をして、売り子をやったり、パフォーマンスをしたりする参加者の増加である。と同時に、女性優位だったコミケットに、男性参加者が増加してくる。創作系では、なんきんや西秋ぐりん、永久保貴一といった描き手がいたが、一方で、女性によるホモマンガに対抗した美少女物の流れが生まれてくる。後に〝ロリコン〟と名付けられることによってブームになるジャンルだった。『シベール』の沖由佳雄、孤乃間和歩、『人形姫』の千之ナイフといった描き手たちだ。

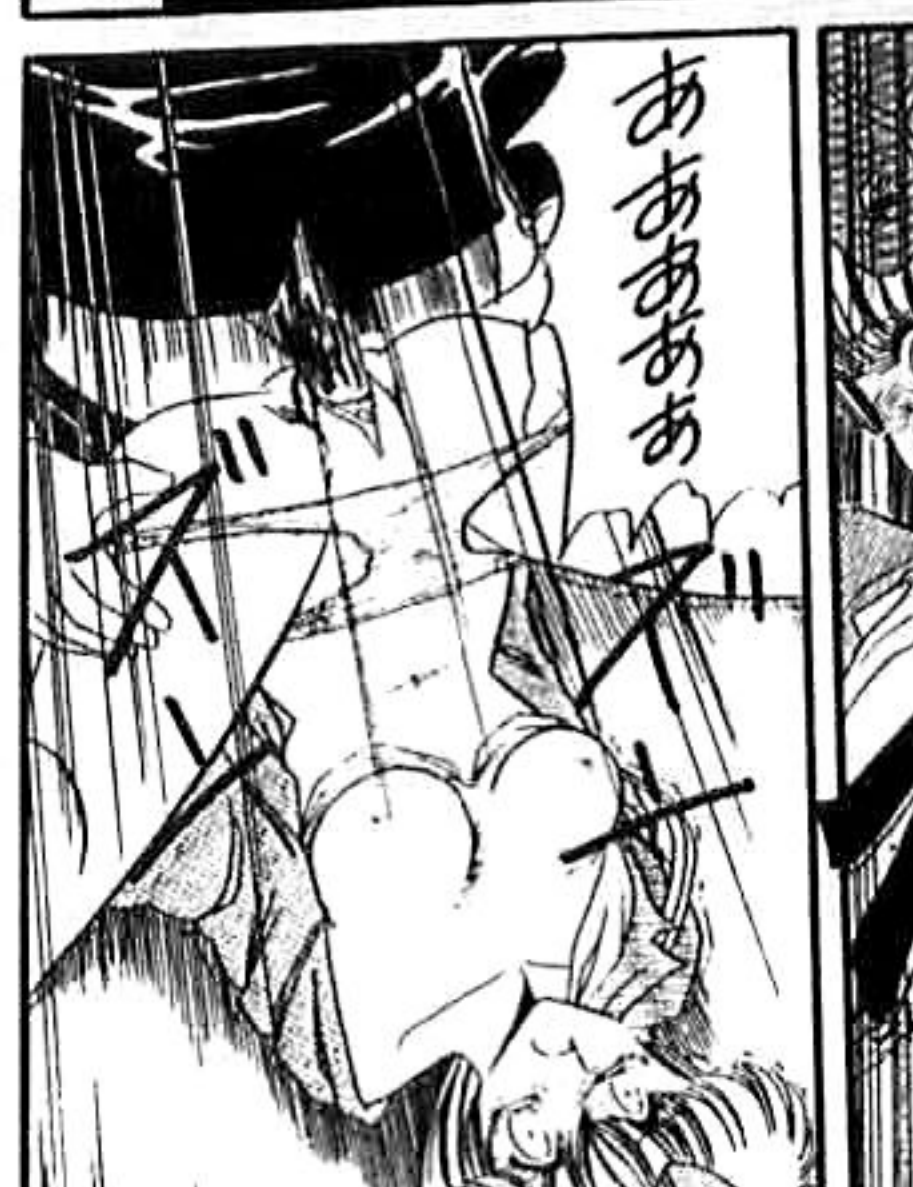
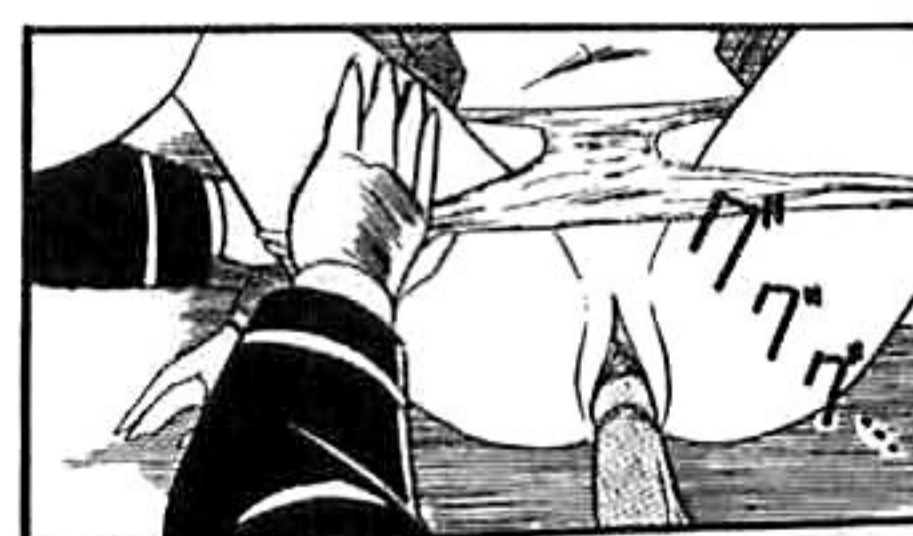
「うる星やつら」ラムちゃんのコスプレ

巨大化への道

年三回ペースで開かれていたコミケットは、即売会としての機能と共に、社交場としての意味を持ち始めていた。さらに「祭り」としてもだ。

マンガを描く、本を作るといった地道で時間のかかる作業があって、それを「ケ」とするならば、コミケットは「ハレ」である。そして、参加者はハレの日のために、派手な服でやって来て、楽しんでいく。少女マンガファンの参加者たちが、ロック系や人形系（エプロンドレス）のファッションを持っていたのに対し、アニメファンが持ち込んだのがコスプレだったといってもいいだろう。市民プラザの時代に、こうした見た目の派手さと祭り的な様相が形作られていった。そしてもしかしたら、同人誌界というインサイド固有のマンガのジャンルも形を整え始めていたのかもしれない。

というのは、八〇年代になると、商業出版のジャンルは、あらゆるものを許容していこうとし始めていたからだ。ＳＦやファンタジー、実験的なものから、内省的なもの、耽美にロックに、エロスにホモ、さらにロリコンまでもが商業誌に取り入れられていった。そうしたなかで、より同人誌的であろうとするならば、同人界内でしか成立しない楽屋落ちを基盤にしたパロディが突出してくるのは当然だった。それも「笑い」、「風刺」、「批評性」にこだわらず、「外伝」や「新作」という「もうひとつのストーリー」の創作である。

八一年十二月、コミケット19は、ついに晴海国際貿易センターに移る。規模は、六百サークル、九千人になっていた。アニメやマンガの少女キャラをいたぶったりするロリコン同人誌は、いつしか、少女を主人公にして少女の魅力やエロチシズムを描く男性によるマンガ全般を指すようになり、それは、男性参加者を増加させていくこと

エロ同人誌はこのように「面妖本」とも呼ばれる

になる。SF—特撮、音楽、芸能といったジャンルの同人誌も少しずつ増えていた。アニメも勢力を伸ばしていきつつあった。

　コミケット準備会は、六百ものサークルを扱うために、スタッフの人数が増え、案内のためにコミケットカタログを刊行するようになった。また「うる星やつら」ブームのなか、ラムちゃんのコスプレ（虎縞のビキニ）などが問題になり、警備会社を使うようになる。

　コスプレは、多い時でも参加者の二、三パーセントで、千人に満たないのだが、見た目の派手さもあって、マスコミで取りあげられることが多かった。あらゆる表現を許容することを謳うコミケットでは、手づくりのコスチュームによるパフォーマンスもひとつの自己表現ということで、歓迎はしないが規制もしないという方向で対処することになる。

　ただし、この頃より『コミケットマニュアル』で、理念、目的、心得など、サークルの自主管理を基本に、モラルや常識というものを参加者に対して具体的に明文化して、アピールしていくことになった。

「何か行動する時には、人の気持ちになって考える。エゴイズムは抑えなければ、心地良い場はできない。モラル、常識、マナーを忘れないこと」——中、高校生も多いコミケットという「場」は、学校や家庭で教えなくなってしまった、社会生活の場での人間としての基本的部分をマニュアル化することで、巨大になってしまったコミケットの自由を維持することにしたのだ。

マンガによる遊びの発見!!

　晴海という容器の中で、コミケットは回を追うごとに巨大化していった。八二年十二月には千サークルを突破。年二回開催となった八四年八月のコミケット26では二千四百サークル、三万人。八六年のコミケット30では三千九百サークル、四万人が集まるようになっていた。ロリコンブームは、美少女を核に、メカとSF、ホラー、ファ

コミケのカタログより。ここにあるのはすべて自主制作パソコン・ソフトのサークル

ンタジー、ラブコメ、キンキー（SMなど）と多様化していき、エロチシズム派と物語派に分かれていった。とはいえ、男性系サークルは全体の三割を超えはしなかった。

そこに起きたのが「キャプテン翼」ブームである。『少年ジャンプ』連載のこの少年マンガ（アニメ）を、パロディにした同人誌が、八五年頃から少しずつ増えていった。登場人物の少年、小次郎と健の二人をホモカップルに仕立てあげた〝やおい〟（ヤマなし、オチなし、イミなしの略で、ホモ系アニパロ作品を自虐的に呼ぶ言葉）が主流だったが、たとえば日野日出志のタッチでホラーにしたり、いがらしみきおの「ぼのぼの」を模した四コマ形式で描いたりと、あらゆる遊びが登場した。

そう、遊びなのである。それは、同世代の女の子みんなが知っている「キャプ翼」という作品世界の設定を前提に繰り広げられる変質、解体、批評、弄び、であり、スタイルやファッションや趣味のコミュニケーションなのだ。マンガは、きっちりした物語やドラマを語るためには、世界、登場人物の説明を行なわなければ、話を始められない。その基本的説明だけで数ページ、いや数十ページが必要となる。しかし、遊びで易々と行なうには、二〜十六ページぐらいが適当なのであり、その場合、こうした説明をしなくてすむ既知の世界と設定を使えば簡単なわけである。

そうして、こうしたドラマの基本部分をすっ飛ばしたおかげで、女の子は絵のスタイルやファッション性、心理描写といったディテールに集中することができるようになったのだ。少年どうしの恋愛は、男らしい少年とかわいい少年のカップルが多いことから見ても、仮装した少女と少年の疑似恋愛、SEXなのだろうし、その二人の感情のゆらめきは、少女マンガのラブロマンスと似ている。いや、八〇年代に入ってからは、商業誌の少女マンガにも〝少年〟は定着していたではないか。基本的にラブ、

行きつくところのSEXを描く少女マンガは、もっと前からダイレクトに少年の魅力を描いていたではないか。

にしてもこの「キャプ翼」の抬頭は、女の子たちに、同人誌でしかできない、しかもそうした場所ゆえに楽しめる「遊び」「表現」を定着させたのである。続いて「聖闘士星矢(セイント)」が、アニパロの新しいジャンルとして現われる頃、コミケットは晴海からTRC(東京流通センター)へ移り、二日間開催という形をとるようになっていた。八八年十二月のコミケット31は、四千四百サークル、四万人という規模。それは、この「キャプ翼」「星矢」によって流れ込んだ、第二次ベビーブーム世代の女の子たちによってもたらされたものだった。

マスコミとコミケット

TRCでの三回の開催の後、また晴海に移ったコミケットは、三館を使用し、二日間開催という、巨大なものに脹れあがっていた。八九年夏のコミケット36には一万サークル、十二万人近い参加者が集まったのである。——しかし、そこには好奇の目を持ったマスコミ、テレビ局が次々と押しかけた。その三日前に、幼女誘拐殺人の容疑者宮崎が捕まり、彼がアニメファンであったことにマスコミは飛びついたのだ。

テレビ局の取材の最後にはつねにこうつけ加えた。

「何が宮崎を作ったかと、強いていうならば、それはテレビでしょう」と。

日本中をおおう戦後世代は、ほとんどがメディアによって育てられた疑似体験世代であり、人を物として見、扱う視点は二〇世紀の近代科学合理主義のたまもので、誰が悪いかというならばダーウィンにまでさかのぼらなければならない。さらに、何が恐いかというならば、あなたのなかの、そしてぼくたちのなかにある宮崎的部分であって、彼はそれを自覚させるために現われた啓示であるのかもしれない。もし、そう尋くあなたが、宮崎の行為に本当に恐怖を感じているならば、それは自分のなかにあるものが恐ろしいのであって、そうでなければ、人の痛みがわからないということで、あなたの言う宮崎とあなたは同じである。

だが、そうした発言はすべてカットされ、放送されることはなかった。

コミケットを、一部のマニアによる秘密の会合のようなつもりで取材に来たマスコミは、秘密というにはあまりに巨大なその数に驚いて帰っていった。ここに十万人の宮崎がいると書いたマスコミもあった。しかし、同人誌に関わる人間はその何倍もおり、マンガやアニメを個人的に楽しむ層がさらに何百万人もいること、そして、そのアニメを放送するのはテレビ局であり、ホラーブームだ、スプラッターだ、ロリコンだ、アクションカメラだ、と祭りあげ、その気にさせていったのは、マスコミそのものである、とは誰も言わなかった。

やがてそれは、メジャー出版対マイナー出版(『アニメージュ』と『OUT』、『少年ジャンプ』とロリコン誌)、テレビとビデ

オの暗闘となり、結局、弱い者が殺されていった。その図式は、見事に、あの事件とも重なるのである。

「おたく」なんて知らないよ!!

この本は『おたくの本』なのだそうだ。理解し難く、わからないものに名を与え、扱いやすいものにして商品にしたり、自分とは関係ないものとして切り捨てるという、例のやり方である。もともと、マンガ、アニメ、SF、特撮、プラモデルなどといった趣味の世界に集まるファン、マニアのなかで生まれた言葉である「おたく」は、はっきり言ってしまうならば、そうした層のなかの「気持ち悪い奴」「つきあいたくない奴」の典型としてパターン化された〝キャラクター〟である。外見、性格、物言い、ファッション、行動、テリトリーまで詳細に設定され、「おたく」という名前まで付けてもらったこのキャラクターの対極にいるのが、たぶん、「トンガリキッズ」なのだろう。

それは、ぼくが会った、最初のおたくの一人である中森明夫君によって創られた。その前に彼が書いていたのが、「宝島少女」というレッテルだったから、そうしたネーミングによる遊び、シャレだったと思う。

しかし「おたく」という言葉がひとり歩きしはじめた頃、一部ではAタイプおたく(太身)、Bタイプおたく(瘠身)などのバリエーションも生まれ、ぬぐいさりがたい肉体的特徴による差別は、深刻な問題さえ内包しようとしていたのだ。どんなに性格が良かろうと、外見が醜くければおしまいだ。ファッションに気をつかわなければ、差別されてしまう。——が、ファッションばかりに金を使う人間の軽薄さは、これまた問題ではなかろうか。彼らは「自分の物語」にしか興味のない人間である。

そして、フィクションを楽しめる、つまり「他人の物語」に興味を示す人間がいる。マンガやアニメや小説や映画……それらは、今ある自分とは違う、別の世界、人生を知り、楽しむ方法なのだ、もちろん、そこには健全なバランスが必要なのだが。

「おたく」という言葉で、ある種の人間をより詳細に規定していって、人目につかないところに追いやってしまうか、あるいは「おたく」の定義を拡げてしまう、つまり本フェチのアカデミズムの学者たちも映画フリークもロックマニアもマンガファン、アニメファンも、こだわりのある奴はみんな「おたく」である、という具合にだ。しかしこの言葉が否定的な意味合いで定着してしまっている以上、それを押しつけられる方はたまったものではない。大滝詠一の言った「趣味趣味」もエンケン(遠藤賢司)の「通」も結局は、おたく道に通じるものがあったはずだ。だが、もう遅い。

永遠のアマチュアたち

繰り返すが、コミケットは表現者のための場なのである。それを求めてくる層は、商業誌やプロのマンガ家にはない新しい面白さ、別の楽しみを見つけにやって来るの

だ。表現することを知っている者は、できない者より何倍も広い世界を持っているし、ある意味では偉いのだし、それを分かちあうことで、作品を共有しようとする読者は、少なくとも、自分の恋や生活や人生だけがすべてではない、広い視点を持てるはずだ。たかがマンガ、アニメと笑う世代は、かつて文学や映画が何といわれたか思い出してもらいたい。いや、それどころか「大衆表現」という言葉は、マンガの出現によって、はじめて実現したのではないか。

　マンガによってフィクションの楽しさ面白さを知り、マンガによって自己を表現する方法を知った人は思いのほか多い。すべてのマンガ家、そして、赤川次郎、栗本薫、菊地秀行、田中芳樹……島田雅彦、山田詠美、泉谷しげる、横尾忠則……このリストはいつまでも続けることができる。

　かつて、マンガを描き続けるためにはプロになるしかなかった。だが、同人誌界という世界が定着してしまった今、描き手たちは、いつまでも趣味や遊びで描き続けることができる。多くの者は、なれればプロになってもいいが、アマチュアでも別に構わないと考える。しかも同人誌のなかでマンガ家ごっこ、出版社ごっこ、編集者ごっこさえもできる以上、プロにならなくてもそれなりの満足は得られる。同人誌専門の軽オフの印刷所は現在二十社以上あり、毎週どこかで即売会が開かれ、いたれり尽くせりのサービスが行なわれる。

　箔押しカラー表紙どころか、中身の紙質やインクの色変え、ハードカバー、箱入りと、金さえかければ商業出版物とは比べものにならないほど豪華で美しい同人誌が作れる。またサークル内ではなく、原稿依頼制という編集方法が定着し、好みの描き手や人気作家を集めての本も作れてしまう。売れれば、小遣いていどにはなるし、次の本の資金にもなる。――数は力なのだ。同人誌界は巨大になったおかげで、あらゆることが可能な場になった。コミケットは自主流通の場として機能し、商業出版物に対抗できうる規模の同人誌市場を形成し、同人誌マンガというそれ独自のジャンルさえ生み出してしまった。

　その自由さが魅力なのか、プロになっても同人誌をやめない作家たちは多いし、最近では、プロが同人誌を出すというケースも目立つ。商業誌の連載を落としてでも同人誌の作品をあげるという話もよく聞くし、コミケット当日には何百人というプロが、参加者の一人として、ごく普通に会場に集まるのだ。プロもアマも読者もファンもマニアも、マンガ、アニメとその周辺にいるあらゆる人々が、集まれる場としてのコミケットは、そこに人がいるから、さらに人を呼ぶことになっていく。八九年十二月には、ついに幕張メッセに会場を移したコミケットは、一万一千サークルを集めて開かれる。そこには、何万という思い思いの同人誌、そして人、人、さらに何万もの出会いがあるだろう。それをどう思うかはあなたの勝手だ。だが、彼ら彼女らの多くはナイーブな、おとなしいごく普通の若者たちなのである。ただ、マンガやアニメが好き

なだけの……。

コミケットはどこへゆく

そろそろ終わりだ。コミケに関するいくつかのデータや内実を紹介しておこう。とりあえずはサークルに向けて出されているマニュアルより「設立趣旨」を引用しよう。

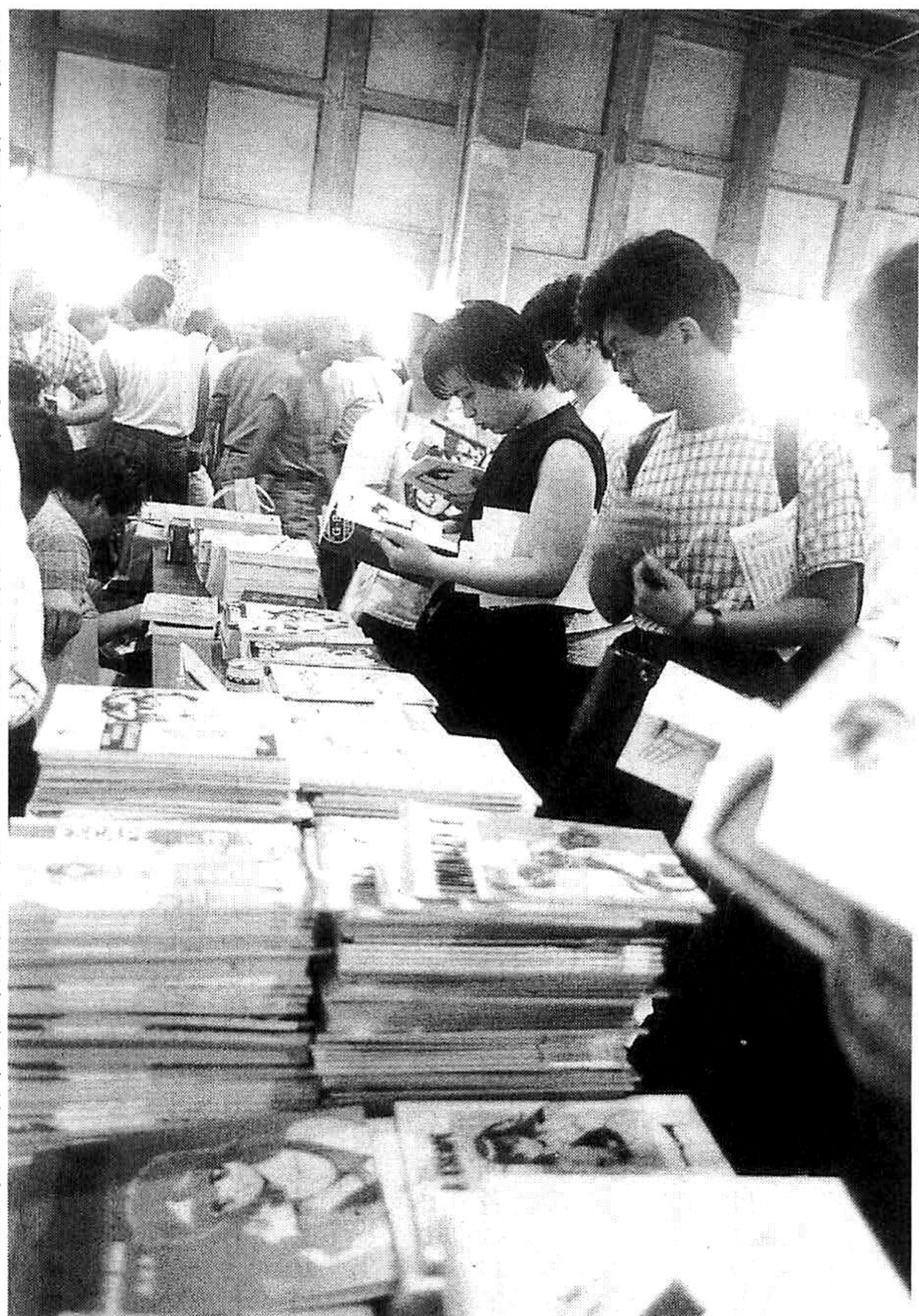
〈コミックマーケットことコミケットは、間違えば孤立し、仲間内にとどまりかねないマンガ同人誌活動を広く一般に向けてアピールする為の場として始まりました。形としては、同人誌、ファンジンの展示即売会の体裁を取り、さらに幾つかの自己表現を容認するものとなっています。マンガ、アニメに関わる人達の自己表現としての同人誌は、印刷されたとたん、不特定多数に向けられたメッセージ、メディアとなります。それは受け手があって初めて成立する一つのコミュニケーションです。

描き手、創り手はより多くの人に自らの表現をぶつけてみたかったでしょうし、読者もまた、新しい可能性を持った作品に出会ってみたかったのです。送り手と受け手が同人誌の受渡しを通して図るコミュニケーションの場、マンガ、アニメファンが出会える場所、それがコミケットの「場」としての基本です。

コミケ会場に入るときは必ずコミケット・カタログを見せなければならない。カタログは一冊六百円

その「場」を恒久的に用意し続けていくことで、読者状況の変革、プロダムとは違った形での創作の出現に力を貸すことをコミケットは一つの目的としていました。さらに、場であるが為に、単なる売買のみでなく、人と人との出会いも機能に含まれています。

そうしてコミケットが生まれてから十五年が経ちました。メジャー誌のふところは広くなり、雑誌では日々同人誌の描き手がデビューしています。マンガやアニメに関する情報は、専門の情報誌を中心としてあふれかえり、日々何処かでサークルの集会が開かれています。

十数年前、コミケットが求めた、マンガ状況の変革は、今、そういった形で現実のものとなっています。しかし、それは考えていた「ユートピア」とは違っていたようです。もちろん、それに意義を唱えるつも

同人誌の値段は一冊五百円ぐらい。一人あたり二冊しか買わないとしても、十二万人で軽く一億円を超える

りはありません。見方によっては、同人誌界は今、我世の春を謳歌しているとも言えるのです。

そうして、コミケットに求められる意味も、状況の変化によって変わってしまいました。一つには、二日限りであることから生まれてくる「お祭り」的性格です。祭りに参加する者達は、その祭りをより面白く、よりすばらしいものにする為に、祭りと祭りの間の日常を準備期間としなければなりません。言うまでもなく、それはサークル活動であり、個々の創作活動の事です。祭りのだしものである「同人誌」をよりすばらしいものにすること。祭りを楽しく、いかにすばらしいものにするのかは、参加サークル、個人にかかってるといえるでしょう。もちろん、祭りは無秩序であってはいけません。自由とは、好き勝手できることとは違うのです。

また、多くのサークル、一般参加者が集まるコミケットは、商品の数、買い手の数の点で「マーケット」的機能では、充実してきていると言えるでしょう。サークル活動の結実としての同人誌は、あ意味でまぎれもない「商品」なのです。が、それは「作品」であることも忘れてはなりません。特に、創り手にはそこのところをいつも考えてもらいたいと思います。「場」であることを前提としたコミケットは、マンガ、アニメ等に関するあらゆる表現行為を認め、反映させ、可能性を伸ばしていかなければならないと考えます。何かを為そう、少しでも先に進もうとする人達の為に、コミケットは一つの自由な空間として推維されていかなければなりません。

その空間を彩り、埋めるのは参加者です。「コミケット」を創りあげているのはサークル、一般参加者、準備会…つまり参加者全員なのです。そこに集まった人達は、みな平等にコミケットの一部なのです。その

ことだけは忘れてもらいたくありません。いかに巨大になろうと、それは個々が創り上げたものなのです。殻が大きくなっても、中が空疎では、やがて解体していくでしょう。少なくともコミケットは、それを求める人がいる限り、続けられていくことになります。それが失なるとしたら、「場」本来の意味がなくなる時なのかもしれません。
　参加者の変化によって、時代の要請によって、これからもコミケットは変わり続けていくことでしょう。いや、変わり続けていかなければならないのです。完結を拒否し、未完成を力として、歩み続ける為には、そのことを確認しておく必要があると思います〉

祝祭空間としてのコミケット

　少しはコミケットの内実というものがわかってもらえただろうか。コミケットそのものは、有志による非営利団体であるコミケット準備会によって運営されている。サークルは参加費（現在五千円）を払って、自分のための場を手に入れる。参加費はすべて、開催維持のための経費に使われる。ちなみに第三十七回コミケットでは、会場費三千二百万、机、イスなどのレンタル費一千万、警備費、掃除費に六百万、備品二百万、他諸経費五百万円を予定している。スタッフは、ほとんど無報酬のボランティアである。
　いっぽう、サークルにしても、黒字になるところは一割ないだろうし、千部以上売れるサークルは二～三百あるかないかである。一冊あたり三百～六百円が平均の値段だから、千部売り切って利益が出ても二～三十万円。もちろん、原稿料とか交通費とかは別である。そこから次の本の費用を捻出する。コミケットの参加費や交通費ｅｔｃを考えに入れれば、ほとんどの参加者はお金を出して同人誌活動を続けているのである。
　自分の金と時間と労働を費やし、それでもなぜやっているのかと尋ねるならば、みな、楽しいからと答えるだろう。自分の表現が自由にでき、それを読んでくれる人間がいて、しかも仲間がいる。そこでは、マンガやアニメという、世間がいう子どもっぽい趣味は、逆にそれをどこまで究めるかによってステータスにさえなりうるのだ。最近では親子連れやカップルさえ目立つ。コミケットは社交場であり、出会いの場だ。
　そして、祭り。町から学校から共同体というものが消え、祭りは失われていった。コミケットは、参加者全員が共にひとつの目的に向かって祭りを盛り上げ、ポトラッチと騒ぎの二日間を迎え、そして、また散る。この心地良さと高揚感は、祭りを体験した者でなければわからないだろう。――都市が、日本の社会が喪失していったものが、形を変えてここにはある。誰もが創ろうともせず、忘れ去られるにまかせていただけだから、自分たちで創ろうとしただけだ。一体感と興奮と自由の、無秩序でありながら統一された空間。もし、何が恐いかというならば、そんな空間が存在していることが、なのかもしれない。

僕が「おたく」の名付け親になった事情

「おたく」命名第一号の原稿を全文採録！

エッセイスト
中森明夫

出版系職業人ならいちどは足を運んだことがあるだろう現代風俗の一大情報バンク、あの大宅壮一文庫の索引カードの〝族〟の項目には「おたく族」は見当たらなかった。ようやく昨年から今年にかけて『週刊プレイボーイ』に二度ほど掲載された「オタッキー」に関する記事が発見できたぐらいだ。「ポンピュー族」「金ゴロー族」「こたつむり族」「出産ギリギリ族」「アンマリッチ族」「仮面少女」「フライヤーズ」「新男類」……いちども耳にしたことのないこれらの〝流行語〟の数々を掲載している八九年度版の『現代用語の基礎知識』『イミダス』には、「おたく」はもちろん、「おたく族」「オタッキー」の姿もない。

「おたく」はとうとう八〇年代には辞書的・図書館的に認知されなかったことになる。さて翌年度版には、これらの言葉をめぐってどのような記述がなされるのだろう？おそらく、それぞれの九〇年度版には「おたく」という項目を新設せざるをえなくなるに違いない。

「事件」で急浮上した「おたく」

たとえば『朝日新聞』八月二十四日朝刊にはつぎのような一節がある。

ロリコン誌の編集者をしていた経験を持ち、アニメや若者文化に関する著書もあるフリー編集者の大塚英志さんも、「宮崎に対する社会の反応は、まるで魔女狩り」と指摘する。「本当は社会その

ものに、『宮崎的なもの』があるのに、それを認めたくないから、必死になって彼を異端者にしようとしているんじゃないかな」

そして「この事件」でビデオマニアの『オタク少年』たちが新たな被差別者になるのではないか」と心配する。

新聞紙面に『オタク少年』という語がなんの注釈もなく登場している。さらに『週刊朝日』八月二十五日号記事中の一節。

宮崎は、この六畳間にこもりっきりのことが多かった。ほとんど人と話すことはない。面と向かうと人の名前を呼べず、「お宅」と呼びかける、

「通称オタク族」

だったようである。たとえば「お宅どんなビデオ持ってる」と使う。アニメやビデオの熱狂的ファンに多い種族だ。

また『サンデー毎日』九月三日号、えのきどいちろう氏のコラム欄は「おたくの犯罪」と題され、「しかし、まぁ、これでホラー・マニアとか、アニメ・ファンとか、いわゆる『おたく』と呼ばれる人たちは旗色悪くなるだろうなと思います」との記述がある。

『週刊読売』九月十日号には、記事中、用語解説的に「『おたく族』とは」と題する囲みがあり「アニメやパソコン、ビデオなどに没頭し、同好の仲間でも距離をとり、相手を名前で呼ばずに『おたく』と呼ぶ少年のこと。／人間本来のコミュニケーションが苦手で、自分の世界に閉じ込もりやすいと指摘されている」の説明がなされている。

『朝日新聞』のみならず、わずか半月ほどの間に三大新聞社系週刊誌に「おたく」は登場しているのだ。『週刊ポスト』九月一日号などは「小中学生『オタク族』を『1・5の世界』が蝕んでいる」の大見出しで特集記事を組んでいる。この時を待っていたかのように、「おたく」という言葉は、メディアの表面に急浮上したのである。

「おたく」命名の起源

一部に「おたく」命名者と知られる僕ではあるが、じつのところ、僕自身が「おたく」について原稿を書くのは本当に久しぶりだ。それどころか、実際「おたく」という言葉を自分の文章の中で使うのは何年ぶりのことだろう？　いつの間にか、暗黙に自らの内で「おたく」について書くこと、「おたく」という言葉を使って語ることを禁じていたのだと思う。本当に久しぶりに、今、僕はその禁を破ろうとしている。

その機会がなかったわけではない。実際には何度もその起源について命名者としての発言の機会が与えられてきた。そのつど断わり続けてきたのは「話せば長くなる」ということと、今になって語るにはさまざまに誤解を生じかねない当時の複雑で細々とした事情に触れざるをえなくなるからである。「おたく」という言葉は、そのメディアでの最初の登場の際から相当の波乱含み

だった。
　さらに、今となっては「おたく」という言葉の起源は諸説さまざまだという。たとえば『噂の真相』十一月号、「『宮崎勤』で脚光を浴びた『オタク族』の世界をのぞく!」記事中には、「確認しようがない情報のなかには、中森明夫が誌上で紹介する直前に麻雀漫画雑誌のなかで『おたく』という言葉をテーマにしたコラムを確かに見たと証言する雑誌編集者がいたり、俺はもっと前から『おたく』と呼んでいた、俺が名付けたと断言する吉祥寺組のまんが家など未確認情報は山とある」の記述がある。
　しかしなにも「おたく」の命名者であることを誇りに思うのでもなく、そのネーミングの二次使用権を主張するわけでもない僕としては、むしろその諸説の根拠をきちんと伺ってみたいものだと思う。このメディア社会においても、ひとつの言葉が数年を経過すると、その起源が伝説化されてしまうことの好例だろう。となると、僕としては、今やその〝ひとつの説〟を語るほかはない。
　なにしろ七年近くも前のことだ。細部の記憶はあいまいだし、資料は散逸してしまっている。僕自身が書いたはずの、記念すべき「おたく」活字化第一号コラムさえ、探し出すのに相当苦労した。とりあえず、その文章を全文再録しよう。タイトルは〝「おたく」の研究①〟「街には『おたく』がいっぱい」、掲載誌は月刊『漫画ブリッコ（片仮名が正しい）』（白夜書房）八三年六月号である。

再録「『おたく』の研究」

　コミケット（略してコミケ）って知ってる？　いやぁ僕も昨年、二十二歳にして初めて行ったんだけど、驚いたねー。これはまぁ、つまりマンガマニアのためのお祭りみたいなもんで、早い話、マンガ同人誌やファンジンの即売会なのね。それで何に驚いたっていうと、とにかく東京中から一万人以上もの少年少女が集まってくるんだけど、その彼らの異様さね。なんて言うんだろうねぇ、ほら、どこのクラスにもいるでしょ、運動が全くだめで、休み時間なんかも教室の中に閉じ込もって、日陰でウジウジと将棋なんかに打ち興じてたりする奴らが。モロあれなんだよね。髪型は七三の長髪でボサボサか、キョーフの刈り上げ坊っちゃん刈り。イトーヨーカドーや西友でママに買ってきて貰った九八〇円一九八〇円均一のシャツやスラックスを小粋に着こなし、数年前流行（はや）ったRのマークのリーガルのニセ物スニーカーはいて、ショルダーバッグをパンパンにふくらませてヨタヨタやってくるんだよ、これが。それで栄養のいき届いてないようなガリガリか、銀ブチメガネのつるを額に喰い込ませて笑う白ブタかてな感じで、女なんかはオカッパでたいがいは太ってて、丸太ん棒みたいな太い足を白いハイソックスで包んでたりするんだよね。普段はクラスの片隅でさあ、目立たなく暗い目をし

て、友達の一人もいない、そんな奴らが、どこからわいてきたんだろうって首をひねるぐらいにゾロゾロゾロゾロ一万人！　ここぞとばかりに大ハシャギ。アニメキャラの衣装をマネてみる奴、ご存知吾妻まんがのブキミスタイルの奴、ただニタニタと少女にロリコンファンジンを売りつけようとシツコク喰い下がる奴、わけもなく走り廻る奴、もー頭が破裂しそうだったよ。それがだいたい十代の中高生を中心とする少年少女たちなんだよね。

考えてみれば、マンガファンとかコミケに限らずいるよね、アニメ映画の公開前日に並んで待つ奴、ブルートレインを御自慢のカメラに収めようと線路で轢き殺されそうになる奴、本棚にビシーッとSFマガジンのバックナンバーと早川の金背銀背のSFシリーズが並んでる奴とか、マイコンショップでたむろってる牛乳ビン底メガネの理系少年、アイドルタレントのサイン会に朝早くから行って場所を確保してる奴、有名進学塾に通ってて勉強取っちゃったら単にイワシ目の愚者になっちゃうオドオドした態度のボクちゃん、オーディオにかけちゃちょっとうるさいお兄さんとかね。それでこういった人たちを、まぁ普通、マニアだとか熱狂的なファンだとか、せーぜーがネクラ族だとかなんとか呼んでるわけだけど、どうもしっくりこない。なにかこう

『おたく』の研究①

街には『おたく』がいっぱい

中森明夫

コミケット（略してコミケ）って知ってる？　いやぁ僕も昨年、二十三才にして初めて行ったんだけど、驚いたねー。これはまぁ、つまりマンガマニアのためのお祭りみたいなもんで、早い話しマンガ同人誌やファンジンの即売会なのね。それで何に驚いたっていうと、とにかく東京中から一万人以上もの少年少女が集ってくるんだけど、その彼らの異様さね。なんて言うんだろうねぇ、ほら、どこのクラスにもいるでしょ、運動が全くだめで、休み時間なんかも教室の中に閉じ込もって、日陰でウジウジと将棋なんかに打ち興じてたりする奴らが。モロあれなんだよね。髪型は七三の長髪でボサボサか、キョーフの刈り上げ坊っちゃん刈り。イトーヨーカドーや西友でママに買ってきて貰った980円1980円均一のシャツやスラックスを小粋に着こなし、数年前はやったRのマークのリーガルのニセ物スニーカーはいて、ショルダーバッグをパンパンにふくらませてヨタヨタやってくるんだよ、これが。それで栄養のいき届いてないようなガリガリか、銀ブチメガネのつ

初めて「おたく」が活字化された「漫画ブリッコ」83年6月号より

いった人々を、あるいはこういった現象総体を統合する適確な呼び名がいまだ確立してないのではないかなんて思うのだけれど、それでまぁチョイわけあって我々は彼らを『おたく』と命名し、以後そう呼び伝えることにしたのだ。
　どうして「おたく」って名づけられたのか、とか、「おたく」とは何か、なんて疑問には次回からゆっくりと本格的に答えていくことにして、でもなんとなく感じつかめるでしょ、君の廻りを見廻してごらん、ホラいたいた、「お・た・く」が——。
　ところでおたく、「おたく」？

「おたく」は族ではなかった

　足かけ七年も前の自分の文章を、今、目にすると苦笑ものだが、明らかに当時全盛だった昭和軽薄体の影響下にある文体である。また、その頃月刊『宝島』等々でよく見られた、たとえば内藤良氏に代表されるような典型的若手ライター文体とも読める。
　また、このいちばん最初の文章で「おたく」と表記されていたことが確認される。「おたく族」「オタッキー」「オタッカー」等々のバリエーションのみならず、「おたく」は今や「オタク」「おタク」「お宅」とさまざまな表記のされ方をしているのだが。『SFアドベンチャー』十一月号、「大東京オタク年表・不完全版」には、「中森明夫、用語『オタク族』を発明（〈ぶりっ子〉大塚英志）」の記述があり、月刊『投稿写真』十一月号、「おたくの逆襲」には以下の一節がある。
　ここで登場するのが、かの中森明夫氏だ。彼が〝おたく族〟と名づけ、後には族の字が取れて〝おたく〟となり、さらに多少洗練されて明るい雰囲気を持つ〝オタッキー〟に代表されるいわゆる対人関係に好んで距離を置きたがる青少年たち、つまり〝おたく〟という言葉は、またたく間に若者文化の全ジャンルにまたがって増殖してしまった。
　これはまったく逆である。ひとつの事柄が、たった数年で諸説乱れ、事実関係は歪曲されたり時には正反対になったりする、その好例だろう。『投稿写真』の説とは逆に、最初「おたく」と名づけられたものが、後に〝族〟の字がついて「おたく族」と呼ばれるようになったのだ。僕の記憶では、八四年に月刊『宝島』誌上で紹介記事が出た時、すでに「おたく族」になっていたと思う。それより少し遅れて、鴻上尚之氏の第三舞台の公演で使用されたセリフの一節、さらにはテレビ朝日の深夜番組、怪物ランドの『ウソップランド』で扱われた時も「おたく族」だったはずだ。
　話を「おたく」命名の起源に戻すと、そもそも『漫画ブリッコ』の〝「おたく」の研究〟コラムは「東京おとなクラブJr.・」というページの一コーナーとして書かれている。それは当時僕が係わっていたミニコミ誌『東京おとなクラブ』の出張版といった形式のページだった。
　八二年夏に創刊された『東京おとなクラ

ブ』の編集長エンドウ・ユイチ氏と僕は、前年の秋頃、あるミニコミ誌の編集部で知り合った。当時大久保にあったその編集室には、U君という僕と同い歳の男がいつも寝泊まりしていた。U君と僕とエンドウ氏は真夜中にバイクで下北沢あたりへ繰り出しては、ゲームセンターでパックマンに打ち興じたり、夜明けの吉野屋で油ギトギト牛丼を七味唐辛子で赤く染めて食したりする遊び仲間だった。

　そのミニコミ誌が廃刊され、大久保の編集室が閉鎖されることになると、U君はマンガ専門誌の編集者になった。さほどマンガおよびマンガ状況にくわしくなかった僕の水先案内人となったのが、このU君であり、エンドウ氏であった。生まれてはじめてコミケットへ行ったのも、U君に連れられてであり、たしか八二年の夏のことだったと記憶する。その時のショックの余波が、前述の文章からうかがえる。

　そしてマンガ専門誌周辺や「おとなクラブ」関係の読者と接触するうちに「おたく」という言葉が浮上したのだと思う。具体的にはU君との会話の中でだったのだろう。マニア少年たちが子ども同士なのにもかかわらず、友人を他人行儀に「おたく」の二人称で呼ぶ不思議。「おたく」という新語は、またたく間に僕らの仲間周辺に広がっていった。時に、八二年後半から八三年にかけてのことだった。

「おたくの研究①〜③」を掲載した「漫画ブリッコ」

一方的な、連載打ち切り

　さて、『漫画ブリッコ』八三年六月号から連載された〝「おたく」の研究〟は、結局、たった三回で打ち切られることになる。連載当初から内容に関して修正してほしいと担当の緒方氏より申し入れがあった。後に同誌の編集長となる大塚英志氏よりのクレームによるとのことだった。その種のやりとりが数度繰り返された結果、連載は打ち切られる格好となった。その数カ月後の八三年十二月号には、「おたくの研究——総論」という文章が〝江治ソン太〟名で掲載されるが、これは切り捨てられた僕に代わって『おとなクラブ』同人のM君が執筆した、しごく真面目な反論だった。

　思えば最初から無謀だったのかもしれない。『漫画ブリッコ』は純然たるロリコン・マンガ雑誌だった。その当の読者の大半は、

そのまま僕が〝「おたく」の研究〟でそう呼んだ「おたく」の人々だったのだろう。いわば、これは一種の読者罵倒とも読める。反発をくらうのは当然だ。若い僕なりの計算がなかったわけではない。その当の「おたく」的雑誌でやるからこそ意味があると思った。ある意味で読者を挑発したかった。罵倒することで、僕自身が大半の読者に罵倒されることにもなるだろうが……。

当時、二十三歳の僕はライターとしては駆け出しで、文筆業以外のバイトでやっと生活しているような状態だった。『おとなクラブ』を作っている時は、友人に借金をして、ようやくしのいでいた。文筆業だけで生活できるようになるのは、それからやっと二年後のことである。原稿料こそたいしたことはなかったものの、いずれ文筆業だけで身を立てていこうとしていた僕にとって本当に数少ない署名原稿の発表の場を、こうも簡単に奪われてしまったことに対して怒りを覚えた。担当の緒方氏に対して、それに大塚英志氏に対しても。間接的ではあれ、連載を打ち切られたことの要因に大塚氏の強い圧力があったことは明白だった。しかし、僕はその時でも、大塚氏とは会ったこともなければ電話で話したことさえなかったのだ。雑誌作りの現場では、編集者は強い権限を持つ。編集者が自らの権限で駆け出しの若手ライターの連載を打ち切るなど造作もないことだろう。しかし、その際には、権限を発揮した編集者から、当のライターに対しての事情説明があってしかるべきだ。たとえ電話一本でもいい。どんな駆け出しライターに対してもそれは最低限のルールだと思う。編集者は、ことに新人ライターに対して、その生殺与奪権を握っているのだから。

しかも、話はそれで終わらなかったのだ。〝「おたく」の研究〟が打ち切られてから十カ月後、大塚英志氏が編集長に就任する直前の『ブリッコ』八四年六月号、「オーツカ某責任編集」とある読者欄において、突如としてまたも「おたく」問題はむし返されたのだ。巻頭の「最近、マンガ家・編集者のおたく攻撃が泥沼化してきました……」とはじまる十行ほどの読者のお便りの後に、編集サイドのお答えとして百十余行にわたる大塚氏の文章が掲載されている。

◎この問題についてはいちどキチンとしておかなくてはいけない……と思っていました。まず、新しい読者には「おたく」という単語の意味が不明だと思うので説明しますが、これは以前『ブリッコ』誌上で、東京おとなクラブの中森明夫氏がいわゆるロリコンファンやアニメファンを指す蔑称として作りだした造語です。これほどあからさまに差別することを目的として作られた〈差別用語〉も珍しいと思います。

さて、中森氏の「おたくの研究」について僕は担当の緒方に対し毎回、「不快感」を表明してきました。中森氏の文章は〈健全な批判〉ではなく〈差別〉を目的としたものと目に映ったからです。最終的には登場を御遠慮願うことになった

のですが、意外だったのは中森氏の文章に読者を含めて、相当の支持者がいたことです。

……と、延々と続くのだが、見開きの片ページ、文字部分のほぼ九割以上がビッシリ編集者サイドの意見で埋め尽くされた、読者欄としては見るからに異様なものである。また文中の「ぼくにとっては〈おたく〉批難も『ブリッコ』を没収する教師も、中曽根内閣の〈少年の性雑誌規制〉とやらも同じものと映るわけです」……といった記述でもわかるよう、相当に強引で一方的な調子である。当然、翌月号の読者欄には感化された多数の読者のお便りが掲載される運びとなる。結局は雑誌サイドの望む意見に〝読者からの反響〟の口つきで誘導する、近頃よく見られる週刊誌記事的手法を見れば明らかなように、やはり編集者の権限は強固なものだ。しかし、それにしても、これほどあからさまに読者欄を編集者の意見発表（しかも若い読者に対して一方的に、「差別反対」といった、絶対に反論できないような正論をもってする、広瀬隆講演会的なやり方で）の場として「私物化」してしまったケースも珍しいんじゃないだろうか。

大塚英志の言葉狩り

当の大塚氏からは何の説明もないまま、とっくに「登場を御遠慮願」わされた僕、ろくに反論の場さえ持たぬ駆け出しライターだった当時の僕は、ここでも相変わらず名指しで批難されっぱなしになっている。連載打ち切り後の『ブリッコ』誌上での名指し批難はこの一件だけではなかったと思う。その後、そのままライターとして芽が出ず、その道を断念したのだったら、僕は〝幻の「おたく」命名者〟として消え去っていたことだろう。「おたく」という差別用語を作ったものの、編集者・大塚英志氏の正義によって追放された男として。今、ここで書かれているこうした事情も、僕がライターとして生き残れてきたからこそ、やっと記されることなのだ。そこを理解してほしい。諸々の想いを記すことなく、さまざまな形で葬り去られた書き手はいっぱいいるだろうから。

結局、僕が今日ライターとしてデビューできた大きなきっかけは、八五年春に登場した『朝日ジャーナル』の「新人類の旗手たち」というシリーズだったのだろう。その前哨戦となったのは、その後、新人類三人組と呼ばれることになる三人が、前年の秋に『GS』誌第二号にそれぞれ原稿を発表していたことだった。当時ブーム渦中だったニューアカデミズムの面々を『おそ松くん』の登場人物になぞらえた僕の原稿は、一般には中森明夫の事実上のデビュー作ということになっている（『週刊現代』八五年五月十一日号）。

その『GS』誌の筆者紹介の僕の欄の末尾に「近く『おたく族』の生態学的考察をまとめる予定」との表記がある。実際に予告どおりまとめられていれば、僕の単独で

は最初の単行本となるはずだった。担当編集者が退社されたりの諸事情の末、オクラとなったのであるが。僕としては『ブリッコ』での反省も踏まえての本作りにする予定だった。ところが、この筆者紹介の小さな記述に、またしても大塚英志氏はすぐさま反応してきたのだ。白夜書房のPR誌『白夜通信』十号の氏の文章内で「若手の評論（?）家でミニコミ誌『東京おとなクラブ』の発行人、中森明夫は、コミケットに集まる少年少女たちを〈おたく〉なる新たな差別用語をもって軽蔑的に呼んだが、彼の場合、そこに一種の近親憎悪的ニュアンスが込められてほほえましいが、それを一冊の本にまとめてしまおうとする冬樹社のおもしろがりかたは不快である」と訴えている。もはや、僕を飛び越して出版社に対する圧力だった。それにしても、これには仰天した。なぜなら、「おたくの研究」は冬樹社ではなく、他の出版社から出版される予定だったからだ。なにしろ、どこにも冬樹社という記述は見られない。おそらく冬樹社から出版されていた『GS』誌の筆者紹介にそう書かれていたので早合点したか、どこかで事実誤認の噂でも聞きかじったものだろう。さすがにこの時ばかりは抗議しようかと思った。まったくの事実誤認で特定の出版社名を名指しする悪質な圧力だったのだから。

「おたく」は差別用語か

命名者である（と言われる）僕と、「おたく」という言葉との密接な関係は、じつのところ、このへんまでだろうと思う。前述したように、八五年に僕は本格的に物書き生活に入った。今回、この原稿を書くにあたって記憶にある限りの資料を集めたが、僕自身が「おたく」について書いた原稿は自分でも驚くほど少なかった。八六年以降は皆無に近い。それ以前でも、数多い僕の原稿のなかでは、ごく数えるほどだ。やはり『漫画ブリッコ』誌上で連載打ち切りとなった〝「おたく」の研究〟三回分が、依然として僕にとって「おたく」について言及したもっとも長い文章のようだ。今となっては、命名者である僕以上に批判者である大塚氏のほうが「おたく」という言葉の使用頻度では勝るんじゃないだろうか。

そういうわけで、そのネーミングの生みの親ではあっても育ての親としての実感のない僕としては、どうしてこの言葉が今まで生き続けてきて、今また新たな意味を帯びて浮上しつつあるのかの確証がない。もちろん、大塚氏が繰り返すよう「これほどあからさまに差別することを目的として作られた〈差別用語〉も珍しい」「他の呼称と決定的に違うのはその最初から負の記号として登場している点」が「おたく」という語を、この潜在的差別社会の底流で生き残らせたのだろうか？　しかし、「ビョーキ」「ネクラ」「㋪」…etcと「最初から負の記号として登場した」「あからさまに差別することを目的として作られた〈差別用語〉」など流行語としていくらでもあるし、じつはちっとも珍しいものではない。

むしろ語そのものとして言えば「ビョーキ」（病気＝健常ではない）、「ネクラ」（根暗）「ビ」（貧乏）など、明確に、修復できないハンディキャップを前提としたよりひどい〈差別用語〉とさえ言える。もちろん、重要なのは〈差別用法〉なのであって、どんなに〈差別用語〉を禁じて言い換えたって、当たり前の言葉が〈差別用法〉としていくらでも機能してしまう。「おたく」という、語として言えば、なんのことはないたんなる二人称も、どういう関係性のなかで使用されてきたかのほうが問題だろう。「差別用語だ！」と声高に言いたて、一方的にレッテル貼りをするだけでは、それもまたたんなる用語差別だと思う。もちろん、僕にまったく差別意識がなかったとは言わないし、今でもある程度そうした意識はあると思う（自らの内にある差別意識に無意識にならずに、できるだけ意識的でありたいが）。言葉を使って職業する人間として、その上で自らの使用する言葉の規準を持っていたいと思う。反省も込めて。

「おたく」は浸透、拡散した

パソコン雑誌『ログイン』八五年八月号に「ニッポン放送・三宅裕司のヤングパラダイス潜入ルポ・おたく族を探る!!」と題する記事が掲載されている。

当時ベストセラーになった『恐怖のヤッチャン！』に続く、このラジオ番組の人気コーナー〝おたく族の実態！〟に関するものだ。それは「おたく」という語があるていど一般層に普及するきっかけとしては無視できないものだったろう（もちろん、マンガマニアの間でこの言葉が根強く語り継がれてきたことに大きく因するのではあるが）。

僕自身は当のラジオ番組を、ほとんど聞いたことはなかったが、この記事が作られた頃、ニッポン放送のプロデューサーと『ログイン』の編集者に会見を求められた覚えがある。すでに人気コーナーとなっていた「おたく族」のルーツを探ったら僕に突き当たったようで、「使用許可を」と申し込まれたが、「使用許可も何も、もはや僕の言葉ではない」と答えたはずだ。その時、件の『ログイン』記事中の「おたく族っていうコトバのルーツはなんや？」と題する囲みの取材を受けている。

「誰もが持ち合わせている感覚を、流行言葉としておもしろく取り上げていってほしい、それだけですよ、とおっしゃる中森さん」と僕の発言は結ばれている。この記事あたりが、僕が自覚的に「おたく」命名者として発言した最後だろう。

大塚英志との和解

最後に、どうして今になって本当に久しぶりに「おたく」について書いたのかを記しておこう。文中でも触れたように、その登場の際から波乱含みだった「おたく」という言葉と自分との係わり合いを書こうとすれば、こうした（誤解を生じかねない）複雑で細々とした事情に触れざるをえな

かった。ことに大塚英志氏との関係については。

その後、大塚氏は八七年春に『「まんが」の構造』、八八年夏に『システムと儀式』という評論集を出版した。それぞれの本には「新人類・中森明夫」と「おたく」を結びつける文章が相変わらず収録されていた。正直、この人も相当にシツコイ人だなぁと思った。しかも、そのつどきわめて政治的、戦略的だ。しかし、それとは別に読み手としての僕は、この二冊の評論集で達成されている評論家・大塚英志の仕事は無視することのできない秀れたものだと思った。八九年春に続けて刊行された『物語消費論』『少女民族学』において、それはより深化し確信的になったように見える。しかも、現在僕自身が作家として直面している仕事と、関心のありかも問題の所在も「近いのではないか」と思った。ある部分では、僕自身がまだ語りえていない領域を、彼は明確に評論の言葉で提起しえているように見えた。同世代にこれほどの論客が存在したことが驚きだった。

そして、僕たちは（おそらくこのような本がこの時期に出版されることになった要因でもあるだろう）、あの八九年八月十日を迎えた。その日以後の大塚氏の働きに対して、僕は彼に「秀れた評論家」「優秀な論客」以上の想いを持った。ことに、彼によって八月十日以後最初に書かれただろう文章の中にある「僕が守ってやる」という言葉には強い感銘を受けた。その言葉どおり、彼はその限度を越えてまで「守った」と言えると思う。それが正しいかどうかはわからない。ただ、「守った」のだ。この国で言論活動を行なう者たちのなかで、彼がもっとも「守った」ことだけは間違いない。沈黙する同世代の連中のなかで、僕には彼だけが、たった一人で〝あの男〟を守るために闘っているように見えた。

八九年八月二十三日、深夜零時過ぎ、僕は彼に電話をかけた。その電話をきっかけにして、とうとう僕たちは七年目にしてはじめて会った。最初の出逢いと語らいは『SPA!』九月二十日号に掲載された。一カ月後の十月はじめにもういちど会った。この二度の語りは、今秋出版されることになった本に収録される予定だ。僕らだけではなく、その本のなかでは、同世代の何人かが「あの事件／あの青年」について彼ら独自の意見を語ってくれるだろう。僕たちの企画した本ではない。その本の企画・編集者は、僕らの因縁についてまったく知らなかった。

僕らの最初の出逢いが雑誌に掲載されたとき、僕の肩書きの部分に「おたく族の名付け親」との表記があった。僕はそれを受け入れることにした。

八〇年代は「おたく」の時代だった

『中央公論』十月号の「『私』のなかのM君、M君の中の『私』」という文章のなかで、大塚氏は久しぶりに「おたく」という言葉をめぐって、かつての僕との係わり合いについて書かれた。今回僕が書いたこの

原稿は、彼のその文章に対する返信でもある。かつての彼の僕に対する批判がずいぶん一方的に思えたように、僕のこの原稿も彼からすれば一方的な言い分に見えるかもしれない。思えば、七年も前から、あれほど何度も繰り返された大塚氏からの批判に対して、僕は今の今までただの一度たりとも応えてはこなかった。それどころか「大塚英志」という名前を原稿に書いたのは、今回がはじめてのことだ。八〇年代に僕は、ことにかつて「新人類」と呼ばれた頃、ずいぶん批判や批難や中傷やあてこすりを受けた覚えがある。それは同世代・同業者系の連中からのものが多かったと記憶する。しかし、僕は彼らにマトモに反論したことはなかった。反論するに値しない、と思った。僕は自分の課題には自分の実践で答えてゆく。今や僕よりずっと年下の僕の若い読者たちの大半は、僕が「おたく」の命名者であるどころか、かつて「新人類」と呼ばれたことさえ知らない。新人類批判に忙しかった同世代・同業者系の連中は、今ではかつての新人類的役どころを回り持たされて御満悦のようすだ。僕はそういう連中を軽蔑しきっている。結局、この八〇年代に、批判を受けて、反論するに値する同世代人は大塚英志ただ一人だった。

　二度の対談が終わった後、やはり僕たちは別れ道に至ったように思う。しかし今度は、かつてのように会うこともなく不幸な決裂をみるのではなく、純粋にさまざまな意見の交換の末に、お互いが選び取ろうとしたまったく相反する態度として。いずれ、また共闘する日は来るかもしれない。しかし、とりあえずその日まで、きちんと〝敵対〟していたい。いや、僕らの本当の〝敵対〟は、やっとこれから始まるのだと思う。

　思えば「おたく」について書くことは、そのまま僕にとって八〇年代に自分が歩んできた足跡について語ることだった。八〇年代のはじめにミニコミ仲間たちと遊んでいたこと、いろいろな雑誌に書いたり、雑誌を作ったり、新人類と呼ばれ、『東京トンガリキッズ』を書き（『宝島』八五年六月号から連載し続けてきた「トンガリキッズ」も八九年十二月号に八〇年代とともに最終回を迎える）、対峙する優秀な論客とも出逢えた。そして八〇年代末にきて、あの事件へと……。こんな形で八〇年代を振り返ることになろうとは思わなかった。

　八〇年代はじめに僕らが係わり合った「おたく」というフィールド。そこに、（大塚氏の呼び方に従えば）〝M君〟もいたのだと思う。八〇年代終わりに、そのフィールドからはぐれた〝M君〟をめぐって、僕と大塚氏は、まるで交わる二本の直線のように激しく交錯したように思う。その時、そこで見たもの、直面したものを決して回避することなく、自ら引き受けてゆくこと、それが九〇年代の僕自身の大きな仕事となるだろう。

PART②
おたくという第三の性

ロリコン、二次コン、人形愛
架空の美少女に託された共同幻想！

アニメや少女漫画の顔をしたエロ漫画雑誌の数々。ハードなエロ描写と裏腹に、そこには少女を犯す主体たる男が描かれていない。レズやオナニーが多いのも特徴だ。性関係の当事者になることより傍観者であることを選ぶ彼らの主体とは何か？

土本亜理子　ルポライター

◎◎◎◎◎

すべては一包みの宅急便から始まった

「近頃、生身の女の子とつきあえない男の子が増えて問題化してるらしいんですが、そんな若者向けというのか、少女漫画やアニメ風のエロ漫画がいっぱい出ているんですよ」

編集部のMさんが、ある日、美少女漫画を取材しないかと電話してきた。あの幼女殺人事件で重要な脇役として浮かび上がったポルノメディアの周辺を追うという話だ。

事件は多くの専門家が解読している。でも正直いって私は新聞を読むのさえおっくうだった。この国にはほかに重要なことがないのかと呆れるほどにぎにぎしい報道。子どもを失った家族にマイクを突きつけて「ひと言！」と迫るTV番組の無神経。取材の話を聞いた時、この集団ヒステリーのような報道の一角に入りたくないと即座に思った。ただどこかで「生身の女の子とつきあえない男の子」という言葉は気になっていた。そういう若者向けのエロ漫画って、どういうものなんだろう……。

数日後、編集部から宅急便が届いた。開けると中から雑誌がごっそり。『レモンピープル』『ホットミルク』『ペンギンクラブ』、コミック本に漫画同人誌。どれも表紙はかわいい女の子のイラストで、一見、フツウの漫画雑誌だけど、ぱらぱらめくると胃がぎゅーっと絞られるような感じになった。どの漫画も、いきなりどぎついセックスシーン。しかもレイプ、近親相姦、SMと、なんだかフツウでないセックスが異様に多いのだ。

美少女エロ漫画雑誌のいろいろ

この漫画の読者が十代かと思ったら、イライラしてたまらなくなってきた。ポルノ映画はものによっては嫌いじゃないし、中学時代は今より元気だった『微笑』を回し読みしたし、ヌード写真にいたっては自分でも撮りたいと思っている。でも、これはひどい。何よりひどいのは、どのレイプ漫画も最後がハッピーエンドで終わることだ。バカいってんじゃないよ、と虚しさが襲ってくる。

小学校の時、近所の高校生に空き地の隅でいたずらされたことがある。今思えば、相手は好奇心で触れてみたかっただけのようだが、この時の恐怖は長いこと私の中でくすぶっていた。相手の顔、服装、伸びた爪と爪の間の垢まで憶えている。その後、女子高に進学したことも、今も爪の長い男性にぞっとしてしまうのも、あのたった数

分の出来事と無縁ではない。合意のない性的交渉が、ハッピーエンドで終わるわけがない。こんな身勝手な幻想が幅をきかせているなんて、男たちはいったい何を考えてんの?

断わるはずの仕事を受けて、それから一カ月、私の妙な取材の日々が始まった。

◎◎◎◎◎ お坊さまになった元ロリコン教祖

蛭児神建。現在、埼玉県川口市に住むNさんは、かつてヒルコガミケンの名前で、コミケット（同人誌即売会）に君臨した、ロリコン同人誌界の名士だったという。

髪を腰まで伸ばし、ハンチングにサングラス、トレンチコートにマスク。少女の人形を逆さまにぶらさげ、もう片手に鈴を持ってチリンチリン。こんな不気味ないでたちでコミケット会場に出没し、『幼女嗜好』と題した小説同人誌を売る。中身は、幼女に対する執拗なまでの性的興味から、犯し、死に至らしめるものが多いという。まるで、今回のM事件のようだが、一部にかなりの人気が出て、小説やコラムが商業誌を次々と飾り、やがてロリコン漫画雑誌の編集長にまで出世（?）した。蛭児神さんは、いわゆるロリコンブームの創始者の一人だったという。

と、ここまでの情報は雑誌で調べたもの。ウソかホントか、幼女殺人のMが逮捕されるまで、この人が容疑者のリストに入っていたというのが、雑誌でのもっぱらの噂だった。

教祖とまで呼ばれた人物だが、数年前、ふっつりと活動をやめ、姿を消したという話も聞いた。この人なら男たちの本音が聞けるかもしれない。そう思って出版社で電話番号を調べた。が、A社でもB社でもわからない。ようやくC社で「昔の番号なら」と教えてもらったが、昼にかけても夜にかけてもつかまらない。何日かかけ続け、ついに本人が電話口に出てくれた時は、こちらがドキッとしてしまった。

「ハア……。ロリコン漫画ねぇ。〝井の中の文化人〟とでもいいましょうか、あれは私の忌まわしい過去でして。センセイと呼ばれて有頂天になっていた自分を思い出すだけで、布団の端を噛みながら叫び狂いたいほどのことで、とてもお話などできません」

事件で警察の捜査こそ受けなかったが、マスコミから追われていたらしい。取材はていねいに断わられた。あの世界を去って、すでに二年になるという。〝井の中の文化人〟という言葉が耳に残り、「すでに過去ならば」と食い下がってみた。数日後、再び連絡した。

「でもですね……」と蛭児神さん。

しばらく間があって、唐突に、

「お通夜がなければ」とポツリ。

「エッ、お通夜?」

「私、じつは今、坊主なんです」

驚いた。三年間務めたロリコン漫画雑誌の編集長をやめて、仏門に入り、修行を終えて葬儀屋互助会と契約する月給十八万円の「サラリーマン坊主」になったというの

だ。

なかなか連絡がとれなかったのは、お通夜やお葬式といった、ふいにやってくる〝仕事〟で、しじゅう家を空けているからだった。

いったいどんな人物なのか。申しわけなかったけれど、おそるおそるの心持ちで約束の場所、大宮駅構内のキングコングの像の前に行ってみた。蛭児神さんは、丸刈り頭だったからすぐ目についた。袈裟をまとえばたしかにお坊さま。茶色のスーツ姿の大柄な男性だった。

「ハンチングにマスクで来ると思いました？ あれ、変質者のイメージのパロディだったんです。ロリコン↓幼女嗜好↓イコール変質者でしょ。どうせそう思われるなら、いっそのこと自分でやって見せてやろう。まあ、一種の変身願望かな。あの姿になるとなんでもやれる勇気が出たんです」

吾妻ひでお「スクラップ学園」（秋田書店）に登場した蛭児神氏

こんな話をしながら喫茶店に入った。なるべく隅の方の席を捜して座った。取材を自分で申し込んだくせに話の糸口がつかめない。とってつけたように年齢を聞いたら三十一歳。もっと年配に見えたが、ほとんど同じ。同級生だと思ったら、何だか急に気がぬけた。

◎◎◎◎◎

「幼女なら自分の自由に動かせる」

青少年向けのエロ漫画には、いわゆるロリコン漫画と美少女漫画の二系統があるらしい。発行部数十四万部と業界ではトップを走る『ペンギンクラブ』は美少女漫画雑誌。編集長で漫画プロダクション「コミックハウス」社長の宮本正生さんによれば、

「幼女趣味のロリコン漫画は、同人誌『シベール』の出現でいっとき隆盛を誇ったけれど、やがて美少女漫画に人気が移行した」という。理由はアニパロ。アニメ世代がアニメ作品に出てくる少女キャラクターにエッチをさせるパロディ漫画に人気が集

まり、主人公が幼女から少女に変わったというのだ。しかも大人のエロ雑誌に出てくる劇画調の美女ではなく、アニメに出てくる美少女が主人公になった、と。

蛭児神さんは、この幼女から美少女へ、という嗜好の変節期を過ごしたが、自分の求めていたものはやっぱり幼女だったという。

「幼女って、妖精なんですよ。まだ人格が形成されていない白紙の女性。やさしくてあどけなくて、男が勝手に思い込める相手なんです。女性に対する支配的な愛の究極のかたちはひたすら自分を愛してくれるただひたむきな愛を一方的に注ぎ込める相手なんです。女性に対する支配的な愛の究極のかたちはひたすら自分を愛してくれることでしょう」

メンソール煙草をひっきりなしに吸いながら、言葉を選び、話を続けた。

「小説で愛を描くのに、大人の女性は空想でさえ動かせなかった。けれど幼女なら、好きに動かせますから」

徹底的に暗い物語を作ったという。不幸な女の子はいつか必ず幸せに、という物語のパターンを壊した、救われない暗い物語。これがコミケットでウケた。すると出始めた商業雑誌が目をつけて引き抜く。日本で初めてのロリコン漫画雑誌『レモンピープル』でデビュー。すでにコミケットで話題の人物でもあったため、またたく間に人気が出た。

「金は入るし、先生扱いだし、ファンは増えて、私の言動が一人ひとりに影響を与える。これは正直いってものすごい快感ですよ。でも、調子に乗って美少女漫画の編集長を請け負ってから、私の歯車が狂いだしたんです」

蛭児神さんにとってのロリータ、幼女は純粋な愛の対象だったという。が、時代はロリコンから、中学高校生ぐらいの美少女にエッチをさせるエロ漫画嗜好へ。ロマンチックからエロチックへの移行は不本意だったが、編集長ともなれば、売れることが第一前提だ。漫画家が不足すると同人誌から次々と引き抜く。作家自身がまだ未熟な状態でアマチュアの独善的な世界から卒業できていないから、作品も彼らの好みに偏ってしまう。プロ意識もないから、原稿の締切りの無視や逃亡は日常茶飯事。いいものができるはずはない。

「この世界で責任感なんて持ち出すのはバカですよ。よけいなお節介。でも、ある時ふっと自分のいる世界そのものがグロテスクに見えてしかたがなくなったんです。男の側からだけのわがままなセックス、そういうものを青少年に読ませていいと思いますか?」

☆△○□……?(絶句)だって、自分がそういう世界を作ってきたわけじゃあ……。

「たしかにそうなんです。だから、私、おかしくなったんです。誰も責任を持たないことに腹を立てて、結局、私自身、自己破産してしまった。最後の一年は、あちこちの雑誌や作家を名指しで非難し、えげつなくこきおろしてもうガタガタ。気が狂う寸前でした」

喫茶店のテーブルに重苦しい空気が漂う。大宮の街を歩き、場所を変え、食事をしな

がら話を聞いた。編集長を下りてからの蛭児神さんはまるで迷える仔羊だったらしい。キリスト教の洗礼を受け、レンタルビデオ屋の店員を経て、浄土宗の修行の道に入った。

「今は坊主ですが、これが最終目標ではありません。夏目漱石やアンデルセンの世界を楽しみ、トーベヤンソンの小説に夢中になったことが、私に小説への道を開かせた。人が何かを書きたいと考えるきっかけは、いい作品に出会ったからでしょう。作品に対する恩返しは、いい作品を書くことでしかない。なのに私は裏切ってばかりいたのです」

　三十歳を前にして、先々の自分に焦りを感じたともいう。わかる気がした。「失敗を重ねながら生身の女性と出会った」ことも「卒業」への大きなきっかけだったらしい。

「幻想の世界は今も大事にしています。ただかつてのように幻想に逃げたりしない。支配できない愛のよさに気づいたからかもしれません。これって大人の発想ですか?」

◎◎◎◎◎

「レイプならお話を考えなくていい」

　蛭児神さんが言うコミケットからの青田買いは、今も日常的に行なわれている。『ハーフリータ』や『ロリタッチ』で活躍する美少女漫画評論家（こんなジャンルがあるなんて初めて知った!）の二本柳俊馬さんによれば、かつては数千の同人誌サークルが、今は二万以上。もちろん、美少女漫画はその一部だが、ものによっては異常な高値がつき大儲けすることも夢ではない。そこに商業雑誌のスカウトマン、口入れ屋が暗躍する。売れる条件は食いつきやすい絵柄とエッチ度とか。それにしては、あの雑誌、いろいろながめてみたが、相当程度が低い気がした。

「今の商業雑誌は作家を育てず、使い捨てで殺してしまう。ひどい状況ですよ」

　と、二本柳さんは吐き捨てるように語った。

　殺されるのか、自力でべつの回路を見つけるのか、まだ美少女漫画を描き始めて一年ちょっと、それ以前はアニメーターで、コマ漫画はほとんど描いたことがなかったという緒図乃真朋（オズの魔法?）さんに会った。

「エロ漫画を描き始めたら、いいもんが食えるようになって、おまけに一日中家の中にいるから、六キロも太っちゃったんですよ」

　原稿の受け渡しでいつも使うという阿佐ケ谷の喫茶店に現われた緒図乃さんは、この日、二つの締切りに追われて徹夜が続いたせいか、目を真っ赤にしていた。多めの髪がボサッとして、まだどことなく少年の面影が残っている青年だが、デビュー一年で、『コッペパン』『ピーチパイ』『キャンディコミック』などに筆を執り、すでに単行本を一冊出すという売れっ子ぶりだ。

　北海道の日高で育ち、アニメが好きで上京し、アニメの専門学校に入学した。ここ

で入った漫画研究会の仲間に誘われてコミケットに行ったのが、この世界に触れたきっかけといえばきっかけになるらしい。「うる星やつら」のラムちゃんのアニパロエッチ漫画同人誌を作って売ったら飛ぶように売れたのだ。

が、アニメ作家が希望だった彼は、深入りしなかった。漫研仲間の紹介で入った海外向けのTVアニメの制作プロダクションで、アニメ作りに専念する。しかしこれがほとんどタコ部屋状態。連日徹夜の重労働の上に、新米のせいもあって給料はチョボ

緒図乃真朋「フルーツ・ジャム」より

チョボ。ホカホカ弁当がごちそうだったというのだからそのビンボーぶりは凄まじい。三年半後、体力も懐具合も底をつき、その会社をやめてブラブラしていた時、友人から美少女漫画を描かないかという話がやってきた。

「コマ漫画を描いたのは、そのラムちゃんくらい。しかもあれはパロディ。漫画の描き方もドラマの作り方もわからないから、もう無我夢中。むちゃくちゃですよね」

編集者は「やることはやってくれ」と一言。すごい注文だが、そんなもんなのだろうか。

「必然性のないエロは描きたくないけれど、そうも言っていられない。一所懸命描き上げて、彼女に見せたら『こんな体位、ウソだ。できっこない』なんて言われてガックシ。アダルトビデオで研究したり、それなりに苦労しているんです」と苦笑する。

もうじき編集者が取りに来るという出来上がりホヤホヤの漫画を見せてもらった。といってもおもむろに開けない。ほとんど

春画を見る感じでめくると、何やら中世ヨーロッパなのか王子様と娘がチキチキバンバン。絵の線がきれいで、登場人物はどれも洗練されていてかわいい。が、まあお話はアレ。しかも娘がレイプされることで魔物から救われるという物語だ。

　なんでレイプシーンを描くの？

「いやがる女の子を泣かせてまでセックスするなんて好きじゃないから、僕はレイプを描きたくない。基本は愛し合っている二人のラブコメディ。でも話作りに困った時は使っちゃうかな。レイプってストーリーを飛ばして、いきなりセックスシーンにいけるから、話が浮かばない時は使いやすい。だから漫画家がよく使うんだと思う。後味悪い話は描きたくないから、やっぱりハッピーエンドで終わらせますよね」

　ハッピーエンドこそ後味が悪いのに……やっぱりズレている。そのことを伝えたら、こんな言葉が返ってきた。レイプ漫画を描いていると、犯人の顔がだんだん凶悪になってくるというのだ。

「アッ、俺はこいつを憎んでいるって思うんですよ」と緒図乃さん。先々のことはわからないが、今は、ドラマ作りの面白さで突っ走っているという。目の充血は続きそうだ。

◎◎◎◎◎

「女の子になりきって描いている」

　一方、現在は美少女漫画一筋だが、いずれは官能劇画の巨匠を狙いたいという将来のビジョンを語ってくれたのは、弱冠二十一歳、十七歳でプロデビューして、「業界でもっとも若いスケベ作家」の異名をとる通称もりやねこさんだ。

『劇画スペシャル』『劇画野郎』『ホットミルク』『ミルキーコミック』などに作品を載せ、単行本は『マーメイドキッス』など、なんとすでに十二冊。永井豪の「ハレンチ学園」で開眼し、小学校三年の時から、クラスメートの女の子のヌードを次々と描いては、男の子に読ませて、絶大なる人気を誇っていたというから、開いた口がふさがらない。

　この超売れっ子は小田急線豪徳寺の自宅兼仕事場のアパートに住んでいた。忙しくなると、アシスタントを雇って、部屋にこもり、ホカ弁をほおばって仕事をするという。運動はほとんどしないというもりやさんは、ちょっとふっくらとした、まだ学生さんといったほうがよさそうな若者だった。

「ぼくはスケベですよ」なんてことをシラーッといってくれる男の子、正直いってマイッタナと思い、親の顔が見たいと呟いたら、

「親は僕の印税を全部管理していますが、いずれいっしょに不動産でも始めようかといっています」

　……。本当なのか、人をかついでいるのか、いずれにしてもこのあっけらかんとした漫画家に、エロ道追求へのいきさつを聞いた。

「小学校の頃から、あいつを裸にしちゃおうぜって、ふざけてエンピツでさらさら自由帳に描いていたんです。女の先生もね。

描くとウケるでしょ。僕の周りにはいっぱい友だちが集まるから、うれしくてまた描く。そうすると人気が出るからやめられないでしょ」

彼はほんとうにうれしそうに話す。

「高校でアニパロに染まって、次にアイドル歌手を片っ端から脱がせて、友だちに見せまくっていました」

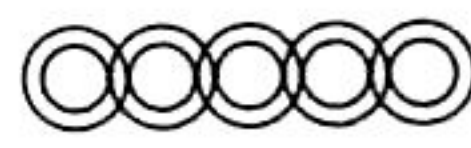
横浜で育ち、横須賀にある高校へは、漫研があるという理由だけで進学したという。プロへのきっかけは、同人誌仲間にエッチなイラストを頼まれたことだった。コミケットでこの絵を見た出版社がいきなり単行本の話を持ってきた。

「すでにコミック三冊分の漫画は出来ていましたから、そんじゃあ、お願いしますって感じであとはとんとん拍子でした」

せめて卒業したらという親の意見を振り切って三年で中退。デビューからすでに五年。エッチな学園漫画から、最近は女の子同士がドタバタする同性愛のテーマが多い。

「いたいけな少女がじつは淫乱だったというのが、たまらなく好きなパターン。なぜ淫乱がいいかというと、自分からさっさと脱いでくれるから設定が楽なんです。レズが多いのは、男を描きたくないから。男は、あのダサイ顔とムサイ体がたまらなくいやです。描くとしてもチョイ役でいい。描く時は、自分を女の子だと思って描いている から、女の子の体を描き込めればそれで満足なんです」

ハア……。淫乱少女は自分から脱いでくれる。たしかに。レズなら男を描かなくていい。それもそうだ。レイプはストーリーを度外視できるともりやさんもいう。アブノーマルなセックスは、作家たちにとって、作画上の理由がそれぞれあるというのだ。

◎◎◎◎◎

「本物のセックスは面倒くさい」

女の子の漫画同人誌の世界で今、異様な人気のホモ漫画とこのレズ漫画は対称なのか。それも違う気がする。同性愛は、それを望む人たちの自由だと思う。が、美少女漫画のそれは、ウケ狙いのあざとさが不快だった。しかし、もりやさんの話を聞いていて、ハッとした。「自分を女の子だと思って」……。つまり彼のレズ漫画は、一方が女の子の形を借りた男女のセックス話なのである。

彼は雑誌に「童貞でなければエロ漫画のイマジネーションのボルテージが保てない」と書いていた。思い切って真意を聞いてみた。

「ずーっとそう思っていたんですよ。でも違いました。最近、経験したんですが、漫画に何の変化もなかった。多くのエロ漫画家は、本物の女を知ってしまうと、漫画よりいいやって、この世界を卒業してしまう。僕もそうかなっていう恐れもあったけれど、違った。実際のセックスなんてどこが面白いのって感じ。相手を楽しませるなんて面倒くさいことやっていられない。漫画のほうがよっぽどいいですよ」

淫乱少女幻想が、もりやさんの中では、現実の女性より勝っているというのだ。も

もりやねこ「マーメイドキッス」より。この人の漫画はオナニーとレズが多い

しかしたら、本当に人を愛したことがないのではないか。目の前の青年を見ていて、そんなことを思っていた。その時、彼は自分の女の子の絵は初恋の人だと話し出した。

「僕の描く女の子はどの子もあごがほっそり長いと気づきませんか？　これ、中学の時に真剣に好きになった女の子の顔。結局ふられてしまったわけだけど、僕が惚れたというのは後にも先にもその子一人なんです」

その女の子に何年も淫乱少女を演じさせる心の中は屈折しているのか、それとも今も思慕を寄せているのか、理解できなかった。

先々は官能劇画の世界に行くという。

「ほかに特技はないし、サラリーマンになる気もない。社会っていうのを知らないから、上下関係もよくわからない。だから、今、本気で結婚したいと思っているんです」

結婚したい？

「自分ではたぶん惚れないけれど、僕に惚れてくれる女の子がいたら、すぐにでも結婚しちゃう。同棲と違って、一人の女を確実に自分のものにできるでしょ。それに、学生生活以外の世界を知らないから、キャラクターのかわいさとスケベな絵だけで押し通すしかなかった僕の漫画に、結婚生活という、新しいストーリーができるじゃないですか」

相手に惚れない、性生活は面倒くさい。それでは結婚はムリでしょう……。

「セックスはしたくないけれど、耳掃除や肩を叩いてほしい。一緒にお風呂に入るのもいいな。お金には不自由させない。海外旅行でも家でも。だから、だれか来ませんかって、この記事でも書いて下さい」

二十一歳と、もりやさんはまだ若い。「童貞じゃないと」という持論が崩れたように、「人に惚れない」も「セックスが面倒」も、いずれ変わってくるだろう。でも、その過程で量産される彼の漫画に影響を受ける少年たちはどうするのだろう。

◎◎◎◎◎

イージーライダーの妻はお人形

自分で始めてしまった取材だが、こんな妙な気分の仕事もめったにない。喫茶店や呑み屋で、ノートを片手に、若い男たちのセックス観や恋愛観を聞いている。時に、レイプだの近親相姦だのと会話の声が高ぶり、ハッとあたりを見回すことになる。大声で話せないから、ついヒソヒソ話になり、お酒を呑んでいても酔うどころではない。ああ、私は何をしているんだろうと、頭が真っ白になってしまうこともたびたびだ。

気を取り直して考えてみると、蛭児神さんの幼女嗜好も、緒図乃さんの少女好きも、もりやさんの淫乱少女偏愛も、どれも、ただひたすら注ぐ、一方的な愛が共通している。生身の女性よりも漫画やアニメのキャラクターのほうがいいという青年が増えている背景が、ほの見えた気がしたが、もうひとり、漫画とともに、人形へその愛を注いでいるという青年に会った。

彼は、タカラの人形ジェニー（以前の商標はバービー）に、その愛のすべてをかけているという漫画家で、バービー人形研究家のばあびい露木さん。商業雑誌で描く一方、『バービーちゃん官能写真集』なる、人形にエッチなことをさせて写真や漫画にするといった、あきれた同人誌を出版。一時期コミケットをにぎわし、一般男性雑誌でも話題になり、挙句に人形の発売元のタカラに告訴されたというご仁だ。

新宿中村屋の喫茶室で待ち合わせをしたが、約束の時間になっても露木さんは現われなかった。家ではお人形を片時も離さないというからどんな人か、女っぽいのかとあれこれ想像を巡らし、入口に目をやっていた。

「やあ、遅くなりました」

ハスキーで大らかな声にハッとして振り返ると、後ろに束ねた長い髪に黒いミラーグラス、ヘビメタ風のジャンパーに黒ジーンズ。そして長く伸ばした豊かな髭。女っぽいどころか、映画「イージーライダー」に出てくるアメリカのひと昔前の不良といった趣で、一瞬息をのんでしまった。

「ジェニー？　あいつはかわいいですよ。どこがいいって聞かれても、惚れた女のどこがいいかうまくいえないのと同じで答えられない。ただ、ジェニーにポーズをつけて写真に撮ったり、同人誌にするのは、『俺の彼女、こんなイカシているんだゾ、色っぽいんだゾ！』って、友だちに見せびらかす感覚に近いんじゃないかな」

あいさつもそこそこに人形の魅力を聞いた答えがこれだった。「俺の彼女」……。なんだかヘンな気持ちだった。怪訝な顔をしていたら、露木さんはミラーグラスを取って、ふつうのメガネに変えた。いかつい雰囲気がいっぺんにやさしくなった。

人形のジェニーに最初に出会ったのは、高校の時だという。

「もうひと目ぼれ。かわいい。漫画やアニメが好きだったけれど、それとは違って、ジェニーは触れる。動かせる。持ち歩ける。常に恋していられる。これって片思いですよ。自分がこの恋に飽きちゃった時が終わりなんですから。でもぜんぜん飽きない。ますます好きになっていくんです」

愛している人形はただひとつ。しかし、長年持っていると、一部が壊れてしまう。

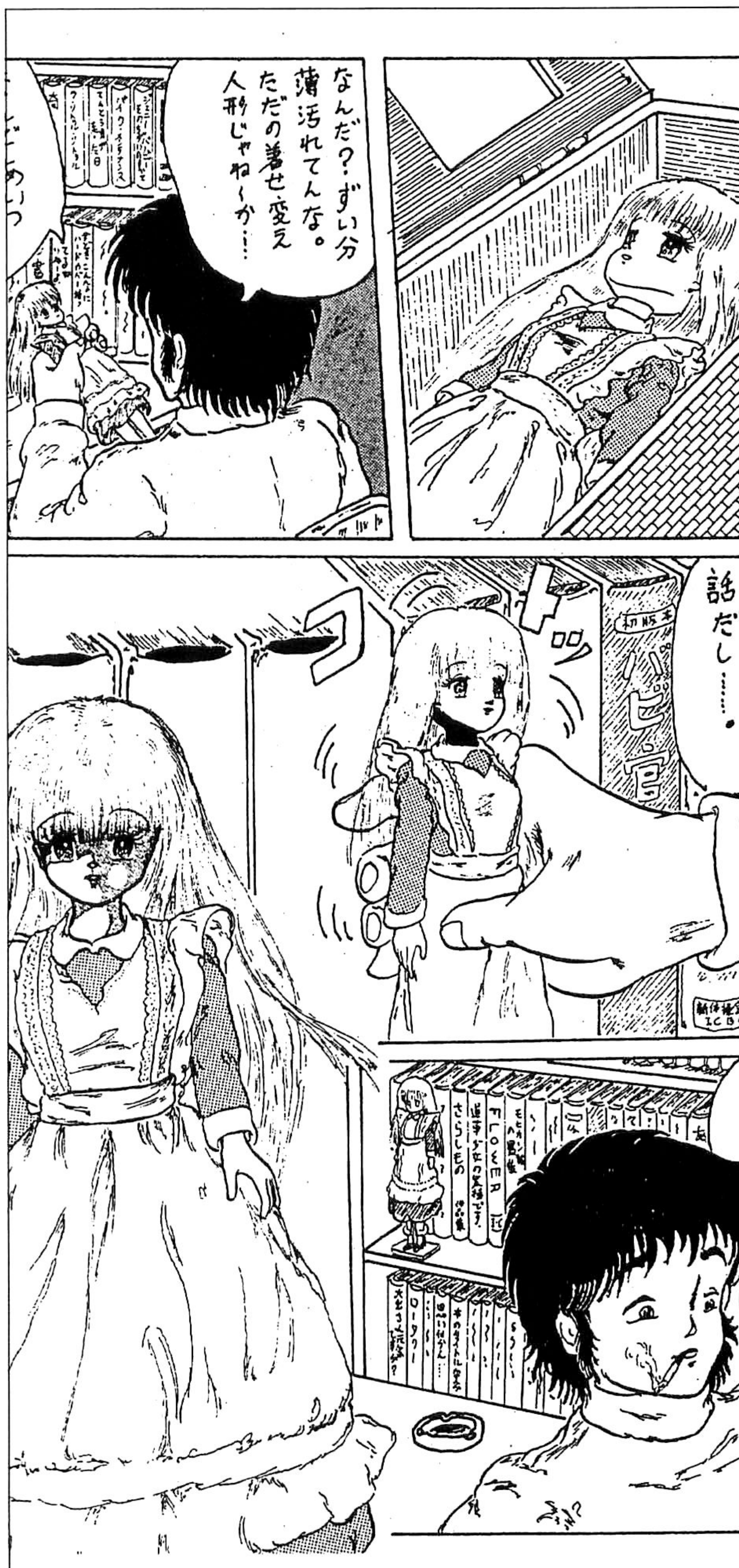
「こんなことは本来邪道で、やりたくないのですが、いざという時の取り替え用の『影』を入れれば四つの人形を持っています」

とくに露木さんの持っている人形はもう発売されていない型だけに貴重だという。

「もう八年近くいっしょにいるから、だんだんと愛し方が変わってきた気がします。前はもうただただかわいいって感じで好きでしたが、今は、妻子持ちの気分というのかな。ジェニーに自分が縛られている感じ」

◎◎◎◎◎

「愛は一方的でいいんです」

「子どもの頃から、俺はいつでも死ねると思ってきたんです。小学生時代の憧れは特

攻隊。自分の命をかけて敵艦を沈める特攻隊」

そんなもの知らない世代でしょう?

「本やプラモデルの世界では知っているでしょ。そりゃ、頭の中では、今の時代に特攻隊はないとわかっていました。でもなれるような気がしていた。ところが、中学一年のある日、突然、理解したんです。特攻隊はない。俺は特攻隊にはなれないんだって」

露木さんは、この時のショックが忘れられないという。ヘンな話だったが、彼の気迫に押されて聞き入ってしまった。

「生きる目標を失った感覚って、わかりますか? ああ、俺はもう用済み人間なんだという気持ち。それまでは優等生でしたが、その辺からケンカをしまくって、次々に問題を起こしたんです。ぬけがらみたいに生きていた。そんな時、ジェニーに出会ったんです」

デパートの玩具売場で見た人形に視線を

同人誌『バービーちゃん官能写真集』より

奪われ、買わずにいられなかったという。

「ジェニーに恋してから、自分の命を粗末に考えることはできなくなった。特攻隊はもちろんケンカもできない。俺が死んだらこいつはどうなるかと思えば死ねないでしょう。何日か出かける時は友人の家に預けていきます。オヤジが火の不始末でも起こして火事になったら大変ですから。ジェニーはひとりじゃ逃げられないし……」

露木さんは、自分のしていることを「擬似マイホームかもしれない」と分析している。しかし、生身の女性とこういった関係を持ちたいのにできないから人形で、というわけでは断じてない、という。

「学生時代はけっこうモテたし、ガールフレンドもいたし、セックスもした。ただ、人間というのは相手の気持ちというのがあるでしょ。これは面倒なものです。愛は一方的でいいんです。今、いちばん恐いのは、バイク事故で僕が植物人間になったり、年をとり、ボケてしまって、自分の周りになぜジェニーがいるのかがわからなくなること。人から見たらただの人形でしょう。捨てられてしまうこともある。この子のことが不安でたまらない」

話を聞いていると、ジェニーが人形であることを、こちらが忘れてしまう。人形を愛でるヘンな人という思いがだんだん薄らいでいく。不安になって、夜、友人に電話をしてみた。聞いた話を一部始終したら、「その人、変態よ」と彼女はいぶかしげに言う。そうだろうか。変態かそうでないか。そんなことよりも、これほど何かを愛せることにうらやましさを感じてしまった。

*

なぜ、生身の女性ではダメなのだろう。男たちはあふれて、こぼれてしまいそうなほどの愛を、川のように一方向へ流し続けている。その行き着く先は、女たちのいる大海ではない。内へ内へとこもるナルシズムなのか。

それにしては、男たちは自分自身をも愛し損ねているように思える。あいまいでとりとめのない愛情の発露をぎこちなく支えるメディアやモノは、それを享受する若者たちによって再生産されていた。

ハッピーエンドのレイプもご都合主義の近親相姦も、その歪んだ支えの一断面かもしれない。絵も物語も気に入らない。が、モノ作りに熱中している若者たちの表情は、いい顔だなと思った。ただ……。彼らが自分たちの創った幻想と現実の間にいるように、彼らの作品を受け取る読者たちは、その境界すらわからなくなって浮遊している気がする。

あのM事件、その後に起きた誘拐殺人。そして今日の夕刊でも、少女の裸を撮った二十二歳の公務員の逮捕が報じられている。何故こんな事件が起きるのだろうか。

人はもっと愛されたほうがいい。そしてもっと自分を愛したほうがいい。私はどうなのだろう……。取材を終え、怒りよりも、いつか人恋しさの只中にいることに気がついた。

やおい族
美少年ホモマンガに群がる少女たち！

『八犬伝』、ギリシャ神話、そしてアクション刑事ドラマ。「使命」をもって、仲間と「協力」し合い、自らの「命」さえも投げうって強大な「敵」に立ち向かう。そんな「男たち」の物語に《恋愛》を見る〝少女性〟とは。

梨本敬法
本誌編集部

「首筋をたどって動くキスに、小さくうめく。夏の香も香ばしい、よく焼けた肌に若島津はしつっこく舌をからめてくる。肌だけではなくもっと深い情を刺激し、甘くさざ波をたてようとする。濃厚なくちづけのくりかえし。顔をそむけてもきりもなくたわむれかかってくる……。
『……あ……』
『俺、だめなんです。あんたでなきゃ…』」
「指先と舌の動きは、みだらなひとつのカオスとなって、小次郎の奥深いところでうごめき続けていた。まとわりつき、からめられ、なめまわされて…。強情な小次郎を、それは頂点へむかって追いあげていく」
（「U ARE THE ONE……」まのあそのか『つばさ百貨店』）

「やおい族」と呼ばれる女のコたちがいる。コミケットなどの同人誌展示即売会で、美少年モノ同人誌に群がる少女たちだ。「ヤマなし、オチなし、イミなし」を略して「やおい」。もともとは、マンガの基本「ヤマ、オチ、イミ」を無視した描き手たちが謙遜で「また〈やおい〉してしまいました」などと用いていたものが、いつしか彼女たちが好んで描く美少年モノ同人誌一般を指し「やおい本」、彼女たち自身を称して「やおい族」なる呼び名で定着したのだ。いきなりの、きわどい内容で驚かれただろうが、冒頭の引用は、そんな彼女たちの「やおい本（やおい小説）」からの一節である。定番ともいうべき、少年愛、ホモセクシュアル傾向モノのひとつ。もちろん、こうした露骨なセックスシーンばかりを描いているわけではないが、美少年たちの、ちょっと危険な日常がそこにある。これをどう捉えるべきか。

熱血少年の友情に〝恋愛〟を見る

彼女たちの遊び、「やおい」の方法はこんな具合だ。お気に入りのアニメ、マンガのなかから、好みの少年ふたり（圧倒的に、翳のある美形の場合が多い）を選び、彼らの情熱、絆、性格、人間関係などに恋愛を見る。そして原典では描かれない彼らの日常を夢想し、また、SF、ファンタジー、時代モノなどの場合、現代などの解放された世界にひっぱり出し、彼女たちだけの「彼ら」を演出するのだ。

若島津は若島津健、小次郎は日向小次郎。『少年ジャンプ』に連載された少年サッカー・マンガ「キャプテン翼」の登場キャラクターである。原作の主人公、大空翼率いる南葛中学サッカー部のライバルチーム、東邦学園サッカー部のエース・ストライカー（小次郎）とゴールキーパー（若島津）。彼らのかなわぬ夢（原作はかならず主人公が勝利を勝ち取ってしまう少年マンガなのだから）、勝利への〝情熱〟と〝友情〟に、彼女たちは、〝恋愛〟を見るのだ。

打倒、宿敵大空翼をめざす日向小次郎の情熱を小次郎の翼への愛とすれば、ともに打倒南葛をめざしてキャプテン小次郎についてゆく若島津の友情もやはり愛……。かくてちょっと危険な三角関係、倒錯の恋愛

各図版左、若島津健（男）と右、日向小次郎（男）を夫婦と設定した同人誌「*BRIDAL* II」より

世界ができあがる。寮生活という彼らの閉鎖的な空間（そこには女が入り込めない）が、彼女たちのお気に入りの舞台だ。そこでは、少年たちが思いのままに恋を演じる。

女が出ると夢の世界が壊れちゃう

西山佳代子さん（仮名・二十六歳）が、「やおい本」と出会ったのは八年前。高校を卒業後、保母および幼稚園教師の資格を取得するため福島県から上京して、短大で幼児教育を学び始めた頃である。根っからのアニメ好きゆえ、同人誌即売会コミケットに顔を出したのがきっかけだった。喧噪と熱気、そして何よりも同じ趣味をもつ者の存在の多さに興奮した、という。ちょうど「やおい本」の発祥が十年ほど前、「ボルテスV」や「闘将ダイモス」「機動戦士ガンダム」などの巨大ロボット・アニメの美形悪役を扱ったものからといわれるから、いわば「やおい族」の創成期といった時期のこと。

「こんなのがあるんだ」。それが、第一印象だった。アニメ雑誌で評判は耳にしていたが、やはり実際の同人誌は新鮮に映った。少年愛、ホモセクシュアル傾向のテーマは、以前から萩尾望都、竹宮恵子の少女マンガで知っていた。さほどの違和感もなかった。もちろん「やおい」などということばは当時まだない。内容も今ほどハードなものはなく、せいぜいキスシーンどまり。ちょっとイキ過ぎた男同士の友情物語といった感じの、ほのぼのとしたものが多かった。半年ほどして、自分でも作り始めた。人気の「ガンダム」を題材にした、コピーをホチキスでとめただけのお粗末なものだったが、とにかく作ってみたかった。

「別にホモセクシュアルだと思っているわけじゃないんです。好きな美形キャラ（キャラクター）が先にあって、ギリシャ神話に出てくるような中性的なイメージにあてはめているんです」

　好きなキャラクターが、たとえマンガや小説のうえでも他の女性とつきあうことに耐えられない。今回話を聞いた多くの女のコたちが答えた「やおい」、ホモセクシュアルの理由である。女性が登場すれば、日頃感じている女の嫌な部分が見えてしまう。せっかくの夢の世界から現実に引き戻されてしまう。だいいち、そしてそれゆえに、そんな「やおい本」は売れない。

女のコだけの同人誌即売会「ウィングマーケット」

　結論は自然と導かれる。自分たちにはけっして手の届かない、男の友情への憧れ。「なんとなく危ない」倒錯の快楽。

「やおい本」を作るうえで彼女が最も苦労するのはストーリーづくりだ、という。いかにしてスムーズにことを運ぶか。いかにして不自然なくベッドにたどりつくか（たとえうまくベッド・インしても、こんどは男性のからだがどんなものなのか知らない）。そこでの思いは、デート前日の男の心境に近いかもしれない。「やおい本」に「入院中の病室に見舞いにくる」という設定が多いのも、そんなストーリーづくりの難しさの反映である。「不治の病で」「知ってても言えなくて」とくれば、誰にでもいきなりお涙頂戴できるし、そしてそこにはベッドがあるから。彼女の場合、少年愛マンガ雑誌『ＪＵＮＥ』『小説ＪＵＮＥ』、そしてテレビの昔ながらの青春モノなどのストーリーを参考にしている。要は、好きなキャラクターが、好きな物語のなかで動いてくれればいいのだ。

短大を卒業し、アニメ制作会社でアルバイト。保母、幼稚園教師の資格も取得したが、どうしてもアニメ関係の職に就きたかった。昨年どうやら食べられるようになり、現在、フリー・アニメーター。アニメーション制作の初期段階でキャラクターの基本的な色指定など、カラーコーディネートを行なっている。そして、プロとしてアニメ制作に携わるようになった今も、同人誌活動は続けている。「同人誌を通じていろいろな人に出会えるから」である。

大義のために死ぬ、神話世界の少年たち

いわゆる「イチゴ世代」の佐藤里香さん（仮名・十五歳）が、「やおい本」を知ったのはこの春のことである。クラスの友達に誘われ、ドラゴンクエストのコスプレ（扮装）でコミケットに参加したのだ。テレビ・アニメで見ていた「キャプテン翼」「聖闘士星矢」の「やおい」。ひと目で気に入った。その場で十数冊を購入。二カ月分のこずかい、一万円ほどの出費であった。

「セックスのことは当然興味ありますけど、生々しい話はいやですね。なんか汚い感じ、〈やおい〉だったらキレイだから……。コスプレは、同じことが好きな仲間が集まるし、握手や写真を求められたり、何か自分が別人になったような気がしてほんとうに楽しいですね」。母、兄との三人暮らし。今いちばん興味があることは、バイクの免許、ドラゴンクエスト、そして「やおい本」だという。

七〇年代後半、おりからの萩尾望都、竹宮恵子、青池保子などが描いた少年愛的少女マンガの影響のもと誕生してきた「やおい」は、八五年「C翼（キャプテン翼）」の一大ブームを経て、同じく少年ジャンプ連載の「聖闘士星矢」「サムライトルーパー」「天空戦記シュラト」と、彼女たちが「ジャンル」「系」などと呼ぶ、遊びの対象となる原典の数を増し、現在に至っている。マンガ情報誌『コミックボックス』十一月号によれば、今年八月、晴海の国際貿易センターで行なわれたコミケットの参加推定人数は十～十三万人。うち八〇％が女性だったという。また、参加サークルジャンル比でも「C翼」一六・五％、「聖闘士星矢」一四・二％、「サムライトルーパー」一二・一％というから、そのすべてが「やおい族」というわけではないにしろ、人気のすごさは推して測れるだろう（コミケットカタログと『コミックボックス』九月号での誌上アンケートの結果、「やおいが好き」と答えた人は、六七％）。さまざまなマンガ、アニメでのさまざまな「やおい」。だが、彼女たちのお気に入り、それらキャラクター引用の元となるマンガを見てみると、そこにはいくつかの共通点が見えてくる。

コンパクトに話をまとめた、アニメ・ビデオを見れば一目瞭然だ。「聖闘士星矢」は、その物語の設定をギリシャ神話に求めているし、「サムライトルーパー」は八犬伝、『シュラト』はインド神話を基にし

ている。彼らはいつも神話的戦士たち、すなわち「使命をもった少年たち」であり、「大義を果たす」ため「協力」し合い、仲間たちの犠牲になって自分の「命」を投げ出し、「強大な敵」に立ち向かっている。はっきり言って、ラストシーンなどはシチュエーションの背景画だけが違っているだけで、どれもほぼ同じに思えるほどだ。

「太陽にほえろ」はラブ・ストーリー!?

『牧歌メロン』という雑誌がある。〝ボッカチオとデカメロンの危険なドッキング〟と銘打たれたこの雑誌は、八〇年十月、アニメ専門誌『OUT』の増刊『ALLAN』として創刊し、以後『月光（月ノ光）』と改名するなど、休・復刊を繰り返し現在に至る。〝少女のための耽美派マガジン〟としてスタートしたこの雑誌には、そうした彼女たちの想像力のもうひとつのあらわれが見られる。雑誌は、大きく前半に「猟奇」「ナチス」「日本切支丹殉教史」など耽美好きの少女たちをそそる特集、後半に「読者のぺえじ」という投稿欄で構成さ

「ウィングマーケット」カタログの各サークルと「牧歌メロン」(パロル舎)

れる。注目すべきは、その「読者のぺえじ」。以下はその投稿の抜粋である。

彼女たちの遊びを分かりやすくするため、少し古いが『ALLAN』から、八二年十月十五日放送の「太陽にほえろ」を見てのものだ。ジプシーは三田村邦彦、ドックは神田正輝。

「巷では、ジプシーとラガーができてるとかドックはラガーを狙っているとかで、騒いでいますが、それはウソです。本当はドックとジプシーができているんです。

二人の仲が決定的になったのは（本当に結ばれたのは）、『雨の降る街』です。この話、ひっくり返せば、ドックとジプシーのラブストーリーなんです。ちょっとしたことで、二人の仲がきまずくなり、ジプシーに危機がせまり、ドックが助けにいって、二人は互いの愛を確認する、という〝雨降って地固まる〟の話はこびですが、これを細かくこだわってみていくと下記のようになります。

①ジプシーが、傘を女の人に貸した、というとドックは『女!?』と表情を変えました。これは、ドックのやきもちです。

②ドックとジプシーは同じ覆面車に乗っていました。

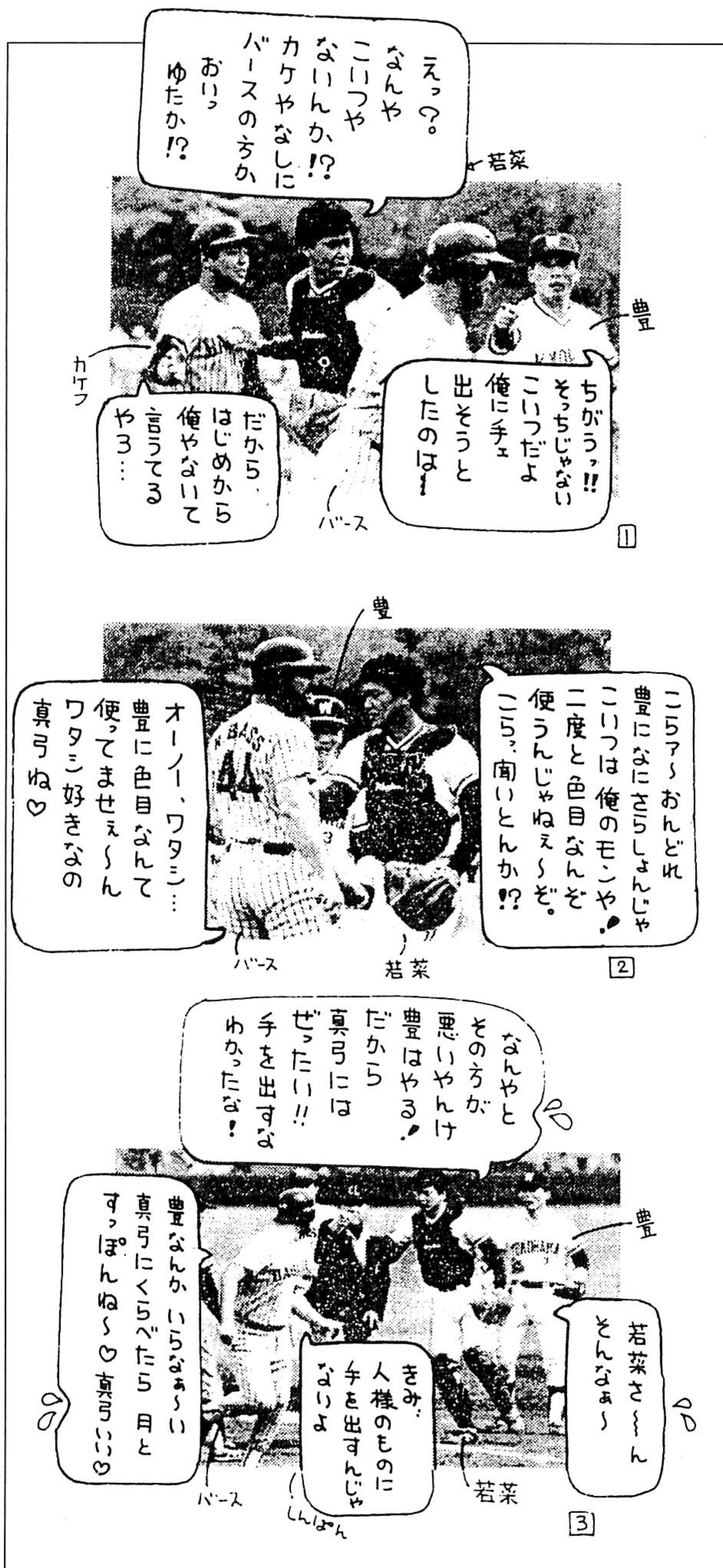
――（中略）――

⑦めでたく犯人が逮捕されます。ジプシーはヘロインを打たれていて、フラついています。だから山さんが肩をかそうとしてジプシーの腕をつかむと『だいじょうぶです!』といって、ジプシーは山さんの手を振りほどくんです。で、振りほどいた拍子に、ジプシーは床にズテ!と倒れてしまいます。するとドックが駆け寄り、ジプシーを抱き起こして（恋人接近ですよ）『ジプシー…おい、お前ガンコすぎるぞ』と、やさしく微笑みかけるんです。そうすると、ジプシーは苦しいんだけどかすかに、微笑み返して、『そうですね。気をつけますよ…ドック…』というんです。ジプシーの素直な様子（ドックが抱いていても、いやがらない!）にドックは感激して、『ジプシー…』とせつなく呼びかけるんです。もうこれはラブシーンですよ」

（『ALLAN』十四号、春日真澄投稿より）

彼女たちが見ているのは、もはや同じ刑事ドラマ「太陽にほえろ」であっても「太陽にほえろ」ではない。ここでも「やおい」と同じ読み替え、ドラマのなかから好きなふたりのキャラクターを選び出し、彼らを同性愛、ホモセクシュアルと見做す遊びが行なわれている。七曲署の刑事という「男たちのグループ」が、社会の平穏維持という「大義を果たす」ため「協力」し合い、犯罪という「強敵」と戦う。そして（番組の視聴率が落ちてくると）たまには「殉職」したりもする。

違いは、ここでの遊びはキャラクターが実在の、生身の男であること（が、それとても彼女たちにとっては、テレビのブラウン管のなかで起こる同じ二次元の物語ではあるが）。そして、ここでは、このほかプ

口野球「真弓（阪神）と若菜（大洋）と高木豊（大洋）の三角関係」からバレーボール「富士フイルム：杉本と蘇部」「とんねるず：木梨と石橋」「アルフィー：高見沢と桜井」「必殺仕事人：中条と三田村」「三国志：諸葛孔明と曹操」まで、メディアを通して見えるあらゆる時代、分野での男たちのホモセクシュアルが満ち溢れていること。彼らの危ない一瞬（？）を捉えた写真、彼らの乱れた関係を鳥瞰する相関図とともに。

「〇〇くんと××くんはデキてるー♡」

ペンネーム深母草晶良さん（二十三歳）とジャニー志水さん（三十一歳）は、この「読者のぺえじ」で知り合った。ともに『ALLAN』創刊当時からの読者で、「読者のぺえじ」の常連でもある。深母草さんはロックバンド「A」、ジャニーさんはバレーボール・ネタなど、さまざまなジャンルの読み替えをやっている。投稿だけでなく、

若菜と高木豊（「月光」'85年7月号より）

こうした読み替え創作で同人誌も発行している。

初めてこの「読み替え」を知ったときは、ワクワクするようなときめきがあったという。が、そのワクワクが何であったのか、今になってもうまくことばにはならない。

深母草　「基本的には、その人のファンで、ファンだから始めるんです」

ジャニー　「誰か好きな人がいて、その人と仲がいい人がいると、その仲のいい人も一緒に応援しよう、と。男の人同士のそういうとこ、見てて幸せなんですね。なんかちょっと肩を抱いただけで」

テレビのブラウン管のなか、自分が好きなキャラクターだけをとことん見つめてゆく。たとえば歌番組「夜のヒットスタジオ」。彼女たちは、お気に入りのキャラクターが歌うときはもちろん、そのほかのあまり興味のない歌手が歌うときもチャンネルを変えることなく、背景に映るお気に入りをつねにチェックし続ける。誰としゃべっている。誰と目があった。アイドル岡田有希子が投身自殺したとき、この番組で多くの少女たちが中森明菜の背後にユッコの顔を見たことがあった。見るはずのないところを凝視する視線がそこにはある。

ジャニー　「たとえばスポーツ選手の場合、からだがガッシリしててひ弱なはずないんですけど、なんかこう好きになってみると普段ゴッツイかなというなかにも、ちょっとした美しさとか、ふとしたか弱さとかがあって。そういうのを見つけたらシメたものというか」

深母草　「それを見つけるのが楽しい、目をさらのようにして」

メディアから与えられた情報に、発見し読み解いた意味を付着させ拡大解釈する。「危ない」「イケナイ」というスリルが想像力を掻き立てる。思いどおりに好きなキャラクターを動かせる楽しみに加え、自分たちだけが知る隠された物語という快楽。そして、いったんそうした物語ができてしまえば、あとは新たな情報が物語を発展させてゆく。「読者のぺえじ」で、一世を風靡したプロ野球「若菜と真弓の危険な関係」の場合はこんな調子だ。

トレードで一緒にライオンズからタイガースに移ってきた若菜と真弓（情報）。ともに目が大きくて野球選手としては美形。真弓は小柄で、若菜はガッシリとしたお兄さんタイプ→ふたりは怪しい（読み解き）。阪神広報部によるとふたりは同居しているらしい（情報）→ふたりはデキている（読み解き）。やがて若菜がホエールズにトレード（情報）。こんどは同じ理由でホエールズの真弓タイプの高木豊と若菜がデキた（読み解き）。が、若菜はほんとうは真弓が忘れられない→三角関係成立（読み解き）。そうしたなかでの阪神―大洋戦。ホームベース上での、若菜と真弓クロスプレー激突。真弓が骨折するという事件発生（情報）。やっぱり……（彼女たちの想像力爆発）。

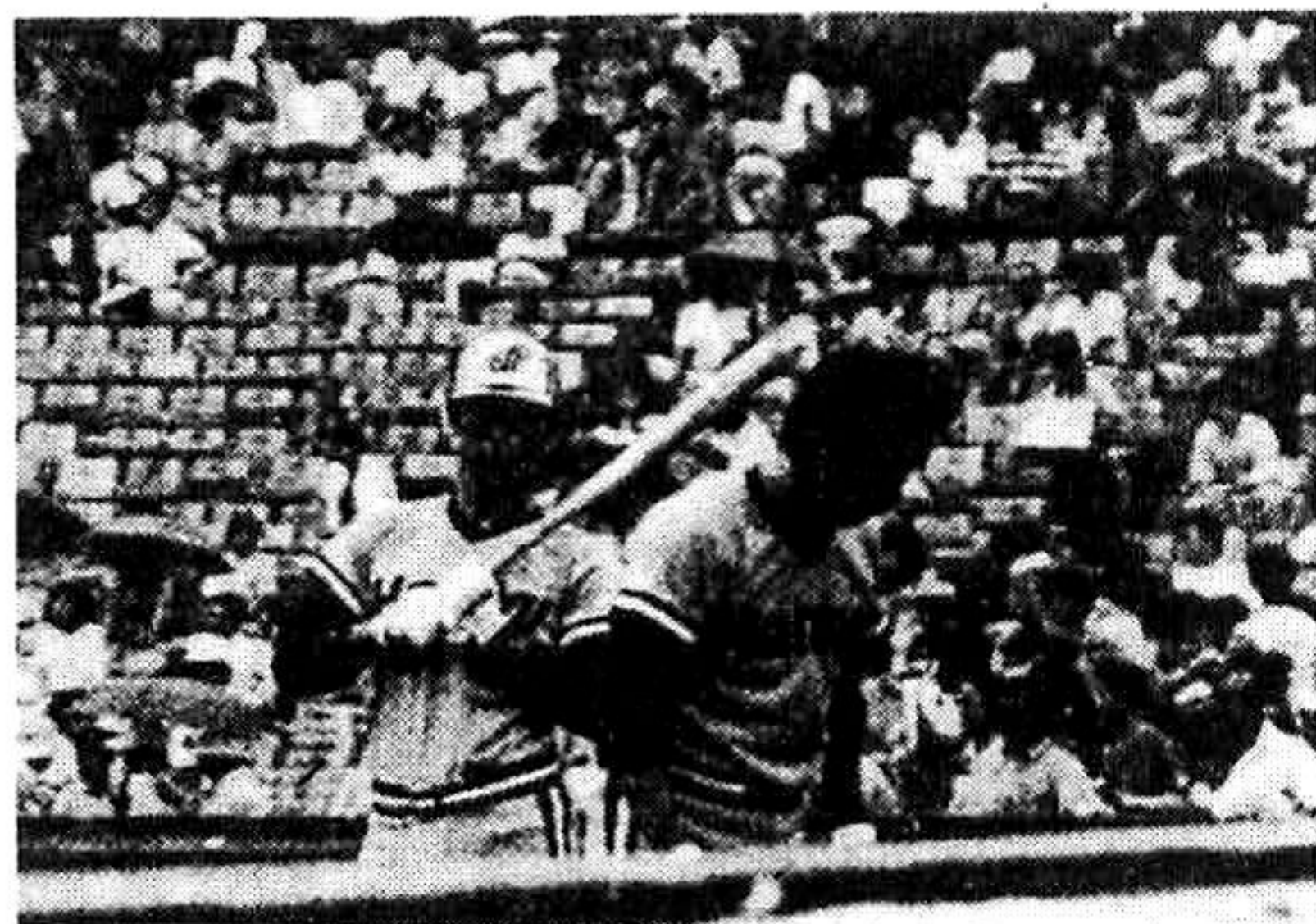
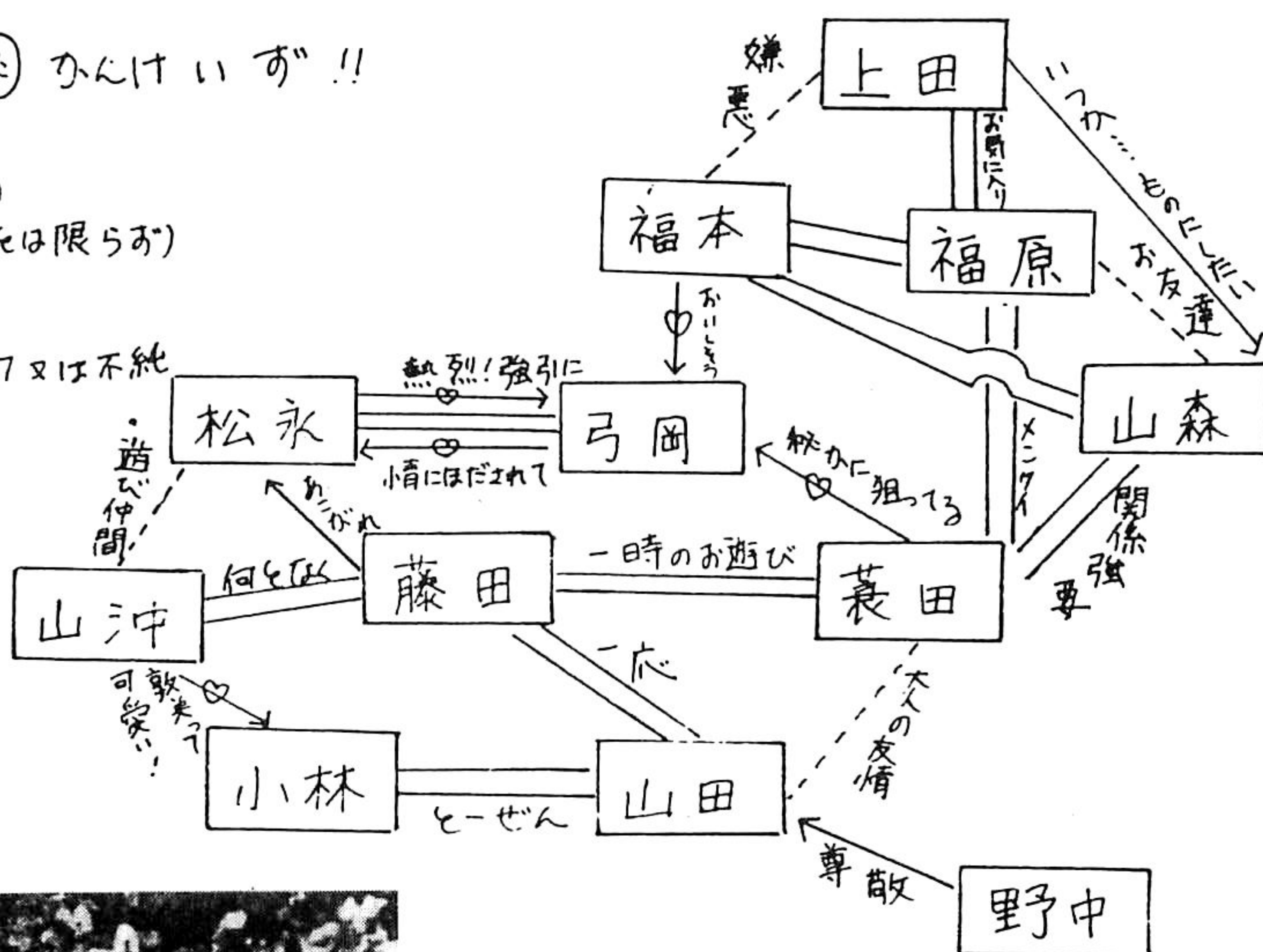
「誇大妄想ともいいますけどね、こういうの」

と彼女たちは自分たちを客観的に見つめる。

ほとんど独断と偏見による……

ブレーブス㊙かんけいず!!

＝＝ 関係あり
（合意とは限らず）
→♡→ 好意
——→ プラトニック又は不純
- - - - その他

上田
福本
福原
山森
松永
弓岡
藤田
山沖
蓑田
小林
山田
野中
嫌悪
お気に入り
いつか……ものにしたい
お友達
おいしそう
熱烈！強引に
情にほだされて
秘かに狙ってる
メンクイ
関係強要
あこがれ
遊び仲間
何となく
一時のお遊び
一応
大人の友情
敦夫って可愛い!
とーぜん
尊敬

元阪急ブレーブスの相関図。松永と弓岡は「ユミとマツ」の愛称で一世を風靡。（『月光』'85年７月号より）

が、一方では「ほかの人とは違う」という特別な思いがないといえば嘘になる、という。こうした投稿、同人誌活動は、ふつう人には言わない。会社などでは絶対に秘密だ。二重生活を送っているような、「もうひとりの誰も知らない私」がいるような、そんな気分が愉しいのだ。

　彼女たちの分析によると、こうした遊びをやる女のコは奥手が多い、という。「ステキだな」と思ってもけっして声をかけられない、そんな男女づきあいの苦手な女のコが。では、彼女たち自身はどうなのか。たとえば結婚について。

ジャニー　「たしかに奥手なほうだと思いますね。結婚はしないつもりです。同人誌のほうがおもしろかったからですかね」

深母草　「私も結婚したくないですね。まず相手がいない、というのもあるけれども、結婚生活にとられる時間がもったいない。ただ、それでまわりからモテないと思われるのはいやですね」

いごこちのいい「少女の世界」

十代、二十代の女のコといえば、スキーやテニスをし、ディスコで遊び、海外旅行に夢中。そんなものだと思っていた。男のコと大好きな恋愛をし、たとえそのことで悩んでいたとしても女のコ同士相談に乗り合い、文句を言い、グチをこぼしながらもけっこううまくやっていると。だが今回話を聞いた女のコたちは、雑誌やテレビで喧伝されるそうした「いまどきの若い女のコ」とは違っていた。むしろ、そうしたモノを避けて通っていたりもした。とはいっても、彼女たちがいわゆる「個性派」ということばで言い表わせるわけではない。こと同人誌という場には、雪崩れを打って身を擦り寄せているのだから。

思えば、新撰組の土方歳三と沖田総司に夢中になる少女たちは昔からいた。「少女時代の潔癖性」などということばで括られてきたアレだ。あるときは歌舞伎の女形であり、あるときはランボーやワイルドなどの世紀末文学であり、あるときはデビッド・ボウイやJAPANなどの耽美的ロック・ミュージシャンであったりした、中性的なものへの憧れ。が、かつて彼女たちは思春期を過ぎて、大人の女となるにつれて、そうした潔癖性からも卒業していくはずだった。結婚をし、子供を産んで。

「同人誌活動のほうがおもしろい」。彼女たちは今メディアを手に入れた。そして溢れかえる情報のなかから、好みに合わせてマンガやスポーツ選手からさえも、主体的に記号を選び出す方法を。

一方で、スキーをし、ディスコで遊び、海外まで出かけてブランド商品を買いあさる、とテレビや雑誌で喧伝される十代、二十代の女のコ。しかし、かけ離れた存在に見えるこれら同人誌に夢中になる女のコたちも、せっぱつまったところのない経済的余裕という点ではなんら変わりないのだ。ボディ・コンシャスという、女が女のからだを強調する服を着る時代。ハイ・レッグのレオタードで身を包んだコンパニオンなる職業に人気が出る時代。そうしたなかでの「少女の潔癖性」がそこにはある。

いちど同人誌の展示即売会に行ってみるといい。そこは女のコたちの、期待と興奮の入りまじった無数のざわめきで溢れている。「売れ線」「大手」「万部サークル（一冊につき、一万部以上印刷するサークル）」などと呼ばれる人気サークルには、入場と同時に長蛇の列ができ、山と積まれた同人誌が飛ぶように売れてゆく。人気同人作家にサインを求める者、さながら宝塚のスターにするように、花束を手渡す者。一部六百円～千円。それで彼女たちはちょっと危ない世界を手に入れる。多くのコは、親に、そして同じ趣味をもつ仲間以外、友達にもこのことは話さない。だからこそ、彼女たちは「ほんとうの」一体感が得られる同人誌が好きなのだ。

キラキラお目々の氾濫
ボーダーレス化する少女マンガと少年マンガ

藤田尚 評論家

シンクロナイズド・スイミングをテレビのニュースで見ていてビックリしたことがある。画面ではあの小谷実可子さんが華麗なフォームを見せてくれていたのだが、そのバックに映像的処理が加えられ、キラキラキラキラと、もうまばゆいばかりに十字の光が輝いていたのである。

少女マンガだ！……と僕は思った。

少女マンガが黒いインクの活版誌面でなんとか華やかな雰囲気を出そうと苦心してあみだした手法が、実写として、ほんとうの光としてシンクロナイズド・スイミングの背景を飾っていたのである。

「かわいい」＝少女マンガ的であること

男性雑誌の『GORO』を眺めていても〝少女マンガ〟にお目にかかることができる。篠山紀信撮影によるアイドル美少女の、〝ドアップ・ピンナップの〝目〟である。目の中にはいろんな形で光が映り込んでいる。単純にフラッシュがひとつ反射しているのもあれば、円形に丸い光が六個も並んでることもあれば、目の下半分が白く輝いているのもある。眼球のカーブに沿って蛍光灯の光のようなものが長く映り込んでいるものまである。これが〝少女マンガ〟でなくてなんであろう。

「目の大きさが顔の半分ほどを占めていて、そのなかには星や月や太陽が輝いてるんだぜ～」っと、いまだにケイベツ的に評されることの多い少女マンガであるが、その少女マンガを少女マンガたらしめる手法は、

気づかないうちにあちこちに浸透していたのである。

美少女の顔を美しくアップで撮ろうとすれば、どうしても目がポイントになる。素人の女のコをアイドル写真ふうに撮って並べた写真集を見たことがあるが、それは悲惨なものだった。顔の造型そのものにモンダイがあることはさておくとしても、まず、みんな目が小さい。これだけでかなりハンデがあることが、それこそ一目でわかってしまうのだ。おまけに撮り方が悪くて、目に光が入ってないのでたんなる黒目になってしまっている。これもまた、表情をなんとなく暗いものにしてしまっているのである。少女マンガは正しかった。目は大きくパッチリと、かつ月や星が入っていなければならない。「かわいい」というのは、いかに少女マンガに近づくか、だったのだ。

ピンク・チラシのいろいろ

「少女マンガ的少女の顔」という記号の消費

ピンク・チラシというのがある。よく電話ボックスにペタペタ貼ってある名刺大くらいの出張マッサージの広告だが、写真を使ってないものは、なぜかみんな少女マンガの絵を無断借用している。僕はけっこう気をつけて見ているのだが、「ゴルゴ13」とか、いわゆる劇画の色気たっぷりな女性イラストを使ったものには、めったにお目にかかれない。どれもこれも顔の半分が目で、なかに月や星が入っていると男にバカにされているところの〝少女マンガ〟の絵

なのである。
　劇画といえば、昔、隆盛を誇っていた〝エロ劇画誌〟というのは数えるほどしかなくなってしまった。エロ劇画の雄だった『エロトピア』をはじめ、どれもがみんな、ロリコン系かヤング・コミック誌に転身してしまったのである。ロリコン系というのは少女マンガの影響がとくに強いところで、売れない時期の女性マンガ家も少なからず通り過ぎていっている。男性を読者とするコミック誌で女性作家が活躍できるようになったのはわりと最近のことだが、例外的に女性マンガ家を多く起用していたのがロリコン業界なのである。それは、少女マンガ的な絵が求められていたからである。

アニメ風になった「エロトピア」の表紙

恋愛を描くようになった男性マンガ

　少年マンガ誌で初めて大活躍できた女性マンガ家は「うる星やつら」の高橋留美子である。女性であるにもかかわらず、いや、女性だからこそ描けた不思議なイロっぽさが匂う少女キャラクターの出現は、少年マンガ界にとって革命的だった。
　高橋留美子はまた、青年劇画でも少年マンガでもない〝ヤング・コミック〟というジャンルを定着させるのにも一役かっている。青年誌『ビッグコミック』から派生した『スピリッツ』に連載された「めぞん一刻」によってである。昔ながらの青年劇画やエロ劇画ではなく、少年マンガの延長にあるタッチの、この恋愛マンガの成功は、『スピリッツ』のみならず『ヤングジャンプ』『ヤングマガジン』といったヤング・コミック界の可能性を確信させたのだった。
　また、過激なSEXYコメディで『ヤングジャンプ』誌の部数を伸ばしたマンガ家に「みんなあげちゃう」の弓月光がいるが、彼は少女マンガ誌『りぼん』の出身である。『りぼん』当時からすでにイロっぽいコメディで定評があったが、ヤング・コミック界でさらにそれをエスカレートさせて大成功をおさめた。過激な性描写と少女マンガ的なかわいさ・上品さを持つ絵がうまくマッチしたからこその成功であった。
　もう一人、少女マンガ出身で忘れてならないのが、あだち充である。もともと女性的な感性も持っていた人だが、『少女コミック』時代に、少年マンガにはない独特のタッチとテンポを身につけたことが「みゆき」や「タッチ」などの大ベストセラーを生む下地になったことは疑う余地がない。

〝おたく〟向けの大メジャーマンガ

　『少年ジャンプ』は、本宮ひろしの伝統を受け継いでいるせいか劇画的な作品が多いが、車田正美の「聖闘士星矢」の成功には

少女マンガ的要素が大きく働いていた。それは、キャラクターが少女マンガ的な〝美形〟であることはもちろんだが、さらに少女マンガ的なのは、それぞれが〝コンプレックス〟を持っているという設定である。アニメ化によってそれらはさらに強調され、『少年ジャンプ』の女性読者が急増した。「星矢」のアニメが上映される〝東映まんが祭り〟には、女子中高生ファンが押しかけ、あまりにキャーキャー騒ぐために、小学生の男の子たちがおびえていたということである。

　最近なぜか突如連載が打ち切られた萩原一至の「バスタード」も美形キャラであるが、それよりも面白いのが、コマの外にコチャコチャと書き込まれた手書き文字の作者のコメントだ。作者が作品の中に顔(声)を出すというのは、ある意味で作品世界を壊してしまうことであり、作法としてはあまり感心できることではない(たとえば「あしたのジョー」の中に突然、梶原一騎やちばてつやが、「○○くん、手伝いありがとー♡」などという書き込みをすることを想像してみよう)。しかし、「バスタード」においては、それが作者と読者とのコミュニケーションのひとつとして機能し、読者のファン意識というかマニア意識を急速に高めるのである。それも、もとは〝二十四年組〟といわれる昭和二十四年前後に生まれた少女マンガ家たち――萩尾望都、竹宮恵子、山岸涼子、大島弓子――によって行なわれていたことである。あの当時、マニア意識を抱いた読者の一部が話題を共有する仲間を求めあい、いわゆる初期の〝おたく〟になっていったといえるかもしれない。一種の〝業界ノリ〟の楽しさそれ自体が目的になってしまう「場」ができてしまった。しかも、そんなマニアの「場」が、実売四百八十万部の『ジャンプ』のうえで成立してしまったのだ。

〝管理人さん〟は〝おたく〟の理想

さて、少女マンガ的な心の機微を描いた「うる星やつら」や「タッチ」は、作者が描かなかったことまで妄想して描いてしまうパロディ的な〝ウラ本〟同人誌を大量に生み出すことになり、弓月光マンガの成功は、男のほうから行動しなくとも向こうからやって来てヤラせてくれる美少女とムシのいい少年の〝逆玉の輿〟的コミックを生み出すこととなった。

「めぞん一刻」のヒロインが〝管理人さん〟で、就職しそこなって困っていた主人公のついた職業が〝保父さん〟だったというのも、この「おたく」時代を象徴するものだったといえるかもしれない。

　少年マンガと少女マンガの垣根がどんどんとっぱらわれていき、読者と作者が互いの領域を行ったり来たりできるようになった今、新しい人間関係の摸索が、作品のなかでも、実生活の面でも、必要になってきていると思われる。そういう意味では〝おたく〟という現象は、変わりつつあるマンガ界全体のなかの過渡期的存在といえるのかもしれない。

ロリコンとやおい族に未来はあるか!?

90年代のセックス・レボリューション

上野千鶴子
京都精華大学助教授
インタビュー・構成▼編集部

――『おたくの本』をつくることになって、編集部で大量の〝おたく雑誌〟を収集したんですが、それを見ていていちばんびっくりしたのが、投稿欄なんです。こういう雑誌の投稿欄って（と言いながら、美少女エロ漫画誌『ペンギンクラブ』の投稿欄を出す）女の子のイラストだらけなんです。

美少女エロ漫画の場合はわかるような気もしますけど、ミリタリーマニア、ガンマニアのための『コンバットマガジン』とか、プラモ雑誌やオートバイ雑誌まで、とにかくいわゆる「おたく」雑誌の投稿欄は全部女の子のイラストでいっぱいなんです。

こういうのを見ていると、〝おたく現象全般を覆うロリコンの影〟というようなものを感じてしまうんですけど、これはいったい何なんでしょうか?

「おたく」雑誌に氾濫する「かわいさ」

上野　そうね（と『ペンギンクラブ』を覗き込む）、これって少年マンガというより少女マンガの絵よね。大塚英志くんが言ってるんだけど、少女って「使用禁止のボディを持った女の子」のことでしょ。ここにあるのはみんなかわいい女の子の絵ばかりで、成熟したセクシーな女っていうのはひとつもないでしょ。この「かわいい」っていうのがキーワードなのよね。これを描いてる男の子も、きっと「かわいい」少女の世界にいたいのね。

彼らは男であるということをもて余して

しまってる。もっと言うと、「男になんかなりたくない」と思ってるんじゃないかな。とっても痛ましいよね。

——痛ましい？

上野　こういう男の子たちって、男であるということに深く傷ついているんじゃないかな。だからセクシーな女じゃなくて、「かわいい」女の子しか描けない。

少女マンガって「少女のままでいたい」「成熟した女になんかなりたくない」っていうメッセージでしょ。そういう世界でしか生きられない男の子たちも、同じように「大人の男になんかなりたくない」って叫んでるのよ。

——この投稿欄を見ると、女の子のイラストの隣に丸文字でメッセージが書いてあって、この女の子って彼らの自画像なんじゃないかっていう気もするんですが。

上野　フロイトによると、人間には二種類の欲求があるの。こんなところで、フロイトなんて使いたくないけど（笑）。そのひとつが、対象化欲求。相手を所有したいという欲求なんだけど、でも、こんなに目の大きい女の子が現実にいるはずないじゃない（笑）。もうひとつが同一化欲求。その人自身になりたいと思うわけだから、その場合はこのイラストの女の子が、この絵を描いた男の子の自画像ということになるんだけど、それだって不可能だよね。それに性転換でもしないかぎり少女の世界からは拒絶されている。だから彼は、永久に自分の欲求を実現できない。

エロ漫画の美少女、「やおい」の美少年

——男の子の漫画に描かれている美少女って、女の子の漫画の美少年と同じなんじゃないかって思うんですが。

上野　そう、彼女たちにとっての美少年って、男でも女でもないのね。第三の性っていうか、やっぱり自分が女であるということを拒否したい少女の理想化された自己像だと思う。美少年たちが女の子のマンガのなかで演じる同性愛は、理想化された自己愛なのよ。そこからは「時よ止まれ！　わたしは女にも男にもなりたくない」っていう叫びが聞こえてくるの。

——この美少女エロ漫画にも、レズものがかなりありますよね。

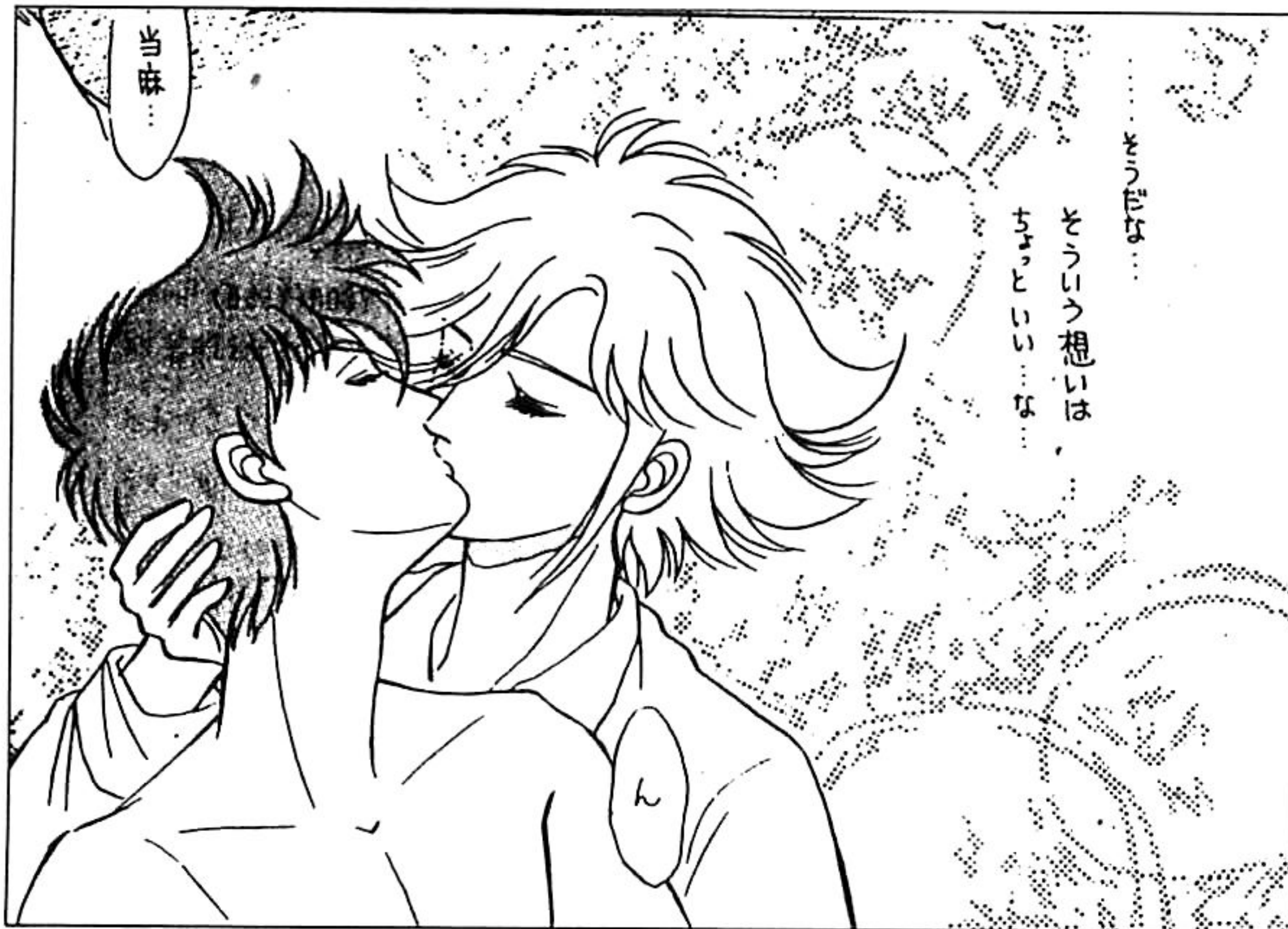
美少女エロ雑誌の投稿欄

上野　土本さんのルポにもあるように、この子たちは、男の絵なんか描きたくないからレズビアンを描くわけでしょ。そのとき、描き手は自分が描く女の子になりきって、頭の中で女の子言葉でしゃべりながらセリフを考えたりしてるんだろうけど（笑）。でも。やっぱり女じゃないんだから、彼は女の子たちのレズビアンの世界には絶対入り込めない。

　レズで快感を味わっている女の子たちは、ようするに描き手の男の子に向かって「アンタなんていらないわよ」って言ってるわけでしょ。彼は、自分を完全に疎外するセックスを描いてるのよ。痛々しいと思わない？

――はあ。

上野　ここには、男の子のどうしようもない無力さが無防備に表現されてるのね。その究極の形が、女の子のオナニーだけで完結しちゃう漫画。これって「あなたのペニスは必要ありません」って宣言されてるようなものでしょ（笑）。女の子のオナニーを覗き見てマスターベーションするのと同じね。

――この手の漫画を見ていると、両性具有の登場人物がかなりいることに気がつくんです。たとえば、性転換で胸だけ大きくした男、もしくはペニスをもった女にレイプされる漫画とか。

やおい系同人誌の少年どうしのキスシーン

上野　それはエロ漫画では昔からよくあるパターンね。異性愛神話に冒されている証拠だと思う。セックスっていうのはペニスの挿入がなければ完成しないっていう思い込みがあるから、レズビアンを描いても、女の子にペニスをつけちゃうのよ。ほんとは挿入なんて要らないのにね。

――登場人物がかわいい猫の女の子で、二人（二匹？）はレズなんだけど、最後は一人の尻尾がもう一人のヴァギナに挿入されて、オーガズムで終わるっていう漫画があって、とても気になったんですけど、それも同じなんでしょうか。

上野　あれはちょっと違う。一人二役を演じて自己完結しちゃうオート・エロティシズムの世界っていうか、他者を必要としないセックスだと思う。

――それって、やっぱりどこか気持ち悪いところがあるんじゃないかって思うんですが。

上野　そう？　少なくともレイプなんかするより、一人で妄想のなかでイッてくれた

ほうがずっと平和的よ。そう思わない？

レイプ描写に見るSEXへの脅え

――この漫画にも、レイプがずいぶん出てきますね。

上野　でも、たとえレイプでも、どれも最後は女の子のオーガズムで終わってるでしょ。最初は嫌がってても、エンディングでは必ず女の子が「イく」ことになってる。現実のレイプでは、そんなつごうのいいことは起こらないけど、マンガの中でさえ、男が一方的に女を凌辱して、勝手に射精して、ほっぽらかして去ってゆく、というパターンはもうないよね。

男にとっての完全なセックスっていうのは、自分よりも、女が「イく」セックスになってしまった。男性支配の皮肉な逆説ね。女を「イかす」ことができなければ、男として役立たずにされてしまう。それが「完全なるセックス」幻想として、ものすごい強迫観念になって、男を脅えさせている。

セックスのあとで、女から「あんたってダメね」ってなじられたらどうしよう、そう思うから実際のセックス、現実の女から遠ざかっていくのよ。

――男は、セックス以前に、女の子とつきあおうと思って声をかける瞬間から脅えているようにも思うんですが。

上野　恋愛やセックスにおいて、男はつねに能動的な役割を果たさなければならない、という義務感に責められているからよ。ベッドのなかで能動的になれる自信のない男が、ベッド以前に能動的になれるはずがないじゃない。だけど「無能」の烙印を押されるのが怖くて、男女関係のゲームに参加しない男の子は、ゲームのノウハウを学ぶことすらできないまま歳をとっていくでしょうね。

――そういう男の子が男女関係のゲームに復帰するには、どうすればいいんでしょうか。

上野　女が能動的になればいいんだろうけど、女は女で受動性をあまりにも強く内面化しちゃっているから、自分はリードされるのが当然だと信じ込んでいるのよ。でもそれって、ようするにセックスに対して無知で怠慢で横着なだけ。ベッドで丸太ん棒のようにしてれば、あとは男が一生懸命やってくれるし、自分をイかせるのは男の義務だと思ってる。そんな女、私が男だったらとんでもないって思うけどな（笑）。

幼女にしろ、他人格とは関係できない

――話がちょっと変わっちゃうんですが、今回の幼女殺人事件で、こういった漫画がすべて「ロリコン・マンガ」として週刊誌などから批判されました。だけど、これってロリコンじゃないような気もするんです。出てくる女の子は、顔はかわいいけどみんな豊満な体をしているし、幼女も出てこない――。

上野　たしかにロリータ・コンプレックスと幼女趣味は全然違うわね。でも、あの幼女殺人事件とは通じるものがあると思うよ。

女の子を殺して、動かなくなってから死体をいじってるわけでしょ。彼は大人の女に脅えるばかりか、相手がたとえ幼女であっても、予想外の反応をされるとパニック起こしちゃうほど弱かったのよ。彼は、自分が完全にコントロールできるものしか愛することができなかった。だけど、死体や人形やマンガの女の子は自分を傷つけることはないけど、けっして愛し返してもくれない。

男は、愛することばかりじゃなくて、愛されることを覚えなきゃだめなのよ。愛されるっていうのは、相手の客体になること、ただのモノになって、相手の自由にされるかもしれないことでしょ。それはものすごい恐怖だし、能動性という男性性が危うくなるからできない。男も、ベッドでいちど丸太ん棒になってみればいいのよ。ソープランドって、男の「丸太ん棒になってみたい」欲望の表われだと思うけど、でもあれだって「女を買う」っていう手続きでかろうじて能動性を守ってるわけでしょ。

――ただのモノになることが恐ろしいっていうのはわかるような気がするんですが、そうすると、ベッドで丸太ん棒になれる女の子って、愛されることの恐怖、受動性の恐怖を回避する技術のようなものを身につけてるんですか?

上野 女だって、愛されることで客体になるのはこわいよ。だから女の子は、「大人になりたくない」「セックスされたくない」って叫んでるでしょ。拒食症なんていうのは、彼女たちのハンガーストライキのようなものじゃない。ベッドで丸太ん棒になるのは、「あんたのモノになる」っていう一種の開き直りよね(笑)。

だけど、いまの女の子って、受動的な男を求めはじめてもいるんじゃないのかな。村上春樹の『ノルウェーの森』が女の子に受けたのも、あそこに出てくる男が徹底して受動的だからでしょう。男がセックスにおじけづいているのは、女が能動的存在になりつつあるというメッセージを男が受けとめはじめたってことかもしれないよね。

――それは、おたく少年にも恋愛の希望は残されているということなんでしょうか。

上野 ただ、男の子が化粧品使って、スネ毛抜いてがんばっても、少女マンガで理想とされているような美少年にはとうていなれないよね(笑)。同じように、ここに出てくるようなかわいくて、豊満な体をした女の子なんて現実にいるわけがない。少女マンガの理想的男性と少年マンガの理想的女性がここまで遠くすれ違ってしまったのに、恋愛なんてできるの? 心配になっちゃう。

『シーメール・コレクション』(白夜書房)より

「おたく」夫婦に未来はあるか？

――少女漫画やSFが好きでそういう雑誌の仕事をしている先輩がいて、少女漫画家と結婚してるんです。まったくケンカもせずに、うまくやっているんですけど、でもどこか奇妙なんです。セックスはほとんどしないし、いっしょにビデオ見たり、漫画について話したりはするんですが、それ以上の会話ってまったくないし……。

上野　サークル夫婦というか、友だち夫婦っていうやつね。いいんじゃない。

――でも、セックスしない夫婦って、どこか変じゃないですか？

上野　なんで？　セックスって本能だと思うの？

――違うんですか？

上野　男は放っておくと、たまってきて必ずやりたくなると思ってるの？　私は、性欲って文化的につくられてきたものだと思ってる。だからやらずにいれば低位安定するのよ（笑）。セックスしなくても、平和な夫婦なら別にいいじゃない。男がアダルトビデオを見て、女がハーレクインロマンスを読んで、オナニーしあう夫婦ってそれはそれでいいんじゃない。

――それでいいんですか……。

上野　少なくとも、夫が妻を当然のようにレイプする家庭よりもずっといいよ。これまでは、そういう夫婦がほとんどだったんだから。相手の意思などかまわずに夫がしたい時にセックスして、子どもは何人か産んだけど、オーガズムってどんなものか知らないっていう日本の妻は、いっぱいいたんだから。

――「おたく夫婦」って、両方とも子どもだから料理、洗濯、掃除といった基本的生活能力がないような気がしますが。

上野　そんなの関係ないじゃない。なくったってちっとも困らないよ。今は家事能力がなくてもシングルが暮らしやすい時代だから、二人でいてもシングル、という男女が夫婦やっててもいいんじゃない？

――「おたく夫婦」って理想の家庭なんですか？

上野　たとえば「食べる相手」と「寝る相手」を変えるというやり方もある。セックスが夫婦関係の必要不可欠な核だという考え方は、神話だと思う。でも、セックスしないで、互いの内面には立ち入らずにずっと友だち夫婦でいようっていう関係は、二人の間に第三者、つまり子どもが登場したときに破綻するよね。夫婦は相手の内面に立ち入らなくてもやっていけるけど、子どもは親に関係を強要してくるからね。『アクロス』に「わがままHanakoは子どもを産んではじめて、世の中に自分よりもわがままな存在がいることを知る」って書いてあったんだけど、あれには感心したなあ。

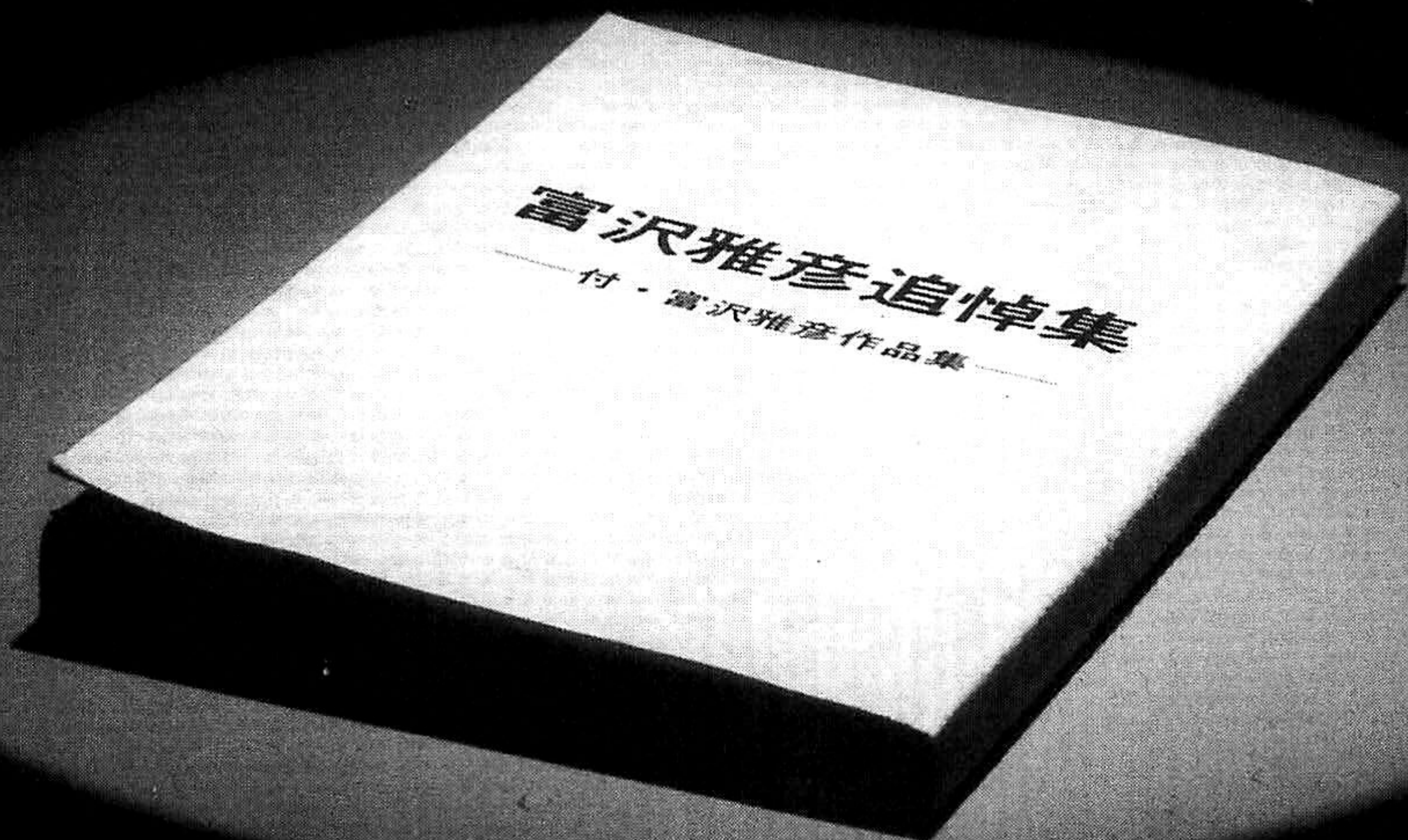
そういうおたく夫婦の子どもがこれからどう育ってゆくか、今ものすごく興味がある。本当に、おばあちゃんになってもそれを見届けるまでは死ねないっていう気持ちよ（笑）。

PART③
おたくという生き方

おたくに死す
殉教者・富沢雅彦へのレクイエム

昭和六十一年、晩秋。東京・西池袋でひとりの男が死んだ。富沢雅彦、享年三十歳。自ら「おたく」として生きることを選んだ男。生涯一同人誌ライターとして二千枚を超える原稿を書きまくり、火花のように散っていった男。その早過ぎた死を通して「おたく」という生き方を問う。

千野光郎 フリーライター

富沢雅彦追悼集
――付・富沢雅彦作品集――

富沢雅彦が三十歳で逝ったのは、八六年の晩秋である。命日はわからない。西池袋のアパートにて死後二週間で発見された。死因は肺炎を併発した心臓発作。栄養不良と心身の極度の疲労のため風邪をひどくこじらせたらしい。彼の古い友人、竹内博氏はこれを「戦死」と呼んだ。八〇年代も半ば、モノで溢れかえった東京の片隅で、なぜこうした死が可能だったのか。私にとって富沢雅彦を語るとは、「こうした死」に到ることもできる私たちの現代を語ることにほかならない。

「無頓着な服」「七三長髪」の積極的選択

漫画専門書店まで足を運べば、フュージョン・プロダクツから出版された『美少女症候群』というロリコン同人誌のアンソロジーを見ることができる。その一巻から四巻までが、富沢雅彦の編集・解説によるものであり、現在容易に入手できる唯一の彼の仕事だ。これは富沢の仕事全体から見て、氷山の一角にも足りない。商業誌にもかなり執筆していたとは言え、彼の活動の中心は同人誌であった。彼の死後、お姉さんの五味洋子さんによって編まれた『富沢雅彦追悼集』がある。追悼集と言っても、その四分の三は富沢の作品集であり、その総量は四百字詰めで一千枚をゆうに超える。そのほとんどが、二百部そこそこの同人誌(ファンジン)に発表された。富沢雅彦はなによりも同人誌ライターでありエディターだった。では、同人誌ライターとしての生き死にを選ぶとはいかなることなのか。その意味を現在入手可能な富沢の仕事である『美少女症候群』を手がかりに考えてみたい。

「美少女症候群」
(フュージョン・プロダクツ刊)

『美少女症候群』は、コミックマーケット——普通コミケットあるいはコミケと略されるマンガ、アニメ、特撮などのファンジン即売会に出品されたロリコンと通称される作品のアンソロジーだ。コミケ出品作品のアンソロジーとしては、主催者代表の米沢嘉博氏編集による『コミケット・グラフィティ』もある。こちらが作品性の高い創作マンガ中心に行儀よく編集されているのに対して、『美少女症候群』はアニメ・キャラのエロ・パロディを中心に、内輪受けのギャグやメカへ向かうフェチシズムや耽美嗜好や少女趣味やらなにやら、己の自閉的欲望の限りない自己増殖の産物で溢れている。これはいわば、コミケの本音の部分をすくいとろうとしたアンソロジーなのだ。

『美少女症候群』一巻の末尾には、「世紀末美少女症候群伝説」と題された富沢による解説がつけられている。そこで彼は、ロリコンに代表されるコミケ文化を、「生まれたときからマンガとアニメに囲まれて育ち、イメージの繭の中から一歩も出る必要を認

めず成長した世代」からの〃現実〃に対する異議申し立てと捉えている。

ここで、〃現実〃と富沢が呼ぶ世界を〃空想〃や〃夢〃の反対物と捉えては誤解を招く。

「三次元の現実はつねにこの社会内でのアイデンティティを確立せよ、〃現実〃の生活や家庭や出世、〃現実〃の女との恋愛やセックスに欲望を持て、それによって社会に帰属せよと迫る。ぼくらはどうしてもそれに対する齟齬感を抱かずにはいられなかった」

富沢の言う〃現実〃とは、社会的に公認されている価値体系のことであった。したがって、「異議申し立て」も観念的な空想への逃避などではなく、きわめて具体的姿をとる。

「筆者自身に関しても、あるときタワムレに髪染めちゃおーかしら、ファッションもロンドンっぽくキメちゃおうかしら、なんて思ってみたりして、そこですぐに気づいたことには、しかしそうしたならば行動もファッションに規制されて従来の生活――書店で喜々として『コミックボンボン』を立ち読みすること、電車の中でプロレス新聞を拡げること、外食は牛丼と立ち食いそばの類しか食べないこと、等々が非常に困難になってしまうであろう、と。服装と行動をキメることによる〃明るい青春〃とどちらかを選べと言われたら、それは答えるまでもないことで――」

富沢はマンガ、アニメ少年たちの「無頓着な服装、むさくるしい七三分けの長髪」を、積極的に選択した「無意識の自己表明」として肯定しようとしていた。

近代批判にまで高められた「おたく」擁護論

「学校や会社」も「メジャー文化」も、「他人を蹴落とし、優位に立つことを強いる競争原理」に貫かれている。「恋愛すらもその中では、いかに他人より先に他人よりいい女をモノにするかのパン食い競争の如きものになっている」と彼は断じる。そして彼には、「七〇年代末に一斉にある種の男の子たちがロリコンとしての自己主張を始めたということは、その背後に〃社会変革の意志〃の存在が感じられた」。

〃社会変革の意志〃は橋本治の『青空人生相談所』(ちくま文庫)からの引用である。七〇年代末の少女マンガの新しい波に、〃社会変革の意志〃を読んだ橋本の『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ』は、どうやら富沢雅彦のバイブルだったらしい。アニメや特撮を語るときの富沢の文体には、この時期の橋本治の影響が濃厚に見られる。そして橋本治も富沢雅彦もその思想の理論的背景とした仮説に、岸田秀の唯幻論があった。富沢は自らを岸田秀のミーハー的ファンと呼んでいる。あらゆる正義も、性をめぐる正常、異常の規範も、皆、本能が壊れた動物、人間が社会秩序維持のために信じている共同幻想にすぎないとするこの仮説は、現在と別の共同幻想による社会も可能であるという〃社会変革〃への夢を育んだ。

大人たちの正義が空洞化したとき、とも

かく「好きなものは好きだ」というところから、自分たちの文化を肯定してゆこう、というヤング・サブ・カルチャーの反乱が八〇年前後にあった。橋本治はその代表的オピニオン・リーダーだったし、岸田秀や栗本慎一郎も同じ文脈で読まれていた。だが、多くは自嘲しあるいは自分だけは違うというかたちで当事者であることから逃れようとする者が多かったロリコン同人誌を、こうした理論武装で肯定したのは富沢雅彦ひとりだったろう。自らがいわゆる「おたく」であることを否定せずに、そこに積極的意義を見いだしてゆこうという決意を、『美少女症候群4』――富沢の死の直後に発行された――の後記の末尾の次の引用に見ることができる。

富沢が全精力を注ぎ込んだ同人誌『ＰＵＦＦ』

「まがいものでもウソっぱちでも、そこにはそういうものを書かざるをえなかったわたしたちがいるのよ」――清原なつの「俺たちは青春じゃない」。

富沢雅彦にとって、現実――権威化された共同幻想体系との闘いはとうの昔から始まっていた。ロリコン同人誌から話を始めてしまったが、それは早すぎた晩年の仕事。高校時代からファン活動に参加した富沢の本来のレパートリーは、ロリコンでもアニメでもなく、まず怪獣映画、特撮番組、ＳＦだった。

「好きなものを好き」というカクメイ

八〇年サブ・カルチャー反乱（橋本治は八〇年安保と呼ぶ）より七年前、最初の怪獣映画のファン・グループ「宙」が発足。ファンジン『ＰＵＦＦ』が発行される。『ＳＦマガジン』の投稿欄に載った怪獣映画見直しを叫ぶ一投書がきっかけだった。これらファングループの後押しで『ＯＵＴ』『宇

「ノラ」創刊号の「怪獣倶楽部」紹介記事より。
全列左から中島紳介、西脇博光、竹内博、富沢雅彦。

宙船』といった専門誌ができるのはこの数年後。初期のファンはこうして集まったのだ。この発足当時のメンバーからは、八〇年前後までに多くのプロがデビューしている。この分野の研究・評論の第一人者である竹内博、池田憲章、中島紳介といった人たちである。富沢雅彦もまた発足メンバーであり、七五年、『ＰＵＦＦ』六号から中島紳介とともに編集の中心となってゆく。

「怪獣ファンは～すべきである、とか第二次ブーム作品は第一次より低級、怪獣番組は怪人番組より高級、アニメなんて見ないのが本来の怪獣ファン、『ゴジラ』やウルトラに勝るものは存在しない、ｅｔｃ、ｅｔｃのドグマや、後世に残る価値がある、大人の鑑賞にも耐えうる、ｅｔｃの権威づけとは、自分のミーハーとしての立場を拠り所にして戦わなければならない。（中略）さあカクメイを始めよう」

七九年四月の『ＰＵＦＦ』十七号の編集後記である。怪獣ファンとしての富沢雅彦の立場は、この一文に集約されている。『ＰＵＦＦ』とは、ピーター・ポール＆マリーのナンバーからとられた名だという。ＰＵＦＦという名の玩具のドラゴンが、持ち主の子どもが成長してしまったので遊んでもらえなくなって泣いている、という歌詞を怪獣映画を見直すファンジンのタイトルとしたそうだ。見事なネーミングである。

しかし、大人になって子ども時代の玩具を見つめ直す場合、ふたつの立場がある。①大人の価値体系の中に玩具を位置づける立場――すなわち、「後世に残る」「大人の鑑賞に耐えうる」「社会批判がある」「国際的評価に値する」……と、②大人の価値体系に対抗する価値を玩具とそれに夢中になっていた自分の感性から導き出す立場とのふたつだ。当時の怪獣ファンの間では、前者の方向が主流であったという。円谷プロを神聖視し、フィルモグラフィー作製や一般の映画評論ばりの演出論や特撮論を展開して、怪獣番組の市民権獲得を目指す方向である。そのなかで富沢雅彦の『ＰＵＦＦ』は、はっきりと後者の方向を打ち出したのだ。

当時の富沢が闘ったのは、そうした大人の価値体系だけではない。ファンの間でいつしかできあがってゆくドグマに対しても、絶えず揺さぶりをかけ続けた。怪獣に限ら

ず「おたく」やマニアの世界は、そのジャンルなら誰にも負けないという少年たちが集まるため、自分たちの好みをドグマチックに絶対化したり、ほかの分野の話題を不純として嫌う偏狭さがしばしば見られる。怪獣ファンがアニメを蔑視したなどもその例だ。だが、どこまでも「好きなものは好き」と言い続けようとする富沢は、そうした枠からどこまでも自由であろうとした。

そして、彼らマニアが軽蔑するミーハーの立場から固定観念やドグマに抑圧された者たち――自分にとってほんとうに大切な者たちを救おうとしたのである。

だが、大人の価値観にしろ、マニアの偏狭さにしろ、そこに自らの好みを突きつけることで説得力ある批判をすることはきわめて難しい。富沢雅彦に限ってそれができたのは、ひとえに彼の並外れた文章力ゆえである。彼には、自分の好みをロジックに構築し、レトリックに展開する稀な筆力があった。

ロジックの例で言えば、富沢はキングギドラが嫌いであった。三頭の龍という形態の圧倒的かっこよさで絶対的人気のあるこの怪獣を否定することはマニアの間では不可能に近い。だが、富沢にはできた。彼はギドラの形態的かっこよさをまず肯定する。そのうえで、ギドラはそれだけの怪獣にすぎぬと断ずるのだ。原水爆への怨念を秘めたゴジラ、文明への復讐を担うモスラ、古代生物であるラドン、侵略者としてのミステリアン。そうした主体性(!)がギドラにはない! 精緻な作品論、演出論とともに呈示されるこうした新しい価値観を、マニアたちは目から鱗が落ちる思いで読んだという。

レトリックについては、引用が難しい文章であるために説明は難しい。文体も橋本治調を基本としながら、椎名誠風ひねりを効かせたり、ボネガットやブローティガンを模したり、変幻自在。随所にSFや怪獣映画、アニメの名台詞のパロディが散りばめられ、サブタイトルや小見出しも内田善美や清原なつの、倉田江美のパロディと凝りに凝っている。「暇なときには少女雑誌の懸賞発表欄などを見て、キマった名前の女の子を捜していたりする」という富沢は、もともと過敏なまでの言語感覚に恵まれていたのだろう。小中学生の頃から作文などには絶妙な才能を発揮していたという。

ミーハーは思想たりうるか⁉

七〇年代末、中島紳介がプロ・デビューし、『PUFF』スタッフを降りたあと、『PUFF』は富沢雅彦の個人誌的性格を強くしてゆく。百八十頁はあるファンジンの四分の一、原稿用紙で百枚近くが富沢の文章だった。しかも、ある時期は、寄稿原稿も彼が清書していたと聞く。しかもその『PUFF』が、年に多くて三~四回は発行されるのだ。生活のすべてを打ち込まなければ、そんなことは不可能だ。富沢没後、『PUFF』の仲間が再録中心の追悼増刊『GRACE』を刊行したが、完成まで二年近くかかり、あらためて富沢のパワーに

驚嘆したという。

怪獣や特撮が若者のサブカルチャーとしての市民権を認められ始め、発足当時の同人たちが、皆プロ・デビューしてゆくなかで、富沢雅彦はホームグラウンドである『PUFF』を守る仕事を選んだ。プロとなる実力がなかったとは言えまい。たしかにそのレトリックは同人誌という場でこそ十全に発揮されるものではあった。しかし、『OUT』でのデビュー、「快傑ズバット」紹介にしても、「マジンガーZ」「闘将ダイモス」「UFOロボ・グレンダイザー」などのアニメ・レコードのライナー・ノートも、きわめて読みやすい文章である。納得がゆけば編集者と妥協する常識もあったという。口べたで打ち合わせや企画売り込みが苦手だったとも聞くが、商業誌での仕事はしているのであるし、それだけでプロ・デビューが不可能とはとても言えない。『PUFF』の仲間も富沢の商業誌への売り込みに援助を惜しまなかったという。では、なぜ?

やはり富沢雅彦はあえてファンライターに徹することを選んだとしか思えない。「ミーハーとしての立場を拠り所として戦う」こと、「好きだ」というそのことを膨大な論理とレトリックを駆使してあらゆる角度から言い尽くすこと。そして、大人の論理体系に拮抗できる言葉を織り上げること。そのためには、商業誌に書いてなどいられなかったのかもしれない。あるいは、プロのライターとなること自体、大人の価値観に属すると考えたのだろうか。彼は早逝の直前、内田善美ファンクラブをつくる準備をしていると語って編集者を呆れさせている。二十九歳にもなってファン・クラブ!? だが富沢にとっては、ファン活動がプロ活動よりも人生において価値が低いとする考え方自体が大人の秩序の側のものであったのだろう。ファン活動が男子一生の仕事となる人生を、彼は敢えて選択した。

アニメ雑誌『アニメック』という、富沢雅彦としては異例にメジャーな雑誌へのデビュー原稿で、「機動戦士ガンダム」生みの親として、アニメファンにとって神にも等しい富野悠由季監督を、高級志向の一部マニア受けを狙った作風でアニメ本来の「面白さ」「楽しさ」を高級さのために切り捨てており、先細りによる衰弱は当然、とこきおろしつつ、アニメマニアが子供向きと蔑視して見もしない「キン肉マン」の面白さを発掘して見せた。かつて『PUFF』で、円谷プロ絶対視に対して、仮面ライダー以下の東映怪人番組を擁護した富沢の、これは商業誌への挑発だったのかもしれない。シリアスな富野アニメよりも、宮崎駿の名作アニメよりも、歌舞伎メロドラマと言われた長浜忠夫のアニメを。社会派的モラルで識者にウケる樹村みのりよりも、内田善美や倉田江美を。派手なキングギドラよりもラドンやヘドラを。富沢雅彦はいつも定まった評価という名の権威に抑圧されている者たちの知られざる魅力を、言葉を与えることによって救う魔法使いだった。あらゆる権威のガードを解いて、ミーハー的感動を救い出してみせる騎士だった。

だが富沢の評論は、たんなる判官びいきではない。彼の筆鋒は、常に現実社会の抑圧的な良識――男性中心の現実的価値体系を狙い続けていた。少女と遊ぶひとときにのみ安らぎを得る社会不適応の青年の悲劇「シベールの日曜日」。日本的世間に追い詰められてゆくかよわいインテリと美女のために妖怪白雪姫が復讐する「夜叉ケ池」。富沢が深く愛した映画である。ゴジラに始まる怪獣たちも、同じように現実の犠牲者だった。ロックではクイーンのファン。社会性や前衛性を誇るプログレに対して、ここでもミーハーを擁護する側に立つ。

右＝『マグネロボ　ガ・キーン』のヒロイン花月舞
左＝『ＵＦＯロボ・グレンダイザー』のマリア
Ⓒ東映動画

フェミニズム思想家としての富沢雅彦

富沢はいわゆるロリコンではなかった。だが、現実の女性よりも二次元のアニメの少女にひたむきな思い入れを捧げてはいた。だが、その好みは、男性アニメ・ファン一般からみて、かなり特異だったかもしれない。男性の保護欲をそそるたとえば宮崎駿が描くラナやクラリスとは対極に位置する、生意気でおてんばでわがままで男勝りの勝ち気な「UFOロボ・グレンダイザ」登場美少女マリア、「マグネロボ　ガ・キーン」のヒロインで研究室が似合うクールで知的な美少女科学者花月舞。どちらも戦うヒー

ローに救い出されるよりは自ら戦闘する設定が似合う女の子であった。おきゃんでボーイッシュな彼女らはむしろ女の子のアニメファンに人気のあったキャラクターなのである。

岸田秀・橋本治派の富沢にとって、性欲は本能ではない。それが社会秩序に規定されたフェティシズムでしかない以上、オルターナティヴな性秩序も可能であるはずだ。『美少女症候群』のロリコン少年擁護も、じつはこうした脱男権社会（フェミニズム）の視点に支えられていた。

しかし抑圧的な通常の恋愛をあえて拒否し、別の秩序を選んだ少年たち――とロリコンを賛美した富沢はおそらく誤っていたと思う。ロリコンマンガの男女関係は男性の支配欲が全面肯定されるポルノグラフィとなんら変わらず、通常の恋愛以上に男性自我を肥大させている。だが、富沢雅彦自身はそうしたロリコンではない。「ホンキで女の子に生まれたかったと思っている」と書く富沢は、マリアや舞を自分の恋人として抱き支配したいと憧れたのではない。「マリアちゃんは女性化願望のある男の子がかくありたいと思う理想の存在なのである」。男らしい男性と男のための女らしさを身につけた女性が営む社会を抑圧的と考える富沢にとっては、女の子がいったんマリアや舞のように中性美少女化し、男の子もそれに応じるかたちで中性化することが、彼にとっての「社会変革」の前提だった。

現在、コミケットではロリコンは影が薄

マリアちゃん論の一環としての吉田理保子論

下を見ればクララ、上を見れば[illegible]（何ちゅー名前じゃ）

by 富沢雅彦

プロローグ

おぬしらは'79年の夏期に放映されたアンネタンポンOBのCFを知っておるか。まっ、本稿の主旨に基いて、言うまでもなくその声の出演を吉田理保子さんがやっておられるのですが、まずはその内容について、ね。

……おフロ場で（推定）中学一年生の女の子が、モノローグでお喋りしながら衣服を脱いでいる。画面には手足の先と、脱衣カゴに無造作に落とされる着衣しか見えない。

「ママー、お先に入るわねー」

画面の外からママの声、

「リホコ～、今日は大丈夫の日なの?!」

「大丈夫！ あン、ママったら古いんだから」

バスルームの戸を開けて、元気よく中へ消えてゆく足。

N「アンネタンポンOBならあの日でも安心です」

――とまあ、こーゆーものなのですけれど、これが実に、メグちゃんを実写でやるとこーなる!!というムードだったのです。（なぜここでマリアちゃんと言わないかというと、彼女は母親を持たないからである――あァ、メカアニメでも生活感出すためにこーいうのやればいいんだよな。レスト・ルームで待機する4人に緊急「△△地区にベガ獣出現、グレンダイザー・チーム発進せよ！」「行こうぜマリアちゃん、出撃だ!!」威いよく飛び出す甲児、「ダメよあたし今日あの日だもん」甲児君バランスを崩してモロにひっくりコケる、とかし。）まそれはともかく、メグちゃん・マリアちゃんのファンでこのCFを知らない人は可哀想としか言いようがない。

そのようにして、ぼくは'79年の夏をアンネタンポンのCFと共に過ごしたのだ、た――モーニングショーのスポットで毎朝見てたんだから！

アニメファンの女の子よみんな……

カットは大きな吊りの猫型美女のバリエーションであります

「PUFF」で展開したマリアの声優、吉田理保子論

くなり、「キャプテン翼」や「聖闘士星矢」の「やおい」と呼ばれるホモパロディに熱中する少女たちが主流となっている。なぜ、ホモパロディなのか？　少年ヒーローたちに勝手に男役女役を割り振って絡みを演じさせながら、彼女らは少女漫画風擬似恋愛を楽しんでいる。ある場合は男役の少年には理想の男性を、女役の少年には理想の「自分」を幻視し、また、ある場合には、男役の少年に感情移入して「攻め」る側を楽しんだりしながら。支配被支配としての恋愛を知らない、あるいは知りたくない彼女らは、一般的な男と女の関係に還元されない理想の恋愛を、ホモという置き換えを踏むことでシミュレイトしている。そこにも保護被保護の関係は残るのだが、富沢雅彦はマリアになりたかったが、マリアになった自分の相手までは明らかにしていない。あるいはマリアの生命感に励まされて生きる、女性化した男になりたかったのだろうか。

現実の価値体系と、〝感性〟で闘う

アニメ「聖闘士星矢」の作画監督は、奇しくも富沢雅彦が熱く支持した荒木伸吾である。マリアも荒木のデザインだ。たとえば彼の手になる女々しい美少年、少女たちのパロディで人気ナンバー・ワンの女役、アンドロメダの瞬くんを、そして「やおい」少女たちを富沢が生きていたらどう論じるであろうか？

富沢が逝く年のコミケでは、すでに「キャプテン翼」ブームは高揚しつつあった。そのあたりに励まされたのか、『美少女症候群4』後記の富沢はどこか安らかで明るい。

「一九八六年の夏、ぼくらは自分たちで作った同人誌をもってコミケに参加した。翼コーナーやロリコンコーナーは地獄と化している、とのうわさが風のように伝わってくる。コスプレの人々が回遊魚のように徘徊し、彼らはもとめられれば写真撮影に応じていた。完売したサークルの歓声や三本じめが潮騒のように耳に入ってくる。それは不思議に充実した喧騒と静けさに満ちた、日曜日の午後のことだった」『ＰＵＦＦ』以来、現実の権威に拮抗する拠点は富沢自身の感性だった。だが、『美少女症候群』以降、それは「おたく」の世代の感性へと拡大しつつあったようだ。同時に富沢の文章も彼個人の思い入れに奉仕するのみならず、世代の感性を代弁する思想表明へと拡がりつつあった。晩年の彼と深く交流したフリー・エディターは、その頃の富沢が新たな使命感を持って『ＰＵＦＦ』を続ける決意でいたようだと語る。単行本『世紀末ヒーロー列伝』で、星飛雄馬や仮面ライダーから北斗のケンシロウに至る世代の精神史を綴じる企画も端緒につきかけていた。商業誌への執筆が増え、高崎の実家から池袋のアパートへと上京したのは、八五年の春。突然の死が富沢雅彦に訪れたのは、そんな矢先であった。

静かすぎる人の早すぎた死

「戦闘的で楽しいあのパワフルな文章からは想像もつかない物静かな人」。生前の富沢雅彦を知る人は口を揃えてそう語る。怪獣やSFの話題で知識が共通する友人とは多少談笑もするが、普通はにこにこと静かに笑みながら黙って座っている。人の会話にけっして割り込もうとはしない。かぼそい声で何かしゃべりかけても、誰かが口を開くとすっと引っ込んでしまう。でも、ある怪獣の名を誰も思い出せないで会話が途切れると、ボソッと正解が出てくる。稀に名場面のものマネをやれば、絶品の芸をみせるが、けっして自分からウケを狙いはしない。文章で富沢を知った若い『PUFF』読者の間で、そんな富沢はいつか伝説的存在となっていた。

　富沢の死は彼をよく知る人たちにとってもあまりに突然だった。もともと物静かな彼ゆえに、からだが不調かどうか、はたからはわかりにくかったという。だが、死の年の夏、コミックボックス誌の連載コラムで抗不安剤を常用しているとの身辺記が書かれ、知人たちを心配させた。上京後の生活は楽ではなかったろう。マニア雑誌の稿料で生活するには、相当の量を書かねばならない。それは即、同人誌活動を切り詰めねばならないことを意味する。そのジレンマゆえか、不眠と不安に悩まされていたという。

豊島園での富沢雅彦

　SFや特撮のマニアたちは水のごとき淡き交友を好む。グループ例会などでも、昼の喫茶店でおしゃべりする程度で、酒を飲み明かすことなどほとんどない場合も珍しくない。とくに仲間の私生活を知ろうともせず、マニアとしての交流のみしかない場合もある。ましてや富沢はめったにしゃべらない寡黙の人だった。彼が立教大学の心理学科に現役で合格し、三年で中退していること、その後は高崎のデパートでレコードショップのパート店員をしていたことすら知っている仲間はいなかった。

　そんな人間関係しかもたなかった富沢は、いつしか困窮時にSOSの電話すらかけられない孤独をあたりまえに生きるようになっていたのかもしれない。

　死の前年、女の子たちとジェットコースターに乗って遊んだよ、という手紙が、『PUFF』の古き仲間たちに届いた。皆、「あの富沢さんが——」と驚いたそうだ。それは富沢の死を知った者にわずかに救いを感じ

させる明るいエピソードだった。内田善美ファンクラブの縁で知りあった同人誌『おとめＢｏｏｋ』のメンバーと豊島園を訪れたときのことである。富沢を知る女性が皆、彼に深い敬愛を寄せている様子は追悼集からもうかがえる。『おとめＢｏｏｋ』の仲間とビデオを見る集いで、彼は自分が編集したアニメ名場面集を披露した。クイーンをＢＧＭに用いた編集の巧みさと美しさに、女性たちは思わず声を上げたそうだ。だが、自己ＰＲなどけっしてしない彼の魅力が知られる機会はまずなかった。電話をしても話かけても、かぼそい女性的な声で「ええ」「はい」といった返事が返ってくるだけ。先の豊島園でも、実は遠慮してジェットコースターには乗らず、荷物番をして地上で待っていたという。

富沢が好きだった唯一のアイドル、ひとり日本でけなげに頑張る香港少女だった頃のアグネスチャンが「夢をください」で歌っている。♫傘を誰かに貸して／自分が濡れる人なんです／お人よしでじれったいあなた

「日常」をおいてきぼりにする「自由」

「日常生活のことなんて語らないし、自分でもそんなことどうでもいいと思っていたんじゃないか」。彼を知る人は言う。コミックボックスのコラムには、冷蔵庫がないので魚の缶詰に蛆が湧き、ホラー映画みたいで楽しい体験だったという一節がある。

「個人的な感覚を説明するならば、（中略）――この世界には何の意味もないのであるという思いが根底にあって、その中で人間が生きることは是か非か、そのメーターが胸の中にあって事に応じてそのメーターが左右に揺れ動く」。慢性鼻炎でいつも鼻声だった富沢。激しい偏食で肉類が食べられなかった富沢。私の似た経験に照らして言えば、呼吸にも食事にも苛立ちが伴うこのタイプの人は、往々にして人生に対するニヒリズムを早くから身につけてしまうのだ。

しかし、現実に否を突きつける人間精神も、彼がどうでもよいとした三次元界に存在する肉体と日常生活に支えられてこそ活動できるのだ。かかあ天下の上州の長男らしくおっとりと育てられたらしい富沢はふとこのバランスを忘れてしまったのかもしれない。富沢の文才によりさんざんコケにされてきた〝現実〟、疾駆する彼の精神に置いてきぼりをくらった〝肉体〟と〝日常生活〟は、ここぞとばかり逆襲に出たのだろう。抑圧的社会への違和感を、「異議申し立て」として屹立させ〝現実〟と対峙させるという難行を富沢の才能は可能とした。だが「異議申し立て」を社会変革へと展開させるには、さらに現実をだましなだめて巻き込んでゆくたくましさが要求されるのである。ファッションをキメつつ、しかも「おたく」を続けるスタイルを自らデザインしてゆかねばならないのだ。死者に鞭打って言うのではない。これこそは転形期の凄まじい姿そのもののような死を自ら選択して見せてくれた富沢雅彦が、私たちに遺した宿題ではないだろうか？（文中敬称略）

アイドリアン日記

24時間フル回転のマニアック・ライフ

T氏は、都内の有名私立大学の工学部を卒業し、電機関係の会社でLSIの設計に携わる二十九歳の技術者。イベント参加、ビデオ録り、ミニコミ誌への投稿とオールラウンド、いわばアイドルマニアの王道を歩む。「アイドルの存在そのものがたまらない」という、アイドル歴十年選手。

七月某日(土) 休みなので10時過ぎ起床。本日は世田谷区民会館で吉田真理子のイベントがある日。なぜか、世田谷区選挙管理委員会というお堅いところの主催。なんでも世田谷区じゅうに彼女の選挙告知ポスターが貼ってあるそうな、うらやましい……。

朝食後、『ザ・テレビジョン』と『読売新聞』の番組欄を見ながらビデオのタイマー予約。まず、「鶴ちゃんのプッツン5」(ときどきアイドルが出てる)、それから「カトちゃんケンちゃんごきげんテレビ」の歌のゲストをチェック。一応、その他の番組にも目を通しておく。

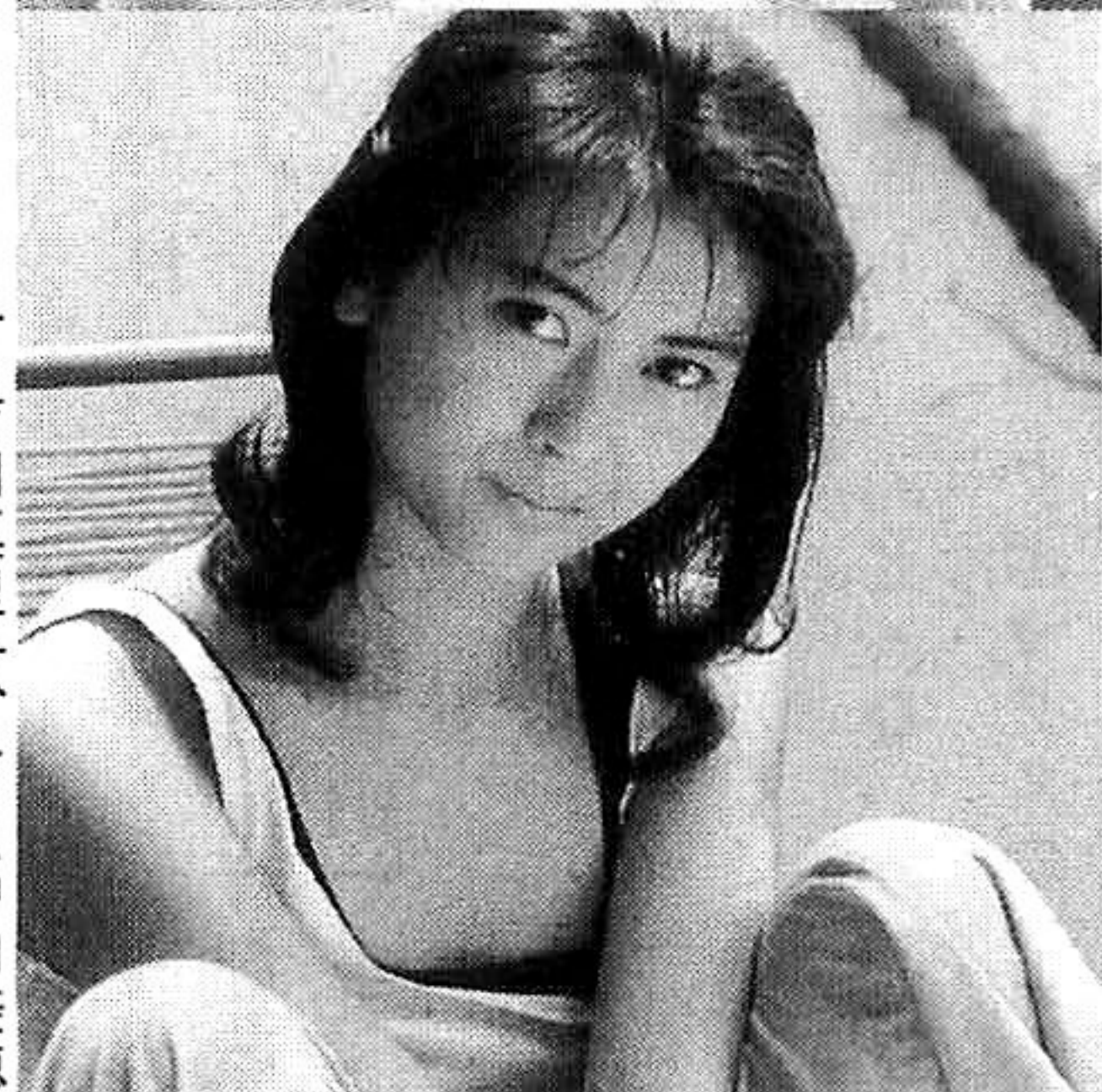
11時00分 家を出る前にチケットセゾンにTEL。中山美穂の渋谷公会堂でのコンサート9/23・24の昼の部を予約。それというのも両日ともウィンクのコンサートが夜あるから。

11時40分 お茶の水着。アイドルのミニコミがたくさん置いてある我々アイドルファンの強い味方(?)、書泉ブックマートで本日発売の『オリコン・ウィークリー』とアイドル満載の『TYO』『ORE』、『Momoco』を購入。

12時から13時1分 公衆電話で「ホットスタッフ(プロモーター)」に会員優先予約TEL。中森明菜の東京厚生年金会館でのコンサート(10/25)を予約。しかし、何度ダイヤルしてもお話し中のため、電話BOXで一時間立ちっぱなしはツライ。その後、神保町駅より京王多摩センター行きで下高井戸へ。そこで世田谷線に乗り換え。この電車を見た瞬間、目が点になってしまった。二両編成でボロい、おまけによく揺れる。救いは一律百十円であることか?

13時55分 松陰神社着、徒歩五分、世田谷区民会館に着く。地べたに腰掛け列に並ぶ。

14時35分 座席券配られる。ここでUターン。新宿経由、池袋・西武百貨店プレイガイドで先ほど予約した中山美穂のチケットを受け取る(ゲッ! 二日とも二階席、ガックシ)。続いてサンシャインシティアルパ新星堂で予約してあった吉田真理子のLDを受け取り、文芸座しねぶてぃっく(文芸座という映画館の横にある前売りチケット、映画関係の書籍類、パ

上=吉田真里子、下=中山美穂

右＝有森也実、左上＝田村英里子、左下＝小川範子

ンフレットの売店）で映画「星空のむこうの国」の前売りを三枚購入のはしご。これは有森也実の〃実質的〃初主演の映画。文芸座ル・ピリエという映画館とそのほか一部の映画館でのみ上映された〃16ミリ〃。とにかく、この映画での彼女はすばらしいの一言に尽きる。

ここでまたUターン。

17時20分　世田谷区民会館に戻る。会場に入ると知った顔があっちにも、こっちにも……。ここで場内アナウンスがある。「お配りしたチラシで紙飛行機を折って下さい。そして、後半のある曲で親衛隊の合図とともにそれを投げて下さい」の指示に、みんな「おいおい、ホントかよ」と受ける。

18時00過ぎ　選管のお偉いさんの挨拶のあとオープニング。

内容的にはカラオケをバックに、かと思ったら生バンド付きだし、一時間ものステージがタダということでおいしかったと思う。ちなみに紙飛行機はみんなのタイミングが合わず企画倒れ。出口で私の所属する同人誌『A』(当初は二十五歳以上の社会人対象のアイドル・ミニコミ、ちなみに現在は二十歳以上なら可）の仲間数名と落ち合い、そのうちのひとりN氏宅へ。

N氏宅で座談会。後からやって来た人も含め八人が六畳間に集う。愛知県・豊田市から上京してきた〃発刊人〃F氏を中心に、「会員を増やすにあたって制限はどうするか？　拡大するにはどうしたらよいか？」を話し合った。ちなみにBGビデオはN氏とF氏がはまっている三人組女性アイドルグループ、レモンエンジェルのライブLD。F氏とN氏は彼女らのライブやイベントでの独特のノリについて熱く語ってくれたが、やはりこの目で確認してみなくては……。

その後、三人は翌日仕事などがあるため先に帰る。残った五人で、深夜までいつものアイドル談義で盛り上がるが、私は疲れのため一足先に寝る。

翌朝、私ともうひとりは帰宅。N、F両氏ともうひとりは福島県の郡山で行なわれるレモンエンジェルのイベントを見に出かける。まったく、この人たちには頭が下がりますよ。

某月某日　5時前には周りをかたづけ、トイレも済ませておく。5時と同時に仕事を終え急いで着替えて退社。今日は今年の新人、田村英里子のファンクラブ結成式が東京湾上で行なわれる（さるびあ丸貸切りで）。

時間を気にしながら、急いで浜松町へ。駅を降りたはいいが、もらった案内図ではよくわからず、

人通りも少なくオロオロしてたら少し離れた所で紙切れを持ちキョロキョロしている若い男がいたので、「あのー、もしかして君も〝あれ〟ですか?」と聞いたら、「あっ、君も!」ということになり、ふたりで竹芝桟橋へ。着くとすでに人がいっぱい。私の整理番号は313番（参加者総数三百三十名弱か? オリコン発表は五百名となっているが）。歌はデッキで歌うとのこと、場所が狭いので半分ずつ二組に分けられた。私は後ろの組になったので、先ほどの人と同じブロックの三人で「まったく、間がもちませんよ」とぐちをこぼしたりして暇を持て余していた。ちなみにほかのふたりとも社会人だそうな。

やっと、我々の番になり幸い出口に近いブロックなので急いでデッキへ。前から二列目の真ん中にしゃがんでいたが、これは失敗だった。近すぎて仰ぎ見るかっこうになってしまったうえに足が痛くて痛くて……。結局、二曲だけでがっかり。

その後、ブロック別ジャンケン大会・抽選会があったが三人とも全滅。軽食をとりブラブラしてたら同人誌のM氏とやっと遭遇。時間を持て余したまま桟橋に到着。景品を受け取り下船したところで英里子ちゃんと念願（初めて）の握手。

22時頃、帰宅。ビデオ録りしてあった「ザ・ベストテン」と「とんねるずのみなさんのおかげです」を急いでチェック。

某月某日 今日は小川範子の中野サンプラザでのコンサート・昼の部（夜の部を取り損なったため）。前日に引き続き午後、半日有給休暇をもらう。休暇願いの理由の欄は「私用」ではダメ。具体的な理由を書かなくてはならないので、理由を「適当」にみつくろわなければならず頭をひねる。結局、「旅行の準備」と「旅行」（翌日、土曜日で隔週休みの日なので二日半旅行ということにする）。周りの人間には「旅行とはいっても愛知県・豊田市の友達の家へ遊びに行くだけですから、観光じゃないし、今、金欠なのでお土産はありませんよ」と前ふりをしておく。休暇願いを部長に提出するときは緊張。「旅行の準備?」と聞かれたときは思わず冷汗を流しながら「ええ、まぁ、いろいろとありまして……」と顔がひきつる。まったく「私用」でいいじゃねぇかよ! 理由なんか聞くなっちゅうじゃ。ただでさえよそに比べて有給休暇が少ないんだから（今年現在、私は十日、少ねぇ!）。

前日、予定では日比谷野音で「パラダイスGOGO」（フジTV系）のイベントでCoCo（女の子五人組）の握手会（13時）、南野陽子の中野サンプラザでのコンサート（15時）、ウィンクの渋谷公会堂でのコンサート（18時30分）とかけ持ちしようとしたが夏バテがひどく（連日のコンサートによるものか?）、時間的にもキツイので日比谷野音の方は諦める。南野陽子は二日前と先月、千葉でも観ていて三回目、ほんとは三日連チャンの予定だったが、ウィンクが後から重なってきてしまったので昨日の分は知り合いに売却。彼女のコンサートは凄い盛り上がりというものではないが、アイドルの正道という感じでそれなりに好感が持てる。ウィンクのコンサートでは我々、同人誌のメンバー四人十一人で最前列右よりに並んで観ていたが客のノリが悪

南野陽子（前頁、中山、有森ともに写真提供マルベル堂）

いのにはがっかり。

コンサート後、よく寄る喫茶店でアイドルに関する話で過ごす。先週五本、今週六本と立て続けの夏のコンサート・ラッシュもこれで終わりだ。連日のコンサートもしんどいが、毎日、定時退社するのも後ろめたくて……。

某月某日　たまたま定時で帰れたので「輝け！紅白対抗トップテン」という特番を見ていると、夏、プールサイドでいろんな歌手（売れている人もそうでない人も）が水着姿で歌ってる昔のビデオが流れた。前々から思っていたことだが、なぜ、最近のアイドルは水着姿ぐらい見せてくれないんだろう。八〇年代（特に後半）のアイドルの流れとして、デビューしたての頃少しだけ水着姿を披露し、売れてきたらもう見せないというのが当たり前になっている。いつからてめえらそんなに偉くなったんだよ！

腹をたてながらも好きなアイドルをちゃんとチェックしている自分が情けない（だって好きなんだもん）。

そうそう、買ったばかりのアイドル雑誌にまだほとんど目を通していなかった。スケジュール情報を見てたら、そろそろ学園祭の予定が入っている人もいる。

「ふう、また忙しくなるぜ……」と呟きながら心は期待にふくらむ。早くほかのスケジュールも決まらないかな。二つ重なってしまってどっちを選ぼうか思案したり、一日に二本立て、三本立てなんて無理な予定を組んだりしてスケジュール表が埋まっていくのが楽しいんだよね。

某月某日　今日は「さよならザ・ベストテン」の放送日。もちろんビデオもまわしているが最後ぐらいは生で見なくては。いちおう前日、残業して今日定時で帰れる見通しを立てておいたので7時前には帰宅。

私はできるかぎりこの番組を見続けてきたが、最近は昔のようにワクワクするということもなくほとんど義務感で見ている。それはアイドルの出られる歌番組がひとつでも減ってほしくないという切実な気持ちからなのだが、最近のアイドルはそんなファンの気持ちも知らずに平気で「今日はオフで欠席です」とぬかしやがる（とくに売れてる女性アイドル）。その点、別に好きというわけではないが、光ＧＥＮＪＩは偉いと思う

それはさておき、いろいろ懐かしいＶＴＲが流れて、〃ヒット曲とは好きであろうとなかろうと、みんなの心に残っているもんなんだなぁ〃と実感した。

少々、がっかりしたりカチンとくるところもあったが、〃この手〃のものはあまり期待するとがっかりするものなので覚悟してました。

当日、会場には懐かしい顔ぶれもあり感慨ひとしおです。まあ、来てほしかった人、来てしかるべき人が来てなかったのは残念だったが。

歴代司会者のなかでは、やはり久米宏は偉大だった。その彼が歴代出場拒否者のお詫びのところで「心からお詫びしたことはいちどもありませんでした」と言ったときは腹を抱えて大笑いしてしまった。〃さすが久米宏！〃と思った。

某月某日　明後日は同人誌の原稿締切、ということは今日じゅうに仕上げなくてはならない。まったく、ぎりぎりにならないと始められない自分が情けない。12時をまわってからワープロを打ち始める。ネタは日頃、思いついたこと、最近、見聞きしたことをなんとかかんとかまとめていくのだが、眠い目をこすりながらなのでうまくまとまらないし、誤字脱字が多い。こうした次の日はもう眠いのなんの、仕事中なんども顔を洗いに行くことになる。仕事と趣味はちゃんと区別しなくちゃと思いながら仕事中アイドルのことを考えてたり、抜け出してコンサートの電話予約をしている自分を「バッカだなぁ～」とつくづく思う。

そろそろ三十に手が届こうとしているのに、こんなことしている私を家族も諦めきっています、はい。

僕と右翼とプロレスおたく

右翼に極左にインチキ宗教家……。
プロレスという絆に結ばれた
フリークたちの〝素晴らしき日曜日〟！

岩上安身 ルポライター

妖しい熱を帯びた、ただならない気配が、満員の後楽園ホールにどろんとよどんでいる。十月十日日曜日。午前十一時から始まったジャパン女子プロレスの試合会場に足を運んだファンは、男ばかり約三千人。女子プロレスの会場にはつきもののローティーンのギャルの姿はほとんどない。

見るからに〈おたく〉風の少年がいる。昼間から酒をあおって赤ら顔のオッサンがいる。いかにも屈折に屈折を繰り返して、マイナーの袋小路に迷いこんでしまったといった顔つきのプロレス者もいる。ひとくせもふたくせもありそうな面子ばかりだ。会場がふだんよりも薄暗く感じられるが、それは照明の加減のためではおそらくない。ホールを埋め尽くしている男たちの、不気味なまでに地味な装いのせいだ。『メンズノンノ』を定期購読していそうな、オシャレな若者の姿はほとんど見あたらない。ここは、消費社会のモードの外に存在する〝異界〟なのだ。

Bも、その異形の者たちの群れの一人だった。

女子プロレスを愛するB

「全日本女子は、女の子の世界なの。会場に来てるのは十代の女の子ばっかりでしょ。そんなとこへ、俺なんかちょっと行きにくいじゃない。その点、ジャパン（女子プロレス）はおっさんの世界なの。今やアイドル並みの人気のキューティー鈴木が、リング上でいじめられて『ああ〜っ』なんて声出して苦悶する表情なんかこたえらんないもの。それに、いじめ役の尾崎魔弓がこれまたえれえいい女で、おっさんにやたら人気があるんだよね。ロングヘアのワンレングスで、腰とかウエストとか、こんなにキュッと細くてさ、ちょっとお水っぽくて銀座のホステスみたいなカンジで、オヤジさんたちが喜ぶんだ。もう会場は見てのとおり、男ばっかり。だから面白いの。これこそキワモノのきわみでしょ。そのへんの中学生より弱そうな女の子と、神取しのぶとかデビル雅美とか、男でも勝てそうもないようなのとかが、一緒にリングに上がってるんだからね。ワクワクしちゃうじゃない。ここへ来るファンって、かなりの通か、相当アブない奴だと思うよ」

Bがビデオを買ったのは、今から七年ほど前。それ以降プロレスのテレビ放送は、団体を問わずほとんど毎週欠かさず録画している。二時間収録のテープを三倍録りにして、CMを詰めて入れるので、一巻あたり七週間分は入る。そんなテープを四十巻以上も所有している。『ゴング』など、定期購読しているプロレス専門誌も十数年分保存していて、これも一千冊は優に超えている。機会があればプロレス会場へ必ず足を運ぶし、プロレスファンのためのミニコミ誌の編集もしている。

今年三十歳を迎えてなお、プロレスへの情熱の衰えを知らないBは、やはり、れっきとした〈プロレスおたく〉である、と私は思っている。だが本人は〈おたく〉と呼ばれることに、頑として抗う。

ジャパン女子プロレスのキューティ鈴木（写真提供はすべて「ゴング」編集部）▶

「〈おたく〉じゃないですよ。俺よりもっとすごい〈おたく〉っているもん」
　えてして〈おたく族〉は、本質的には何の差がなくても、〈おたく〉の濃度の差によって彼我を区別立てしたがるものである。たしかにBは、外観は巷間言われるところの〈おたく〉イメージには相当しない。色白ではないし、メガネをかけてもいない。非力ではないし、体格も貧弱ではない。寡黙ではないし、不潔で曖昧な長髪でもない。
　Bは身長一七五センチ、体重は一一〇キロを超える偉丈夫である。やや肥満気味で、大学の体育会の柔道部で鍛えた体は屈強である。短く刈りこんだパンチパーマと口ヒゲがまた、この丸々とした巨体によく似合ってもいる。
　彼は実は、〈プロレスおたく〉であるだけでなく、れっきとした行動右翼の活動家でもあるのだ。全国的組織の某右翼団体に所属する中堅幹部なのである。

右翼団体の幹部として

「このあいだ悔しくってねえ。鳥取へ日教組大会粉砕のために出かけたんですけど、ビデオのタイマーをセットするのを忘れて、ジャイアント馬場の現役三十周年記念試合の、対ブッチャー戦を録画できなかったんですよ。悔しいなあ。もってませんか？　テープ」
　彼と知り合ったのは、ごく最近のことである。〈右翼の現在〉について書いた私の文章を読んで、版元の編集部に彼が電話をかけてきたのが、知り合うそもそものきっかけだった。電話の用件は、あいにくと著者への激励ではなく、激烈な抗議だった。電話を受け、彼と会った編集担当者によれば、Bの剣幕は大変なものだったらしい。紆余曲折の末、ともかく私は彼と話し合うために、新宿にある事務所まで出かけた。
　紙数の都合で、やりとりの詳細は割愛するが、彼は私の文章に書かれた事実を大筋において認めながらも、怒気をはらんだ表情で、このままでは感情的にはおさまりがつかない、血気にはやる若い者には、私への個人テロをも辞さない者もいる、と凄む。
　私とて、殴られたり刺されたりはあまり趣味ではない。しかし、そうかといって、事実誤認があればともかく、それ以外の理由でそう易々と自分の文章を撤回するわけにはいかない。小心翼々たる小市民にすぎない私ではあっても、拙文に関しては責任を負っている。「言論の自由」などという大げさな言葉などをもちだすまでもなく、それは売文をもって生業（なりわい）とする者としての最低限の矜持である。
　押し問答は平行線をたどった。いいかげんお互いに疲労をおぼえてきた頃、話が途切れて気まずい沈黙が訪れた。私は、その機会をつかまえて、事務所に足を踏み入れたときからひどく気にかかっていたことを彼にたずねた。
「あのー、あそこの黒板に書かれているスケジュール表の、あれ、何ですか。ほら、

『鳥取日教組大会』って書いてある下の、『ジャパン女子プロレス』っていうの？」

Bから放射されているぎらぎらとした殺気が、ふとゆるんだ。私もまたプロレスが好きで、ときどきプロレスについての文章を書くこともある、と言うと、彼の表情が、コワもての右翼から無邪気なプロレスファンのそれに一変した。

「えーっ、ホントですか⁉　じゃ、プロレスラーとかとも会って話すんですか。いいなァー、うらやましいなァー、今度、プロレスの話をきかせてくださいよォ」

その場のテンションが、急激に低下したことは言うまでもない。

私たちは本題から脱線してプロレス談義に話がはずみ、それが縁となって私もこの日、ジャパン女子の試合を彼と一緒に観戦する次第となったのである。

ヤラセがほころびる一瞬の快感

〝アイドル〟キューティー鈴木が、悲鳴をあげて会場をわかせ、デビル雅美が客席に乱入して盛り上げる。そのたび、カメラを首からぶら下げたBが、見せる笑顔は、本当に幸福そうだった。笑うたびに白い歯がのぞく。そのうち数本はさし歯であるという。過激派セクトとのこぜりあいで折られたり、銃剣術の練習で折られたり、一本一本に行動右翼としての歴史が刻まれているのだそうだが、「あはは」と無邪気な笑い声をあげる今のBの姿は、プロレス好きの大きな子供のようだった。

「プロレスは、大げさじゃなくて、物心つく前から見てた。父親もじいさんも好きだったからね、力道山の試合もテレビで見てるはず。おぼえてはいないけどね。おぼえてるのは、豊登とか、芳の里、吉村道明が活躍してた頃。いつからプロレスファンになったかといえば、だから生まれたときから、としか言いようがない。子供というのはヒロイックなものに憧れるでしょ。普通はそれを卒業するんだけど、俺は卒業しないでそのまま今まできちゃったの」

試合が終わったあと、水道橋のレストランに入って、食事をしながら話をきいた。オーダーをとりに来たウエイターが、Bを前にして緊張しているのがありありとわかる。Bの格好は、Gパンにトレーナーといたってカジュアルで、べつに戦闘服を着ているというわけではないのだが、なにしろ容貌、体格がただ者ではない。

「プロレスの魅力って、感情移入できるとこなんだよね」

生ビール一リットル入りの大ジョッキを〝ごくり〟とあおって、Bは言う。

「だって楽しいじゃない。自分のかわりに戦ってくれるんだもの。もちろん、まがりなりにも俺も格闘技の経験あるから、プロレスが真剣勝負そのものじゃないというのはわかってる。柔道を一度でもやったことがある人間だったら、腕ひしぎ逆十字がいったんガッチリきまったら、即座に『参った』するしかないって誰でも知ってるもの。それをきめたりきめられたりしながら、ロープに逃げたりして三十分も四十

分も試合が続くなんてありえないよ。そうでしょ？　考える頭のない子供時代は、本当に真剣勝負だと思ってた時期もあった。でもそのうち、なんだかヘンだなあって気づくわな。結局、大男が痛い思いをしながら、しのぎあいをする、それがプロレスってことで、それでいいんじゃないの。でも、ギミックのうちにも、意地の突っ張りあいになったり、ムキになったりする瞬間ってあるじゃない。そういうのが見えた瞬間って、たまんなくイイよね。アクシデントとかもあるし、同じエンターテイメントでも、映画やアニメじゃありえないでしょ。馬場のセメント（ヤラセのない真剣勝負）もありえないけどさ（笑）」

右翼も左翼もないよ！プロレスには

「それにリングの上だけじゃなくて、リング下でも嫉妬や野心や欲望がドロドロからみあって、あけすけな派閥抗争だとか裏切りとかが年中あるでしょ。それがまたリングの上にもちこまれて、商売のネタになったりさ。考えてみてよ、一〇〇キロ以上の大男が、やきもちやいたり、カネや女や酒がらみでトラブル起こしたり、世間にそれを隠しもしないんだよ。女々しくてさ、いかがわしくてさ、誰とは言わないけど、海外遠征先で外人女に子供産ませて知らん顔してる奴もいるって話だしさ。こんなこと、普通の会社員じゃありえないでしょ!?　単身赴任先で金髪女をはらませておいて、ほっぽってくるなんて、許されるわけないじゃない。

それとかさ、長州力みたいにさんざん前の会社の悪口言ってさ、よその会社へ移って、うまくいかなかったからってまた元へ戻って、しかも移籍にからむカネのゴタゴタも、半ば踏み倒してウヤムヤにしちゃったり。普通だったら告訴モノだよ。もうムチャクチャだよね。

マサ斎藤にいたっては、本当に傷害罪で刑務所に入ってるのに、それをまたウリにしてさ、テレビもテレビで、アナウンサーが〝獄門鬼・マサ斎藤〟とか言ってんだよ。ひっどいよねー、それをまた客が喜んでるんだからね。俺もそうなんだけどね（笑）。でも俺、レスラーがでたらめなの、ぜんぜん悪いと思ってない。プロレスの世界って、きちっとした管理社会に対するアンチテーゼなんだからさ。愉快、愉快、愉快！」

さすがによく飲み、かつ食べる。プロレスの魅力について滔々（とうとう）と語りながら、大ジョッキをおかわりして、パエーリャをたいらげ、「さあ、朝メシの分は終わった。次は昼メシの番だ」と言って、メニューをにらむ。

Bがいちばん好きなレスラーは、ジャイアント馬場だという。「その理由は？」とたずねると、「おっきいから」と言下にこたえる。

「だっていくら体を鍛えて強くなったとしても、誰も馬場のマネできないじゃない。プロレスはプロレス以外の何ものでもない。やっぱり、普通の人ができないことをやってるから凄いんだし、楽しいんだよね。だ

ジャイアント馬場とラッシャー木村の兄弟仁義

いたい馬場の十六文キックなんて、誰ができる？　屈強な外人レスラーが、五十歳すぎた馬場の足の裏にちょんと当たるだけで大げさに吹っ飛ぶんだよ（笑）。誰もマネできないでしょう、こんなこと。だから馬場とラッシャー木村の兄弟タッグが最高なわけよ。二人の年齢を足すと百歳近いんだからね。この頃全日の会場じゃ、馬場が登場すると『馬場コール』じゃなくて『兄貴コール』だよ。それで、木村には『弟コール』（笑）。それで兄弟タッグの配下のファミリー軍団の若手レスラーには「子供コー

ル」(笑)。こんな楽しさ、プロレス界以外にあるだろうか!?

「プロレスはフリークスの魅力だ」

そもそもプロレスってイロモノだから楽しいわけでしょう。だから鶴田とか谷津とか、アマレス五輪代表だけあってプロレス技はなんでも器用にこなしちゃうし、実力はたしかに凄いと思うけど、五体満足で普通人で、つまんないのね。結局、欠けたとこがないのね。欠如ってもんがない。プロレスラーって、やっぱりフリークスでないと駄目だと思う。普通人としてはどこか何かが欠落しているところから、魅力が生まれるんだと思う。いわば、孺子、バケモノね。馬場は経営者として決していかがわしくないけど、リング上では力いっぱいいかがわしいじゃない。猪木のプロレスって、誰でもマネできるでしょ。体型も大きいことは大きいけど、まあ普通だよね。でも猪木も凄いと思う。あの人は、性格がフリークスだからね。もう裏切りだの陰謀だの借金だの、リング外じゃスキャンダルだらけでしょ。それを平然と踏みこえて、議員になって、北方領土返還と世界の平和を口にするあの厚顔無恥。だいたい猪木が議員になっちゃうこと自体、プロレス的事件でしょう。凄いよねぇ、世の中なめきってるよねぇ(笑)」

「外人レスラーで好きなのは、〝鉄の爪〟フリッツ・フォン・エリック。あいつドイツ人ということになってるけど、本名はジャック・アドキッセンで、ユダヤ系なんだよね。だから他のドイツ系悪役(ヒール)レスラーは、みんなナチス・イメージを売り物にして、リング上で『ハイル・ヒトラー』とかやったもんだけど、あいつは一回もやんなかった。やっぱりナチスは許せないんだろうけど、その一方でドイツ人という仇役イメージを利用して大儲けしてる。それからシークも、裏側の人生の屈折がみえて大好き。あいつもユダヤ人なのに、アラブ人を名乗ってんだからね、何考えてんだか。そしてきわめつけは、やっぱりグレート東郷でしょ。あの人、日系だけどれっきとしたアメリカ人のくせに、日本人のふりして、田悟作スタイルで日の丸のハチマキして、リング上で『天皇陛下バンザーイ!』とかやるわけでしょ。右翼の僕としては、その話を聞いて困ってしまった(笑)。とにかくアナーキーで、女とカネが大好きな人で、もう、人間の生きざまとして凄いと思う。右翼も左翼も関係なしで楽しめるよ! プロレスは」

〝昼メシ〟のグラタンが運ばれてきた。

「俺、虚弱児だったたんですよ」

「誰も信じないけど、俺、虚弱児だったんだ」

グラタンをビールで腹に流し込みながら、Bは自分について語りはじめた。

「生まれたとき、二四〇〇グラムぐらいしかなくて、もうすぐ〝金魚鉢(保育器)〟行きだよって言われてた。えらい体弱くて、小児ゼンソクとかになったらしい。しかも、

俺がいちばん上の子で、弟がかなり年下だから、ずーっと一人っ子みたいに育てられたわけ。家にはおばさんとかも同居してて、女ばっかりの環境だったから、ひ弱だった。体も小さくて、小学校から中学までは、よくいじめられた。弱いくせにナマイキだったからね。向こうっ気だけは強くて、ケンカはよくしたけど、ちっとも勝てなかった。本当に弱かったんだよね。だから強くなりたいとか、どっか遠くへ行きたいなって、いっつも思ってた。スーパーマンになる夢なんてしょっちゅう見てたし、昼間も授業中、窓の外をぼんやり見て、ずーっと外へ飛んで行けたらいいなとか、いっつも思ってたよ。

あんまり原っぱとかで遊ばなかったな。サッカーとか野球とか、ぜんぜんうまくなかったし。体育なんかいっつも1か2だったから。活発な子じゃなかったね。一人でマンガや本を読んでることが多かったね。SFが好きで、筒井康隆や星新一なんかはぜんぶ読んだな」

今でもアニメの主題歌は、レコードやテープなど三百曲近くもっている。コミックも一千冊以上はある、という。

「小学校の頃は小さくて細かったけど、中学から太りだして、だから早い話が運動不足の肥満児ですよ。それが友だちと一緒に遊ばず、図書館で本ばっかり読んでいたから、まわりと話が合わない。何もかも、アンバランスなんだよね。体力に自信が出てきたのは、高校に入ってから。背が一〇センチ以上も伸びたんだ。三年間ヨット部に在籍して、力もついてきたしね」

「おたく」と右翼の間にあるもの

右翼の道へ入ったのは、高校一年のときにたまたま書店で手にした『若きサムライのために』という三島由紀夫の著書がきっかけだった。以後、むさぼるように三島作品を読み始め、その影響で「民族主義運動」に身を投じることを決心した。

「三島由紀夫の本からいちばん影響されたのは死生観だね。割腹自殺したのは、我々が小学校五年のときでしょう。もちろん、本質的には何も理解してなかったけど、それでも子供心にすごいなぁって思ってたからね。それが高校生のとき読んだ三島の本でよみがえってきた。つまり、死をも超越する価値観の存在、生き死により大切なものがある。それが、すめらぎを中心とした日本である、と。十七、十八の頃って、死についていつも考えてた頃だから。俺はいつ、どうやって死ぬのかなって。生命以上の存在って、学校でも誰も教えてくれないじゃん」

彼の身の内でずっとうごめいていたものは、自己超越の願望であり、その願望に形を与えたのが三島だったのだ。〈おたく〉と呼ばれる若者が、他者に対して、あるいは現実に対してひたすら自閉し、サナギのようにマユを編み、その中で眠りこけて夢想するのは、やはり自己超越の夢にほかならない。「自分は〈おたく〉ではない」と信じている私たち自身の内にも、多かれ少

なかれ巣喰うその夢は、時として新しい価値創造の種子を育みもするが、同時に、超越的存在との同一化の欲望にも容易に転化する。そしてこの国ではそれは、おおむね天皇制へと回収されてゆく契機として働く。かつて現実離れした観念肥大に対する処方箋として、〈肉体〉を対置する戦略がもてはやされたことがある。しかし、それは修正されなくてはならないのではないか。ボディビルで見せかけの筋肉をつくりあげた三島自身がそうであったように、肉体的コンプレックスのかたまりのような〈おたく族〉と、その対極に位置するかのようなマッチョ・イメージの右翼との間には、どこか深くで通じ合う回廊が存在している。

〈おたく〉って自分じゃわからないよね

「今、民族主義運動に入ってくる若い奴らって、本で読んだ情報が先行してる頭でっかちが多いのね。ロリコンとかの、本物の〈おたく〉もいっぱいいる。昔のような、肉体派の硬派って少ないんだよね。ひょっとしたら俺たち以降の世代って、みんな〈おたく〉なんじゃないか。考えてみると、物心ついたときからテレビアニメやマンガ週刊誌で育った世代って、俺らがいちばん最初だし、それに何かのマニアになって、モノを収集するって、貧乏な家庭じゃムリでしょう。原っぱで遊ぶしかないよね。でも、そんな極貧家庭って、東京オリンピック以降は、もうほとんど存在しなくなったでしょう。世の中が豊かになったって、やっぱり大きいと思う」

現代は情報化社会であるなどとはいうが、実相は情報の暴風化社会である。言葉はもはや意味のある伝達をあきらめたかのように吹き荒れ、サンドストームの一粒として、私達の目をつぶし、耳をふさぐ。そのノイズの暴風から避難して、やっとひと息つくことのできるディスコミュニケーションの空間は、では何によって構成されているかといえば、やはり砂粒=情報に他ならない。ただし、それはいま現在、風によって激しく吹き荒れている砂ではない。もはや動かない、手ですくって、さらさらともてあそぶことのできる砂。流動する〈現在〉から切り離され、私達をおびやかす毒性の半減期を過ぎた言葉であり、映像であり、記号である。〈おたく〉の志向が過去へ傾きがちなことと、安全でレトロな情報玩具と誰にも邪魔されず戯れていたいという誘惑とは無縁ではない。

「ただ、今、〈おたく〉が差別されるのは、常軌を逸してるからでしょ。マンガにのめりこみすぎて、生身の女じゃダメで、マンガの中の女でないと欲情しないっていう二次コンなんてのは、ビョーキだと思う。そういう知り合いはいるけど、一緒にしてほしくないなと思う。でも俺も、他人から見たらそうなのかなぁ……。自分は違うが、あいつは〈おたく〉だっていう言い方って、ちょっと精神病患者に似てるよね。精神病患者は自分では『キチガイじゃない』って言い張るっていうでしょ。だから、俺も自分の意識しないところで病んでんのかもし

れない。まわりから見ればね。誰にも迷惑かけてないけれどもさ……」

B級映画の味、FMW

六時半。私たちは再び〝プロレスのメッカ〟後楽園ホールへ足を運んだ。夕方からはFMWの試合が始まる。FMWとは、元全日本プロレスの大仁田厚が興した新しい独立団体である。もちろんテレビ放送もないし、レスラーの頭数もそろっていない。その点では旗上げ当時のUWFと同様だが、UWFには前田日明をはじめビッグネームのレスラーがいたし、団体としてのポリシーも一貫していて、格闘プロレスとでも言うべき、新しいスタイルを確立することができた。

しかしFMWには、そんな未来を切りひらくヴィジョンもないし、過去に実績のある一流レスラーもいない。トップの大仁田からして、かつてはジュニアヘビー級のチャンピオンになったことがあるとはいえ、ずっと現役から遠ざかっていたのだ。パンフレットにも堂々と「現役引退後は、水商売をやり」とある。どういう団体なのかと首をかしげたくもなるが、会場はぎっしり満員だった。昼間のジャパン女子プロレスとダブルヘッダーで来ている客もかなりいる。丸一日、プロレス三昧。まったくどうも、〈プロレスおたく〉にとってこの日は、「素晴らしき日曜日」なのだった。

客の狙いは、空手家の青柳清司と大仁田との〝因縁〟の異種格闘技戦にある。前回、反則がらみでもつれ、その因縁をもちこしてきているのだが、そんな因縁抗争ドラマは、現在のプロレス界ではすでに化石と化した古典的手法だ。空手対プロレスというコンセプトも、新日本やUWFの模倣にすぎない。プロレスとはもともと格闘技のシミュレーションであるが、それをさらに縮小再生産した複製を見せようという心づもりらしい。だが、それでもファンは大喜びでつめかける。これはどうしたことだろう。「みえみえの嘘くさい因縁抗争、御都合主義、いいですねえ。これぞB級プロレスの決定版でしょう」

Bは、御機嫌だ。

「マイナーB級映画ってあるでしょ。クリストファー・リーの出ない吸血鬼映画とか。ああいうの、俺、大好きなの。今、UWFがいちばん人気あるけど、やってることはプロレスなのに、プロレスを否定するようなことを言うじゃない。ああいうの、すごく反発を感じるね。第一次UWFは好きだったけど」

泣き、叫ぶ一人の青年

会場のそこかしこで、Bはプロレス仲間の知り合いと挨拶をかわしている。彼はニコニコと笑いながら、一人ひとり私に紹介する。

「この人はね、極左だったの。若い頃はバリバリの過激派だったんだよ」

行動右翼と元極左とが交歓する光景に、私が当惑していると、彼はこう続けた。

「プロレス会場へ入ったら、俺はもう活動家じゃない。お互いに政治的なこと話すのなし、一切なし。それだからつきあえるんだよね。ときどきは、お互いの正体をちらちらめくりあって遊んだりもするけどさ。『おっ、こいつ中核派だったんか』とかね。俺の仲間、ヘンな人間多いよ。元極左セクトで、今も不穏なことたくらんでるらしい人物とか、元アナーキストで、今はいかがわしい新興宗教に首つっこんでる奴とか、ナチの研究家とか。そういう俺だって、明日の生活のことも考えないで、スピーカーのついた街宣車に乗って、日教組の会場へ押しかけてんだから、人のこと言えない。そういや、仲間のなかには学校の先生もいるな（笑）。みんなさ、人生をプロレスしてる人間ばっかり。いいじゃないの、極左とアナーキストとインチキ坊主と日教組と右翼が一緒にプロレス見て楽しんだって。馬場とブッチャーだって、血まみれの試合やったあと、同じバスに乗ったりするじゃない。俺は、プロレスファンに関してはすごく寛容で、なんでもありなの。俺の父親はまともな商社マンだったけど、俺自身はやっぱり、ちゃんとしたサラリーマンに向いてない人間だと思うのね。人生は、やっぱりプロレスですよ。なんたってプロレス界には、真面目な常識人じゃけっして花咲かないっていう素晴らしさがあるじゃないですか」

ＦＭＷの試合は、期待どおり(?)のジャンク・ファイトの連続だった。素性の知れない三流外人レスラーや、あやしげな空手家や、下腹のたるんだ女子レスラーらが入り乱れて、プロレスというより、通俗に徹したプロレスのまがいものを、これでもか、これでもかと見せてくれる。

だがしかし、それでもメーンエベントの大仁田と青柳の試合は異様な盛り上がりをみせた。青柳に一方的に攻められ、流血しながらも前へ前へと出てゆく大仁田の姿には、たしかに一流選手同士のテンションの高い試合にはない、不思議なカタルシスがあった。情報資本主義社会の、生産―流通―消費のハイスパート・サーキットから脱落したガジェットだからこその安心感なのだろう。

私の座っていた席の斜め後方に、たった一人で声をふりしぼって絶叫している二十歳前後の若者がいた。

「大仁田ーっ！　プロレスの強さを見せてくれーっ！　空手なんかに負けるなーっ！」

鬼気迫る切実なその叫びには、プロレスを微塵も疑っていないひたむきさと危うさが同居していた。Ｂが、身体半分だけ〈プロレスおたく〉なら、彼は真正の〈おたく〉に違いなかった。色白の頰と、黒縁のメガネのその風貌は、誰かに似てはいたが、それが誰か私はすぐに思い出せなかった。

試合は、セコンドの乱入というハプニングもとりまぜながら、ひと通りのスペクタルを見せて、大仁田の逆転ＫＯ勝ちでしめくくられた。大仁田は涙を流して勝利の喜びをあらわし、それなりに楽しめはしたものの、すれっからしのプロレスファンである私には、それはしごく凡庸な予定調和の

FMWの大仁田厚と青柳清司の死闘

結末にしか見えなかった。

だが、くだんの若者は、違った。人目もはばからず号泣するのだった。

「大仁田ーっ、ありがとう！ やっぱりプロレスは強かったんだ！ ありがとう、大仁田ーっ！」

その泣きっぷりは、誰をも寄せつけない、幸福な陶酔にひたされていた。

その日の試合から数日たってから、Bはしみじみと回想してみせた。

「プロレスを見て泣けるって、うらやましいよね。笑いが解消できるストレスって、せいぜい二日分だけど、泣くってことは、少なくとも十日分のカタルシスがあるものね」

彼の言葉を聞くうち、あの若者が誰に似ていたのか、私はようやく気がついた。

彼は、浅沼稲次郎元社会党委員長を刺した十七歳のあの右翼テロリストの面影にそっくりだったのである。

彼女にキーボードがついてたら

一人ひとりを「世界」の支配者にするパソコンという魔術

桝山寛

テクノ・ディレクター

「おたく」とは現実生活以外の「場」の磁力に支配されることである。

ならばコンピュータは究極の「おたく」製造マシンだ。

それは他のおたくのような同好の集団さえも必要とせず、

たったひとりで別世界の創造とコントロールが可能になるからだ！

あなたは、カールを食べるのに箸を使う人びとの存在を知っているだろうか。あるいは、十一時十五分の時計を見て「ゼロビー時ゼロエフ分」とか言ってニヤニヤする奴があなたのまわりに、いないだろうか。

　カールを箸でつまむのは、パソコンのキーボードを打ちながら食べるときに手を汚さないため。また、11をB、15をFというのは、16進法が当たり前になっているコンピュータ・プログラマーの言葉だ。

　そんな人間に会ったら試しにコンピュータに話題をふってみるといい。ふだん無口でおとなしい彼らは急に腕組みをして饒舌にしゃべりまくるだろう。

「やっぱ、メガドラは68000使ってるし、二万円くらいのゲーム機のくせにリニアなアドレスで4メガをサポートしてるなんてすごいよね。大人じゃん。スーファミは65816だから移植大変じゃん……」

　じつはこういった行動や話し方に、なんとなくわかってはいても、言葉で明確に定義できない「おたく」のエッセンスが見え隠れしているのだ。

「おたく」はわが隣人

　私にとって「おたく」は遠い存在だった。いや、遠いと思っていた、と言うべきか。以前の私には、おたくとは「アニメ・ファン」「ロリコン」「長髪で色白、といったステレオ・タイプ化された独特のルックスとファッション」という程度の認識しかなく、できればお近づきにはなりたくない人種だなあとしか考えていなかった。

　しかしある日、「マイキャラが255個に増えてさあ」とか「あのダブルスクロールすごいよね」といった調子で、テレビゲームについての少しマニアックな雑談をしていたら、「桝山さん、それっておたくだよ」と言われた。その瞬間は、「あんな連中といっしょにしないでくれ！」と憤慨してムッとした。

　だが気をとり直して聞いてみると、彼はどうやら「おたく」をマニアに近い単語として使っているようだった。それまでに私が考えていたおたくは、アニメおたくにすぎず、じつはほかにも「パソコンおたく」や「映画おたく」など、「おたく」は広い範囲のマニアに適用可能な用語だったのだ。

　そうして「おたく」という切り口で世の中を見直すと、それまではべつべつの分野でバラバラに進行しているように見えた現象が、自分も含めて、「おたく化」という言葉で括れるように思えてきたのである。

「パソコンおたく」は社会の御用達

　世界初のパーソナル・コンピュータ、アルテア8800がアメリカで発売されたのは一九七五年。わが国で一部のマニアがパソコンに手を出すようになったのは七〇年代末だから、それから十数年たったことになる。しかし出現当初言われていた「ソフトしだいで何にでも使えるパソコンは、絶対に普及する」という幻想はその後、完全に砕かれてしまった。一千万台以上ファミ

コンが売れ、ワープロやＯＡが常識となった今でも、好きでパソコンをいじり、なおかつ自分でプログラムできる人は圧倒的に少数派にすぎない。それはオタッキー（おたくの形容詞形）に言えば「ユーザー・インターフェイスが悪い」、日本語で言えば「使いにくい」からだろう。

それゆえ、パソコンおたくに対する社会の視線はほかのおたくとはかなり違って不安と期待の入り混じった複雑なものになっている。社会適応度が低い、という点では同じでも、クリエイティビティに欠ける他の多くのおたくなどに比べ、コンピュータおたくは現代社会の電子情報化のなかで「生産的」役割を担う特殊技能者として社会にとっての利用価値が高いからだ。

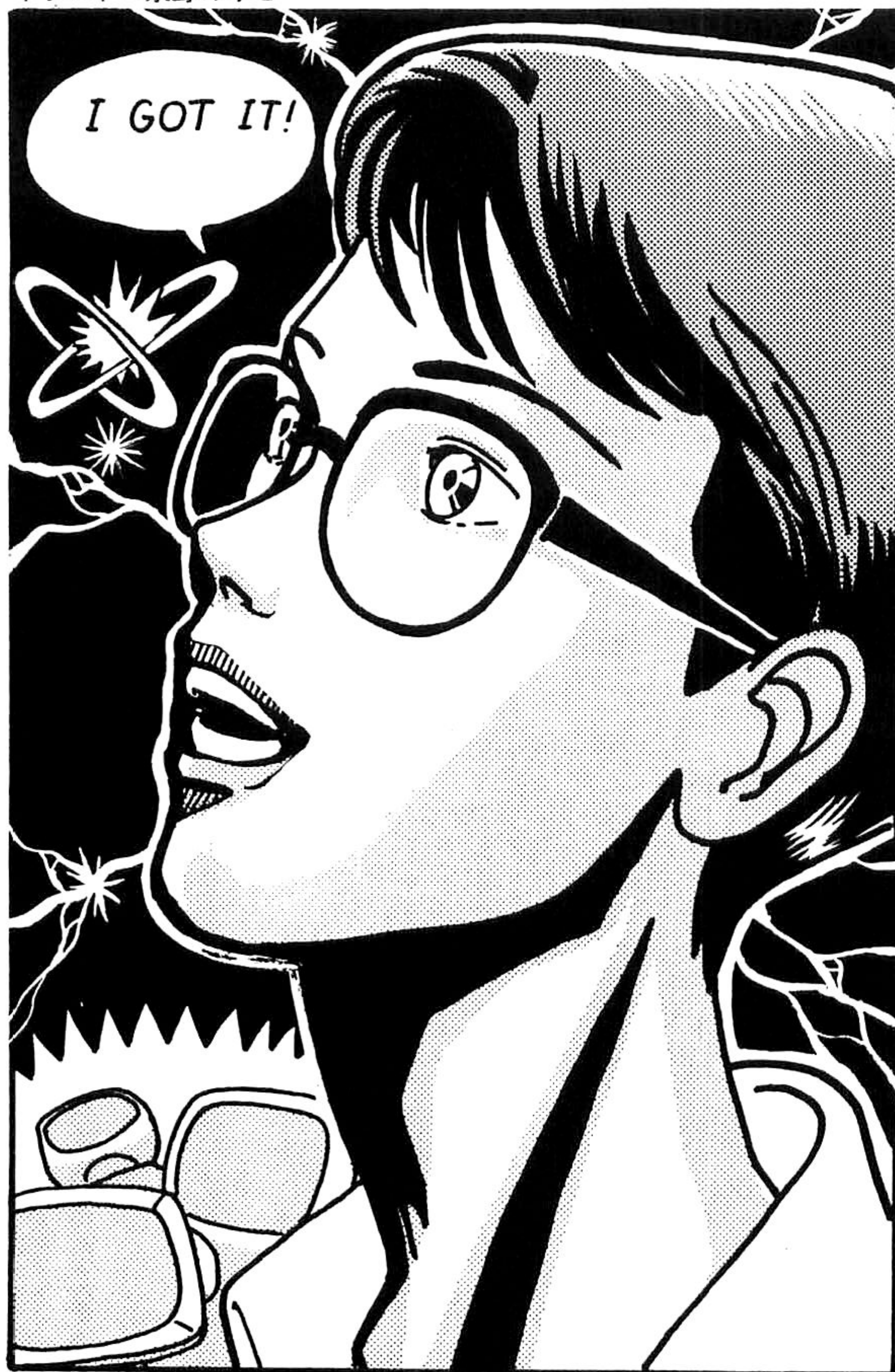
パソコンユーザーのなかにも、ゲームやパソコン通信など、既存のソフトを使うだけのマニアもいる。もちろんそのほうが多数派ではあるのだが、ここでは「自らプログラムを組む人」を扱う。「パソコンおたく」の本質と、それが「マニア」ではなくてなぜ「おたく」なのか、を語るうえで最適なのは、やはり彼らプログラマーたちだろうから。

あるおたくの誕生

一九七九年「スペースインベーダー」が大ヒットした。当時横浜市郊外の住宅地に住んでいたＡさん（現在二十三歳・プログラマー）は中学生だった。小学生の頃から収集癖があり、もらった手紙の切手を全部保存しておいたり「ファーブルになりたくて」昆虫採集に凝ったりしていたと言い、レコードからカセットに音楽をダビングすると、必ず、曲目と分数、秒数までをメモしていたというＡさんの性格は、成績表の通信欄にも書かれた「几帳面だが、過ぎるところがある」に近いだろう。今では「だいぶ、ルーズになった」と言うが、現在、彼が中心になっている会社の事務所は、かなり整理整頓が行き届いているように見えた。

「インベーダーが死ぬほど好きでしたね。あの頃はもうメシ食わなくてもいいからゲームやりたかった」

それ以前からラジオを自作したり、当時流行したＢＣＬ無線に凝っていたりしたＡさんの興味が、インベーダーを動かしている「コンピュータのプログラム」に向かっていったのは自然だろう。そのことを知って以来、自分でインベーダーをプログラムして作るのが夢になった、という。日本で８ビットのパソコンが最初に発売されたのは、ちょうどインベーダーブーム真っ最中の七九年。最初に大ヒットした機種が日本電気（ＮＥＣ）のＰＣ－８００１だ。

「高校に入ってからやっと８００１を手に入れて、独学でプログラムを勉強したんです。〝初心者のためのなんとか〟っていうような本をいっぱい買ってきたんだけど、初心者向けのくせに最初から〝アルゴリズム〟とか〝サブルーチン〟なんていう用語がなんの説明もなく出てきて全然わからなかったですね、最初は。そのうちマシン語でインベーダーが作れるくらいになり、当

時の業務用（ゲームセンター用）のゲーム『ディープスキャン』とかをまねて、いくつもパソコンで作りました」

マニアとおたくを分かつもの

Aさんにとっては「勉強があまり好きではなく、家にいるのがイヤだった」のもゲームセンターに入り浸った理由のひとつだったらしいが、そこにあったゲーム機は、あまりスリリングとは言えない日常生活よりも圧倒的に魅力のあるアナザーワールドだったのだ。テレビゲームという電子空間では、プレイヤーが「世界」のすべてをコントロールできる。自分の意志と能力だけで支配できる画期的な「別世界」だ。その「世界」はまだまだ単純な「宇宙人が攻めてくる」ていどのものでしかなかったが、次のステップとして、その「世界」を自分の手で構築してみたい、つまりゲームをプログラムしてみたい、と発想するのは当然の結果だろう。社会的な権力もなく、お金もない、ケンカが強かったり、スポーツが得意でもないローティーン、つまりごく普通の中学生には、「命令(コマンド)」をすれば、何も文句を言わずに「実行(ラン)」してくれる相手などパソコンくらいしかいないのだ。

そのあたりに、今までの「マニア」と「おたく」を分かつものがあるように思う。つまり、Aさん自身も集めていた切手などのコレクションとテレビゲームが違うのは、まず自分で「コントロールできる世界」であるかないかだ。たとえばテレビが異常に好きな人がいても、それは「テレビ・マニア」と呼んだほうがピンとくる。それをビデオに採って、リモコンで好きなように楽しんではじめて「おたく」と呼べるのだ。

もうひとつは疑似現実度の高さだ。オー

イラスト＝永野のりこ

ディオ・マニアは、音しかコントロールできなかったから「おたく」にまではいたらなかった。しかし視覚メディアの発達は、映像体験のコントロールを可能にした。

そしてさらにインタラクティブ（相互作用的）要素までも加えたパソコンの世界においては、プログラマーは独裁者、いや、全能の神にして創造主なのだ。

そんな「自在にコントロールできる世界」の住人は、現実の対人関係においてはどうか。Aさんが他のパソコン・マニアに「おたく」を感じるのは、「根拠のない頑固さ」だという。

「彼らは話をしててもけっしてこちらの意見は聞こうとしない。コンピュータのチップでも中島みゆきでも『自分の好きなものは最高』ということだけなんです。少しでも異論を唱えると猛烈な勢いで反論してくる。カタイんです。弾を二百五十六発ぐらい当てないと死なない（笑）」（カタイ、とはゲーム用語で敵キャラが強くてなかなか撃破できないこと）。

彼女にキーボードがあったなら

日本で生まれた「インベーダー」はアメリカのゲームセンターでもヒットしたが、アメリカでパソコンがようやく注目され始めた「ギャラクシアン」の時代になると、パソコン用にゲームを制作し、大ヒットを飛ばす会社も現われた。テレビゲームを自宅で楽しめる時代が始まったのだ。そのうち「アップル・ギャラクシアン」や「エイリアンタイフーン」というソフトを作ったのが、じつはトニー・スズキという日本人（本名不明）だった。日本の地方都市に住む普通の大学生にすぎなかったが、在学中にパソコンゲームを独力で開発、まず日本国内のソフト会社に買われ、そこからアメリカの会社にも売られることになり、「トニー」というアメリカ向けの名前だけがゲーム業界の伝説として残ったのだ。その経歴や近況は謎で、八〇年前後のいくつかの作品以後はゲーム界から姿を消した。

Bさん（現在三十二歳・プログラマー）はそのトニー・スズキに会ったのがきっかけでパソコンを始めたという。腕には猫のフェリックス（アメリカ製アニメのキャラクター）の時計、仕事場のパソコンの前には宮沢りえのポスターが貼ってある。余談だが、NECのイメージ・キャラクター斉藤由貴に対抗して、富士通が今までの南野陽子に代えて宮沢りえを起用したのは、「おたく」のニーズをよく察した展開だろう。

「パソコンを買おうと思ってたんですよ。大学では理学部で物理の実験のデータ解析とかに必要だったもんで。もう十年近く前のことだし、パソコンショップといってもそんなに大きくなかったんです。でも、そこはトニー・スズキが常連の店で、いろんな噂で彼が『ゲームのプログラムをしてウン百万儲けた』という話を聞いてたんです。それで、こいつにできるくらいなら私にもできるだろうと思いました（笑）。トニーは小柄でかわいい感じの男の子でしたね。彼はパソコンおたくのはしりでしょう」

インベーダーに始まるテレビゲームも「人並みにやってた」Bさんは、もともと大学の授業のために買ったパソコンにすっかり「はまってしまった」という。それが原因かどうかはともかく、大学には結局七年も行くことになった。当時、学生結婚していた彼にはパソコンにまつわる強烈な思い出がある。

「毎日パソコンばかりいじっているので、キーボードからコマンド（命令）を入力する、というのがコミュニケーションの方法として当たり前に感じてたんです。ある日、夢を見たんです。その夢の中では僕の奥さんにキーボードがついてるんですよ。でも、それが全然不思議に思えなくてパッと目が覚めたんだけど、しばらく起きたまま隣で寝てる奥さんを見て、〝どうしてこの人にはキーボードがついてないんだろう〟ってぼんやり考えてましたね」

彼はけっして大学時代にゲームばかり作っていたわけではないが、遊びでゲームを作って友達にやらせたら、おもしろがって全然家から帰ってくれなかったという経験があり、それはBさんにとって、迷惑ではあったがけっこう嬉しかった。そして出た答えが「ゲーム制作会社への就職」だった。

「僕の入ったときは、今考えるとかなり優秀な、ゲームに関してはトップクラスのプログラマーが集まりつつありましたね。仕事はそれなりにハードだったけど、今にして思えばおたくっぽいというか、それ風の人もいました。宴会になると必ず美少女アニメの『クリーミイ・マミ』の振り付けを完璧にコピーするおじさんとか……、それ

は家に帰れば娘さんもいる方でしたけど」

プログラマーとは職人芸的なセンスを要求される仕事であり、どちらかと言うとわがままというか頑固なタイプが多い。しかしBさんの会社では、管理側も彼らにヘソを曲げられると仕事が進まないので、他のセクションよりはいろいろな意味で大目に見られていたところもあったらしい。

「一時、どこかから貰ったとかで酒屋さんがつけている〝前掛け〟がたくさん会社にあったんですよ。まあ、普通なら屋号とかデザインがおもしろい、といった程度の会話で終わるんでしょうけど、うちのセクションの連中がどんどんそれを身につけ出して、意味なく流行してましたね。ずーっと前掛けしながら会議したりプログラムしてるのもいた」

年齢的には、おそらく「パソコン第一世代」、つまり学生時代にパソコンを持った最初の世代に属し、三十代前半にして日本の「パソコンおたく」の長老とも言えるBさんは、その後フリーになり、今でもトップクラスのプログラマーとして活躍しているが、彼の若い世代のプログラマーに対する見方は、意外にも、一般的なサラリーマンの管理職が若手を評する声にかなり近い。

「若い人たちは、僕らの時代と違って情報量がとても多いから、表面的な知識だけはあるんだけど実際的な経験になるとあやしいものがある。与えられたことしかしない、自分で工夫しないといった傾向はありますね」

また、おたくの命名理由である「親しい相手を〝おたく〜〟と呼ぶ」ことが、あまりにも知られてしまったため、今はもう実際に「おたく」と呼ぶ人間はほとんどいないが、言葉遣いが妙なのは確かだ、ともいう。

「敬語がちゃんと使えないんですよ。気軽でいいはずの友達に対してヘンにていねいで逆に目上の人に対しては友達と同じようにしか話せない。『MS—DOSが最高とは思わないですけれど、マウスとプルダウンメニューって、えれえめんどいんだよね』といったヘンな喋り方になっちゃう。ついい専門用語を使ったり、256や4096という数が（16の倍数なので）〝キリがいい〟と感じたりするのはしょうがないと思います。でも、この間まいったなあと思ったのは、若い人と飲み屋に行ったとき〝つきだし〟が出たら〝オプションだ〟と言うんですよ（笑）」

朝から晩までコンピュータ

これはトートロジーめくが、おたくは自分のことをけっしておたくと認めない。逆に他人を「あいつはおたくだから」とか「おたく連中はホントに困る」と言う傾向がある。Cさん（現在二十七歳・プログラマー）は、今ではY'Sのジャケットを着こなし、ハウスやアシッドのCDを六本木WAVEでチェックするような人物だが、かつては自らが「完璧なおたく状態」にあったと認める数少ない人だ。

高卒後、大学に行くために上京するのだが、じつはその前に、受験で東京に来たと

きパソコンを見に行ったショップでソントハウスの人と知り合い、すでにスカウトされていた。春休みにはアルバイトとして仕事を始め、あっという間に大学には行かなくなり正社員になる。

「自分がやりたくてたまらなかったことが思いっきりやれて、しかもお金が貰える、ある意味で夢のような状況ですよね。でも今から考えると、それから数年は本当に閉塞したおたく状態でしたね。勉強させてもらったから、会社には感謝してますけど」

ゲーム作りは高校時代からポケットコンピュータで始めていた。

「寝ても覚めてもそればっかり、修学旅行にもポケコン持ってって、電車の中でやってました」

就職後も、会社に行けば会社のパソコン、自宅では自分のパソコン、もちろん休みの日も家でパソコン。仕事や遊びの区別なくすべての時間をパソコンとすごしていた。

これは、現在でも締め切り間際のプログラマーたちには珍しくない生活パターンだろうが、コンピュータの前にいないときは寝るときだけ、といった状況だ。

「デートはもちろん、数少ない会社の人間以外とは話をする機会さえないですから、服装にもかまわず、近所で買った〝三つで千円〟みたいなシャツとジーンズとサンダル、髪も伸ばしっぱなしの〝おたくスタイル〟。普通の人には信じてもらえないくらい、コンピュータのほかにはまったく何もない状況でした」

おたくからの脱出

Cさんは、おたくが普通の人と大きく違っている点に「食生活」をあげる。

「おたくってコーヒーなどの苦いものを嫌うし、酒もあまり飲まないですね。甘ったるいものが好きで、イチゴ牛乳とイナリずしなんていう組み合わせが平気。同じものを毎日食べても飽きない。ひょっとすると体質そのものが違うような気もします」

基本的に子どもの嗜好、あるいは宇宙食的な「原形から遠いもの」を好むようだ。おたくたちは食事はただの「エネルギーの補給」でしかないと思っている、と言われる。たしかにカロリーメイトは彼らの好物だが、けっして何でもいいというわけではない。

「コンビニに売っているものに関してはこだわるんですよ。カロリーメイトでもフルーツ味のほうがおいしいとか、ロッテのVIPチョコの〝生〟と〝半生〟はどう違うかとか。子どもにビックリマンチョコが流行ったときは、『今、シールを捨ててチョコだけを食べるのが最高の贅沢だ』なんて言ってました」

そんなおたく生活を続けているうちに、Cさんに「危機意識」が芽生えた。仕事のほうは、他人が作ったソフトなどを別の機種に移植するようなルーティンワークばかりになって煮詰まってきたし、私生活においても、東京に来てすぐその会社に入ったために知り合いがまったくなく、あまりにも狭い世界にいることに息苦しくなってき

たのだ。
「それで、ふと考えると、もしこの会社を出たらオレには何もない。仕事以外の楽しみもないし、だいいち、生活そのものができない。そう思い始めたら、それまで目に入らなかったほかの世界を一気に広げたくなったんです」

　自分を変えよう、つまりおたくをやめようとして最初に考えたのは髪を切ることだったという。

「原宿のサッシュに行ったんですけど、最初は入るのに勇気が入りましたね」。そして、仕事を続けつつもあらゆる機会に人に会ったり、コンピュータ以外の文化を吸収し出した。友人から聞いたマイナーなレコードを西武アールヴィヴァンで買ってみたり、雑誌社にほとんど飛び込みで顔を出してみたり、DCブランドの服をマヌカンの薦めるままに買いまくったのもこの頃だ。その後紆余曲折はあったが希望どおり退社し、フリーとして大きなプロジェクトを任されるようになった。彼の現在の悩みのひ

とつは、押し入れに眠っている、おたく時代に集めたアメリカ製貴重版ソフト数千枚の管理だという。

アメリカンおたく「NERD（ナード）」

米語のスラングに「NERD（ナード）」というのがある。おたくについての認識が浅かった頃、私は、これを「気が弱くてファッションのダサイ奴」ていどの意味として解釈していたが、映画『ナーズの復讐』（一九八四）をきっかけに、これはかなり「おたく」とオーバーラップする単語ではないかと気がついたのだ。その頃、たまたま話を聞く機会のあったアメリカ娯楽／教育パソコンソフト業界のオピニオンリーダーと言われるブローダーバンド社長のダグラス・カールストンにナードについてたずねた。

「ナードにもいろいろあるけれど、私がナードと聞いて目に浮かぶのは、パッとしないファッションでポケットにペンをいっぱい差し、ネジの部分が壊れたメガネをかけてそれをセロテープで留めている男だね。もちろんパソコンをいじるのに忙しくてメガネ屋に行かないんだ。まともな食事もしないし女の子とデートもしない、気のきいたジョークも言えないけれど、コンピュータに関しては誰よりも詳しい。今思い出すのはトニー・スズキですね。彼は〝Good Nerd〟だった。十年前にトニー・スズキのゲームを日本の会社から買ったのがブローダーバンド社だ」

日本は、世界のおたくか

私は、アメリカのパソコン通信のネットワークに次のようなメッセージを打ち込んでみた。「日本には〝おたく〟という人びとがいるのだが、アメリカではどうか」。すると返ってきた反応では、ルックスに関しては前記のようなステレオタイプが浸透していたが、異論もあった。

「日本の〝おたく〟が、必要以上にていねいな言葉を遣って自分のまわりにバリヤーをはるタイプ、という意味ならその訳語は〝Stuffed Shirt〟（小学館『ランダムハウス英和辞典』によれば、もったいぶったひとりよがりの頭の堅いやつ、の意）だね。ナードの類似語には〝wonk〟があるよ。僕はパソコンネットの仕事をしてるんだけど、この間、自分の仕事をいろいろと友達に説明していたら『そんなにwonkな単語を使うなよ。オレには一言もわかんない』と言われちゃった」

また、「wonkなんて言葉あんまり聞いたことないな。そうすると逆に僕はナードだってことかな、まいったな」という反応もあった。

「日本には〝本の虫〟っていう言葉があるんでしょう。それみたいにコンピュータにとりつかれて離れられない人種さ。症状、と言ってもいい。ナードのメガネが壊れてることが多いのは、ナードなんか目の前から消えてしまえ！と思っている人が多いからだ。これは僕の経験からも言えるよ。あーあ」

ということは、やはりナードはアメリカにおける「おたく現象」と言って差しつかえないのではないだろうか。

これは、客観的データもない筆者の主観でしかないが、欧米のパソコン雑誌を見るかぎり、コンピュータ好きは誰もが世界中で似たような（オタッキーな）ルックスをしている。ひとりだけ例をあげよう。八九年のTVゲーム業界最大のヒットとなった「テトリス」のプログラマー、ソ連のワジム・ゲラシモフ君（二十歳）だ（写真参照）。おたくはマルクスやキリストを脇にどけて国家や体制を超えつつあるようだ。

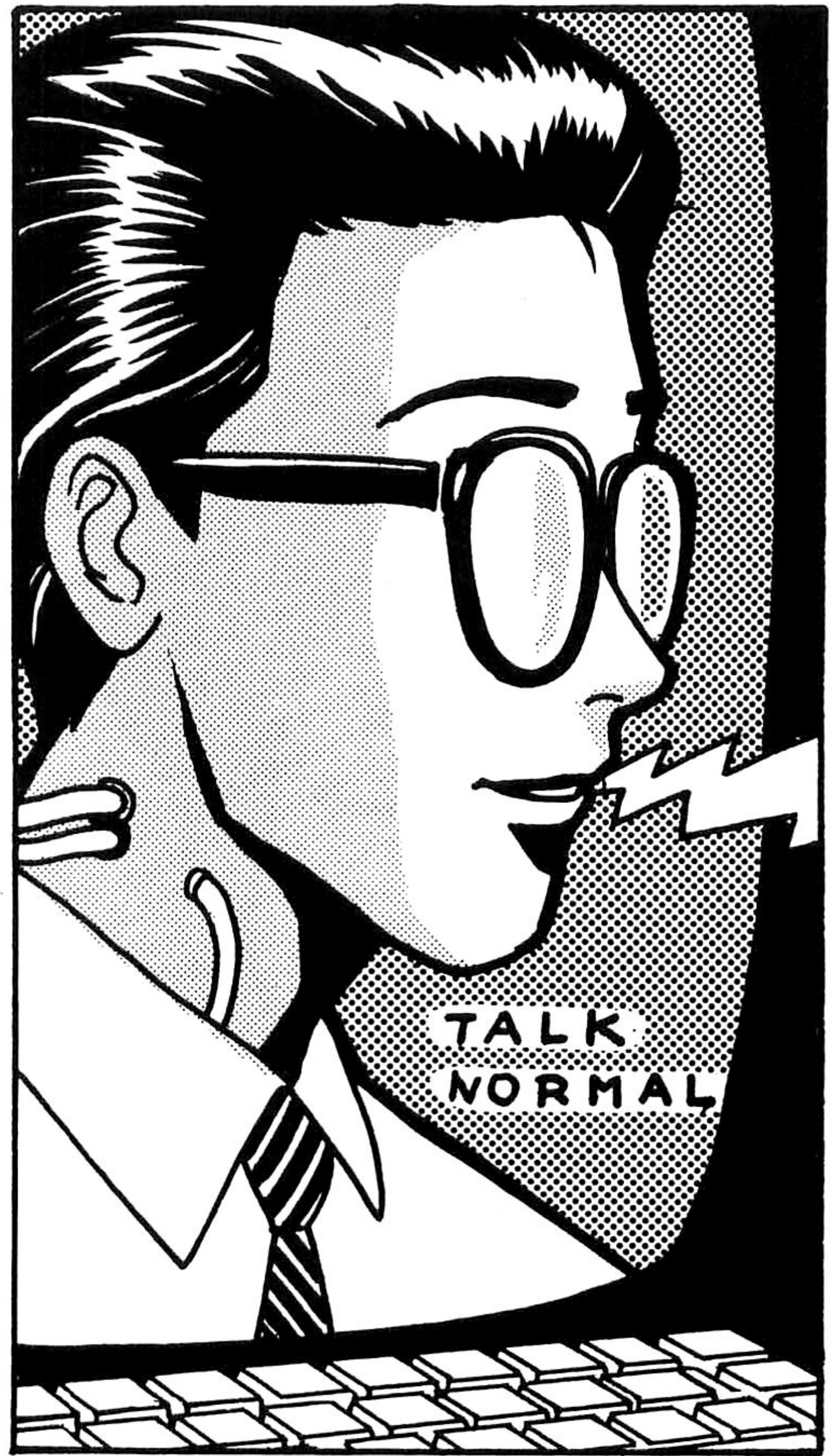
ワジム・ゲラシモフ君

また、映画「ナーズの復讐」にはマザコンのコンピュータ少年やドラッグにいかれた下品なやつといっしょに、なんと「英語のへたな日本人留学生」がナードの一員として出てくる。これを認めるのは屈辱かもしれないが、その日本人は「うまく自己主張できない」「（男の）ファッションやルックスがダサい」「眼鏡をかけている」。しかし「ハイテクに強くて」「けっこういじめられている」というナードの特徴は、じつは完璧に「世界の中の日本人」の特徴なのだ。どうやら「世界はおたく化」しつつあり、しかも「日本は世界のおたく」だったのだ!!

「おたく」＝現実世界と違う価値体系に生きること

日常的なコミュニケーションには普通、日本語なり英語なりの言葉を使うわけだが、表面的に同じ言葉を用いていても、異文化間でその解釈に誤解が生じるのはよくあることだ。ひとつ例をあげてみよう。

あるホテルで秘書サービスのデスクに、「御用の節は、御自由にお言いつけください」という表示をした。すると、あるユダヤ人が来てコピーとりからテレックスの送信を手始めに、書類のタイピングや訪問先への電話までを頼み、その客ひとりのために秘書サービス機能がマヒしてしまった。見かねたマネージャーが、その客にそれとなく注意したところ、逆に「ここに『御自由に言いつけてください』と書いてあるからそうしたまでだ。サービスに限界があるならそれを最初から明確に表示してあるべきだ」と言われたという。これはユダヤ人にとってまったくの正論である。つまり、日本人だったら「御自由に～」と書いてあっても「ほどほどに」するところを、彼らは「あいまいさ」を許さない文化の論理で行動したにすぎない。

パソコンというもうひとつの別の異文化、とくにプログラミングの世界においては、その言語が数学的でデジタル（0か1か、アルかナイの選択しかない）なだけに、どのレベルにおいても「論理性」が重要視さ

れる。いや「重要視される」などという言葉さえ、あいまい度が高すぎて許されない。コンピュータに「気配り」ボタンや「そこをなんとか」スイッチがついていたら……とジョークとして語られるほどの「すべてが明確で論理的に割りきれる世界」だ。パソコン・ユーザーがいまだに少数派なのは、この「パソコン的世界」と現実の日常的なコミュニケーションの世界が大きく異なっているからだ。そのパソコン的世界とのつきあいが深まることが「パソコンおたく」への一歩を踏み出したことになる、と言ったら短絡的すぎるだろうか。

世間一般の常識とはちょっと違うおたく的な生活のディーテールをパロディにしたり、バカにしたりするのはたやすい。だが、本当に注目するべきなのは、彼らがいとも簡単そうに言ってのける「独学でプログラムを勉強しました」ということだ。私が話を聞いた相手はそれぞれ優秀なプログラマーで、彼らがどの程度おたくかは読者の判断しだいだが、彼らは良い意味で例外的だと思う。彼らはおたく的な、ものごとへのこだわり、極端に言えば「おたくしか持ちえないなんらかの能力」をクリエイティブな方向に活かしているからだ。彼らが学生時代にはけっして優等生ではなく、どちらかと言うとドロップアウトだったのも、結局パソコンという、学校ではキチンと教えてくれないところに自分の追求したい世界があったということにすぎない。

「ホテルでのユダヤ人」と同じ文脈において、おたくは異文化の人、「やっかいなガイジン」だとは思う。だから、異文化/ガイジンに対して「崇め奉る」か「排除する」かという対応しかしてこなかった日本人は、同国人の異文化＝おたくに対しても「ハイテク・エリートとして崇める」か「不適応者として排除する」という態度をとるのだろう。おたくとうまくつきあうためには、ひょっとすると本物の外人とのコミュニケーションが訓練になるかもしれない。

おたく少年は学校ではどうしているのか？

現役中学教師が教育の現場で見た「おたく」

河上亮一　中学校教諭

K君は数年前、中学一年生のときに私が担任だった生徒である。

彼がはじめて私のクラスに入ってきたとき、ひと目見て、これは注意しないといけないと感じた。K君の特徴は、たとえば次のように要約できる。

①太りすぎである。

②目が落ちつかない。

③しゃべるのが下手である（言葉が詰まって出てこない）。

④動作がぎこちない。

なかでも、学校でのK君のいちばん大きな問題は、しゃべることだった。授業中に指名されても口ごもってしまって言葉が出ない。教科書を大きな声で読むこともできない。学力が低くて漢字があまり読めない生徒にはよくあることだが、K君の場合は学力が低いわけではなく（知能検査で偏差値63）、漢字も読めるし質問の答えもちゃんとわかっていることが多い。でも、言葉が出ないのである。

当然、クラスの友人関係にも問題が生じ

てくる。友達の話にうまく反応できないから、「人の話を聞いてない」とか「無視する」と言われていじめられることになる。からかわれ、こづかれ、突き飛ばされ……とエスカレートする。

しかもK君には意外に気の強いところがあり、やられると一所懸命抵抗するのである。追いかけたり、手を振り回したり。しかしその動きがいかにもぎこちなく、まわりはよけい面白がってやっつけることになる。

こうして、K君は汗びっしょりになる。彼を助けようとする生徒はいないから、いくらいじめても安全である。ゲームとしてみれば、やめられなくなるのは当然だ。

それでもK君は、ほとんど教師に言いつけることはなかった。ひょっとしたら、追いかけっこのなかで他人とのつきあいが成立していたのかもしれない。彼としてもつらかったろうが、ひとりぼっちでいるよりよかったのではないだろうか。

私は担任として、彼のことをクラスで問題にしようとは思わなかった。彼の精いっぱいの関係のつけ方を壊してはまずいと思ったからである。今にして思えば、彼のこの強さが登校拒否を防ぎ、一人で部屋にこもりきることを防いでいたのかもしれない。

K君に対するこうしたいじめは、二年になってもエスカレートしていくばかりだった。三学期に行なわれた修学旅行では、就寝前の休憩時間にアッという間に布団蒸しにされ、何人もの生徒に上から乗られて、本人は死ぬかと思ったという。このときばかりは彼も青い顔をして本部まで走り込んできたので、緊急にそのクラスを集め、きちんとした処置を行なった。

身のまわりの整理がまったくできない

K君は、身のまわりの整理がまったくできなかった。給食の残りのパンや牛乳をロッカーや机の中にどんどん押し込んでしまい、担任がどんなに注意しても直らなかった。担任が忘れてしまうと、カビのはえたパンやヨーグルト状になった牛乳（発酵して箱がパンパンに膨れあがっている）などがゴロゴロ出てきて悲鳴をあげることになる。

それ以外にも、K君の机の中にはプリントや使用済みのハナガミや汚れたハンカチなどがビッシリ詰まっている。まわりの生徒も気持ち悪がって、K君の机には近づかなくなるほどだった。体育用のジャージもあちこちに脱ぎっぱなしで忘れるし、担任が注意しないと家に持って帰って洗うこともしない。

こうした状態は、家庭でも同じだった。

K君が中学生になった頃は、ちょうどファミコンが盛んになり始めた時期で、彼は小学校六年生のときに、子どもにしては非常に高価なゲーム用のパソコンを買ってもらっていた。自分でゲームソフトをつくることもできる機械で、当時の値段で数十万円はしたはずである。

購入のための金は、K君を溺愛していた

祖母がポケットマネーから出したものらしい。さすがに両親は、子どもには高価すぎると反対したが、「自分の金を出すのだから」と祖母に押しきられてしまったという。

パソコンを買ってもらって以来、K君はゲームに熱中した。学校から帰ってくるなり自分の部屋にこもり、部屋を暗くしてキーボードを叩いている。夕食に呼ばれてもなかなか出てこない。食べるとまた部屋にこもって、夜の一時、二時までやっている。当然朝起きられないから、寝ぼけまなこで遅刻ギリギリで学校に駆け込むことになる。

K君は、中学生になってから自分でコンピュータを操作し、簡単なソフトをつくるまでになった。こうなると、立派な〝おたく〟である。もちろんこの言葉は、例の事件のあとではじめて知ったのだが。

人と話す必要もなく育つ

K君の家族は、両親と兄一人、そして祖母の五人家族だったが、兄とはかなり歳が離れており、一人っ子と同じと考えてもいい。小さいときから、ひどく体が弱かったそうだ。

K君の家では祖母が強い力を持っていて、前述のように彼を溺愛していた。身のまわりの世話はすべて祖母がやってくれたから、K君は何もしなくてもよかった。

何も、というのは、しゃべる必要さえなかった、ということである。K君の望むことは、すべて祖母が察してくれた。病気にでもなろうものなら大騒ぎで病院通いをし、ちょっとの発熱でも腫れものにさわるような扱いだったらしい。

当然、K君の要求はほとんど無条件で認められた。父親はとてもおだやかな人で、祖母（つまり自分の母親）と言い争うようなことはしなかった。母親も、祖母とぶつかると家の中がゴチャゴチャして困るからと、自分の意見があってもそれを主張せずに、じっと我慢してきた。母親としての立場を奪われていた（あるいは放棄していた）と言っていい。

ところが、K君が中学生になって四カ月後に祖母が亡くなった。もちろん母親が、急にその穴を埋めることなどできない。K君の家庭環境は、大きく変わった。

母親としては、今までずっと祖母のやり方に不満を持っていて、それを我慢してきたのだから、当然、今までとはちがうやり方で息子に接しようとする。その結果、衝突が始まる。身のまわりのことを自分で処理させる、というごく普通のことでさえ、息子のひどい抵抗にあうことになる。

汚れものはあちこち脱ぎっぱなし、下着も母親が出してやらなければ、はき替えようとしない。学校からの連絡、集金袋などもカバンに入れっぱなしで（今までは祖母が毎日カバンを開けて必要なことをしていた）、朝だって起こさなければ絶対に起きやしなかった。

私が家庭訪問したとき、母親はノイローゼ気味だった。私としても妙案があるわけではなく、ただ、祖母の死をひとつのキッ

カケとして、彼を何とか一人立ちさせる方向に向かわせなければいけないと思うだけだった。母親もそれを痛切に感じていたから、息子とのトラブルに疲れきっていたこともあって、彼を放り出すしかないという結論に達した。息子のことばかり考えなくてすむからと、仕事に出ることを考え始めた。

学校＝自分の思いどおりにならない世界

K君は、中学では柔道部に入った。小学校のときによくいじめられていたので、強くなりたいという思いがあったのだろう。だが、練習が始まってみると、体がうまく動かない。投げられて痛いのも嫌だった。すぐにあれこれ理由をつけてサボるようになり、体のほうはますます太ってきた。

私は、K君が一人で自転車に乗るのが好きだと聞いて、サイクリングをすすめることにした。夏休み前にスポーツタイプのサイクリング車を買ってもらい、K君は夏休みに一人で遠乗りをするようになった。一人であることには変わりはないが、薄暗い部屋にこもっているよりはいい。K君はサイクリングにも夢中になって、びっくりするほど遠くまで足をのばすこともあった。

K君に対する担任の評価は、三年間ほとんど共通していた。

①音楽や体育など、自分を出さなければいけない教科は不得意である。
②自分にこもってしまう。
③人前できちんとしゃべる練習が必要。
④要領が悪く結果に結びつかない。

だがK君の場合、三年間を通じて少しずつしゃべることはできるようになってきていた。欠席も一年生十三日、二年生二十一日、三年生十一日で、いじめられながらも三年間頑張り通した、と言っていい。わがままいっぱいに育った生徒が、自分の思いどおりにならない、学校という外の世界で生きていくのだから、これは大変なことである。「学校なんか行きたくない」と言って登校拒否になったところで、べつに不思議はない。この点、K君はとても強い何かを持っていたことになる。

高校受験で公立に落ちたため、K君はすべり止めの私立に入学した。当然その私立は、彼にとっては学力的には楽なところで、クラスのトップになって（たぶん小学校以来はじめて）、自信を持つことができたようだ。三年後にK君は、四年制の大学に合格した。彼の学力（中学時代の）から考えれば、かなり難しい大学である。

K君の場合、小学校・中学校時代は外の世界と逆接的にしかつながることができなかったのに対し、私立高校に入って自信を持つことによって、世界と順接的につながることができるようになった、と言えるだろうか。とにもかくにも、一人の世界にこもり切らなかったことが、彼が変わっていくための条件になったのだと思う。

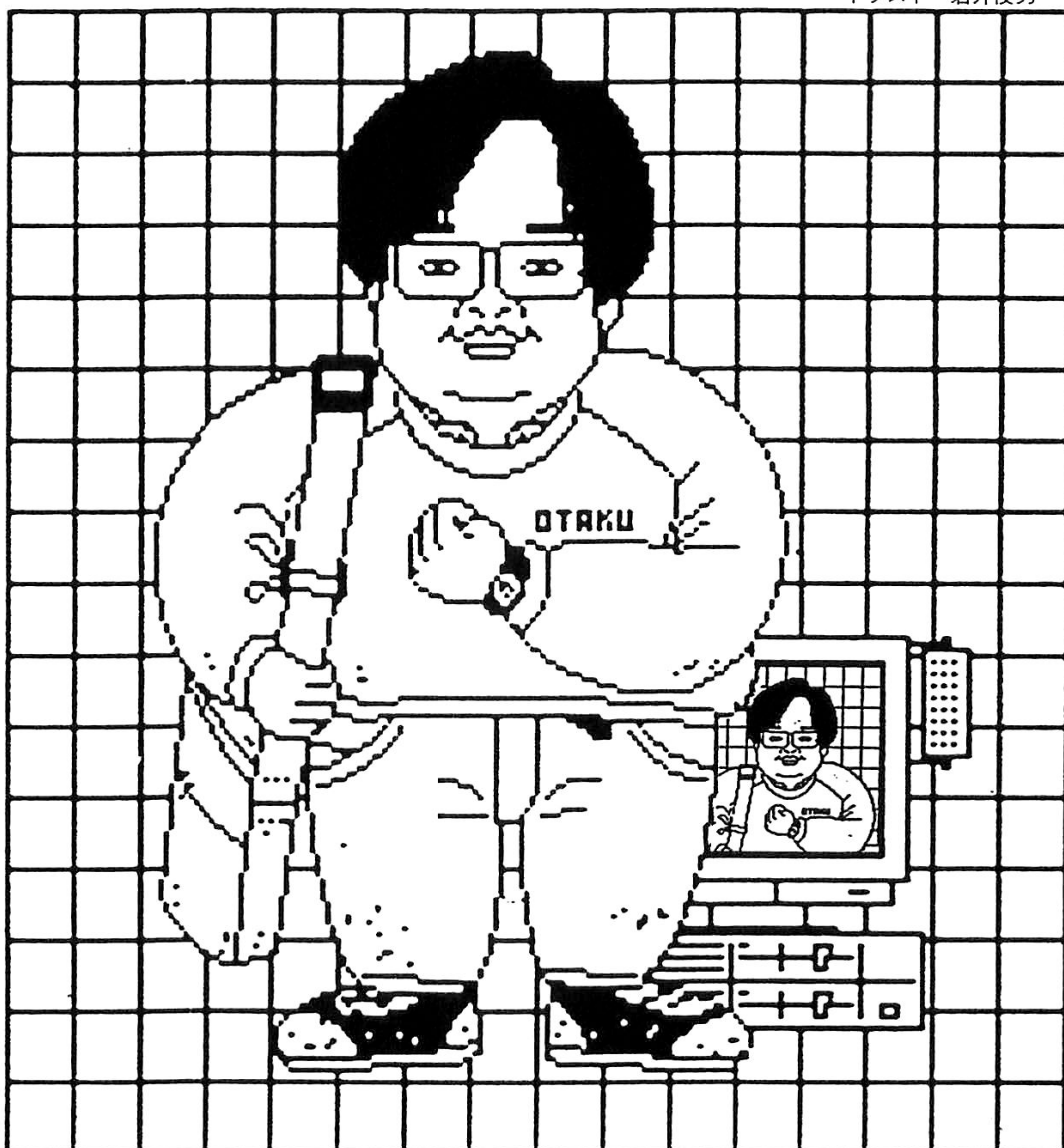
その意味では、中学のとき、いじめられながらもクラスの生徒と追いかけっこをやったことが、K君にとって貴重な体験になったのかもしれない。抵抗することもな

く、ポツンと一人で中学の三年間を過ごしていたら、高校に入っても、外の世界とつながっていくことは不可能だったかもしれないのだ。

対話もケンカもできない子どもたち

ところでK君のような〝おたく〟は、けっして特殊な存在ではない。彼のような生徒は、今でも学年を見渡せば、何人かあげることができる。だが、問題はそれだけではない。

最近、クラスのなかに友達とうまくつきあえない子が増えている。対話がきちんと成立しない、言葉が相手とのかかわりでうまく出てこないのである。これは、学力の高い低いには関係ない。

こういう生徒たちは、ごくささいなことでお互いの意思疎通がうまくいかず、友達との関係がギクシャクする。それでも〝ケンカ〟をして言いたいことを相手にぶつけることができればいいのだが、今ではその〝ケンカ〟すら成り立たなくなっている。

そう言えば、取っ組み合いの〝ケンカ〟などというものは、この十数年間、ほとんど目にしたことがない。たまに体をぶつけあうことがあったりすると、強いほうが弱いほうを一方的に叩きのめしたり、追い詰

イラスト＝岩井俊男

められた弱いほうが、逆に相手に大ケガをさせてしまうような〝事件〟にまで発展してしまうのである。どこまでやったらやめなくてはいけないか、という限界を体で知ることがなくなったせいだろう。小さいときから体をぶつけあう〝ケンカ〟を大人が取りあげてしまった結果である。

クラスのなかで、ほとんど他の生徒と口もきかず、一日じゅうポツンと一人でいる生徒の数も増えている。そういう生徒に話を聞くと、べつに一人でいても平気なのだ、と言う。強がりを言っているのかもしれないが、積極的に友達をつくろうという気もあまりないようなのだ。

おたく的だらしなさは今の子どもたちの共通点だ

日常生活を自分でやりきる能力もひどく低下している。そのひとつの現われが、身のこなしのぎこちなさである。

ひどい生徒になると、倒れるとき手をつくことができず、顔面を地面に叩きつけて鼻血を出したり、唇を切ったり、果ては歯を折ったりする。体育祭の組体操の練習のとき、肩に乗った生徒がバランスを崩して背中から落ち、普通ならば腰を打つところが後頭部をもろに打って、大騒ぎするようなこともあった。落ちたあとも、痛いと言いながら練習に参加し、教室に入って給食も食べ、清掃の時間になって（落ちてから一時間以上たって）「頭が痛い」と泣き出して、担任があわてて病院に運び込んだ。このようなことが、最近ではまれな話ではなくなってしまったのである。

日常の動作にしても、とにかく鈍い。清掃のときも、床におしりをペタッとつけて自分のまわりだけを拭くのが普通で、雑布を両手で押さえてサーッと拭くなんてことは、とても無理である。「サボるな！」と怒鳴っても、体そのものがうまく動かないのだから、効果はない。こういう例はとくに女子に目立ち、廊下にベターッと座って話し込む姿から、教師は彼女たちのことを「トド」と呼ぶようになってきている。

身のまわりの整理をすることも、じつに下手である。机やロッカーの中がガラクタでいっぱいになっている生徒はかなりいるし、忘れものや落としものは数限りない。カバンを昇降口に置きっぱなしで帰って、教師が注意するまで何もしない、という生徒もいる。

この十年間で、人間関係をつくることが下手で日常生活がぎこちなく、肉体そのものが脆い生徒が急速に増えてきている。K君も、そうした生徒の一人にすぎない。彼は偶然、いじめられるということがあったために、担任が彼のことを深く知るようになっただけであり、他の生徒であっても、深く調べてみると、きっとK君と同じような状態が現われてくると思う。その意味では、K君は〝普通の〟生徒である。

もしK君のことを〝おたく〟と呼ぶのであれば、今の学校は〝おたく〟だらけである。そして、そうした〝普通の〟生徒たちを相手に何ができるのかが、今の学校が背負わされている重い課題なのである。

注目すべきおたくたちとの出会い

泉麻人、京本政樹ほか、おたく道を究めた先達のお宅訪問!

「ほんとうに好きなことを見つけるなんて、
じつは簡単なこと。
マニアとは、
それをどれだけ好きになれるか、
そのためにどれだけ犠牲を払うことができるかを、
楽しみながら生きる、
いわば『天使たち』なのである」

みうらじゅん イラストレーター

写真＝滝本淳助

オール・オア・ナッシング

中野D児（AV監督）の世界

今でも初めて中野D児さんに会ったときの感動は覚えている。僕は久しぶりに男に惚れた。

中野さんの監督した（もちろんご本人も男優として出演）エロ・ビデオ、基本的なところで『シスターL』や『ラバー・ベイビー』などは昔から見ていたし、中野さんがローリング・ストーンズ・マニアで白夜書房から『The Rolling Stones Discography 1963—1988』というものすごくブ厚い本を出されていることも知っていた。が、会ってみればご本人はいたって物静か。あのワイルドな仕事ぶりとはとうていかけ離れていた。

「ストーンズの海賊盤マニアなんですよね?」僕は切り出した。

「民間人としての楽しみは半分ぐらい捨ててますから」

僕はそのとき、一瞬、その言葉の意味が把握できなかった。

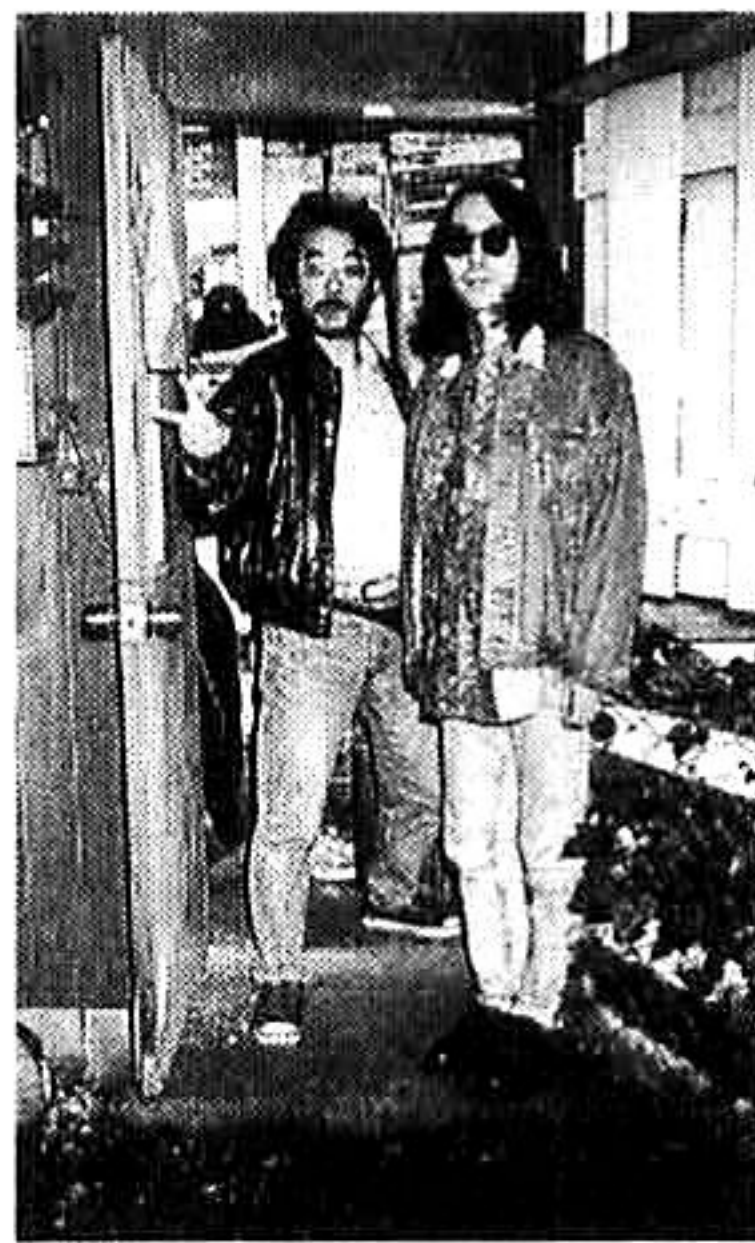
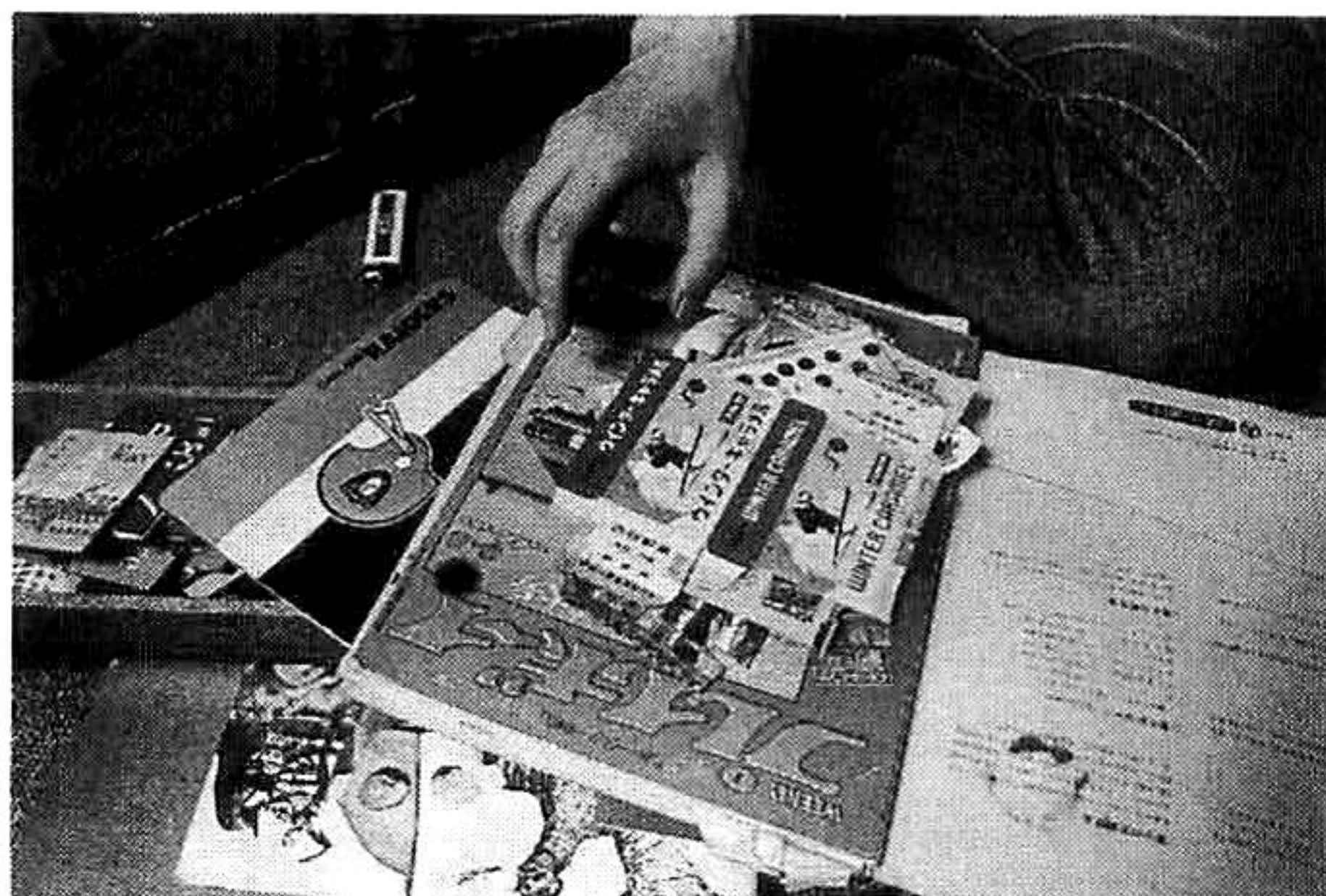
「僕の収集歴は二十歳を過ぎたぐらいから。金が自由に入るようになってから。とにかくストーンズが大好きだったから」

中野さんが出版したストーンズの本には、世界各国のストーンズのレコードが網羅されている。音源は同じでもジャケットが違うものなどはもちろん、レコード盤の色違い、フツーの人が見てもどこが違うのか分かりさえしない再版されたもの、一枚十何万するシングル盤など、異常な数のレコードを写真入りで紹介してある。

「だから僕のノリはみんなみたいに『ノッテる?』『イエー』じゃないことだけは確かだと思う。ストーンズが好きだったら、ちゃんと好きになろうぜって言うか」

僕はその日、異常に興奮していた。淡々と語られる中野さんの言葉には、ある一線を遥かに越えた

中野さんは、第二次大戦モノ（72分の1スケール）プラモのマニアでもある

人のみが持つ威厳すらあった。
「とにかく見かけたときには絶対に買う。二度目はないと思っているから。その時、金を持ってなかったら、いちばん近い親しい人のところで借りてでも、頼んで取り置きしてもらってでも。そうしないとやっぱり悔いが残るから」
今度のストーンズの全米ツアーは行くんですか？

「いや、僕はいまストーンズのコンサート見るんだったら、いいブート（海賊盤）がほしい方だから。今回の僕の予想では、まずはツアーのカセットが出回って、それからアナログ三十種類、CDが五十種類は出るんじゃないかな、ここ一年ぐらいで。だから今でもストーンズ探しに行くときは、二十万ぐらい持って行かないと不安だしね。何か使命感みたいなのがあって、自分自身の義務っていうのかな、やらなくっちゃって」
将来っていうか、中野さんが死んだときはどうするんですか、このコレクション。
「本を作ったときの相棒がいて、その人に『あげるよ』って言ってある。博物館を建ててもいいって言うぐらいのヤツだから。価値の分からない人にとっては、猫に小判だからね」
中野さんの義務感、そこまでさせるものって何なんですかね。
「僕の生き方っていうとカッコイイけど、僕の場合、オール・オア・ナッシング、百かゼロかですから。たとえば恋愛でも、惚れない

んだったら憎んでほしいという、そういう部分ってすごく分かるしね。普通の人は、みんなほどほどに生きてるでしょ。それはそれで、いちばんいいんだとも思うんだけど、僕はやっぱりそういうのは無理だなぁって言うか……」

〃オール・オア・ナッシング〃。

今回の取材で中野さんのお宅にお邪魔して、その言葉の意味がよく分かった。写真でお分かりいただけるだろうか。この部屋はまさしく大人の部屋だと僕は思った。

「勧められませんよ、こんな人生」

中野さんは静かに呟やかれた。

戦友 泉麻人（コラムニスト）の世界

もうずいぶん前になるけれど、泉さんがまだ朝井さん（本名）だった頃、仕事で初めてお会いした。『ビデオ・コレクション』という雑誌の編集部員だった朝井さんは、「今度、怪獣の特集をしたいからいちどお会いしたい」と僕に電話をかけてこられた。

忘れもしない新宿のDUG。少し遅れて行くと朝井さんという人はジン・トニックをすでに何杯か飲ったらしく顔が妙に赤かった。僕は仕事の打合せが始まる前に、さっそく持参した四冊のスクラップブックを差し出した。それは、小学校二年から五年まで集めたおした怪獣写真の切り抜きだった。

〃怪獣特集〃と聞いたときから、このスクラップ・ブックでガツンと一発驚かせたいと思っていた。怪獣マニアの挨拶のようなものだ。

「ほーう……」

朝井さんは赤い顔をして言った。

何か変だ……僕はそう思った。

普通ならここで「スゴイですねぇー」とか「異常ですねぇー」

概ね泉さんはカード系のモノに目がない。それを自ら編集し、雑誌、辞典に高めるのがスタイルだ。

のひと言があるはずなのに……。

「あのさー、じつは俺もね……」

朝井さんは下に置いた紙袋から数冊の僕と同じ種類のスクラップ・ブックを出してきた。

「ほらね……」

僕はショックだった。そこには当時、朝井さんが集めたおした怪獣写真があったのだ。自分と同じことをしてた人がここにいる。小学校の頃からだから、ものすごい歳月をかけて運命のように出会った人、それが朝井さんだった。

現在、コラムニストになられて、何かの雑誌で僕との初めての出会いを〝戦友に会った気がした〟と書かれていて、マニアであった自分がうれしかった。

「やっぱり初めは切手からだよね。コレクターを意識したのは。だんだんと国宝シリーズとかより、通常切手のツーの世界に入っていって。たぶん他のものでもぜんぶそこの部分にいく素養みたいなのがあるんだよね。ただ、その後のは怪獣とか、レコードとか、ジャンルがいっぱいでてきちゃったから。それをなにもかも収容しきれなくなって、のめり込んでいかないですんだっていうか」

泉さんは駅弁の包み紙やお菓子の袋、シール、バッヂ、自分が関わったありとあらゆるもののマニアだった。その数はスゴイ！

「俺ね、なんでもとっておく趣味っていうのがあってね。今でもそうなんだけども、何かでチラシもらったりするでしょ、たとえばお芝居見て。ああいうのべつに興味がないんだけども、ぜんぶ取ってあるんだよね。それが二年ぐらいたって見つかったりするの」

それは何か仕事に使おうとか思って？

「まぁ、とにかく置いておくんだよね。米米クラブとかのコンサートの切符みたいなやつ。何年かして、あぁ行ったんだなという証拠にしたいなっていうのがある」

ナルシストなのかなぁー、そーゆーの。

「自分が持ってることが重要なの。だから人のを見せてもらっても、まったくおもしろくないね」

高校ぐらいになって女の子を意識し始めるとマニア度は落ちるでしょ？

「女のコと話すときは、要するにコンセプトを甘くしてあげるでしょ。飲みやすくしてあげるわけ。その作業は、ほんとうのマニア道から外れているよね。たとえば怪獣に興味があるっていう女の子がいても、最初からメカニコングって言わないもんね」

やっぱり泉さんって、ディスコとか行っても〝これでいいのか〟と思いながら、ついマッチをポケットに入れて持って帰っちゃう？

「ズボンのポケットのなかでマハラジャの券が折れてたりするとすごい残念だったりするよね」

泉さんってマニアの世界で言うと何マニアって言うのかなぁ？

「なんだろう。俺の場合、〝自分がここにいた〟マニアと、がらくた屋じゃないかな？」

泉さんの下落合にある実家の部屋は、「勉強部屋」と呼ばれてた頃のままであった。

未来のマニア像
京本政樹(俳優)の世界

「ウルトラマンのウェットスーツで右の腕のところ、なかに入ってた古谷敏さんが右ききだから筋肉がついていたんで、そこの部分はちょっとつなぎになっていたんだよね。これはもうひとつの人体解剖教材みたいなもんですよ」

京本政樹さんの噂は聞いていた。仮面ライダー好きが嵩じて、『仮面ライダー・ブラック』にギャラ無しで出演したり……。

「ギャラはいらないから条件がありますって言ったんですよ。仮面ライダーになるってことは無理だから、僕はライダーの正体を唯一知っていて、しかもライダーと同じぐらいの働きをする、正体は元FBIだという役で出してくれと」

京本さんがストーリーを書いた?

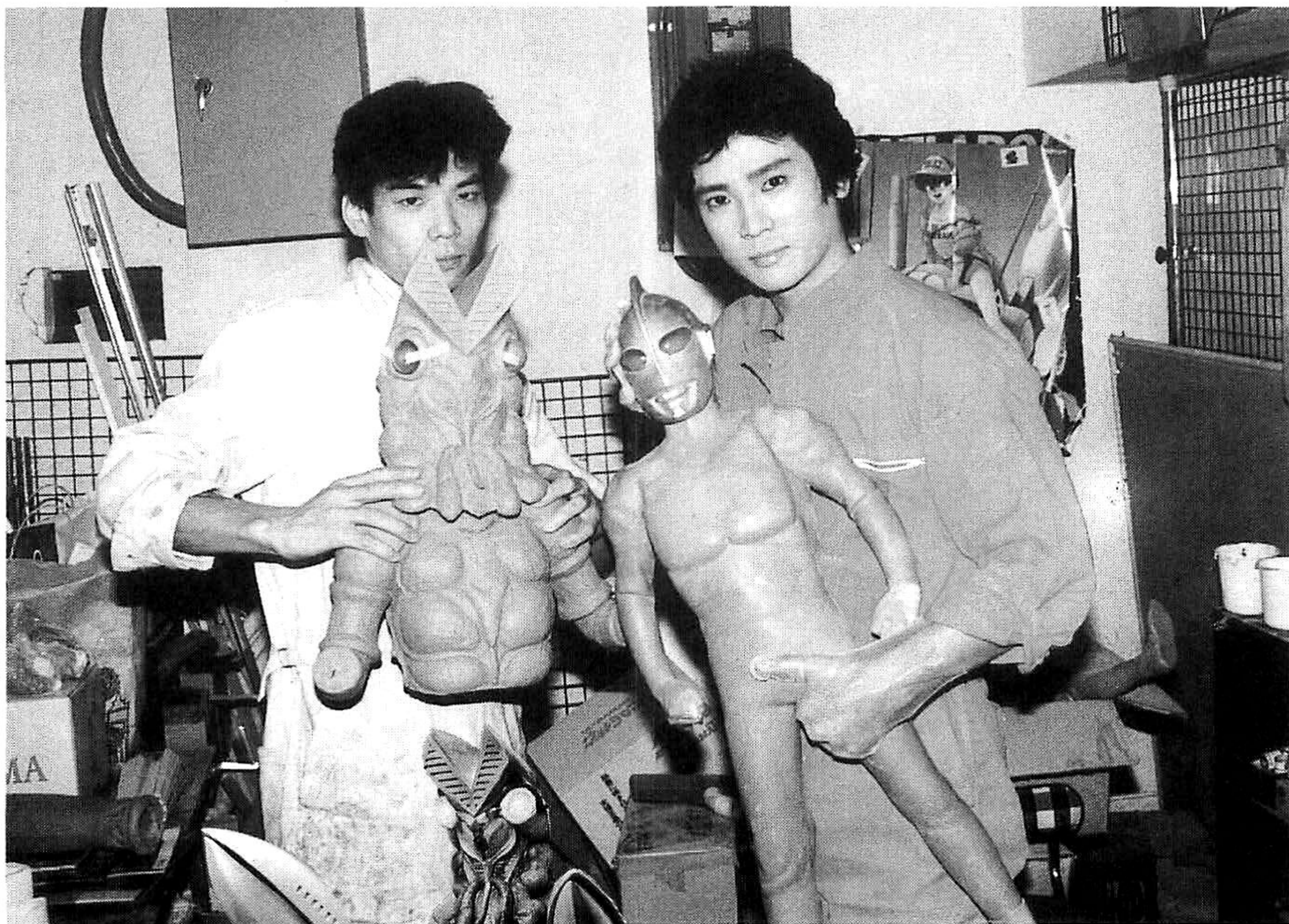
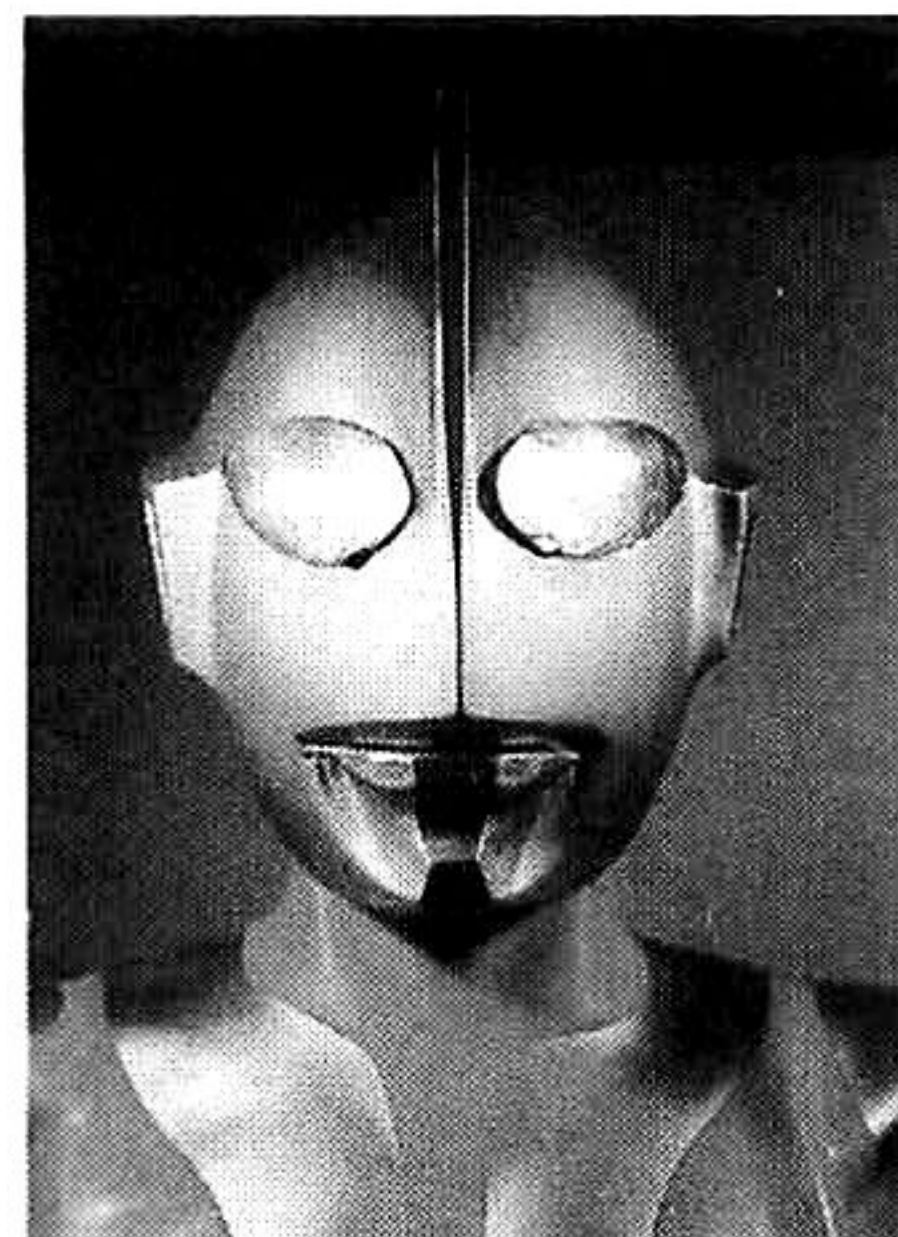
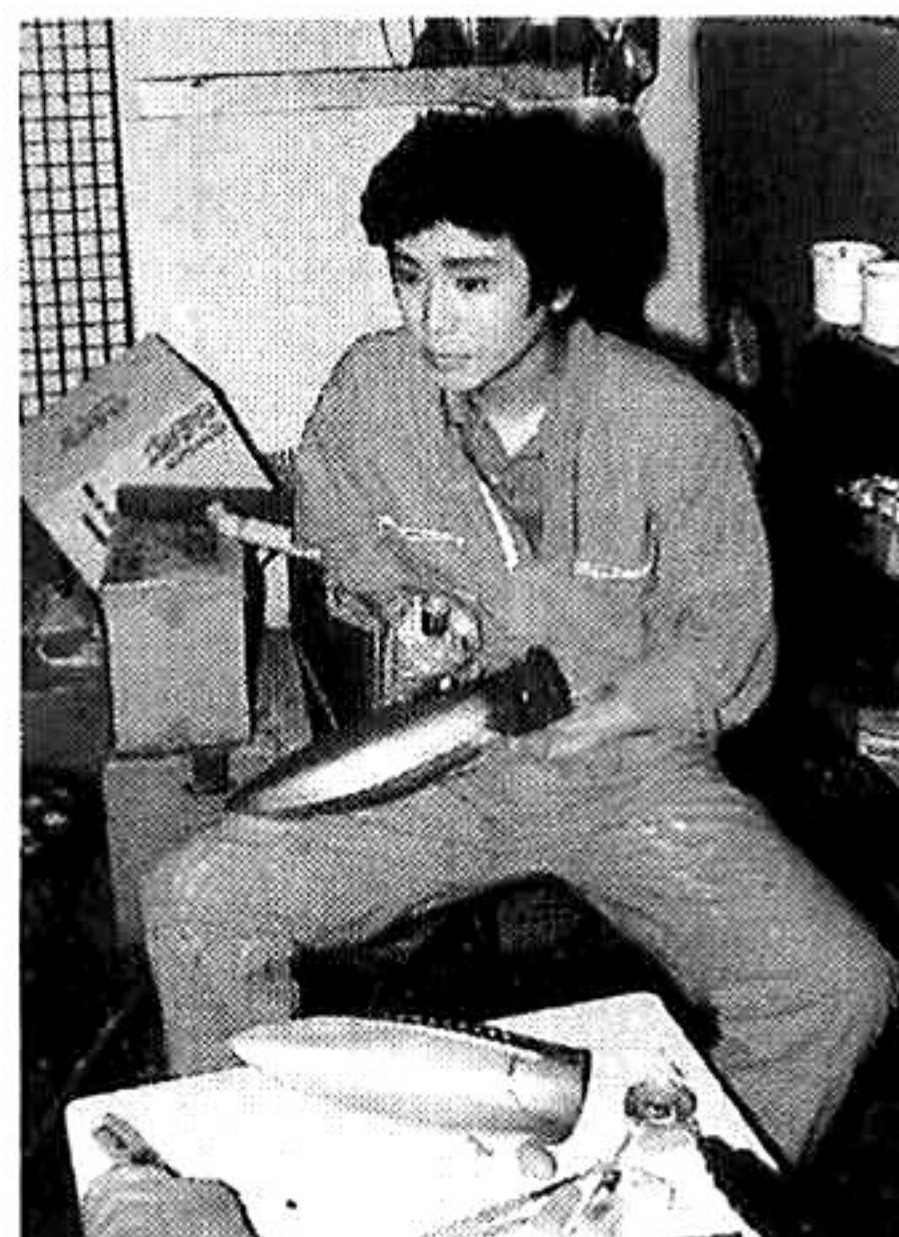
「まるっきりそのままです」

京本さんが仮面ライダーやウルトラマンにのめり込んだのは三年前ぐらいからだという。トーク番組で「昔、大好きだった」という話をしたことから始まったらしい。

すると京本さんは、ものすごいスピードでマニアに向かったということになる。

「もともと、造形が好きで大学も多摩美ですから。そういう要素はあったんですよ。だから初めてウルトラマンのリアル・ホビーの模型見たとき、衝撃あったですよ」

京本さんがその日、大切そうに持参したリアルなウルトラマンの人形は、現在、海洋堂模型の木下氏(リアル・ホビーの先駆者)といっしょに作っているものだった。

「これをおもちゃと考えていいのか。僕はもう芸術だと思ってるんです。今、ウルトラマンの本物も

京本さんの仕事は、時代考証ともいえる。科学特捜隊のヘルメット復元のほかにも、従来定説化しつつあったウルトラマン地下足袋説をくつがえすブーツの発見など、その森田健作ばりの熱意がマニアに与える影響は多大だ。

ないし、資料も写真しかないわけですよ。それをとにかく探しまくって克明に、リアルに再現する」

京本さんは自分のことを〝おたく族〟ではなく〝おそと族〟と呼ぶ。ウルトラマンの当時の関係者に暇を見つけては会いまくり、資料を探しまくるバイタリティは、アウト・ドア・マニアの鏡だ。

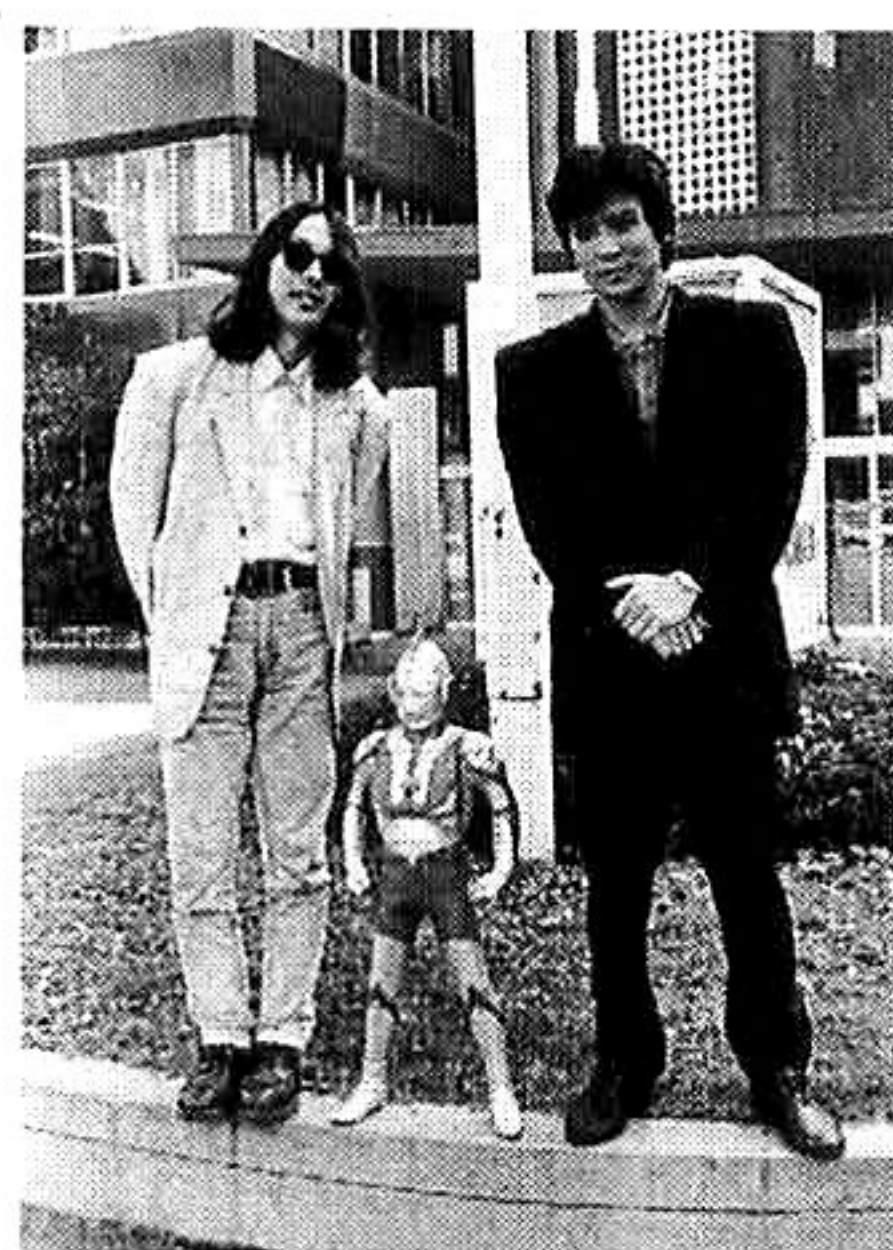
「僕が興味のあるのは仮面ライダーなら一号オンリー。それと、ウルトラマンなら初期のCタイプだけですね。もう『帰ってきたウルトラマン』とか全然ダメ。せいぜい『セブン』まででしょうね」

造形マニアの京本さんは言う。

「僕はそれ以外は、隊員服のデザインとかにこだわっちゃうんです。隊員が持って歩いてたヘルメットとかは、二十五年前の、誰がかぶってたのか分からないんですけれど、必死で探して手に入れたんです。たぶん僕は耳の位置からソガ隊員のだと見てるんだけど。ヘルメットの後ろを見ると『くの工業㈱』と書いてあって、その会社を電話帳で調べまくって、当時のペリカン・ペンギン・

シリーズという自転車用のヘルメットだということが分かったんです。当然、二十五年前の設計図があるわけでもなくて、でも事業部の方に当時携わっていた人がいたんですよ。そして、ついに僕は作ってもらったんです、隊員のヘルメットの原型を」

京本さんは普通の怪獣マニアとかSFマニアと違うんですね。

「普通ウルトラマンが好きだと言うと、昔のおもちゃから最近のおもちゃまで全部集めてるでしょ。僕の場合は造形にこだわっちゃっているというか。まったく本物か、本物を事細かに再現したもの以外には、興味がないんです」

ウルトラマンの顔と京本さんの顔が似てるのは気のせいだろうか。僕は京本さんを未来のマニア像と考えている。世間で言われる〝おたく族〟のイメージはひどく悪い。女にモテないというレッテルまで貼られている。ところが京本さんは女にモテてマニア、もちろん話はおもしろい。これは僕が理想するマニアの姿だ。

「僕は結局、ヒーローが好きなんですよ」

将来はウルトラマンの造形部分の監修をしてみたいと言われる。京本さんこそ、マニアのヒーローになる日は近いだろう。

天才のドキュメント・マニア

根本敬(漫画家)の世界

根本敬さんと僕は、『ガロ』という特殊漫画雑誌でデビューした。時期もほぼ同じぐらいだった

最近、根本さんがもっとも感銘を受けたのは北公次のアルバム。ジャケットも根本さんご自身が「自分でデザインしたかと思った」というほど。

と思う。

みなさんご存知ないかも知れないが、『ガロ』は原稿料が出ない。だから、イコール『ガロ』の漫画じゃ食っていけない。その代わりって言うと何だが、編集方針は他のメジャー漫画雑誌にない寛大さがある。だから描き手も自分のほんとうに描きたいもの、アブなさギリギリまで勝負してくる。

根本さんの漫画はいつもドキュメントである。気弱なサラリーマン、村田のオッサンが迫害を受けたり、時にはバラバラにされたり……。作者はただその姿を遠くから見続けている。そこには、かわいそうだとか間違っているとかの意見はない。ただドキュメントを追い続けているカメラマンなのだ。

そういうことからして、根本さんは僕が知るかぎりの漫画家のなかで、いちばん〝天才〟を感じる人だ。そしていちばん興味のある人だ。

天才の仕事場は散らかっていた。『ディープ・コリア』という根本さんの単行本がある。「韓国鯨狩りガイド」と銘打たれたその本は、もちろん普通のガイドブックなどではない。そこには、根本流ドキュメントで捉えた生の韓国がある。

「何故、韓国に惹かれたの？」

「何かよく分からないけど、僕は人の情念みたいなものにすごく興味があるんだ。韓国、とくにソウルという街はそんな人たちの集大成って感じがする。モヤモヤしてるものがあるんだ」

モヤモヤしたもの。根本さんの漫画に漂うなんとも言えない匂いは、そのモヤモヤしたものだ。

「強烈な個性の人間、ギリギリのところにいる人たちに興味があるんだ。その人が放つオーラみたいなものに」

根本さんは韓国ロック・マニアでもある。部屋にはレコードが散乱していた。どのジャケットを見ても、他国のロックにはない、まさに情念を感じさせるものばかりだ。

「僕はレコード自体より、それを作った人間の方にいっちゃう。日本のB級廃盤でも、どこかの不動産屋の社長が出した自主レコード

のようなものが好きなんだ」
根本さんは、そう言うと一本のビデオ・カセットを見せてくれた。そこに映っていたのは、不動産屋のオヤジがバリバリのスポットライトを浴び、歌う姿であった。
「好きになっちゃうと、コンサートにも行かなきゃなんないし、けっこうたいへんなんだよね。毎月、行ってるよ。何かよく分からないモヤモヤしたものが見たくて」
根本さんはそういう人を見つけると、まずじっくり時間をかけ調査する。本人と会って話をし、その人に関するものなら何だって集めたくなるらしい。
「だからたぶん普通の廃盤マニアとは違うんじゃないかな」
その筋で、値打ちが上がっている元アイドルのレコードなどはいっさい集める気がないのだ。
「どこかの商店のおやじさんが趣味が嵩じちゃって、とうとうレコードまで出してしまったとかさ。いるじゃない。いき過ぎたフツーの人みたいな人って。どこかやっぱりフツーの人と違ってパワフルなんだよね、そういうの」
そう言う根本さん自身も、何か物静かなパワフルさを感じる。
僕と根本さんは何年か前、〝ヘタうま〟ブームというやつで世に出た口だ。だけど根本さんの描く漫画、情念の世界にブームなどない。彼は世の中にモヤモヤ存在する不思議なものを採集する現代のファーブルのような人だと思う。
根本さんに無駄という言葉はない。普通の人なら〝何もそこまで〟と思うだろう人への執着や探求心は、もはやマニアの域を超えてさえいる。
マニアと言えば、物の収集と思われがちだが、それを生み出した人の情念を調査することこそ、行き着いたマニアの姿なのかもしれない。根本さんの漫画は、その研究発表と考えてもいいだろう。

各お宅の玄関先で収めたマニア〝マニア〟写真。最後は、駒沢大学前の根本さんの事務所で。

〝マニア〟マニア

マニアはいつだって期待以上だ。くやしいけれど、そのスゴさを分かってもらうには、実際に本人と会ってもらうしかないと思っている。
ここに登場していただいた四人のマニアの方々は僕の師であったり、戦友であったり、未知の人だったりした。分野はそれぞれ違うけれど、ひとつ大きなところで共通するものを持っておられると思う。それは、大人になりながらにして少年心を忘れない、いつまでも自分らしく生きていくことができる人たちということだ。世間は、そういう人たちに「異常」というレッテルを貼りたがるが、見栄を張って自分らしく生きられない人の方が、よっぽど異常に思える。
僕も、やっぱり世間では〝おたく〟と言われてしまう輩らしく、例の宮崎事件では「おたく代表としてのご意見を」といろいろとコメントを求められた。僕はその頃すでに中野D児氏にお会いしていたし、たんなる〝おたく〟などと言

ボブ・ディラン海賊盤ほか牛、カエル等みうら氏のコレクション（自宅にて）

われる自分はまだまだだと思った。
マニアの世界は、ひ弱な文化系の世界ではない。己の人生をも賭けた「侠気（おとこぎ）」の世界なのだ。そして最終的には、自ら仙人になる道だ。
僕はそんなカッコイイ人になれる自信は毛頭ない。今回の取材でそれがよく分かった。ひとつのことに自分の人生を絞り込むには、まだ捨て切れないものがたくさんあり過ぎるのだ。
でもひとつだけ高校時代から現在までコツコツと集め続けているものがある。それはもっとも自分の人生で影響された〝ボブ・ディラン〟の海賊盤である。ビートルズ、ストーンズ、ディランは海賊盤の多さでは他のミュージシャンの比ではないと言われているが、〝目標死ぬまで〟という長い目で僕は集め続けたいと思う。いつの日か、僕のディラン海賊盤ディスコグラフィー集を本屋さんや通販で見つけられたら、「あいつもとうとうマニアになったな」と褒めていただきたい。また会おう！

おたくの事件簿

大雪山謎のSOSから練馬警官刺殺まで、平成の世を騒がせた「おたく」たち!

あの倒木で作ったSOSは、ほんとうは誰へのメッセージだったのか?
衣食住に無関心な静かな青年を警官殺しに向かわせた力は何だったのか?
平成元年を騒がせた不可解な事件たちを、
犯罪ルポの第一人者が「切断」というキーワードで読み解く!

朝倉喬司 ルポライター

アニメ・ファン大雪山SOSとオカルト少女の自殺ごっこの共通感覚

風倒木でつくった「SOS」の文字。そして近くには次のようなメッセージを吹き込んだテープが残されていた。

「SOS、助けてくれ。崖の上で身動きとれず。SOS、助けてくれ。崖の上で身動きとれず。SOS、助けてくれ。場所ははじめにへりに遭ったところ。笹深く上へは行けない、ここから吊り上げてくれ」

今年の七月、マスコミをさわがせた〝大雪山SOS〟事件。テープはこのほかに「超時空要塞マクロス」「魔法のプリンセス、ミンキー・モモ」など、アニメの主題曲を収録したものが三本。テープと一緒に発見された運転免許証などから、木文字と声の「SOS」を残したのは愛知県江南市の敷島紡績江南工場工務課に勤めていた岩村賢治さんとほぼ断定された。岩村さんが北海道大雪山系旭岳で行方を絶ったのは昭和五十九年七月十一日のこと。当時二十五歳だった。現場付近にはさらに女性の白骨死体が散乱していて、こちらには遺留品はなく、対して岩村さんの方は遺体は未発見。いかにもいわくありげな〝事件の構図〟だったのだが、調査の結果、ふたりはまったく別の時期に、偶然同じ場所で遭難したものとみられるに至っている。岩村さんの失踪は五年前であるのに、白骨死体は死後一～三年と鑑定されたのである。

『ミンキー・モモ』はとくに好きだった

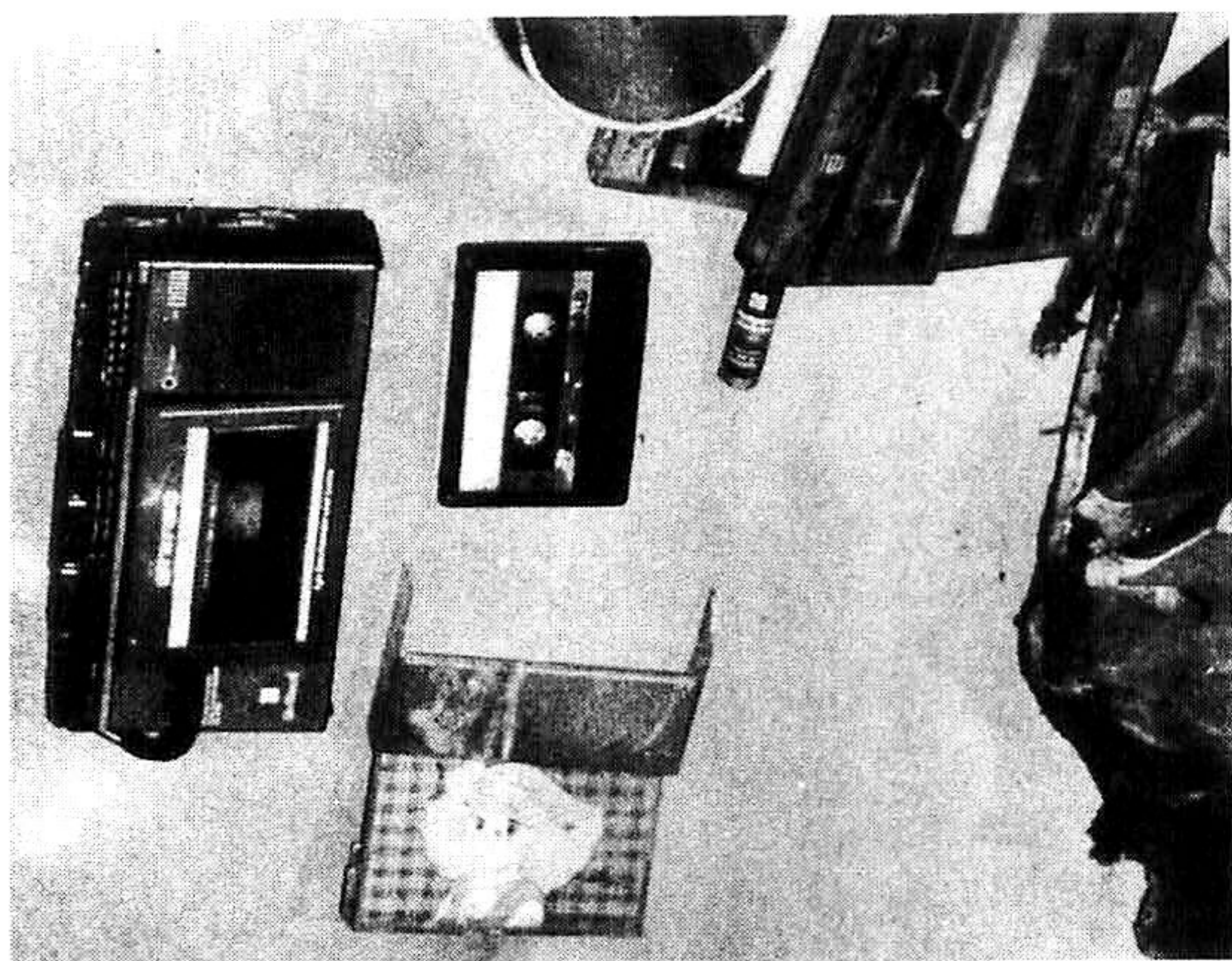
この事件の特異性は、現場に残された二種類の「SOS」そのものに集約的にあらわれており、それが遺留品から一見して明らかな岩村さんのアニメ好きと大いに関係がありそうにみえたことが、世の耳目をいやおうなくひいた。ちなみに、アニメ方面に詳しい浅羽通明氏によると、岩村さんが残した二つのアニメは、いずれも、意欲的なアニメクリエーターが「自分の趣味的感覚を盛り込み」「できるかぎりやりたいことをやった」マニア間で高く評価されたものだという。

岩村さんのアニメへの深入りぶりは、彼を知る人のほとんどが認めるところである。

「友達づきあいは下手で、グループから外れていたけど、いつもニコニコしていてね。アニメのキャラクターをトレースしたのをよく見せられましたよ。『ベリーローダン』とかいうアクション的なSF小説を何十巻とか持っていて、そのスジ書きや見どころを詳しく紹介してくれたり。マンガやアニメのことになると、とにかくよくしゃべりましたね」

と語るのは岩村さんの出身校、京都工芸繊維大学で同期だったOさん。Oさんによると彼は鉄道やパソコンにも凝っており、大学では鉄道旅行研究会とコンピュータ研

究会の二つのサークルに入っていた。
敷島紡績江南工場の寮で同室だったSさんにきくと、
「テレビの再放送を留守録して、仕事が済んでから一目散に帰ってそれを楽しむというぐあいでしたね。ええ、アニメ番組です。ちょうど再放送やってた『ミンキー・モモ』はとくに好きだったみたいで『学生時代のサークルのマスコットだった』とか言っていました。コンピュータ・グラフィックで、かなり複雑なアニメ画像（静止）を打ち出して見せてくれたこともあります。鉄道？　ええ、こちらもしょっちゅうひとりで旅行に行ってSLの写真などを撮ってきてアルバムにびっしり貼ってました。旅行先は北海道が多かったみたいです。なにしろ『ぼくはほんとうは国鉄に入りたかった』ってしょっちゅう言ってましたもの。ちょうど民営化の気運が高まったころで採用がなくて、入りたくても入れなかったんですね。鉄道はほんとに好きだったみたいでした」

岩村賢治さんと、その遺留品（写真中央下に「魔法のプリンセス　ミンキー・モモ」のカセット・レーベルが見える）

岩村さんは京都市右京区生まれ、大学では「制御工学」を専攻した。生産機械の複合的な動きを数式でシミュレートする「モデリング」という分野が、彼の選んだ卒論のテーマだった。紡績会社への就職は、やや不本意だったようだが、入社二年後の昭和五十九年はじめに、彼は「省エネプロジェクト」の一員に加えられ、
「先生に習ったことがようやく実地に生かせそうです」
と、指導教官だった砂原善文教授の研究室を訪れている。
「うれしそうな様子でしたね。彼は今どきの若者には珍しく卒業後も三度ほど私のところをたずねてくれて、そのつど名古屋のウイロウだとか、仕事で四国へ行った帰りだといってワカメなんか、土産にくれたものでした。プロジェクトの一員になったと言ってきたのが五十九年の三月。七月には休みをとって北海道旅行をするつもりだと言ってました」（砂原教授）
社会人としての人生レースに〝ヨーイ、

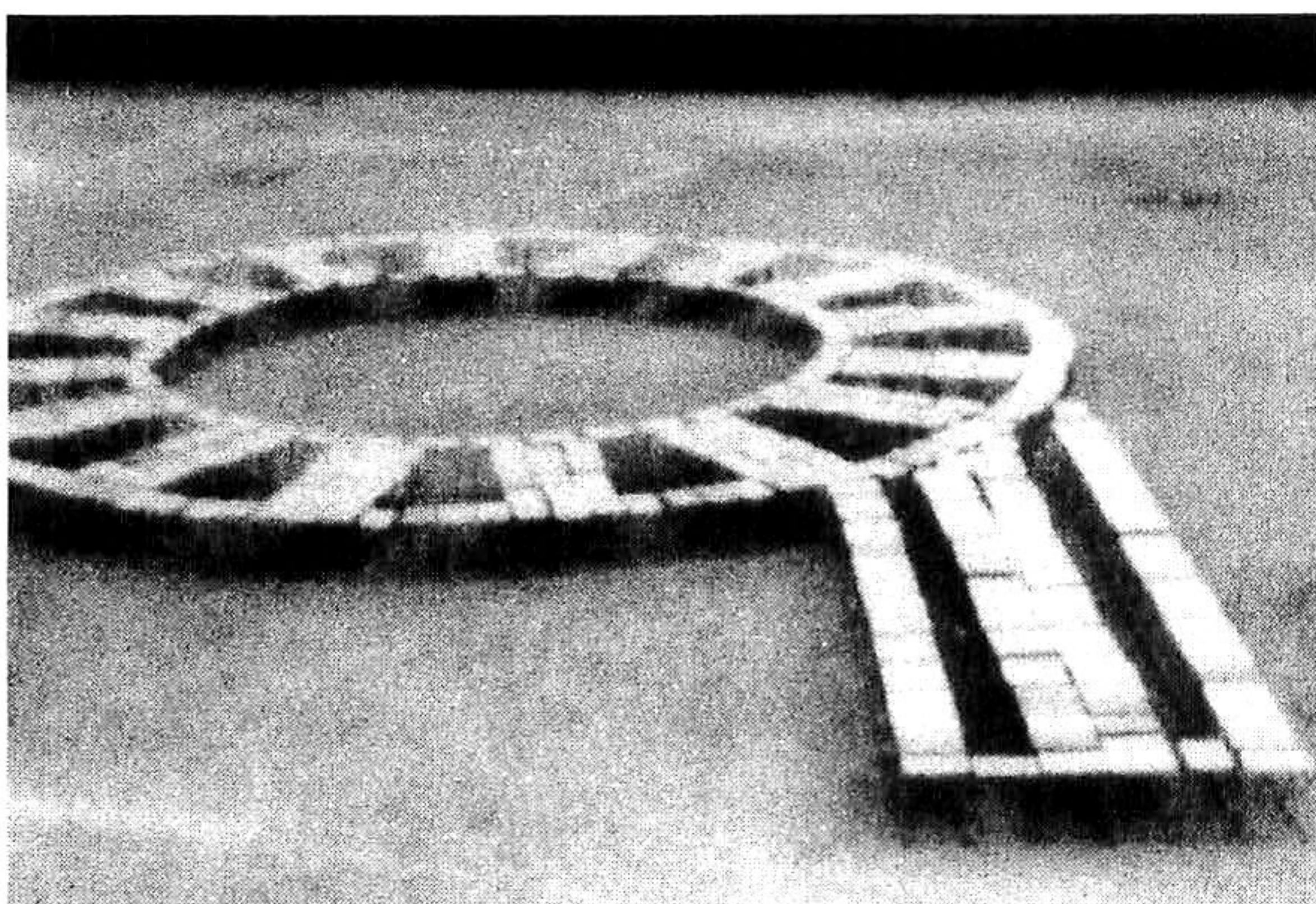
ドン〃がかかって、おそらくはそのひと区切りのつもりで旅行に出、そのまま行方不明になってしまったわけである。彼の名前が社員名簿から抹消されたのは、失踪二年後のことだった。そして、彼を知る証言者に例の「SOS」についてきいてみると、一様に「岩村君だったら、やりそうなことに思える」という返事なのが印象的だった。
「人づきあいのエネルギーをもっぱらアニメだとか鉄道へふりむけていた感じでしたから。とにかく詳しかった。大雪山へはたしか二、三度行ってるはずだけど、山登りを本格的にやっていたわけじゃありませんからね。遭難したような場合に、ああ、あいつはひとりでつちかってきた興味の領域であんなふうに対応したんだなと、なんとなく了解できるんです」
　と語るのは、もうひとりの大学の同期生、Kさんである。

縦五m、横二・五m、ズレた「SOS」のリフレイン

　話を「SOS」に戻そう。まず風倒木の「SOS」は、上空へ向けられたものだけに一文字が縦約五メートル、横約二・五メートルとかなり大きく、これだけのものをつくるのには「屈強なオトナでも丸二日はかかるだろう」と、地元の山岳関係者はみている。そこまでの労力と時間を彼は（遭難したものとすれば）なぜ正規のルートへ戻るなりの行動にふりむけなかったのかというのが、当初誰もが抱いた疑問だった。テープの「SOS」に関しても、これを再生したとしても上空のヘリに声がとどくはずはなく、いったい〃どこへ〃、〃誰に〃伝達しようとして吹き込んだのかよく解らない。言葉の配列は、リフレインを多用したポップスの歌詞のようであり、それが一語一語、からだから信号を発する思い入れよろしく区切って発音されている。演劇の発声練習のようにもきこえて、切羽詰まってナマの感情をあらわにした様子のものではまったくない。
　また「崖の上で身動きとれず」とあるが「SOS」の場所は湿原で、崖の上ではなく、「場所ははじめにヘリに遭ったところ」というのも伝達の要件を大いに欠いている。山中で岩村さんがヘリに出会ったとして、ヘリの側が彼を視認していないかぎり、この言葉は第三者に「場所」を指定することなどできない。さらに言えば、ほんらいこれは、視認したという了解が双方に成立してはじめて出てくる伝達の言葉のはずだ。

「はじめに……」については、これも右記のような条件を満たす形で少なくとも二度、ヘリと岩村さんが出会った場合をのぞいては、彼ひとりの経験範囲に意味をなすだけの、いわば主観的な「出来事」を指示するほかはない。昭和五十九年七月当時、現場付近でヘリが岩村さんらしき人物を視認したという報告はなく、テープの「ヘリ」は彼がただ〝見た〟にすぎないものか、想像のうちに、目撃を〝了解しあった〟ものか、どちらかだろう。それやこれや、岩村さんの「SOS」は救援を求める手続きの実際性とはかなりズレているのだが、ここで私が注目するのは、まず「字はあまりうまくなかった」という岩村さんが、なかなかにきっちりした、デジタル文字様の「SOS」をつくったことだ。

「9の字」と「SOS」映像化されるべき「上方への映像」

もちろん、紙に書く字と工作してあらわす文字を一緒くたに論じるつもりはないが、なおかつ私は、「SOS」に横溢する字体意識について、作成に費やされた労力の途方もなさとあわせて（岩村さんは風倒木から白樺の木を選んで集めている）、あの場における彼の「文字」への、そして文字を文字として成立せしめるべき「上方の空間」への、なみなみならぬ集中度のタマモノだと考えてしまうのだ。そのことで思い出すのは、昭和六十三年二月二十一日、東京都世田谷区立砧南中学で起こった「9の字事件」である。同日深夜、校内へ侵入した九人の少年たちは、教室の机四百脚あまりを校庭に持ち出して「9」の形にならべた。この間わずか二〜三時間。しかも出来上がりはモザイク文字様で、ビジュアル効果満点の「9」。こちらの方の集団的な集中度もまたたいしたものだった。首謀者格のひとりは逮捕後、「あれは宇宙人へのメッセージであり」「一九九九年には自分らが日本のトップに立つ宣言」なのだと述べたが、それよりなにより、あの「9」には、上空からTVカメラに映され、映像として〝情報化〟されることへのあからさまな期待感が漂っていた。

岩村さんもまた、別種の期待感を持って「上空の空間」へ向けた文字信号をつくったにちがいないのだが、そこへ現出すべきヘリへの距離の感覚は、すでにみたように、奇妙なぐあいに錯綜している。作業の全体は上方への集中力を軸としながら、メッセージの具体性は、主観的な「出来事」の継起の領野へジリジリとはみ出していった

机で作られた「9」の字

趣なのだ。したがって彼の「SOS」に応じてやってくるべきヘリは、「出来事」の継起のワンポイントにあらかじめセットされたものであるか、さもなければまったく逆に、「出来事」がアレンジする領域性への唐突な、えたいの知れない闖入者のようなものでしかありえないだろう。こうした、ありうべからざるヘリの機影を事態の「転換点」としてその場にむかえるべく、はるか遠方にキャッチするTVスクリーンを、アニメ映像の集中的な受け手であった岩村さんは、そのカラダに内蔵していたみたいである。そんな彼のカラダが現場から消えたあと、今度は正真正銘、TVカメラを〝内蔵〟したヘリが上空に現われ、「9」の字顔負けの、ミステリアスな「情報」を、目一杯、映像化したのである。この暗合の成りゆきこそ興味深く、じっさい、消えた青年の遺留品と女性の白骨（の情報）、そして「SOS」が配置された大雪山のあの映像は、もし岩村さんがあそこに自らの「死」を演出したのだとすれば、まさに完璧な仕上がりというほかはない。もちろん、それはありそうもないストーリーである。にもかかわらず現場の状況は、〝誰か〟が（ちょうど「9」の字の少年たちのようにあからさまな期待感を持って）意図した、その意図どおりに「出来事」がアレンジされたかのごとき様相を呈した。これが私にはなんだか〝ミステリアス〟なのだ。

事実の継起を追った情報の文脈が、どこか目にみえない領域に進行していたもうひとつのストーリーの介在によって切断され、たちどころに自己完結せしめられたみたいなフシギな感じ。この〝ミステリー〟にからだを浸していると、「SOS」に応じてやってくるべきヘリの「機影」ではなく、むしろあの場における岩村さんの存在こそが「出来事」の継起にあらかじめセットされた「転換点」ないしは、ことの流れの「切断点」のようにもみえてくる。自分の遭難そのものが肥大化した情報システムの律動への、あらかじめの同調ポイントであり、その「点」の上になすすべもなくうつ伏せになり、はからずもことの流れを前後に切り離してしまった彼の姿なども目の前にほうふつとしてくる。

役割分担で自殺する三人の前世のお姫様

そういえばこの八月、世間の意表をつく「自殺ごっこ」をやった徳島市の女子小中学生三人も、仲よく市内の自転車専用道路にうつ伏せになっていたのだった。そしてこちらの方もまた、彼女たちのカラダが、事実の継起に係る「切断点」をなした形跡がありありだったのである。事件を報道した「朝日新聞」の記事から、次に抜粋してみよう。

「北島署の調べでは――（中略）――三人は、自殺を図ろうと薬を飲むが、結局は助かるという筋書きを書いた予定表を持っており、この予定表に基づいて行動したのではないかと見ている」（八月十七日）

「徳島市内で十六日夜、女子小中学生三人が鎮痛解熱剤を飲んで病院に運ばれた事件

は、三人が前世ではお姫様で、意識不明になれば前世がのぞけると思い込み、自分たちで自殺ごっこのシナリオを書いて実行に移していたことが徳島県警北島署の調べで十七日、わかった。調べによると、三人は十六日朝から徳島市内で買い物をしたり、アニメ映画をみた後、市内の薬局で解熱剤を買った。シナリオによると、三人は薬を飲んだあと一人がその場で意識不明となる。残る二人のうち一人が一一九番したあと倒れ、最後の一人も助けを求めて叫んだあと気を失う、などとなっていた」（八月十八日）

筆者が傍点を付した部分に「切断点」が見え隠れしており、記事の文脈じたいも、ときならぬ「意味の断続」を余儀なくさせられている。

「自殺を図ろうと薬を飲むが、結局は助かった」クダリは事実を叙述したものなのに、それが我知らず切れ目を抱え込み、事実は「予定」に吸収されてしまう趣。「意識不明」「倒れ」「助けを求めて叫んだあと気を失う」といったニュースの文脈にとっては由々しき、ゆるがせにはできない事態が、「シナリオ」の介在によって断点を生じ、事実はジリジリと果てしなく、仲よし三人少女によって作為された「ストーリー」に溶け込んでいくばかりなのだ。そしてまさしく、彼女たちのやったことは「死」の演出にほかならず、前記役割分担にしたがって飲む解熱剤の量は、それぞれ八錠、一錠、ゼロ錠ということに決められていた。数量の落差による「出来事」の切れ目によって、彼女たちは死なずに死に、あわよくば前世をこの目（お姫様の視線？）で見て帰ろうという算段だった。この「切断点」こそがストーリーの「起点」であり、ストーリーによって「死ぬ」ことが、死なずにすむ最善の手段として選択されている。そして、このストーリーは生と死が〝どこかで〟連続してしまっている彼女たちの日常感覚から、きわめてムリなくひき出されてきたものだろうと思う。また、この局面において前世を〝視認〟すべき視線は、「SOS」や「9の字」において、仮定または期待された上方の空間からのそ

徳島の女子小中学生は薬を飲む前に宮崎駿監督のアニメ映画「魔女の宅急便」を見て、みずき健のマンガ「シークエンス」（新書館）を持って倒れていた。「シークエンス」は、交通事故で生死の境をさまよった少年と、先史文明時代の前世の記憶を持つ少年との物語。

れと〝どこかで〟重なりあうはずである。すなわち「死」の領域から、自分たちの環界へ向けられた視線の、身体への装置化。これが、それぞれの事件を基底で通じあわせている、当事者たちのテーマだろうと思う。

死の装置化に基軸を定めた当事者たちのカラダは、出来事の連鎖軸をまず切断し、さらにはその社会的な意味の区分をくい破る。

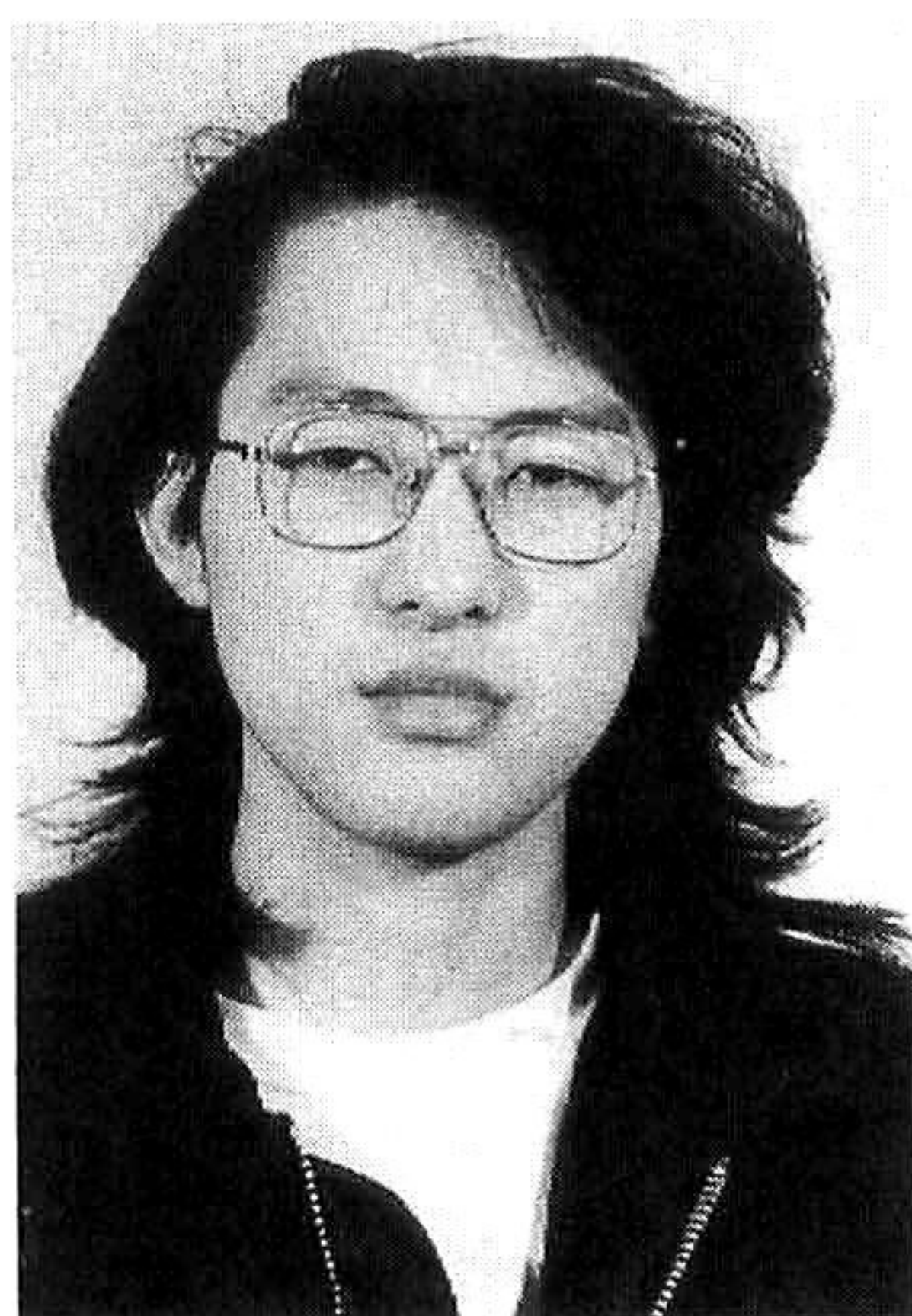
報道の文脈からすれば以上にあげた三つの事件は、それぞれ事故であり犯罪であり、度の過ぎた遊びである。しかし、そうした意味の区分が構成する共通感覚の磁場に、当事者たちのカラダはいっこうに吸着されるようにはみえない。逆にカラダが、破線状をなした区分線のスキ間からはみ出しておたがいに溶けあい、溶けあいのストーリーを分泌しはじめている様子なのだ。

小四絞殺のファミコン・マニアと警官刺殺のミリタリー・マニアの、単独化したカラダ

十月十二日と十八日の両日、私は東京地裁へ、ふたつの公判の傍聴に行った。ひとつが今年三月五日、東京・麹町のマンションで起きた「小四男児絞殺事件」。もうひとつの方が、今年五月十六日、これもやはり東京・練馬で起きた「交番警官刺殺事件」である。被告人は前者が自転車組立工・肥田浩三、二十二歳（犯行時）。自室へTVゲームをやりにきていた麹町小四年のH君（十歳）に「おとなのくせにプラモデルで遊んでいる」などとからかわれて、カッとなって絞殺したということで起訴されている。H君の言葉にあるように、肥田は中学生のころからプラモデルやミニカーのマニア。彼の部屋はそうした方面のコレクションやTVゲーム機、ゲームソフトなどがいっぱいで、「シールをくれたりする面白いお兄さんがいる」という口コミを通じて集まった小学生たちのたまり場になっていた。なかでもH君は、母ひとり子ひとりのせいもあってか、毎日のように部屋に入りびたり、肥田とは大の仲よしだった。

もう一件の方の被告は柴崎正一、二十歳（犯行時）。今年三月、二年間勤務した自衛隊を除隊したあと、運転免許取得、七五○ccバイク購入などで約百四十万円あった貯金のうち約九十万円を遣い果たしたのが、犯行のそもそもの起点だったと検察の冒頭陳述は言う。貯金の大半が消えて、「このままでは人に使われる人生を送るしかない」と、柴崎は大金の取得を思い立った。そのためには「銀行か（競馬場とかの）ギャンブル場を襲う」のが近道と考え、そのための武器（ピストル）を手に入れるべく、ひとり暮らしのアパート（東京都中野区上鷺宮）近くの練馬署中村橋交番を襲って警官ふたりを、かねてより用意していたサバイバル・ナイフで刺殺したというのである。

ともあれ私は、事件の犯人ふたりの「カラダ」をこの目でみたいものだと思った。

肥田浩三（二十二歳）

「人形の悲しみ」を妄想した男の「爆発的なイラだち」

傍聴席からみる肥田のカラダは、ひょろりと細長く、色白のヌメッとした、銀ブチメガネの顔を終始頬杖で支えていた。頬杖といっても被告席の前に机があるわけではなく、膝の上にからだを折り曲げるようにしてである。証言台に立つときのほかは、肥田は終始こんな姿勢で、じっとうつむき加減のままだった。

肥田のこのカラダには、責任能力がそもそも稀薄であることを弁護人はしきりに強調した。なにしろこのカラダは、中学時代「本人にもわからない（自覚外）」まま、年に二、三度は家を出て山野を彷徨し、帰ってきても自宅のまわりをぐるぐると〝回遊〟するばかりで、ついに玄関から入ってこようとしなかった。自衛隊（肥田は中卒後、しばらく自衛隊にいた）の上官の証言によれば、インスタントコーヒーを淹れさせると砂糖やコーヒーの粉末をいつも「常識外れにたくさん入れ、いくら注意してもそれが除隊までいっこうに改まらなかった」そうではないか。転職も頻繁であり、その間成人の友人をひとりとしてつくることはできなかった。組立工としてつとめていた自転車店の主人は「ネジがゆるんでいた」と彼を評し、「自分には弟がいる」「人形にも悲しみがある」といった妄想にかられながらプラモデルに熱中する毎日だった。この事件のそもそものきっかけは、昭和六十三年暮れごろ、近所に流れた「(肥田は）小学生たちを集めて窃盗を教唆している」という噂である。誰がそんな噂を流したのかと腹立たしい思いでいたところ、事件三日前の三月二日、夕食の弁当を買いに出たときに、店先で女性たちが立ち話でそのことを話しているのを耳にした。これに「爆発的なイラだち」を感じてその日は夜おそくまで寝つけなかった。そして被告は、噂の出所について本件被害者を激しく問い質し、ついに彼が学校の先生に「ウソのつげ口」をしたことを認めさせた。事件前日の三月四日のことである。翌五日、被告が外から部屋へ戻ってみると、もう「来ないだろう」と思っていた本件被害者がいて、ファミコンに熱中していた。そんなH君の様子をみるにつけ、肥田は、以前からこの少年がファミコンソフトを勝手に持ち出していたことなども思い出して「極度に感情的になり」、再びなじったところ、前記からかいの言葉が返ってきて怒りは「頂点に達して」殺人に至った。この事実経過をみても、本件が被告の（小学生と対等にわたりあってしまうような）極端な精神的未熟さを背景にしたものであることは明らかであり、その未熟さはたんに幼稚として

とらえられるのではなく、一定の（精神的）障害の介在が認められる。犯行時も心神耗弱状態だったと考えられる。おおよそ以上が弁護側の主張だった。対して検察側は、被告に精神病の既往症歴はなく、そのような主張に理由はないと述べ、犯行時の〝残忍さ〟、死体隠匿（肥田はH君の死体をバッグに詰め、おもちゃを入れたダンボール箱を上に置いて自分は部屋から逃げていた）の〝悪質さ〟を問題にした。

すなわち肥田はH君の後ろエリ首をつかんで洗面所に坐らせたうえ、最初は「撲殺しようとしたが」血が出ると困ると思いなおし「自転車のチェーンでやろう」かとも考えた末、結局、自転車掃除用のパンストで絞殺することを思いつき、そのとおり実行した。パンストでH君の首を絞めながら「背後にかつぎあげ、苦しそうにうめき声をあげ、足をばたつかせる」H君を絞緊しつづけ、静かになったところでいったん力をゆるめてからだをさぐり「心音を確認し」たあと、今度はパンストを縄状に編みあげて再び「自己の背後にかつぎあげて」死に至らしめている。無防備な十歳の少年の不意をついて、途中犯行を断念する機会もあったのにやめず、「確実に殺そうとした」被告の行為には「人間性の一片だに認められない」というわけである。こう論告したうえで検察は肥田に懲役十五年を求刑した。

起床六時、就寝十時 昼食メロンパン一個

次に、警官殺しの柴崎の「カラダ」はどうだったのか。赤っぽいチェックのシャツから伸びた、やけに細い首と、肥田のようにうつむき加減ではなく、背筋を無理なく伸ばして前方を見た切れ長の目が印象的だった。しかし顔だけではなく、からだ全体に表情が乏しいことでは肥田とよく似ており、感情をどこかへ預けっぱなしにしたカラダ、あるいは心の動きを吸収してしまうカラダとかいったフレーズが私の頭をかすめた。そんな彼のカラダをある局地的な仕方で活性化させたのがサバイバル・ナイフである。そしてまた双眼鏡。柴崎の使ったサバイバル・ナイフは、マニアの間では有名な米ガーバー社製。狩猟、軍用につくられた特別仕立てのものである。双眼鏡は、犯行直前に池袋のカメラ店で買い、焦点を微調整したうえ、路上に停めた車から、ターゲットの中村橋交番を（警官がひとりで外へ出かける機会をとらえようと）見張るのに使った。また、指紋を隠すために着用したのが自衛官時代に支給された、繊維をきつく詰めた特別製の緑色の軍手。これを彼は「血を吸ってかえってすべりやすくなる」と考えて、ナイフを振るうべき利き腕には使用せず、左手にだけ着けた。こうした小道具の揃え方や、ひとり暮らしのアパートの四畳半に積みあげてあった『コンバットマガジン』『ゴルゴ13』などにマスコミは注目し、彼の犯行を、銃器へのマニアックな興味がひき起こしたウォーゲームもどきのものとみた。

しかし、種々の報道の断片や、法廷での

やりとりから私のみるところ、この事件はたんにゲーム感覚が増幅したあげくひき起こされたようなものではない。私がまず注目するのは、柴崎がアパートの住人のひとりに語ったという次のような言葉だ。

「自衛隊の訓練はストレス解消になるけど、わざわざ自分たちで勝手に仕事をつくってやっているみたい。それがなんだか面白くなくて心のなかではムカついているんだ」

自衛隊には「武器の体系」はあったとしても、それと関連して展開さるべき「行為の体系」はない。ホントはないのにあるようにみせかけられた日常が「ムカつく」。柴崎が言いたかったのは、こういうことだったのだろう。柴崎は前記上鷺宮のアパートを「本の置き場にするつもり」で、まだ入隊中だった昨年の夏に借り、休日などにはやってきて、「ひとりで過ごして」した。そして除隊が近づくや、自動車教習所通い、自動車免許取得、ナナハン購入、自動二輪の教習所通いと、非常に速いペースで自分の生活に「体系」をもたらそうとしている。

アパート住いをはじめてからも彼は、きわめて規則的な生活を送っていた。起床は朝六時、就寝は夜の十時。「食い物には金をかけたくない」と食事はきわめて質素で、アルバイト先のコーヒー豆販売店での昼食も、朝出勤時に買ってきたクリームパンとかメロンパン一個。昼休みは三十分間なのに十分くらいで食事を済ませてすぐ仕事にとりかかる。店長が食事の粗末さを心配すると、「昼と夜は簡単にしてますけど、朝はホットプレートでいろんなもの焼いて食べているから平気です。店長こそ、あんまりぜいたくしたらだめですよ」

と逆に〝注意〟される始末だった。

逮捕直後の柴崎正一（二十歳）。公判時も同じ服装だった

アパート→ナナハン→ナイフ→双眼鏡→そしてピストル

これらすべては柴崎の、自衛隊から離れた自分の「単身」を基軸に、あくまで自前で、「行為の体系」を編みあげていこうというなみなみならぬ意欲を示しているようにみえる。ところが、この形成途上の体系は事態が「単身」の住居の確保→免許取得

↓ナナハン購入ときた時点で、貯金の大半が「消費されていた」という「断点」に直面する。経済がアレンジするシステムの稼動性と、単独化したカラダは「切断」され、さらにサバイバル・ナイフ↓双眼鏡↓緑色の軍手↓レンタカー（柴崎は犯行にレンタカーを使用した）↓（獲得さるべき）銃器という、急速度で編成された「武器の体系（システム）」が、「出来事」の流れを「切断」して、単独化したカラダと結びつく。武器の体系（システム）と結びついた「単身」の、いじらしいほどのシステマシイこそ、ここでの見ものである。「単身」は犯行着手日をアルバイト先の定休日である火曜日の前日、すなわち月曜日に定め、先ほどの双眼鏡、軍手に関する準備をととのえてレンタカーを借り、服装はといえば黒のタテ縞シャツ、やはり黒のジャケットとズボン。靴下は赤。車で〝出撃〟して、交番近くの西友ストア商品搬入口前の路上で見張りをつづけた末、二度、機会をとらえようとして果たせず、三度目に警官のひとりが交番から離れたのをみて、それを路上で襲ったのだった。ナイフ、タオル、軍手の片方を入れたビックカメラの手さげ袋を手に警官に近づき、電柱の陰でなかからナイフをとり出してケースだけを袋に戻し、袋はそこにおいたまま警官の正面に素早くまわり込んで胸を力いっぱい突き刺した。尻もちをついた警官の拳銃ケースに手をかけて奪おうとしたが「あわてていて」なかなかとれず、そこへ交番に残っていたもうひとりの警官が駆けつける。柴崎は、もみあいの末、この警官も刺して、その場から走って逃げたのだった。アパートへ戻った彼は、いつも出入りする表入口が、開閉のときかなり大きな音がするのに気づいて裏口へまわった。裏口から自室へたどりつくと、室内は蛍光灯の豆電球だけがついている状態だったが、灯りをつけるとあとで怪しまれると考えて、薄暗がりのなかでジャケットを脱ぎ、ズボンに付いた血をぬぐった。外でパトカーのサイレンの音がし、ここではじめてビックカメラの手さげ袋を現場に置き忘れたままだったのを思い出し、不安になり、結局朝まで眠れなかった。（いつもの起床時刻である）朝六時、表の様子をさぐるべく外へ出、セブンイレブン富士見台店へ入ったとき、TVのニュースで「二警官が殺害された」のを知る。以下、結局は遺留品が決め手となって逮捕されるまでのいきさつは省く。公判での、検察、弁護側双方の争点は、ここでの彼の行為に、警官への殺意があったかどうかに絞られていくようだった。検察側が、被告は、殺意を持って警官の「胸」などを「力いっぱい」刺したと主張するのに対して、弁護側は彼はただ「銃がほしかった」だけであり、そのための手段として、あるいは「逮捕を免れるべく」ナイフを使用し、その結果死に至らしめたのだと反論していた。

「モノの体系（システム）」だけが自己増殖する

いずれにしても、単独化した柴崎のカラダにおとずれた事態は「行為の体系（システム）」の自

己増殖であるように私にはみえ、この自己増殖をゲームと言って言えなくはないと思う。しかしそうだとすると、この「ゲーム」は、あまりにも「単身」の生活に骨がらみになっており、生きるための要件のような趣すら濃い。公判で弁護人が、この事件には、

「行動に至るまでの動機に不可解な点が多く、突然、ひき起こされたようにみえる本件の行動の心理構造を明確にしていく予定である」

旨述べ、さらにつづけて、

「恵まれない家庭環境に育った被告の、生き方を懸命に模索した、人生ドラマの一断面とみるべきだ」

と弁じたのも、このことと深く関連するはずである。

そして「行動の体系（システム）」が、出来事の流れのある「断点」をきっかけにして自己増殖をはじめるという現象は、現象としてみれば、高度消費社会と言われる現代に、きわめて一般的なことのはずである。

これまでみてきた、それぞれ趣のちがった事件に登場するカラダたちはみな、「モノの体系（システム）」が分泌する、あるいはそこへ外づけされたストーリーの延長線上に、いつの間にか、自己増殖を励起せしめるべくセットされた「断点」そのものであるか、切断の現場に直面して立ちすくむほかない「単身」であるのだろう。そう、「崖の上で身動きとれず……笹深く上へは行けない」ような。

「自分には弟がいる」というストーリーを抱え込んでしまった肥田のカラダは、遊戯に供すべく部屋に配置されたプラモデル、すなわち「模造品の体系（システム）」と連結し、「悲しみを持つ人形」のストーリーの自己増殖の方向へ、出来事の流れを切断してしまった。「武器の体系（システム）」に共振するカラダがくり出すストーリーに沿ってひたすら行為した柴崎の場合とともに、そこにある一個の人格の「殺意」を確定することなど、ほんとは誰にもできないだろう。

殺意がもしあったとしても、それは彼らのカラダにではなく、断点を起点として増殖する「行為の体系（システム）」にあらかじめセットされていたか、あるいはカラダとともに収束した「点」以上でも以下でもないようなものか、どちらかだと思う。H君のカラダをさぐって心音を確認した肥田は、殺意を発動してそれをやったのではなく、ただ切断すべき流れの手ざわりに浸っていただけのように私にはみえる。

そんなことを頭に去来させながらあの法廷の光景を思い出すと、「殺害」や「殺意」をめぐって法の言葉を駆使し、甲論乙駁のやりとりを展開している「法曹人」たちを、まるで「悲しみの人形」のうごめきを眺めるみたいな気分で、肥田も柴崎もあのように無表情だったように思えてくる。ここにとりあげた数々の事件に共通した特質をひとつあげるとすれば、消費の渦動がもたらした社会の文脈の断点にはまりこんだカラダが分泌する、もうひとつの〝生〟のストーリー、といったことになるのだろう。

PART ④

おたくと高度消費社会

おたくの「場」を読む！

雑誌投稿欄や伝言板に見る、おたくたちの裏のネットワークの磁力

この世界は虚構だと知ってしまった人類は
自分自身をも虚構にしはじめた。
「おたく」は自らをメディアと化して
アニメの美少女になったりしながら
ネットワークを広げ、
裏世界を作りあげる！

井筒三郎 評論家

恐龍はなぜ滅んだのか？

恐龍はなぜ滅んだのか。いろいろな説があるが、ほとんどは「環境」から説明されている。氷河期の到来説にはじまって、重力にたえられなくなったというものから、地球に巨大な隕石が落ちて環境破壊がおきたからだという説もある。

個人的な好みからいうと、重力に負けたという説にひかれるが、どうも最近の研究によると、恐龍はかなり軽快なフットワークで動きまわっていたらしい。年々強まる地球の重力に、あの巨大化した肢体をもちこたえることができず、地平線のかなたまで累々と恐龍の屍体がかさなりつづいている、というイメージは影が薄くなったようだ。今の爬虫類よりは温血動物に近く、動きも鈍重ではなく機敏に捕食活動をしていたという。現代の何かに喩えるとすると、保険勧誘員のおばさんあたりを引きあいに出せば、その明確な像を結ぶことができるかもしれない。

それでもわたしは重力不耐説の魅力もすてがたいので、ほんの少し見方を変えてみた。というのは、重力は、恐龍の巨大な体軀にばかり影響をおよぼしたのではなく、その精神のあり方にまで影響がおよんだのではないかと考えたのである。つまり「意識」に注目したのである。

恐龍は恐龍史上いまだかつてないほどの深刻な問題に直面した。すなわち、存在論的な悩みである。

わたしはなぜこのように巨大な体なのであろうか。恐龍の脳裡にまず不意にその疑惑がよぎり、その疑惑点をよりどころにして考えをすすめる。なぜこのように巨大な存在なのだろうか。そして倫理的に考える。わたしはなぜこのように巨大な存在としてのあり様をひきうけなければならないのか。恐龍は苦悶する。そして苦しみ考えぬいた末に、凝縮された用語へと思考を昇華させる。わたしはなぜこのように巨大化した現存在として世界内に投企されているのか。

地球ではじめて世界内存在としての自分に考えがおよんだのが恐龍であったかどうかの結論はまださしひかえたいが、その典型的な例のひとつとは言えるかもしれない。

そのとき、恐龍は、神の顔と向いあっていたのであろう。わたしにはその情景が、神の顔と対面する恐龍の姿が、ありありと目に浮かぶ。それは悲劇的で美しい。恐龍の眼はすでに盲目となっている。盲目の眼から涙が流れおちる。恐龍は死に至る悦楽のなかで永遠の意識を保っている。永遠の死を死んでいる。我を忘れながら、我を保持している。時よとまれ汝は美しいと叫んでいる。宇宙に存在する一切の事柄が、恐龍のなかで反復されている。

現代の人類はどう滅亡するのが正しいか？

恐龍は英雄と巨人の時代に属する。彼らは勇敢なニヒリズムを自らひきうけ、滅亡の王道を突き進んだ。

そして、現代。我々人類もまた、ニヒリ

ズムに直面している。しかし、ここには嵐も雷鳴もない。サンダーもビームもファイアーもブリザードもない。英雄と巨人はすでに太古の記憶でしかない。

しかしここに声高なニヒリズムはもはや存在しない。自分の存在と直面し、自分の運命をひきうけ、そのうえで自分の存在を否定するという英雄的なニヒリズムの行為はない。ここにあるのは、自分の存在を肯定したふりをしてなんとかやり過ごそうとする卑小なニヒリズムがあるのみである。すでに人類は、重力の影響に由来する重い思考から解放されてしまったのである。

ここで重要なことは、現代の人類にとって、自分を肯定することも否定することも、ともにたいした意味をもたなくなっているという点である。かつては第三の選択として、英雄的な自己肯定の力という思想を説いた世紀末の哲学者がいたが、それも今では誇大妄想というより古代妄想として珍重されているのみである。

肩をいからせて肯定しなければならないほどの自己否定なんて、どこを探してもいやしない。自己否定といっても、こうありたいという自分の姿などまるで思い浮かばない。そもそもアイデンティティなんかどうでもいいのだ。自分がオリジナルな存在である必要なんかまるでない。大衆のどこが悪い。匿名性のどこがいけないんだ。それがニヒリズムというんなら、そんなものはやり過ごすだけだ。ニヒリズムの超克なんてわめきちらすほうがよっぽどニヒリズムだ。

というわけで、このような意識の様態を、学問的には「存在論的なあり方」から「存在的なあり方」への帰還と称する。つまり、存在を対象化して苦悩する状態から、存在に溶けこんだ状態へ移行するのである。

ふとしたことから、たとえば恐龍なら自分の巨大な体軀への疑惑から、自己という存在を対象化するようになり、自分はなぜ存在するのかという疑問に苦しみ、さらに存在一般へと思考の懊悩を広げていく。ところがあるとき突然に飛躍する瞬間がおとずれ、今までの苦悩が嘘のように晴れてしまう。禅でいうところの悟りである。世間で居直りと呼ばれているのがこれに近い。ケツマクリと言う地方もあるが、これはやや乱暴で感情的な意味あいが強いのでニュアンスはズレるかもしれない。しかし、それぞれ語彙は異なるし、それらの行動をとる人の美意識も異なるものの、その結果は似ていることが多い。つまり、形式と目的が同じなのである。共通しているのは、「存在論的な苦悩」から「存在的なあっけらかん」への飛躍であり、ただその手段が高尚な意匠をまとっているかどうかの違いがあるのみである。

ところでこの高尚な意匠というのがクセモノで、その類の表現に人はよく翻弄される。たとえば、「思考の究極は思考停止である」といった言い回しに何か深い意味があるような錯覚をもってしまったりする。

それが、なぜかというと、どうも「究極欲」といった欲望が人間には備わっていて、何事も地の果てまで、究極の地点までいってみないと気がすまないからではないだろ

うか。空想的社会主義者シャルル・フーリエ風に言うと、山の頂上をきわめたいのは、山の乳頭にむしゃぶりつきたいという欲望なのである。

このような究極欲は、往々にして悲惨な結末を迎えることが多い。それは「究極」というものが、蜃気楼にすぎないからである。たとえば真理という究極は、それが存在するから求められるのではなく、その存在が「前提」になっているだけのことだ。前提ということは、とりあえず幻想であるということであり、とりあえずこのどっちつかずの世界を秩序づけるためにとりつくろった虚構だということである。

代々木駅らくがきコーナー（部分）

わたしはたんなるイレモノです

世界が虚構だと悟ってしまった人類が、あっけらかんとしたニヒリズムのなかで暮らすことになるのは、ごく自然に予想がつく。それはほとんど快適といってもいいほどだ。

そこでは自分を虚構化できる体質にすることだけが求められる。その世界がメディアというもので組みあがっているなら、自分自身がメディアとなればいい。それで快適な環境は保証され、その環境のなかでは、たとえシミュレーションという形であっても、自分の意識を思いどおりにコントロールすることができる。これが今現在の状況らしい。

人びとはもはや、自分自身であろうとす

ることに固執したり自己否定にやっきになったりしない。わたしはたんなるイレモノにすぎない。そこにAというものが入っていればAの入ったイレモノとしてあり、Bというものが入っていれば、Bの入ったイレモノとしてか、あるいは、非Aの入ったイレモノとして、もしくは、Aの入らないイレモノとしてあるだけのことである。どこかの宇宙飛行士の言葉を借りるなら、わたしはメディア、というのが現代の暮らしぶりを示す標語と言えるだろう。

世間でメディアの時代と呼ばれ、すみずみまでメディア化した現在の状況を、「もうひとつの現実」と呼ぶ人もいるが、もはや「もうひとつの」と言う必要もなくなっている。新たに別の「新しい現実」が生まれたということなら、それは誤りである。メディアを通してしか世界を見ることができず、まるで「メディア内存在」となった状況を言うのなら、それは無駄というものだ。

事はもっと簡単だと思う。要するに「現実」というものを再発見しただけのことなのである。再発見の「再」も必要ないだろう。つまり「現実」は無いということがわかったのである。それは「真理」と同じく、ある世界観が価値あるものとして思い浮かべ探し求めた虚構のひとつにすぎないことがわかったのである。「現実」は、それを欲望する者にとってのみ、そして欲望するかぎりにおいてのみリアルであるにすぎない。

ここで特に注目したいのは、「現実」という概念は武器になるということである。「現実」は、それを欲望する者がそれを欲望しない者を攻撃する時の武器となる。「おまえは現実的でない」「もっと現実を見ろ」。快楽を価値とする者に対する非難では、もっとも多く使われる言葉だろう。

そして、「現実」を欲望する者は、自分が「現実」を欲望していることに気づいていない。はじめはある世界観が価値あるものとして前提した虚構のひとつだったが、今では人びとの意識の奥底にすっかり実体化して棲みついている。「現実」への欲望は、それが欲望であることすら気づかれないほど無意識のものとなっている。

「おたく」狩りの理論

宮崎勤くんの事件をきっかけにして、「現実」を欲望する人たちが団結した。たぶん彼らは、そうとうな危機感を抱いたにちがいない。なぜなら、彼らの無意識、すなわち「現実」への欲望を、宮崎くんが照らし出してしまったからである。

彼らはとても動揺した。世界の根っこは「現実」であるとする信仰が、宮崎くんの行動によってくつがえされたと感じたからだ。世間には「現実」と「虚構」という語彙がとびかい、さっそく虚構狩りが始まった。

宮崎勤は現実と虚構をとりちがえたのだと彼らは非難した。彼らには、殺人という犯罪よりも、虚構を「現実」の世界にたれ流してくるように見えた宮崎くんの行為のもつ意味のほうがよほど恐ろしかったにち

がいない。
　現実は虚構から守られていなければならないという思いを新たにした彼らは、続いて、ホラービデオ狩りを始める。彼らはこう考えている。現実が虚構を生み育てるのであって、虚構が現実を生むような事態は倒錯である、と。力は常に現実の側になければならない、と。
　もちろん虚構のもつ力を彼らも認めている。ただし、負の方向性をもった力としてである。たとえば、ドン・キホーテやマダム・ボヴァリーのように、虚構の物語を現実の世界で生きてしまうような人たちを、彼らは思い浮かべるだろう。この二つの例は、小説という虚構であるから許されている。あるいは禁書や発禁という形で、現実の側から管理できるシステムもととのっている。
　そして最終的に彼らは、陰に陽に、意識的にも無意識的にも、「おたく」狩りを始めることになる。特殊な例から一般的な反応へとヒステリックに拡大していく事態は、メディアの発達した大衆社会にとてもよく似合っているし、それ自体が興味深いイベントとなっているようだ。
　要するに、「現実」を欲望する彼らは、彼らの信仰する対象を守るという物語を必要としているのであって、宮崎くんはその防衛戦における敵側のヒーローである。彼らは、宮崎くんという反面の救世主によって、彼らの欲望をリアルにしようとする。
　そして局地戦から世界戦争へ突入。今では、現実の世界と虚構の世界との争いにまで一般化している。と、彼らは空想する。
　彼らの信仰信条である「現実」を防衛するために、「おたく」が最終的なターゲットとなる。

「おたく」は「族」ではなく「場」である

　なぜ「おたく」なのか。なぜ「おたく」は社会の「あちら」側に回されるのか。
　それは、「おたく」が、虚構を媒介にしたネットワークをつくるからである。「おたく」は、メディアに擬態して、自分自身をメディアと化している。電話になっていたり、アニメになっていたり、伝言になっていたり、投稿になっていたりするのだ。
　このように人間を放棄した風のありかたが、「現実」を信仰する彼らには、許しがたい畸形と映るのだろう。子どもが伝言ダイヤルにはまってしまった姿を目撃した母親の恐怖は容易に想像できる。
　メディアと化した「おたく」は、アニメのキャラクターになったり、前世のヒーローになったりしながら、ネットワークを広げ、そこに裏世界をつくりあげる。ネットワークというものがそもそも裏世界だと言えるかもしれない。
　そして、念を押しておかなければならないが、「おたく」というのは、「おたく族」と呼ばれるような「人」のことを指すのではなく、ある「場」のようなものを示すのである。このことを明確にしておかないと、「おたく」狩りの片棒をかつがされることになるだろう。

「おたく」は「場」のようなもので、狩り出すことができないため、宮崎勤くんを必要としたと言えるかもしれない。彼は「おたく」という「場」を人格化する役目をもたされたのだ。

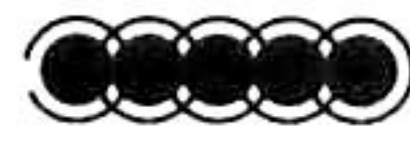
それでは「おたく」がどのような「場」であるのか、その具体的なあらわれを見てみたい。

JR代々木駅らくがきコーナー
実体なきメッセージの曼陀羅が見る者を畏怖させる！

わたしはまったく家から外に出たことがない人間なので、それを実際に見たわけではないが、代々木駅のさほど目立たない壁面に落書きや伝言を勝手に書くことのできるコーナーがあるらしい。

そこにはB全判の広告ポスターが裏返しに貼られている。裏の空白がむきだしにされているわけで、なるほどすでに裏世界がそのときから始まっているのだろう。

その一枚を編集部から渡された。こういうのにも収集家がいるということで、その一枚も某コレクターの所蔵品を借りてきたという。

それはスキー用品の広告の裏側だった。B全判はそうとうな大きさなので、床に広げてそこへハシゴを横に渡しかけ、ハシゴを移動させせながら読まなければならなかった。それを読むだけに数日を要したほどである。

自画像はアニメ・キャラ

隅々まであきれるほど絵と文字で埋まっている。まず大きめのマンガ絵が目に入り、その周辺の文字をひろっていくと、この裏紙が、数年前の冬のある日に貼り出されていたことがわかる。

まず自分の登場した時刻を書き、マンガ絵とメッセージを書き、それにペンネームや愛称らしい名前を書き添える、というのが基本的なスタイルになっている。

渡された裏紙にはおよそ三十ほどのサインがあるから、そのくらいの人数か、それよりやや多いくらいの人数が、ある冬の日の裏世界にまぎれこんでいたと思われる。しかし、サインの数が頭数に対応するという確証はないので、「人数」という言い方は保留しておこう。つまりここに個体を表記しているように見えるマークはあっても、それが固体を識別しているという保証はないのである。

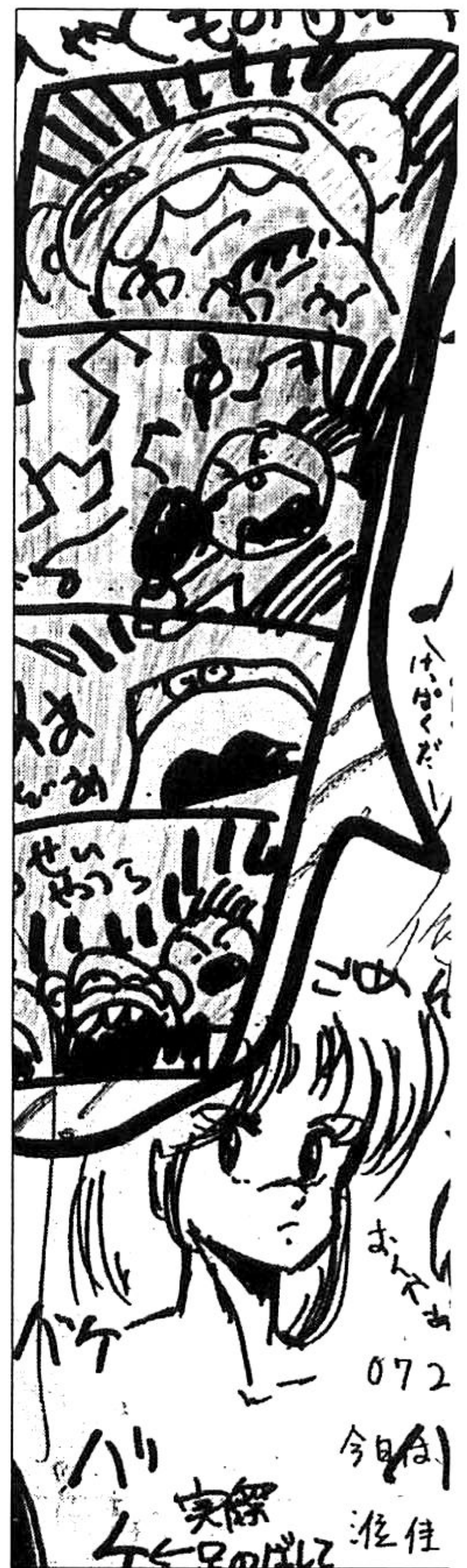
ただ、それぞれのメッセージは、お互いに（かなり頻繁に）応答し合っている。あるメッセージに返事をしたり、コメントを添えたりと、メッセージ自身は忙しく機能している。それがたとえメッセージとメッセージの連絡網にすぎないとしても、何かしらの出会いがあることは確かなようだ。だからメッセージ自身も、いちおうの社交辞令はふまえている。

代々木駅らくがきコーナー（部分）

出会いの初めは、まず、顔見せである。そこでメッセージはマンガ絵の顔で登場する。それが自己紹介であり、メッセージ自身の自画像なのである。それは多くの場合アニメ（コミック）のキャラクターに擬態している。裏紙の世界があたかもアニメ・キャラの仮面舞踏会の様相を呈しているのである。

その理由は簡単だ。メッセージというものがそもそもそういう性格をしているからである。メッセージは機能をもつけれど、実体はもたないのである。メッセージはそれの人格的な裏づけである作者という実体も必要としない。アニメ・キャラの顔をして登場するのは、実体を必要としないメッセージの自己紹介のしかたと言える。それはまた恐ろしく的確な自画像と言えるだろう。

意味のない、メッセージのみの純粋存在

それでは、ポスターの裏にあるこの場で、

メッセージはどのように機能しているのだろうか。

この世界はなんて深いんだろう!!
ゆがんどるだけだす……。
byネリマン

真ん中あたりにこのようなメッセージがある。「この世界」というのは、このポスターの裏側の世界を指すのだろうか。この他にも数カ所、ネリマンという匿名で、他のメッセージへのコメントになっているものがある。

メッセージの機能のひとつに、他のメッセージを対象化して評釈するというものがあるが、それはメッセージのもつ欲望のひとつでもある。

この伝言らくがきコーナーという場は、いわばメッセージの欲望のたまり場ともなっている。

いくつかのマンガ絵をとりまとめるような線を書き足して、スゴロクにしてしまうという、政治的な支配欲をもったメッセージもある。また、日記をしているメッセージ、自分の一日を告白しているメッセージ、これは自己愛の欲求をもったメッセージである。これらもまた、メッセージにもとから備わる欲望なのである。

ことに興味深いのは、その「場」に出現したことのみを刻印しているメッセージである。来た時刻を記し、ただ、「PM1:08 きた、かえる」とのみ示されている。これはいわば、メッセージの存在欲といったものであろう。これはもはやメッセージそのものであり、このようにむきだしになったメッセージと向かいあうとき、人は恐怖を感じ、底なしの深淵を垣間見ることになる。

コミュニケーション・ボードにおいてネットワークを形成しているメッセージ群は、「ふっかつ」という用語を使用することがある。その場を離れ再び登場することを示すらしい。離れているあいだに他のメッセージが通信してきているので、そこで改めて、自分の位置を確認するのである。

自己確認の作業を「ふっかつ」と称するのは注目に値する。たぶんキリストの故事に由来するのだろう。キリストは死んで復活することによって、自分と弟子たちとの、そして、自分と民衆との関係を再確認したのだった。死と再生は、常に自己確認の契機なのである。

キリストの復活は、現代の裏世界でのメッセージのあり方を暗示しているような気がする。キリストの肉体は、生前に行なった(肉体と結びつく)個々のメッセージとともに滅び、そして、メッセージそのものとなって復活するのである。たぶん

「メッセージそれ自体」は、多くの人を躓かせることになるだろう。キリストの復活を信じることが難しかったように。

つまり、復活したキリストは、あまりにむきだしのテキストだったのである。それは理解の対象にはならない。理解するというのは、覆われたものをとりのぞきあらわにすることであるが、復活したキリストは何ものにも覆われていないむきだしのテキストだった。そして現代、裏世界のメッセージは、もはやメッセージであるということ以外、何も意味しなくなっていくのだろうか。ただ黙って自分自身を指し示しているだけという状況が出現するのだろうか。

少女カルト雑誌の文通欄

「私は他人と違う」という差異の強調が、横溢して一様になる！

前世の仲間を探す少女たち

B全判の裏紙の世界はもはや個体であることの意味が希薄になり、むきだしになったメッセージそのものがうごめく裏世界であったが、もうすこし穏やかに、活字印刷世界のスタイルを保持していながら裏世界を出現させてしまう場が、雑誌の投稿欄や文通欄ではないだろうか。

そう独断的に見当をつけたわたしの手元に、いくつかの雑誌の投稿欄・文通欄のコピーが散乱している。

まず、『トワイライトゾーン（TZ）』というオカルト雑誌の文通欄。ここに奇妙な文通希望がいくつも掲載されている。これ

代々木駅らくがきコーナー（部分）

「TZ」（ワールドフォトプレス）

がなかなか魅力的なので、少しひろい出してみよう。

Ψリン、リュウ、キキョウ、ヒミカ、ミロン、ユーミ、サロ、ミルヤ、ムーラ、ムー、ディア等の方々、覚醒していたら至急連絡ください。

また、この名前に聞き覚えのある方、インスピレーションを感じた方等も連絡ください。こちらはコウ、カイ、アルテ、サラ、サキ、ラキャアです。

Ψプレアミスという言葉に何かを感じた方、剣の所持者の方ご連絡ください。私は光の剣の所持者で前世名をライオスといいます。私の友人たちも剣の所持者で炎の剣と天の剣を取り戻しています。その他不思議大好きという方、霊体験あるという人もお便り待っています。

Ψ月を見ていると心の休まる方、前世を知る方法を教えてくださる方、歌うことの大好きな私にお手紙ください。

Ψ中央アジア、ゴビ砂漠ないしはヒマラヤにその本拠地があると伝えられる、東方の伝説的戦士集団〝センチネル〟もしくは聖白色騎士団について何かをご存じの方、聖少女ミストレス＝ファティマ、サキ、クルト、フウガ、シオン、マディミ等の名に心当りのある方、どうかご連絡ください。

Ψシルメリアという名前に覚えのある方、62円切手同封のうえ連絡ください。また、七神将エイゲ、ヒュウゲ、タスク、リラ、ヤヨイ、リヴァ、ナヴァルの記憶を持つ方7人をご存じの方も連絡ください。当方シルメリアです。覚醒を始めたばかりなので名前などに誤りがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

Ψ地王、冥界王、火玉王の方、連絡ください。またヴァルディオスに心当たりのある方、龍界の方、お話を聞かせてください。当時の自画像つきだとうれしーな。

　こういった形での文通希望の投稿を、「前世の仲間探し」というらしい。『トワイライトゾーン』誌が読者にそういう類の投稿はやめてほしいと呼びかけた記事で、そう名づけられている。前世を見ようと自殺ごっこをした少女グループの事件が新聞にとりあげられてから、同誌の編集部は「現実と虚構の違いを見極めてほしい」というタイトルの声明を誌上に発表した。

　わたしは少女たちが物語のために死んだとしても、現実のために死ぬより無駄だとは思えない。もしかすると彼女たちは、「現

「牧歌メロン」（パロル舎）文通欄

（ 34 ）

フルーツ・マーケット FM

FM掲載方・回送方は(42)にあります。

A 北海道・東北

1 札幌市 均等割付 25歳 ♀
突発的に話せる人がほしいという発想が湧きました。元気すぎない人なら男女不問。他人との関係を深める過程というやつを一緒にやってみませんか。返確。

2 北海道 赤唐辛子 20歳 ♀
バンドやる、大槻巨泉、吉本ばななに似てると噂の私の双子を募集です162cm以上60kg以下♀♂国籍不問、それと美少年の方も御1報下さい。ゲイ、女装癖の方ともお友達になりたいです。さびしい娘に愛の手を!!とりあえず、あなたのお便りおまちしております。

3 北海道 まー 22歳 ♀
過ぎ去ってしまったセピア色の懐かしいひとときを心の中では鮮やかなカラーで持ち続けている、そんな気持をいつまでも大切にしたい。精神医学、あらゆる芸術に興味を持っています。たくさん本読んで色んなコト頭ん中につめ込んじゃいたいです。PFのみ募集。同年以上。遠近性別不問。返確。

4 札幌市 友人結婚希望 32歳♂
僕はゲイ。どう見ても普通の人間だけど女性とは友人以上になれない。一応一流企業勤務なので力を合わせれば生活は楽です。どなたか明るい百合の方と、円満に大人の付き合いしていきたい。同居してくれれば全く別の生活OKです。外見も悪くありません。

5 大曲市 32歳 ♀
日帰り温泉・映画館・喫茶店・花盛りの公園に行ってみたい。でも、ひとりでは行けない。どこかへ行く時、つき合ってください。お願い！

6 一関市 孤独なコレクター 22歳♀
すごい田舎に引っ越してきて話の合う人もなく、友達もいない……発狂しそうだ。誰か助けて。とんでもないジャニ娘やデリカシーのない人だけはお断り。

7 宮城県 未少女 17歳 ♀
リードしてくださる優しいお姉様、先生、秘密の関係でいられる暗さを持った方などを求めています。百合の方、どうか私をあやしてあげて下さい。お願いします。絵画・文学、死体・天空・水……など好きです。154×39。

8 宮城県 メイ ♀
悶々の苦悩の日々から心機一転したく思っています。20歳以上の方、お友達になってください。どこかへ行ったり、文通したり、いろいろ遊びましょう。私は深くせまい、心の内を話し合えるつき合いを希望しましょう。（根がまじめな方）

9 宮城県 Mlle O. 31歳 ♀
「女の人が好き」の女達で仲間の輪を広げようとしています。近々仙台市内でお茶会を開きます。自分の行動に責任の持てる方、他人の生活を脅かさないと約束できる方、私達にご連絡ください。風通し良く、くつろげる空間を目指してい

10 仙台市 ももちゃん
私は気まぐれなところが で、その気まぐれを受け止 様な寛大な心を持っている ら、一緒に夢を見たり、泣 ったりして下さい。でも、 ごめんなさい。

B 関東・北陸

1 栃木県 フェイシア
恋人募集。百合求ム。男 美しい人。当方ナルシスト 恋する一見、おとなしいお ま風。読書と映画とミュシ る美しもの好き。近・同県 る人ならなおよろし（PF きれば写真同封で。日常 ル。ひとときの素敵な世界 ……。

2 茨城県 クロウリー
神秘学、美学、文学、哲 興味のある、高校3年生で なことを教えてくれる女の いしましょう。まずは手紙 容姿不問。文通のみも可。

3 前橋市 まりえ 19歳
日曜日を、あなたの為に くわ。車のない私をドライ てくれる人、妹がほしいお フレンドをお探しのア・ナ に色々いけないことを教え 迎。怖い人はパス。PFも可

らかの良識があれば結構。私のいい人になってください。154×45。写真希望。裏は白紙でね。

4 埼玉県 すわれば 20歳 ♀
いろんな方面に興味があり好奇心の強い人、ヘンなもの新しいもの好きでいろんなことしてみたい、造ってみたい人、友達になろう。バカな

いします。返事絶対確実です。写真、自己PR同封の上、お手紙ください。

7 千葉県 オリエンタルビイト ♀
ツェッペリン系HR、HM、ハノイ、ポイズン等好きです。25過ぎても頭がハイパーな自分を開きなおってやってる方、澁澤、夢野も好きな変な私ですが、友達して下さい。

8 船橋市 厚粗 170×57 ♂
普通の愛の在り方に疲れてしまいました。こんな僕を優しくいじめてくれる女の方、または方々。そして、優しくいじめられてみたい女の方も。遠方の方は文通でもよいのです。連絡をお待ちしております。

関西地方の方からもお便りまってます。

11 千葉県 かれん 18歳 ♀
私、年上の人がいいワ。それに、センスよく戸川純が大好きな人だったら最高。まずは、文通しましょう。

12 千葉県 かれん 19歳
私、年上の人がいいワ。それにセンス良く戸川純などが好きだったら最高なんだけど。年齢性別容姿不問。お手紙下さい。きっと生きててよかったぁって思うはずよ。

13 大田区 少年ぱんつ
最後に残されたのは少しだけ寂の混じった渇いた笑いだけかも知れま

方、ノイズにくわしい方、 ストな方。純ちゃん、ハル スターリンなどが好きです。 になってください。

17 豊島区 みけ 24歳
本音で話せ、精神的に高 友人が欲しい。ビスコンテ ァーニ、シャーロット・ラ グ、リリアン・ギッシュ、大 高野文子、高橋源一郎、戸川 物、骨董、等好き。精神的 に出会えたらうれしい。

18 東京都 佐理 24歳
想像の中の自分と遊んで ちな現実逃避型で神経症ぎ よろしければ、20歳以上の

実」もまたひとつの虚構にすぎないことを知ってしまったのかもしれない。

むしろわたしは、「覚醒を始めたばかりなので名前などに誤りがあるかもしれませんが」と言える感性を高く評価したい。そこにはすでに物語の力といったものが芽生えているのではないか。物語が裏世界を志向したとしても、それはまったく当然のことである。物語というものはもともと裏世界をめざすものなのだから。

エキセントリックという別人

これは少女雑誌というジャンルに入るのだそうだけれど、『牧歌メロン』誌の文通欄のコピーがある。雑誌名がいかにもという感じだが、やはりその名のとおり現代詩したり、世紀末したりしている。

この文通欄では多くの人が、いかに自分がヘンな人間であるかを売りこもうとしている。変人を競っているのである。

「リードしてくださる優しいお姉様、先生、秘密の関係でいられる暗さを持った方などを求めています。百合の方、どうか私をあやしてあげて下さい。お願いします。絵画・文学、死体・天空・水……など好きです」
「無様な悪あがきの果ての、とある土曜の午後です。歪んだ感性にマトモな性格という方がベストですが、ぜいたくはいいません。どっちからでもかかってらっしゃい。おばさんは待っている」
「想像の中の自分と遊んでしまいがちな現実逃避型の私でよろしければ」
「一緒に廃墟やライブなどに行ってくれる方、何でも話せる方、ノイズにくわしい方、アナーキストな方」
「両親のトラブルで、人を好きになることに臆病になりました」
「空虚のるつぼ寂しさで脳が耳から流れそう。だからうたってください何かしゃべってください遊びましょう。パンクなわたしは世間のノイズ」
「まだ会えぬビリティス様へ。ミルトの木陰で待っています」
「分裂症圏に棲む深海魚、永続する半死半睡の夜、暗い目をして廃駅、廃ビルを探検する？　自由外出日隔週日曜、手紙は事務用封筒で裏白紙」
「人から見れば性的変子の人々、文通、お友達していただきたくお願いします」
「鋳型の中をまんじりともさせない。自閉ぎみ、神経症病みの私を遊びに連れ出して」
「小柄であまり体が丈夫じゃなく淋しがりやで白紙のネコです」
「私は世界一醜いので友達がいません」

（35）

5　埼玉県　オーロラ姫　20歳　♀
彼女を探してます。映画を観たり、ショッピングしたり、旅行したりしましょう。髪が長く、身長160以下、18歳以上の人。素敵な人だったら、どなたでもうれしいです。私は身長154、短大生の処女です。返事は必ずします。お手紙待ってます。
6　埼玉県　藤野一樹　♂
欲求不満の僕に快楽的関係を持てる♀（特にお姉様）を募集しております。性をteachしてくれる方お願

らみが多くて死ぬこともできん。同じような悩みを持つ人手紙ください。派手な人はこまります。やせ型の女性に限ります。
10　千葉県　ソーインラブ　20歳　♀
最近、[illegible]悠様の危険な魅力にすっかり染まってしまった私。キザな男役には弱いのよねえ……。ツカファン歴は4年とちょっとよ。宝塚ファンのくせにこの本読んでる貴方!!　同年代の方からのお手紙まってるわ。一緒に観に行けたら素敵ねえ。

ぜいたくはいいません。どっからでもかかってらっしゃい。おばさんは待っている。
15　品川区　作品466　32歳　♀
世間から精神的に逸脱している、シャレのわかる皆さま、文書通信で笑える耽美いたしませう。
16　世田谷区　眼球　19歳　♀
友達がいません。被害妄想と加害妄想がひどく、今頭の中は腐敗しかけています。一緒に廃墟やライブなどに行ってくれる方、何でも話せる

てちょ。
19　豊島区　甘えんぼう
募集！　年齢・体重制限
高60歳位迄の女性）結婚して
供のいる方も是非お便り下さ
も優しくない人と人の悪口を
と、外見もものすごく男っぽ
苦手です。手紙の苦手な人は
しえてね。マッテマース。
20　豊島区　ヒマジンガー
結婚してる人、子供のい
身の人もお便りください。

それぞれエキセントリックな自分をアピールしようとするが、皆が皆そうするので、結果的には差異がなくなるようにみえる。それでも最後に引用した「私は世界一醜いので友達がいません」というのには、図抜けたインパクトを感じる。
自分の偏った部分をさらに肥大させ、そこから裏世界をつくりあげようとする行為は、今ではもう古典的な部類に入るかもしれない。それは中心から外れたところで生きる境界人の知恵でもあった。
とりあえず何かしめくくる言葉がないものかと探すのだけれど、何かツルッとしていて触れてくるものがない。たぶん復活したキリストと対面した弟子たちも、そんな気分になったのではないだろうか。
読み解かれるべきテキストのないところでは、理解を放棄するのが賢明というものである。そうでないと、むきだしのテキストを、何かに覆われた解読を待っているテキストと思い違いすることになるだろう。

代々木駅、らくがきコーナーの謎！

ホームの片隅に自然発生した、アニメ少年たちの共和国！

「らくがきコーナー」とは、ＪＲ代々木駅の二番三番線ホームの南端にある伝言板のことだが、階段と階段の間のいわば死角にあたるため、何年も代々木駅を利用していても、その存在を知る人は少ない。井上ひさし「ニホン語入門⑬伝言板の研究」（週刊文春）にも、代々木駅には伝言板はない、と書かれているほどだ。

　その伝言板は毎日、駅員によって貼り出されるＢ全大の真っ白な紙にすぎない。それがその日の夕方までにはマンガで埋め尽くされるのだ。もとは十五年ほど前に、伝言板として駅が提供したスペースだったそうだが、いつ頃からかアニメとマンガのマニアに占拠されてしまった。

　匿名による不特定多数への呼びかけという点は、なにやら中国の壁新聞に似ていなくもないが、ここにはなんのオピニオンもない。

　実物を見た人はその細密さに頭がクラクラするだろう。巨大な紙にビッシリ描き込まれた絵はどれもていねいなものばかりで、わざわざ二十四色のサインペンや色鉛筆を持ち込んで描かれた極彩色のものも多い。曼陀羅さながら、といってもいい。これはすでに「伝言」でも「落書き」でもなく、数十人の手で作り上げられた「作品」なのだろう。

　一年に三百六十五枚作られるこの「作品」を集めている人に会えた。多田克己さんというグラフィック・デザイナーで、もちろん彼もこのらくがきコーナーの常連だ。カラーで描くことを定着させたのは自分だという。

「いかに斬新で面白い遊びを創造するかがポイントなんです」

　熱烈なファンをもつラクガキストもいるらしい。多田さんも有名な常連で、三年以上前から「らくがきコーナー」に「ばかしりーず」という四コマまんがを連載しており、現在八百五十回をこえる。

　常連の多くは、場所がら、代々木ゼミナールなどの予備校生と、代々木アニメーション学院や「おたくの東大」といわれる東京デザイナー学院などの専門学校生が多いが、卒業後もわざわざ代々木駅まで通い続ける人も少なくない。

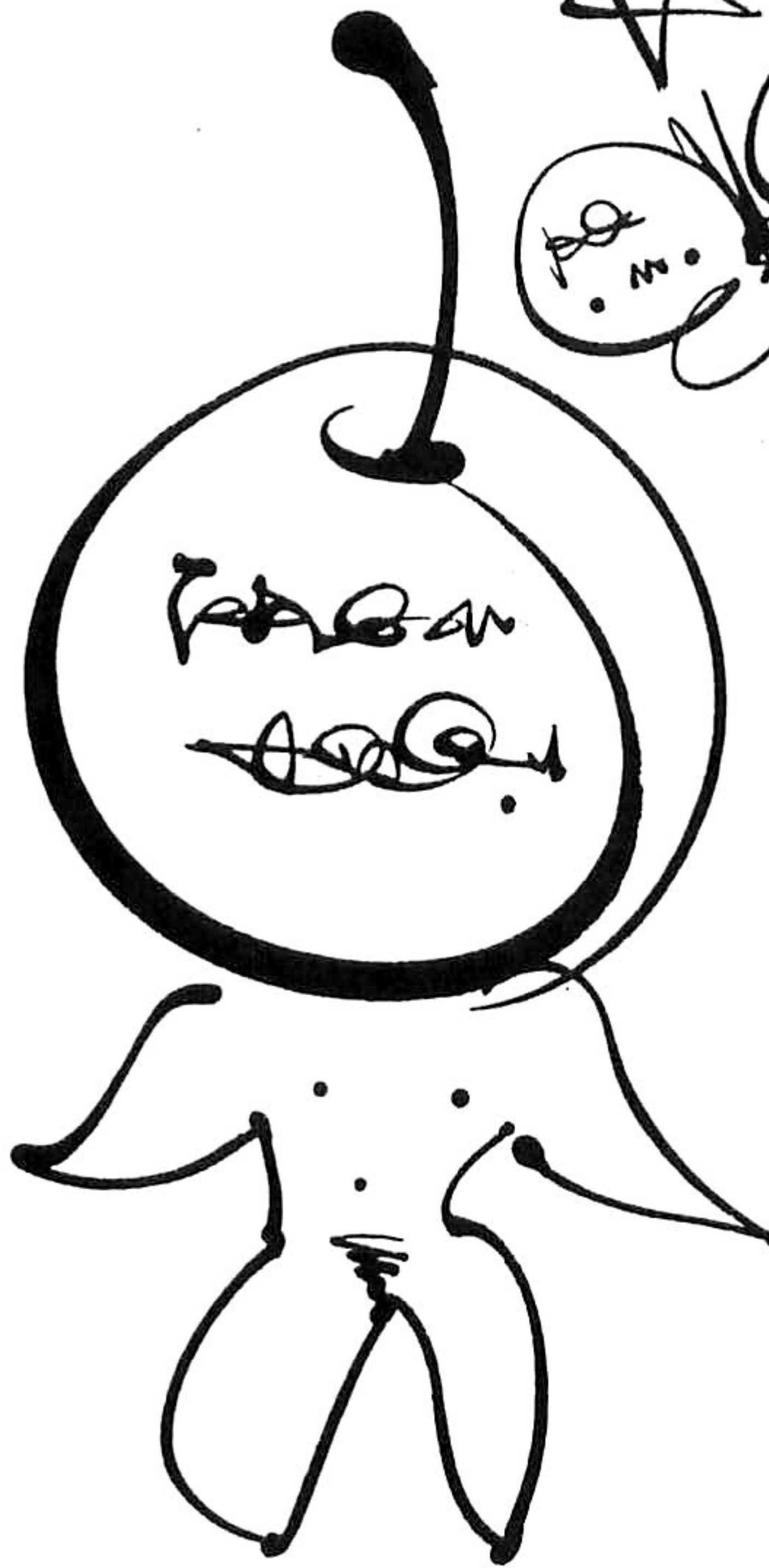
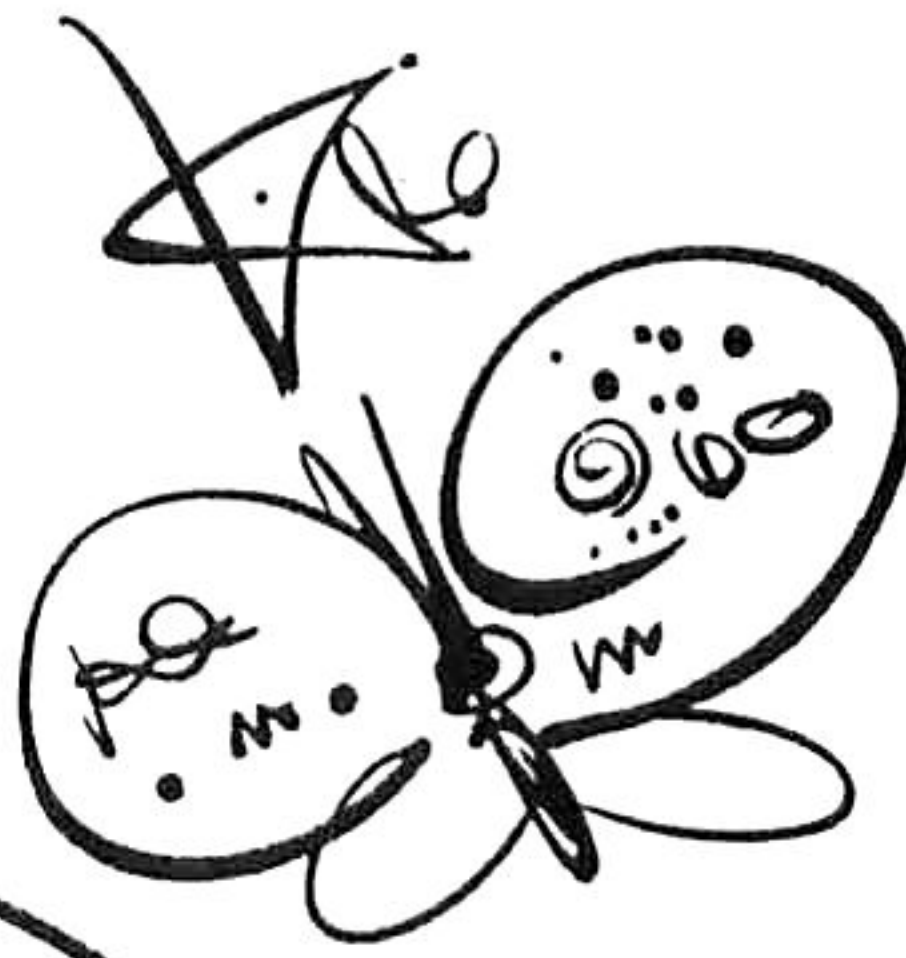
「伝言板の近くにある会社に就職先を決めるわけです。最も古い常連のＨＧさんは代ゼミから某国立大に入った後も通い続けてます」

　ＨＧというのはもちろんペンネーム。伝言板の前で出会った彼らは、その名で呼び合い、「お茶会」を開いたりする。お茶なのは、酒の飲めない人が多いからだ。

　面白いのは、彼らが、暗黙のルールを作り上げている点だ。始発と同時に紙が貼り出されるのを待って描き込むのを「一番乗り」というが、それは必ず上部の隅から描き始められる。ひとりが使うスペースは三〇センチ四方が限度で、大きなスペースを使うからにはそれなりの「質」が求められる。ヘタな絵をど真ん中に大きく描いたりすると、絵の上に「却下！」と書かれて断罪される。

「みんなで作品を完成させようと

いう共通意志があるんです。この紙もひとつのムラなんですよ」
　近くの渋谷公会堂でコンサートをするバンドのファンがこの伝言板に「×月○日渋公」と告知したことがあった。それは伝言板本来の使い方なのだが、その告知は常連たちから徹底批判された。
　この伝言板の中だけで通用する隠語が多用されるため、初めて見る者にはほとんど理解しがたい。その排他的ムードはアニメやマンガファン以外の人間を寄せつけない一種異様な迫力に満ちている。
　同じような「らくがきコーナー」はＪＲ水道橋駅にもあるが、東京ドームの試合が終わる時間には常連が陣取って野球ファンに書かれるのを防ぐという。水道橋は木更津から来ている女性によって仕切られ、毎日出席簿がつけられる。参加者は「やおい」などの女子高生が多い。
　ＪＲ蒲田駅ビル、サンカマタ六階の「コミュニケーション・ボード」は昭和五十六年に設置されたものだが、代々木とは違って、自宅で描いてきたハガキ大の紙を掲示するシステムだ。
「持禁カード」という、掲示を目的としたものの他に、自由に持ち帰ってもいい「フリーカード」と呼ばれるものがある。そこから文通のようにカード交換が始まるわけだ。カードに連絡先が書かれていれば直接会うこともある。相手がどんな人か、性別さえ不明なブラインド・デートだ。
　このボードは平成元年六月三十日に一時撤去されたが、その日は「ボード人」たちが集まってちょっとした騒ぎだったようだ。代々木駅でも国鉄民営化前夜には伝言板廃止の噂でパニックになった。
　この伝言板の存在を知って、家出までして地方からやって来た少女が保護されるということもあった。多田さんは言う。
「ここに集まる人は誰かとのコミュニケーションを求めてるんです。やっぱりみんな学校のなかでは友達が得られなかったんでしょうね。でもここに来れば同じ話題（アニメやマンガ）の人ばかりだから安心できるんですよ」

おたくの誕生
マニアはいかにして「おたく」になったか？

かつて「趣味」は孤独の関数だった。
しかし現在の高度消費社会は
日常や現実の重荷をすりぬける方法を拡大し、「おたく」を生み出した！

小浜逸郎 批評家

「おたく族」について批評しようとするときには、ある構えが要求されるように思われる。

まず、批評者である私自身と「おたく族」との関係がどのようなものであるのかということをきちんと語ってから始めること。言いかえると、「おたく」的マニア志向に対してどの程度の共感を持てるのか、ただまったく違う種族のように見なすほかはないのか、などをあらかじめ測定してから始めるべきだということである。

若い何人かの批評家たちは、宮崎勤の部屋がテレビ画面に映し出されたとき、あれはいくつかの部分を変えれば、自分の部屋と変わらないという意味のことを率直に述べていた。

この率直な表明はもちろんいいことであるが、何となくその先が「だからどうなのだ」と言いたいような、行きどまりなものを感じる。たとえばそこに居直って、マニア的な世界に共感を感じる地点からマスコミの「短絡的な」反応を攻撃したり、「おたく」であることの市民権を主張してみたりしても始まらないという気がするのである。なぜならば、宮崎がやった（らしい）ことが法的に見てどの程度の罪に値するかということをまったく別問題にしても、あの画面は何となく私たち現代人の心に「ふーむ、現代の若者ってなかなか生きにくくて困ったことだなあ」と感じさせるような重苦しいメッセージを送り届ける効果を確実に持っていたからである。たしかに短絡は存在するかもしれないが、宮崎のやった（らしい）ことと、あの画面が印象づけていたマニア性との間に何の関連性も見出すなと言われても無理だと思う。その意味で、マスコミがあの部屋の画面に執着したその背後の直観のようなものが、全部が全部間違っていたわけではないのである。

異文化ならぬ異文化

さて私自身であるが、私には正直に言って、「病膏肓（こうこう）に入る」というほどの趣味的世界の持ちあわせがない。高校から大学にかけて音楽（モダンジャズ）や美術の世界に少し首を突っ込んだが、それもマニアと呼べるほどのところまではとうていいかなかった。私はよろずいいかげんで、書物の世界ではやや人並み以上に深入りはしたかもしれないが、四十代になった今に至るまで、この領域のことなら任せておけといって蘊蓄（うんちく）を傾けられるアイテムなどはただのひとつもないといった有様である。

要するに何に対しても永遠のアマチュアできてしまったわけであるが、こういう私が「趣味」の世界とか、「趣味」に熱中する人たちに対して抱く感覚は、羨望と軽侮のない混ざった、アンビヴァレントな、独特なものである。

私は自分のアマチュア的性格、非専門家的性格を全面的に自己肯定しているのでもなければ、逆にマニアや専門家たちにただ感服しているのでもない。そんな自分のあり方を逆に照らし出すことばとして私は、これまでひそかに「趣味というものにはな

にかしらもの哀しいものがある」などと言って自分に納得を与えてきた。そういう位置から考えて、じつは私のなかには「趣味とは何か」ということを根本的に問い直してみたい問題意識がずっとあったのである。言ってみれば、私の位置は、異文化ならぬ異文化に向き合っているというところであろうか。

私個人の位置から言ってもそうであるが、この場合、もっと一般的な意味で言っても、「異文化ならぬ異文化」という微妙な接触の仕方が要求されてくるように思われる。というのも、この「おたく」現象は、ひとつの特異な現象であるにしても、私たちが生活を送っている今日ただいまのこの日本社会のなかで起こっていることだからである。だからそれは、何かまるで気味の悪いものを見るかのように外からまなざしを投げかけるのでもいけないし、逆に感性的に理解できないのにわかったかのような顔をして内部から論じるというわけにもいかない。

そういうわけで、立てるべき論題は次のようになる。

①人間はなぜ、いつから「趣味」の世界をもつようになるのか。

②「趣味」がマニア的にエスカレートしてしまうことの背景に何があるのか。

③「おたく」的な趣味が示す時代特質とは何か。「古い」趣味との連続性と区別。

④コミュニケーション論としての「おたく」論。

人はなぜ「趣味」を持つのか

人間はなぜ「趣味」の世界を抱えるようになるのか。この問いに対してはとりあえず、単純に答えておくことができる。趣味の深さは人間が孤独であることとの関数なのである、と。

だがこう答えるところからすぐに、では人間の孤独とはどこから起こってくるものなのかということを考える必要が出てくる。

もちろん「趣味」の世界に早い時期から没入しやすい資質とそうでない資質というような個人的な偏差は存在する。よく「この子は小さいときから友達と遊ぶよりも、まわりの道具とか自然の生き物とかに異常なほどの興味を示す子でした」などという述懐を耳にするし、またたぶんに神話化されているにせよ、偉人の伝記などでは、小さい頃の熱中癖を物語るエピソードに事欠かない。しかし、問題はそういうことではなくて、あくまで「趣味」の世界というものが成立する一般的人間的基礎のほうなのである。

言うまでもなく、私がここで「　」をつけて語っている趣味の世界というのは、芸術や学問や文学など、ほとんどあらゆる精神文化的な営みにつながってゆく広い入口の意味を持っている。私の考えでは、ある太い補助線をうまく見つけさえすれば、これらの（しばしば、ただすばらしいものとして賞賛を浴びる）文化的な営みと、マニア的なのめり込み、果てはいまわしい犯罪行為に至るまで、そこへ個人を促している

共通の契機のようなものを等価なかたちで読み解くことができるはずなのである。

「好み」を確立させるあきらめの構造

私は、孤独が「趣味」の世界の成立の条件なのだと言った。それでは、それは一般的にはいつ頃襲ってくると考えてよいだろうか。

これはおそらく、思春期に相当程度、集中しているといってよいと思う。

この時期、多くの子どもたちは、自分の好みというものをはっきり持つようになる。それは、外見上、こちら側にすでに主体性の確立した〈自己〉がいて、向こう側に並べられたいくつもの趣味のアイテムのどれかを自由に選択する(たとえば何々クラブに入る)というようなわかりやすいかたちをとって現われるが、好みというのはそんなに簡単なものではない。大げさに言えば、人はたぶん、この時期の「好み」の確立を通じて、知らず知らずのうちに自分の生の自己限定を強いられているのである。

一般に好みが確立するということは、その子なりの自我が発達してきた指標として、肯定的にとらえられやすい。しかし私はあえてひねくれた見方を取りたいのだが、好みができてしまうということは、自分を直接的な人間関係以外の世界と特殊に関係づけようとすることである。そしてこのことのうちには、直接的な人間関係に対する一種の〈あきらめ〉の構造が隠されているように思う。この時期に、少年少女たちが一様に親や教師との間の交流のことばを失うことと、彼らが好みの世界をはっきり持つようになることとは、裏腹の関係にあると思えてならないのである。

もちろんこのプロセスをことさら悲劇的なトーンで語る必要もまた、ない。ただ、人間が発達してゆくということは、単純に望ましいことというのでもなく、むしろ必ず何らかの喪失をともなうような、不可避的なことなのだというニュアンスを大切にしたいのである。

思春期の孤独と「趣味」

私の中学時代に、ひとりで映画に凝っている男の子がいた。私も映画が好きだったので、その子と映画について少しことばを交わしたことがある。彼は作品知識をマニア的に頭に詰め込んでいたのだが、同好の士を見出したうれしさのためか、あたりははばからぬ大声をあげて、「俺は将来、映画評論家になりたいのだ」と言った。私は内心滑稽なものを感じたのだが黙っていた。

翌日彼は、細かな字で映画クイズのようなものを作ってきて、私に解くように勧めた。私はそういうかたちでこの世界に首を突っ込む気がしなかったので、すげなく突き返したところ、その紙は床に落ち、彼は黙ってそれを拾って引き下がった。

つきあって解いてやればよかった、残酷なことをしたものだと、今でもこのときのことが心を離れないのである。というよりも、私はただ残酷な自分に対する自責の念

だけでこの場面を強く記憶に残していたのではなく、たぶん彼の〈実存〉の寂しげな像のほうが気にかかっていたのだ。

また高校時代、手品に凝っている奴がいた。学校に小道具を持ち込んできて休み時間に誰に見せるというのでもなくやっているのであるが、言うまでもなく手品というのは、観客がなければ意味のない遊びである。はじめのうち、当然二、三人のクラスメートが興味を抱いて彼を取り巻くことになるので、そのつど彼は自分の秘かな思惑を満たされるのだが、しかしそのうちにしだいに飽きられてしまい、みんながほとんど見向きもしなくなってしまう。そのときの彼の表情は、やはり寂しげであった。かたわらで見ていた一人のクラスメートが、にやにや冷笑的な笑いを浮かべながら、「手品なんか趣味にしたってしょうがねえじゃねえかなあ」と私にささやいたものである。

これらはたまたま私の少年時代の生活をよぎった風景にすぎない。だが彼らが私のなかでいつまでも気にかかっていたのは、彼らの振る舞いが際立って特殊で奇異なことであったからではなく、むしろ反対に、私自身のなかの孤独なものの部分的な鏡像をそこに見出していたからに違いないのである。

イラスト＝征矢直行

「趣味」は彼らのエロス

誰とでも簡単に共有するわけにいかない好みの世界を自分のなかに確立することは、(彼自身が自覚していようとしていまいと)

わかってもらえない自分というものができることの反映なのである。それはどこかに、自分をこの世界の現実性から超出させてしまいたいとする傾向のようなものを潜ませている。

人と交わる世界における自分を空虚なものとすること。他者との具体的な〈生活〉を手にすることはできないが、意識の余剰のようなものだけはありすぎるほどある状態。私たちはこの時期、一様に、自分のことなど他人にわかるはずがないと、どこかで思っている。だからこそ同好の士を見出したと思ったとき、つい過剰な喜びを表に出してしまうのである。

この表出の場面は、なぜか羞恥感を呼び起こす。相手の志向が自分の思惑と違っていたら、それは異性にふられたのと同じみっともなさとして現われる。趣味の一致不一致――それを通じて心の流通が可能かどうかを探るプロセスは、エロチックな交通関係における心的なあり方を正確に映している。「趣味」を人に告白することは、愛を告白することのように恥ずかしい。

もしも思春期の少年少女たちが、彼らの友人関係に過不足なく同調することができたり、特定の異性との生活のうちに早くも自分の生の重要な意味を見出していたとしたら、彼らは格別に自分の趣味をマニア的なところまで突きつめなくともすむだろう。学校が終わったので、さあこれからまっすぐ家に帰ってパソコンと対話しようとひたすら考えつつ校門を通り抜けた矢先、そこにクラスの女の子がぽつんと立っていて、彼女に「あなたのこと、ずっと思ってたの」などと、もし突然言われたとしたら、少なくともその日、彼は自分の「趣味」を純粋に貫くための心の「安定状態」を確保することは難しいだろう。

家族から離脱し、まだ新しい関係的存在としての自分を見出しえていない、エロス的生活からの過渡的な疎外状態。その空白がおそらく「趣味」の世界を強力に呼び寄せるのである。言いかえると、「趣味」が彼らのエロスとなる。

〈俗〉的価値の否定と〈技術〉の高度化

文化として花開くあらゆるものは、マニア的な情熱によって支えられている。ゴッホは日射病でぶっ倒れるようになるのもおかまいなしに炎天下で絵筆を握り続けていたし、ピアニストであった頃のシューマンは小指の力を強くするためにバネを取りつけたことがもとで指を動かすことができなくなってしまったという。

人はこのたぐいのエピソードをしばしば天才たちの壮絶な生き方の証としてロマンチックに語ることを好む。しかし、同じような人間的傾向が時には極端な犯罪となって現われたりすることを忘れてはならない。私たちは天才の偉業と切り離し難く思えるこれらの傾向に、ただ感嘆の溜息を吐きかける前に、こうした一種芸術の域にまで達してしまう悪魔的な傾向というものがどういう条件を背景として生まれてくるのかを、ニュートラルな目で見つめておかなくては

ならないと思う。
　人間の悪魔的傾向を支える心理的な基盤は、二つあるように思われる。一つは、人生のなかで、それがなければ生きていけないような〈俗〉なる部分（衣食住とか、他者との日常的な交わりなど）の価値を度外視してしまうことである。もう一つは、そうして度外視することによって開かれてくる一つの専門領域内で、既成の状態に対する不満足感をつねに維持するということである。
　この二つのことが、その領域内で次々に新しいものを生み出させようとする欲求につながり、それらがさらに欲求実現のための〈技術〉の高度化を促すことになる。道具をそろえる、実験を繰り返す、新しい装置や方法を考案する、頭脳や感覚を練磨する、そして何よりも、まるで自分がその領域のために作られた存在であるかのように、たえず自分自身の心身をそこに縛りつけ、失敗にも決してめげない自分を作り出す。人間のなかの悪魔性とは、ひと口に〈技術〉への欲望だと言っても過言ではないだろう。
　ところで〈技術〉とは、人間が、自分自身をつくっている要素そのものを、自分の活動の対象としてしまうことである。しかし技術は人間をつくっている全体ではなく、人間のなかの特定のいくつかの要素に光を当てるのである。対象とされたそれらの要素から、それらを対象として操作するほうの〈主体〉がつねにすり抜ける。
　たとえば、自然対象を相手とした活動で困難にぶつかったとき、自分の手を「問題的なもの」として意識化すると、〈道具〉の発想が生まれてくる。また、自分の経験知そのものが疑わしいという考えに固執すると、主観と客観の分離の意識が生じ、「実験」とか「調査」とか呼ばれる対応方法を編み出すに至る。
　ではこのような人間の悪魔的（技術志向的）特性を、自分のある特定の欲望そのものに向けたらどうなるであろうか。彼は次のように発想し、次のように行動するに違いない。つまり、自分のなかのその欲望のエッセンスが何であるかを感じ取り、そしてそのエッセンスがつねに新鮮な生命力を保ち続けるために自分は何をしなくてはならないのか、と。
　欲望のための新しい素材を四方八方から見つけ出してくること。欲望が目の前の道筋の単調さのために退屈してしまわないようにたえず新風を送り込むこと。現在のさまざまな制約のなかで、可能なメニューを並べ立て、さらに無理をしてでも、ある対象や方法がその欲望にかなっているかのように演出して見せること。たいして変わるはずもないのに、これまでとちょっと異なる趣向や組合せを開発するために心血を注ぐこと。
　さて、これこそは、現在私たちの高度消費社会で起こっていることである。
　高度消費社会が私たちの日常生活に与える二つの心的影響は、衣食住のことを考えないですむ時間が大幅に確保されることと、人間どうしのわずらわしいつながりをできるだけ避けたいという願望が力をもつこと

である。

この二つの心的影響は、人間の悪魔的特性が自分の特定の欲望そのものにひたすら奉仕するような傾向をつくりだす。

生活の軽視を可能にした高度消費社会

マニアはいわゆる〈生活〉とは逆の方向を向いた情熱に支えられているから、それは衣食住と他者との共同性という、〈生活〉にとって不可欠な二つの要素をできるだけ自分のなかから稀薄にしてゆこうとする傾向をもっているし、また、稀薄にすることが実際にできるような条件に置かれなければその情熱を追求することはできない。たとえば、厳しい残業時間をこなさなければ自分の生活を維持できないのであれば、彼はマニアになっている余裕などないであろうし、家族の誰か（たとえば老人や小さい子ども）の面倒を見なくてはならないような立場だったらそんなことにうつつを抜かしている暇はない。

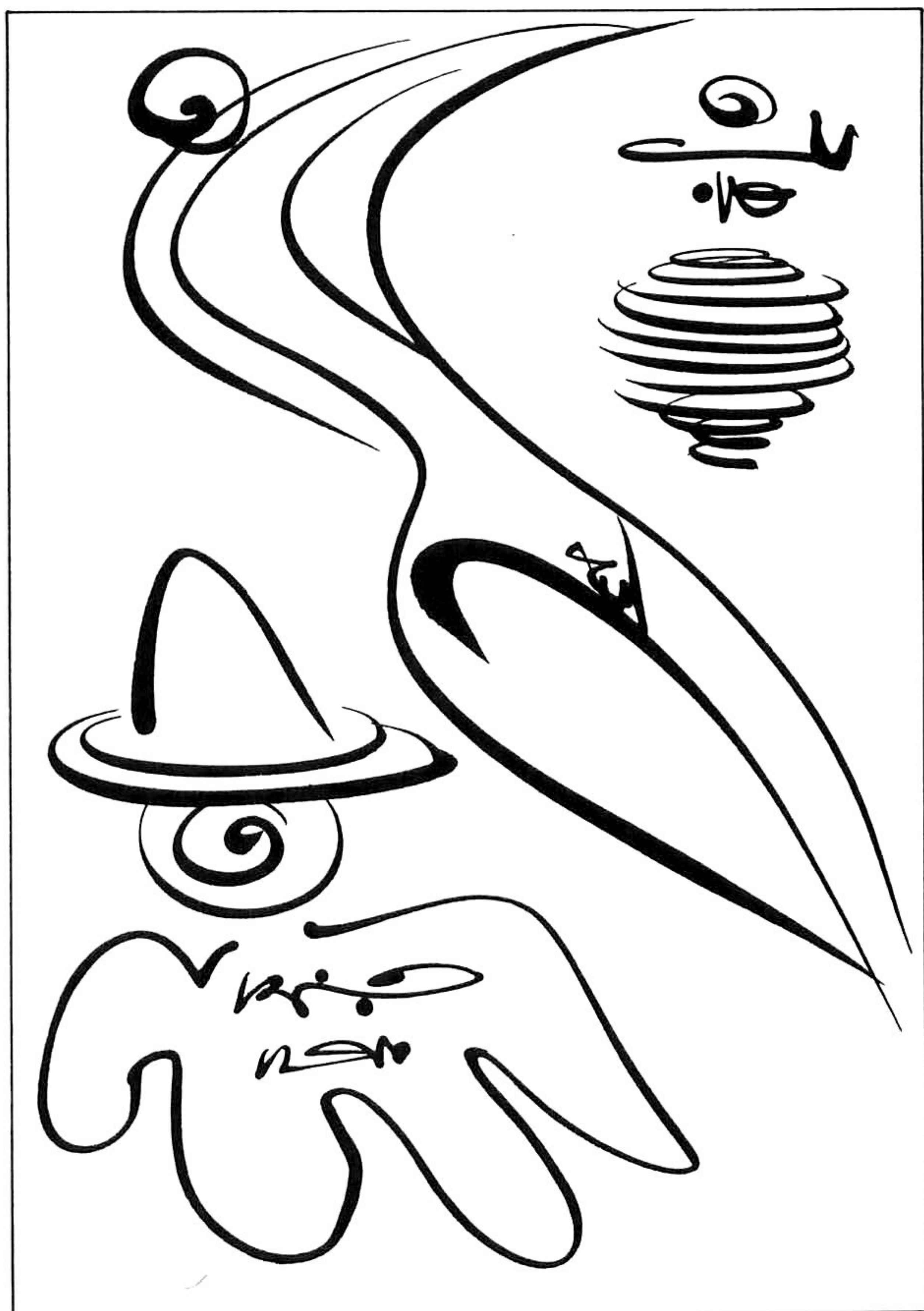
マニアは生産と消費、昼と夜、人間づきあいと孤独、これらを使い分けて自分の時間を確保する。その時間の内部では、社会の共同性が強いてくる倫理的要請は無力であろうし、性の共同性が吸引しようとする〈親和力〉も歯が立たないであろう。こうして社会的拘束と性的拘束の二つから相対的に自由になった現代人の隠された欲望は、さまざまな方向へ突出し、それぞれの赴くところにしたがって深化の道をたどることになる。

肝心なことは、現在これらが大衆的な規模で起こっていることである。大衆と言えばプロに対立する概念と考えられていた。ところが現在では、仮にひとつの道を選んで追求し始めると、まるで誰もがその世界の呪縛力にからめとられてゆくように、必然的に専門化してしまい、むしろ深入りしないアマチュアの姿勢を貫くことが難しい状況であるとさえ言える。こういうことは逆に、プロがプロとして成り立つ古典的な意味を危うくするかたちでも現われている。要するに、大衆の一人ひとりが「何々専門家」になってしまう時代なのかもしれない。

制度が把握しきれない〈過剰〉

同じことを別の角度から見れば、次のようなことも言える。私たちの社会生活は制度的な規範によって秩序づけられている。時代や地域によって、この規範の性格はゆるかったりきつかったりするが、現在の日本社会は、個人の生活感性が古い規範からはみ出してしまうような事実があちこちで露呈していると言えるだろう。

たとえば、高等学校というのは、「教育機関」ということになっている。しかし少なくとも私の見るところでは、この施設が日常時間のなかで設置主体の目的にかなうような「教育機関」としての機能を果たしているのは、全体の半分にも満たないのではないかと思う。

ここで、半分というのは、必ずしも全学校の半数という意味ではない。進学校から

底辺校に至るまで、それぞれにその性格を異にしてはいるものの、要するに生徒たちの生活気分が、制度としての学校的なものに半分か、それ以下くらいしかつきあっていないということである。

進学を志す生徒はたしかによく勉強する。しかしそのことは制度としての学校のあり方に敬意を払っていることでは少しもない。彼らは多くの場合、「授業」など聞かないで勉強するのだし、塾や予備校に通うことで明確な選択意志を働かせている。

また底辺校とあえて言わずとも、中間クラスの高校においても、学校は半ば以上、生徒たちの生活交歓の場と化しているのではないかと思う。校内暴力などのかたちで制度とのぶつかりあいを経験していた頃は、ある意味でまだ制度としての学校に何事かを期待する面が生きていたとも言える。現在、生徒たちは一見おとなしい。しかしそれは、学校との関係でよりいっそう「シラケ」が進んだ状態であるとも言えるのだ。

彼らは教室にウォークマンを持ち込んで秘かに、あるいは公然とそれを聞きながら授業を受ける。また学校を男と女の出会いの場と心得て、身辺のラブストーリーに興じたり、枝毛のケアに余念がなかったりする女生徒たち。

マス・メディアがたれ流す現代都市社会のエロス的なイメージが若者たちの感性を揺さぶり、「学校」というコンセプトを魅力のないものとして印象づける。「学校」とは何か？　どうせ頑張ったところでたかが知れている俺たちの未来を設計してもらうために、この退屈な「授業」なる時間に耐えろというのか？

このように、若者たちがマニア志向とい

うひとつの典型的なところにはいり込んでゆく心的な基盤は、制度空間が自分の持ち札によって現在の人間を把握する力を充分に示しえないというかたちで、消極的に説明される。制度が現在、〈人間〉を把握しうるその許容限界からはみ出したところで、人間的な諸関心と諸能力の過剰な部分が勝手な成長発展を遂げてゆく。その様はさながら栄養を与えられすぎた樹木がグロテスクに枝を伸ばしてゆくようである。

「自己＝世界」の抑制なき肯定

「おたく」であるために必要な要素は何だろうか。どういうことをどのようにしていれば「おたく」であると認めてもらえるのか。このことばの発明者・中森明夫は次のように述べている。

〈『おたく』の由来については、まぁみんなもさっしがつくと思うけど、たとえば中学生ぐらいのガキがコミケとかアニメ大会とかで友達に「おたくらさぁ」なんて呼びかけてるのってキモイと思わない。そいでまぁきゃつらも男なんだから、思春期ともなればスケベ心のひとつも出てくるだろう。けどあのスタイルでしょ、あの喋りでしょ、あのセーカクでしょ、女なんか出来るわきゃないんだよね。それに『おたく』ってさぁ、もう決定的に男性的能力が欠如してんのよね。でたいがいはミンキーモモとかナナコとかアニメキャラの切り抜きかなんか定期入れに入れてニタニタしてるんだけど、まぁ二次元コンプレックスといおうか、実物の女とは話もできないわけ。これがもうちょいマシになると、女性的存在をあんましアピールしないアイドル歌手のほうへ行ったり、屈折してロリコンしたりするってわけ。それで成熟した女のヌード写真なんか絶対受けつけないんだよね〉

（'83年『漫画ブリッコ』おたくの研究②）

また、今年（八九年）の九月にサンケイ新聞に連載された「喪失の世代　若者たちはいま」というシリーズでは、ビデオ、やおい族たちのアニパロ、パソコン通信のチャット(おしゃべり)、ロリコン趣味、ゲームセンター、NTTの伝言ダイヤルなどが問題的なアイテムとして取り上げられている。

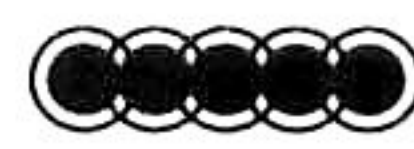
どうやら、男と女の関係のようなどろどろした現実からの逃避を、現代メディアの神話的な呪縛力によって果たそうとするところにこの「種族」の特質があるらしい。さてそうだとすると、これらの現代メディアに共通する神話的な呪縛力の正体とはいったい何なのだろうか。

それはひとことで言えば、こういうことではないだろうか。自分の観念や自分の身体に源を発したものが、一定の因果関係によってあたかも世界のどこかや誰かとつながっているかのような「自己＝世界」肯定の錯覚を与えてくれるということ。

少しわかりにくい断定かもしれない。類推として夢のメカニズムを考えてみよう。夢において私たちが遭遇する共通のことは、経験から超越させて自己を立てること

の不可能さである。そのため、夢においてはいま経験されていることをとりあえず固定しておいて自分をそこから引き離し、その経験の意味を確かめるために何度もその同じ事象に反復的に向き合うということができない。夢は経験そのものであり、それはたえず流れており、その流れゆく経験にいつも自己は忠実につき添っている。たとえば何度電話をかけてもダイヤルがうまく回せないというような反復的な夢でも、はじめは番号メモがよく見えなかったが、次は指がすべってしまったとかいうように、一回ごとに違った障害のかたちで現われるのが普通である。

このようになるのは、夢見る意識が夢のなかの経験の展開を自己に対してほとんど全面的に肯定していて、疑う能力を奪われているからである。

「おたく」趣味においても、一定の装置に自分を適応させると、その流れにどこまでもついていくことができる。流れに対して時々立ち止まって、批判的に自己を立てるということが許されない。夢の意識と同じように、経験のなかにある自己がそのまま世界とイコールであり、しかもその「自己＝世界」構造を全面肯定しているのである。

メディアが生む現実参加の錯覚

こうした全面的な「自己＝世界」肯定の錯覚を与えるメディアの呪縛力は、小説世界への没頭などとよく似ていると言えるかもしれない。

しかしもちろん違っている点もある。それは、小説世界への没頭のように意識を空しくしてそこに展開される世界に自分をゆだねるというのではなくて、必ず何らかの意味で自分の実践的な意志や身体を働かせて状況に参加しようとしている点である。彼らはただ「読む」だけなのではない。自ら「作り」「手を動かし」「集め」「呼びかけ」ることによって、現実参加の〈錯覚〉のなかに主体的に自分自身を追い込む。作られた幻影世界が向こうからやって来るのを待っているのではなくて、自分のほうから幻影を作り出すことに力を貸すのだ。作品のなかの主人公に自分を託すのではなくて、あくまで主人公は現実に行為している自分なのである。名歌手の美声に聞き惚れるのではなくて、カラオケで自ら歌ってみることによっていい気分になろうとするのとその意味では同じである。

このことは、「おたく」趣味が文学愛好者のように一部の限られた知性や感受性の持ち主によって支えられるのではなく、大衆的基盤を持ちやすい事情をよく説明している。と同時に、現在、若者たちが現実に触れようとして何か行動的な触手を伸ばそうとするとどういうことになってしまうかを象徴している。それはひとことで言えば、共同性への飢餓感や焦燥感を現代のハイテク・メディアがほとんどすべて吸収している状態なのである。

現在のメディアは、「宗教に変わる宗教」のような要素を持っていると言っても過言ではない。パソコン通信のチャットや伝言

ダイヤルのような顔の見えない相手との交信は、自分のパワーが世界のどこかに届くかどうかを確認したい欲求が人々のなかにいかに強いかを表わしている。また、アニメーションの世界は、コマからコマへと作品を統制していく時間の流れのなかに、たとえ現実を無視していても少しも不自然ではないような、伸縮自在の感じがほとんど無限に感じられるということが、その魅力のひとつになっている。これらはみな、言ってみれば夢想された「観念の手足」なのだと思う。だが逆に言えば、生身の世界においてそういうパワーや伸縮自在感を実感できないという無意識の挫折経験が、そこには繰り込まれているのだろう。

「マニア」の大衆化と「おたく」

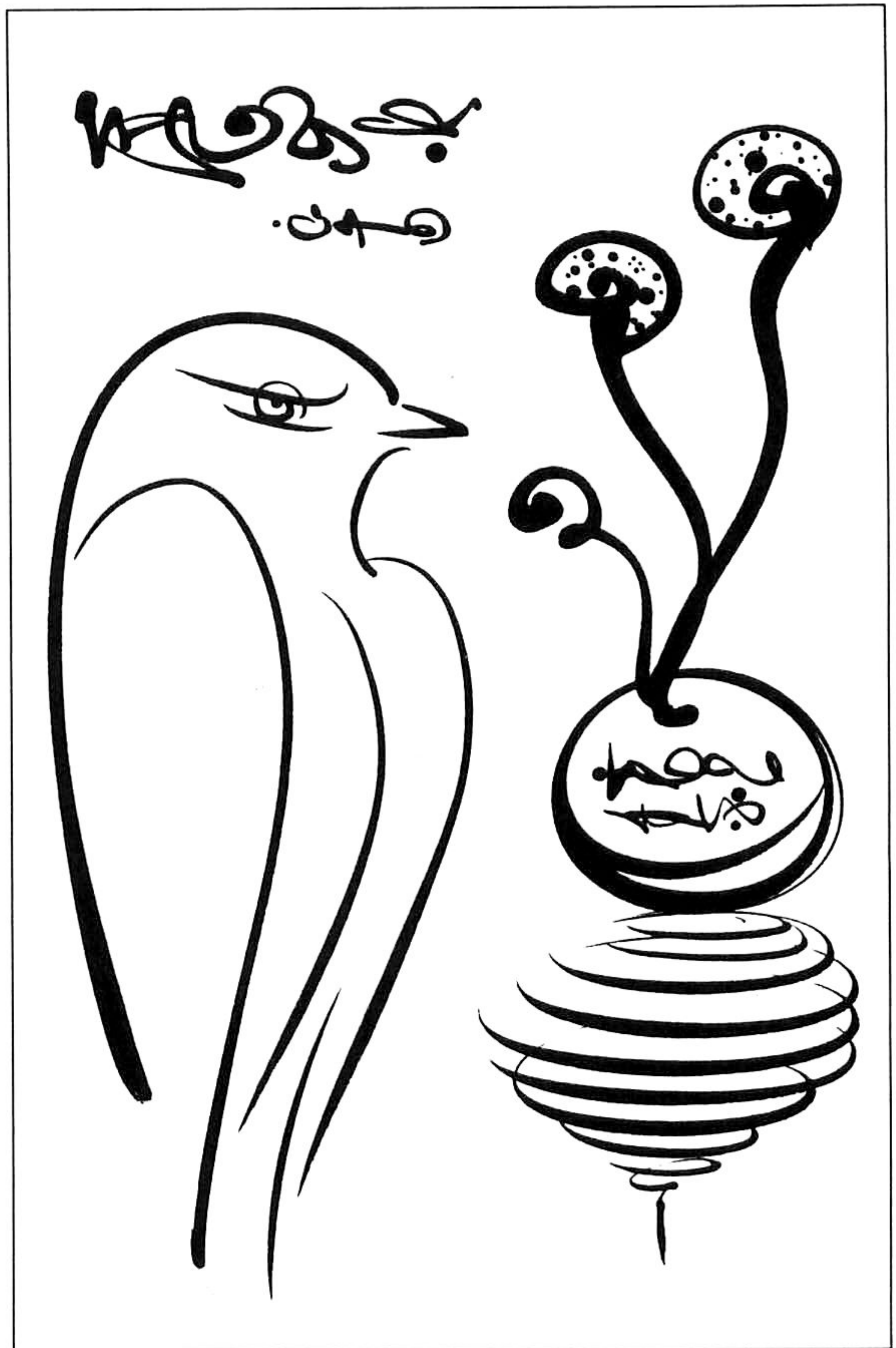
しかし、ひとまとめに「おたく」と言っても、その一つひとつに注目してみると、すべてが降ってわいたようなまったく新しい趣味の出現というわけではなく、古い趣味からの系譜を何となくたどれるものが多い。

たとえば、ゲームマニアは「危機に対面し、乗り越える」という志向を表現化したもので、囲碁や将棋の世界の論理を極端に加速したものと考えることができる。また、パソコン通信や伝言ダイヤルは、日記や交換日記、旅館に置いてある雑記帳などのように、自分と不特定の他者との間にパイプを通したい欲求の現われと見なすことができる。またビデオの収集は本の収集と同じ側面があるし、やおい族は昔だったら詩や小説の同人誌を作りたがる人たちであろう。さらにロリコン趣味は、覗き、下着マニア、痴漢などのように、オナニズム的な要素の強い性倒錯と共通の要素を持っている。

つまり、「おたく族」の出現は、古くからある人間の諸傾向が、現代の都市社会、情報化社会のなかの独特の〈孤独〉の様相、人間関係の難しさといったものに直面することによって、大衆的な規模でたどることになった軌跡の一つだと言いうるであろう。

そこで次に手をつけておかなくてはならないのは、現代における人と人とのコミュニケーションのあり方がどのようなフォームのものになりつつあるのかということについての、もっと緻密な分析である。

ニセの他者とのコミュニケーション

現代のコミュニケーションのあり方をもっとも支配・制圧しているメディアはテレビと電話であると私は思う。ところが、この二つはその意志伝達の実現のされ方が対極的と言えるほど大きく違っている。そこで、まずその違いは何であるかを原理的におさえ、そのあと、これら二つのメディアによって、私たちの「関係への意志」がどのようなあり方を強いられ、またそこからどのようなはみ出し方をしているかを語ってみたいと思う。とくにテレビメディアの功罪などについてはこれまでさんざん言われてきたが、一方の電話については、コミュニケーション論としての「電話論」

というような発想があまりなかった。この領域では考えてみるべきことがたくさんありそうな気がするのである。

メディアとしてのテレビと電話の現象的な違いは非常に明瞭である。前者は情報の公開性が前提だが、後者は秘密性が前提である。前者は多数の受け手に向かって発せられる、いわばポリローグ的な通信だが、後者は原則としてダイアローグである。また前者は一方的な発信を本質としているが、後者は相互的な交信を本質としている。

以上のように列挙できる現象的な違いをその内在的な性格から言い直せば、テレビは受け手の側から計画的に発信し返すことができないことによって権力的な性格をいくらでも持ちうるが、逆に受け手の自由選択性が無限に許されていることによって（視聴率！）、受け手がどんな態度を取ろうと、コミュニケーションの不通に対して責任を取る必要がない（気づかいがいらない）。これに対して電話は、相互性が保証されているために非権力的であるが、逆に、受け手の態度がコミュニケーションの成立にとって決定的な意味を持つ（気づかいがいる）。私が常々乱用してきたことばで言えば、テレビは社会的なメディアだが、電話はエロス的なメディアである。

一人ひとりが、主体なき放送局

現代の人間はコミュニケーションということに関して、きわめて複雑多様な欲求を持っている。自分は参加せずに人の言うことをただ黙って聞いていたいと思うときもあれば、参加はしたいが無名性を保ったままでそうしたいと思うときもある。また特定の誰かにだけわかってほしいと思うときもあれば、やや広く、利害関係や社会的属

性の共通する人々の間に訴える必要があるときもある。さらに、もっと不特定多数の対象に呼びかけたいときもある。その場合でも、個人としての秘密を保持しながらそうしたい場合と、名前を明かして自分を印象づけたい場合との違いもある。

　これらさまざまな要求に応じて私たちはそのつどメディアを使い分けているわけであるが、それにしても、大衆の誰もがなじんでいる二大メディアであるテレビと電話だけでは、もはやこれらの複雑多様な欲求を満たしえないと言えるだろう（その他のメディアはまだまだ大衆的に利用しやすいとは言えないだろう。私の考えでは、オーラルな手段をリモートコントロールできることがメディアを日常化・大衆化させることにとって決定的であると思う。その意味で、テレビと電話はやはり他に抜きん出たメディアである）。

　たとえばあるテレビ番組のあとに視聴者からの電話が局に殺到するなどというのは、こういう場面でのコミュニケーションの不全性に大衆がいらだっていることをよく表わしている。また、学校や幼稚園などで、各家庭への電話連絡網というのがあるが、想像に難くないように、これはよくコミュニケーションの不都合を引き起こす。通信革命がもっと進んで、数十から数百ぐらいの中小規模の利害集団に対する公共的な連絡は、その範囲だけの通信ネットワークでたちどころに済ませられるようになるとよいのだが、現在のところはまだそこまでいっていない。

　このように考えてくると、パソコン通信のチャットやNTTの伝言ダイヤルを利用した「おたく」的マニアの出現が、現代の人間が潜在的に持ち始めているコミュニケーションの欲求のあり方と、実際に利用できるメディアの限界性とのずれを、先端のところで象徴しているということがわかってくるだろう。彼らのコミュニケーション欲求は、テレビ的な不特定多数に向けた一方的・公開的な情報提供のあり方と、電話のように相互的・秘密的な、相手の確定した濃厚な情報交換のあり方との中間的なところを志向している、と、とりあえず言っておこう。

　伝言ダイヤルでは、いかにもヒマで無聊（ぶりょう）をかこっているような青年が、ここへ電話してくれなどと言って直伝の番号を伝えたり、サラリーマンがストレス解消のために、上役の実名入りで「バカヤロー」などとどなり散らしたりする。また、パソコン通信では、姿の見えない相手との文字による交信を通じて、面と向かっては言えないような恥ずかしいことも言い合ったりするという。

　こういう半公開的でありながら相互交信的でもあるコミュニケーションのあり方は、とらえどころのない一種不気味なものを感じさせる。新しい〈夜〉、新しい〈裏〉の世界が、メディアの可能性の限界点のほうから構成され始めているのだろうか。

　彼らは「関係への意志」を未知の相手に向かって投げかけはする。その限りでは「電話」をかけているのとそれほど変わらな

い。しかし、その相手が具体的な身体をもって目の前に現われようとすると、私はただテレビの番組を楽しんでいただけだとでも言うように、自分の顔を隠そうとする。情報の送り手であるということの一定の主体性を満たしつつ、なお、その表出の結果を背負うことからは免れていたいという無責任性をも確保しようとする。これは現在の若者の対人的な対応のパターンを象徴している。

それにしても、一人ひとりが自分の無名性を保存した放送局でありうるということ、このことは、来たるべき社会や権力の構成についてきわめて錯綜したイメージを与えることになる。彼らが呼びかけている対象は明らかにエロス的な他者であり、その動機もまたエロス的なものである。しかし彼ら自身の内部においても、その他者の濃厚な具体像があるわけではない。彼らの意志は、むしろはじめから当てのない曖昧な対象を求めているかのように、虚空に向かってはかなく放たれる。そしてそのような位置の取り方を選ぶことによって、たとえ暫定的にせよ心の安定が得られるのだとすれば、それは結局、自分自身を未知で曖昧な存在のままにとどめておきたい欲求を語っているということになる。そこには、自分という存在や自分の行為が名前を持ってしまうことに対するおそれのようなものさえ感じられる。

「世界」と戦わずにすむ「裏道」の拡張

趣味の深さは孤独の関数であると私ははじめに言ったが、多くの場合、必ずしも深刻な孤独が彼らの状況を説明しているわけではないであろう。そのように〈内面〉的な深読みをすること自体、彼らにとって迷惑なことであるのかもしれない。ここにはむしろ〈遊び〉の自動運動のようなものが強く感じられるからだ。つまり、主観的な寂しさが問題であるのではなく、いわば構造として若者たちが身にかぶってしまうあるバイアスが問題なのである。

昔ならば、現実に飽き足りない感情の捌け口は、組織化されれば反体制的な運動となり、個人の表現であれば「トイレの落書き」とか「投書」的なウラミ節の次元にとどまっていた。ところが、テレビ的でも電話的でもないような交信ルートが開かれつつあるということは、抑圧をすり抜ける仕方や愛の重荷から身をかわす仕方をひとつ編み出したのと同時に、その抑圧や重荷の正体が何であるのかを自分に対してはっきりさせないままに済ませてしまうことをも意味する。世界のつかみどころのなさは、自分にとっての自分のつかみどころのなさとしてもう一回生き直されるのだ。そこでは〈権力〉も〈愛〉も精彩を失い、私たちは希釈化されたそれらの一部を我知らず分有したり、無法則に他者に向かって投与したりすることになるのかもしれない。

おたく産業は巨大なブラックマーケットだ!

知られざるもうひとつのアニメ・マンガ商法

河内秀俊
ルポライター

「アニメ」は「ポルノ」より強し

街のいたるところに〈おたく〉がいる。モノマニアックな人物はみな〈おたく〉だ、という極端な説もあり、彼らの存在は、日本全国いたるところであまりに日常的な風景になってきた。同時に、彼らにさまざまな商品を提供する〈おたく〉マーケットも隆盛の一途をたどっている。

そんな彼らの風景を見に、街に出た——。

昨年の七月、映画会社の「にっかつ」は全国の直営館二十四館のほとんどをポルノ映画専門館から文芸エロもの専門館に衣替えして、名称も「ロッポニカ」に統一した。そのなかの一館、東京・新宿の「ロッポニカ新宿」(昭和五十五年開館)が、いつのまにかアニメ映画専門館「新宿アニメッカ」に変身していた。

場所は新宿中村屋の裏手。JR新宿駅南口から明治通りに向かって甲州街道の坂を下った左手に、「新宿アニメッカ」が入っているヒルトンビルがある。「あなたも運勢を占ってみませんか」という看板がまず目に飛び込んでくるこの地域は、古くは戦後の新宿闇市。暴力団が仕切り、十年ほど前まではパチンコ店や両替所、飲食店、麻雀店などがひしめきあっていた地域だ。ここ何年か、三越裏に若者向けの飲食店が増えるにつれてこぎれいになってきたが、今もそのなごりが色濃く残っている。

「ここは昨年七月に、『ロッポニカ』に路線変更するとき、アニメ映画の企画制作会

新宿アニメッカ

社のMTVがスタッフごと小屋借りして『アニメッカ』になりました。ご存知のように、邦画はなかなか難しい時期ですからね。にっかつ側も実験館という意味合いで貸してくれたようです。私自身はMTVからの出向社員です」

　こう語るのは同館の営業企画担当者、松山盛夫さん(三十六歳)。MTVは劇場版『妖刀伝』などで知られる中堅アニメ制作会社である。同館は百八十六席。平日は午前十時過ぎからオープンして、日に五回転。日・祭日なら朝八時から六回の入れ替えをする。客層は、「十七、八歳が主で男の子が七割、女の子は少ない」という。

「今現在、年間百二十~百三十本のOAV(オリジナル・アニメビデオ＝マンガ雑誌、TVアニメそのままの焼き直しでなく、キャラクターを借りて新しいストーリーで構成したもの)が市場に流れているんですが、そのセールス・プロモートの場所を確保したくてこの小屋を借りちゃったわけです。新作ビデオを出す場合、常設館を持っていれば日時やイベント内容に制約を受けることもなくなるし、他社に貸し出すこともできるわけです」

　その地下一階、切符売り場横はさながら土産物店だ。「アリオン」コミュニケブック(メモノート)、「魔女の宅急便」定規、シャープペン、下敷きなどの文房具。アニメビデオ、Tシャツ、トレーナー、テレカ、セル画、ポスター、マンガ家直筆のイラスト、『女戦士ラフェラ&ジクオラジトス』(大陸書房)などのSF文庫本がところ狭しと並んでいる。そのなかに「バービー人形」(タカラ製、二千~三千五百円)が混じる。

「人形は意外に人気があるんですよ」

　ときおり上映中のアニメの音が漏れ聞こえてくる地下二階の通路で、タバコを片手に淡々と語る松山さん。だが彼自身も、かつてはアイドル・グッズに始まって、今は〈おたく〉向けグッズを製作販売する会社に勤めていたことがある。

「う~ん、やっぱり好きだった時期があるんですよ。ぼくらはマンガが主流でしたけど、十数年前、『宇宙戦艦ヤマト』、『機動戦士ガンダム』の劇場公開で徹夜組が出たりして、アニメファンが誕生してきて、その頃中高生だった連中が抜け切れずに、作る側に回ってたりしてね。ファン気質も変わりましたね。変わらざるを得ないのかもしれない。年一作ぐらいしかなかったし、誰と話しても通じたけど、今はメチャクチャ。作品数も多いし、知ってることを競い合ってる感じだな」

　作る側も、普通の映画に比べればコストは安く、従来、映画制作能力があっても大会社の壁に阻まれて参入できなかった出版社、おもちゃメーカー、大手のアニメの下

請制作会社、音楽業界からも参入して、「乱作気味かな、とも思う」という。
　とはいえ、「アニメッカ新宿」の営業成績は「今のところ、まったくの赤字経営」とか。「平日の一回の入れ替えが二十人ほど」と、昨今のアニメ・ブームからは予想できない数字が返ってきた。
「これまでいちばん入ったのは徳間の『風の谷のナウシカ』。一回の上映で五十～六十人ですかね。今はMTVのオリジナル展開が始まるまでのつなぎ、劇場用アニメのリバイバル上映館といったところです。ここは今アニメ・ミーハー向けで、ホントの〝オタッキー〟が来館するのは新作ビデオを扱うようになってからです」
　と、あきらめ顔。

あの失神、失禁したアニメファンはどこに

　東京・池袋にある「テアトル池袋」も名画座系の上映館（昭和五十五年開館）だったが、今年三月、やはりアニメ専門館に衣替えした。JR池袋駅東口を出て、明治通りを目白方面にいった八階建ての雑居ビルの最上階にある。ビルの周囲は酒を中心にした飲食店街。同ビルの一階にも居酒屋、中華料理などの看板が目立つ。「新宿アニメッカ」同様、ファンタジーとはあまり縁のない環境だ。
「やはり名画座ではやっていけなくなったということですよ。これまでも春休みや夏休みにアニメの番組でそこそこの結果は出てましたし、ちょうど今年三月から五月までアニメ番組が組んであったので、思い切ってアニメ専門に切り替えたわけです」
　こう語るのは同館の所一宇支配人（四十六歳）。同館は二百四十席で、平日は昼十二前後時から、二本立てなら三回転半、一本立ては五回転、土日・祭日は朝十時前後から同四回転、同じく六回転する。
「やはり、モノはOAV中心。大手映画会社は夏場など、学生の長期休み向けにしか作品を作りませんから、どうしてもOAVに頼らざるを得ない。もっともOAVは上映時間が短いですから、『メガゾーン23』の前後編で一時間四十分にするとか、うちの方も料金とのバランスをとるのに番組設定に苦労しますね」
　同館の場合、キャラクター・グッズはほとんど置いていない。
「まだ始まったばかりでどうこう言えませんが、今のところは変えて良かった。結果は出てます。ただし、今後のこととなると頭が痛い。年内の番組の設定は終わっていますが、年明けがまだ決まらない。例年なら大手が正月向け、春休み向けにアニメ作品を出してくるんですが、今年は作らないということでね」
　当然、OAVの比重は高まるばかりだが、こちらにも問題がある。
「集客率がまるで違いますからOAVのイベントもなるべくやってもらうようにしてますが、公会堂などのホールに比べれば収容人員が少なかったり、興奮した女の子の事故も怖い。コストの問題もあって最近は劇場でのイベント開催は少なくなってき

てます。劇場での発表イベントは制作会社にとってもコスト増だし、映倫マークをもらうのにポスター一枚にも金がかかる。市販ならかからないわけです。そのうえ、ビデオ用のものを劇場用に焼き直せば、監督、スタッフにも二次使用のギャラを払うことになる。ビデオ制作会社がこれからも劇場にかけようという姿勢を見せてくれるのか、頭の痛いところなんですよ」

マニアについては、

「お客様は神様。どうこう言える筋合いではないんですが、ハッキリ言って暗い。ジャッキー・チェンの映画を見に来るお客様と比べる方に無理があるかもしれませんがね」

また、女性キャラが主人公なら男性客、男性キャラが主人公なら女性客とマニア動向もハッキリ出るとか。そしてここも客の平均年齢は十八～二十歳といったところで、意外にもOVAの中心ファン層といわれる中・高校生の姿は少ない。では、彼らはどこにいるのか。

今年、新作ビデオの発表イベントで話題になったCBSソニーの『鎧伝サムライトルーパー外伝』。昨年、今年と二度にわたって行なわれた新作発表イベントで、熱狂した女性ファンが声優と握手した瞬間に失神、救急車を呼ぶ騒ぎになったり、なかには失禁するファンも出たというあの熱気はどこに。

声優からプロデューサーまで届いた女子高生のファンレター

彼らはホーム・ビデオ市場にいた。

このアニメは、かつての大ヒット作「聖闘士星矢」（東映）に続く〝美少年アニメ〟と言われ、もともとはテレビ朝日系で放送されていた。現代の東京を舞台に、五人の美少年が戦国時代の武将を思わせる妖力を備えたバトルスーツを身にまとい、人類を危機に陥れる妖怪（これも美形）相手に戦うというもの。

CBSソニー映像事業部販売促進グループの遠藤浩平さん（二十一歳）は、「サムライトルーパー」のビデオ化の経緯をこう語る。

「テレビではタカラがスポンサーになって、小学生の男の子向けのおもちゃの宣伝企画番組として昨年五月から夕方五時半から放映してました。もともとは『聖闘士星矢』（OVAは、同グループ制作）のようにキャラクター・ロボット（人形）の販売戦略アニメだったんです。当初は、通常ならこの時間帯にこの手のアニメがとれるはずの視聴率一〇％がとれず、六～七％と低迷。結局三クールで打ち切りになったんです」

が、女子中・高校生からのファンレターが、「尋常でないという感じで、声優さんはもちろん、うちの映像事業部の制作プロデューサーにまで来るんですね」

さらに、レンタル店向けにTVシリーズを全八巻、三十六話をビデオ化したところ（一本一万二千八百円）、これが売れに売れてその数およそ一万本。

「ビデオにはレンタル向け（一万二千八百円以上）、セール向け（三千八百～五千円）

Vol、1「太陽のムカラ」（CBSソニー）

があって、この商品は値段を見てもわかるとおりレンタル向けだった。しかも男子小学生向けだったはずが、レンタル屋に入らずレコード屋さんを中継して女子中・高校生や一般のお客さんに売れちゃったわけです。そこで昨年、OAVの『外伝』一、二巻を作って売り出したところ（一本三千九百円）、これが十万本の大ヒット商品になっちゃいました」

五人のキャラクターの声優たちもバンドを作ってキングレコードからデビュー、CDもすでに二枚出すという悪のりぶり（？）

この十月には、「鎧伝サムライトルーパー輝煌帝伝説」（一本三千九百円）が売り出された。

「まだ発売したばかりでわかりませんが、当初の売れ行きは前回の三倍強でスタート。このままなら前回以上の売れ行きは確実です」とか。

動画一枚三百円、月五、六万の使い捨て

イベントの客層は九九％が女性、世代は「中学生からOLまで」と幅広い。いわゆる同人誌では、「C翼（キャプテン翼）」（CBSソニーグループ）、「星矢」や「トルーパー（サムライトルーパー）」（ファンもメーカーもこう省略する）、そして最近、赤丸急上昇中の「天空戦記シュラト」（テレビ東京系で放映中、OAVは創通エージェンシー、タツノコプロ）は、いわば四大人気OAV。盛んにキャラクターがコピーされているが、共通点はいずれも〝美少年〟アニメであること。そのあたり、作る側に意図的な狙いはないのか。

「いや、ぼくも遠藤もマニアじゃないし、マンガってむしろ嫌いです」

こういうのは同事業部制作グループ・プロデューサーの風間康久さん（二十六歳）。例のファンレターが来たという人物だ。

「当然のことですが、商品としては売れる量が問題ですから一部のマニアックなファン層ではなく一般受けを狙っています。制作現場のスタッフはぼくらと同じ若いヤツ、二十一、二歳ぐらいでほとんど男です。『トルーパー』を作るとき、他の商品と違うのはコアのスタッフは絶対動かさずにキャラクター性を高くする（一枚の原画により多くの情報を描き込む）ようにしていることですね。通常はスタッフも流れ作業でよくかわるんです」

「トルーパー」ファンの熱狂ぶりについては「彼女たちは『光GENJI』と同じような騒ぎ方をしてますけど、彼らの方がむしろアニメに近い感じがする。人間的な深みのある顔じゃなく、キレイでハナヤカでスマートで、彼らのプロモーション・ビ

デオなんかアニメっぽいですよね。ファンはぼくらがアニメを見る感じと違うところで捉えてるんだと思う」
　一方、OAVという言葉を作り出し、この業界のいわば老舗ともいえる㈱バンダイ・メディア事業部鵜之沢伸さん（三十二歳）は「六年前、うちが初めてOAVを作って売り出した頃はたしかにマニア向けじゃないと売れなかった時期がありましたけど、レンタル店が普及してからはそんなこともなくなりましたね。当社の場合、狙いはおもちゃの販売にあるわけですから、やはり幅広い客層をつかむように軌道修正してきました」
　バンダイは、現在、業界では随一の月産二本というペースでOAVを制作・販売している。昨年度の年商約七百七十九億円のうち、OAVの売上げはおよそ二十億円。『機動警察パトレイバー』（昨年四月に販売開始以来、四万本を売る。一本四千八百円）はマンガ週刊誌掲載、TVアニメ化に先駆けてOAVが世に出し、通常と逆の展開を演出したもので、「逆玉の輿ビデオ」と呼ばれ、バンダイの仕掛けの多彩さ、ヒット作連発の企画力には他社の追髄を許さないものがある。
　こうした制作現場を支えるのは、
「作画、キャラクターデザインは二十代〜三十代までの美大とか大学の映画科、芸術学部出身者が多い。作画の前段階が動画、その前を原画といってますが、動画、原画となるとマンガ家志望の若い人が多い。アニメ学校の出身の人も多くて女の子もけっこういますが、作画を担当するまでにステップアップした人にぼくは会ったことがない」
　作画、キャラクターデザイン担当者はマニアの間ではスターだ。自分のイラスト集も出版されるし、単行本の表紙のイラスト依頼の話も来る。一方の動画は一枚二百五十〜三百円。原画は、一カット二千円ぐらい。こうした世界で働く下積みの若者がOAVを支えているともいえるが、彼らのほとんどがマニア昂じて自分で作画、キャラクターデザインをやることを夢見てアニメの専門学校などに入る。が、一日十枚の動画を描けなかったり、一日で一カットの原画を描けない人もおり、「ホントに好きじゃないと続かない。ハッキリいって月五万、六万では食えないしボロボロやめていきますよ。やめて田舎に帰ったり、ほかの仕事に就いたりね」と鵜之沢氏はいう。
　授業料を払ったうえに、いわば使い捨て扱いなのだ。彼らファンはどこの世界でも一緒で取り憑かれ、抜け切れない以上、いつまでも奉仕することを求められ続けるが、アニメ・ビジネスの世界では助けに来るヒーローもいなければ、彼ら自身がヒロインになることもありえない。

「おたく」のデパート「書泉ブックマート」

　もともとは普通の書店だったのが、まるで〈おたく〉族に侵略されてしまったかのように変身してしまった書店もある。
　古本屋街で知られる東京・神田、「書泉

ブックマート」はその代表格。昭和二十四年に開業した総合書店「書泉グランデ」の支店として昭和四十二年に新装開店した。
　同書店の重野講治さん（三十七歳）が語る。
「私が昭和五十二年にブックマートに配属された当時は、総合書店としてはとにかく効率が悪かった。そんなとき、日大、中大の郊外移転が決まりましてね。『こりゃ、いよいよいかん』ということで、五十七年に一挙に今のような形にしちゃったわけです。対象年齢、学年を一般、大学生から中高生レベルまで落としてね」
　それまでは地階は、法律・経済・教育図書。一階が月刊週刊雑誌・新書・文庫本。二階が文学全集・医学・理工学図書・実用書。三階が一般書店としてコミック本など、そして四階は今も「ブックマート」の得意とするプロレス関係などのスポーツ関係図書という配置だった。それを現在の、地階に月刊や週刊の雑誌とそのバックナンバー。一階に新書・文庫・新刊書。二階に「人生ゲーム」などサイコロゲームとその関連図書、芸能関係図書、ビデオ、関連グッズ、三階にコミック、四階に地図・スポーツなどの趣味の本、という配置に変えたわけだ。
　現在、二階、三階はさらにマニア向けに磨きがかかって、RPG（ロールプレイングゲーム）などのテーブルトークものに進化。三階も同人誌、アニメの人気作画・キャラクターデザイナーのイラスト集などが揃えられている。
「とにかく、うちでなければ手に入らない、という印刷物を置くことを目指した。これはグランデの経営方針をそのまま子どもの世界に当てはめたわけです。マンガ専門の高岡書店など参考になる書店もあることはあったんですが、改装当初はこれでいいのかと半信半疑でした。やはりお客さんが定着するまで二、三年はかかりましたね」
　おりよくテーブルトーク・ゲームが流行し、二年前から置いた同人誌の世界も今が盛りである。現在、平積みで二十点ほどを置き、同人誌界のスーパースター「高河ゆん」の描く作品などは月に一千部を売り尽す。
「やはりうちは三階が目玉。平日でこの階のレジ通過客数が八百〜千人、目的買いが多いですね。土日には、まあ倍は入るでしょう」
　月に何度か、同店に同人誌サークルの女性たちがじかに配本に訪れる。が、彼女たちの持ち込むマンガ本がなぜ受けるのかはわからないと重野さんはいう。
「理解しようとする必要はありませんよ。マンガに関してはもう動きは読めません。同人誌の選定はサークルの子たちから直接、動向情報を集めてます。従来の業界の知らないところで異次元のマーケットができて

高河ゆんが参加した同人サークル「夜嬢帝国」発刊の『聖闘士星矢』のパロディ本、『星矢毒本』（表紙画＝高河）

る感じで、しかも活発に動いている。昔はプロのアシスタントからマンガ家が出てきましたが、これからはコミケからどんどん出てくるんじゃないでしょうか」

　こうした書店以外に、最初からマニア向けショップとして開店する書店もある。新宿、高田馬場、吉祥寺、そしてこの十月に池袋に新店をオープンした「まんがの森」もそうした書店のひとつ。同店の前身は、いわゆるビニ本屋、自販機商売を専らにしていたが、昭和五十九年に現在の形に変えた。開店当初から同店に関わる池袋店店長、印口崇さん（三十四歳）は、

新宿まんがの森

「今、出版物を商おうとしたらマンガがいちばん儲かるということですよ。マンガは五万部売るというと新人の世界。中堅マンガ家で三十万部売りますからね。こんな書籍がほかにありますか。一巻三百七十円の『こちら亀有派出所』は五十九巻、これが月に三回転。横山光輝の『三国志』六十巻は月に五セット出ます。それに、お客は店に置くマンガ、イラスト集、同人誌、ビデオ、なんにでもすべて絡む。どれかひとつだけということがない。そのうえ、ひとつの作品を好きになると批評眼がなくなって全面的に支持してくれる。単純においしい商売だからやるんです」

同人誌で食う印刷所

　東京・東池袋、サンシャインビル近くに同人誌印刷が仕事の一〇〇％を占めるという「光プリンター」がある。敷地二十坪、鉄筋五階建ての小さなビル。菅野紳一さん（四十歳）の経営する「光プリンター」はその地階に居を構える。

「印刷所は父親の代からやってまして、自己紹介するときには『同人誌印刷専門です』と言ってます」

　菅野さんが印刷屋になったのは二十四、五歳の頃。東海大学時代、北極圏探検に失敗して、ふたりの仲間を遭難で失ったことの挫折感から復帰したかったという。なんでもいいから働くこと、と思い、ちょうど大手印刷会社の下請け仕事に疲れきっていた父親の跡を継いだ。

　始めた当初は、

「暇で予算の合わない大手の仕事をやった

り、地元商店街のミニコミ紙を作ったり、なかには、『数千万円単位で金を預けるから女性情報誌、女性のための会の機関紙を作ってくれ』なんていう話にのったりね。実はそれ、中身を見るとスワッピング情報誌だった」

なんてことも。

現在、同印刷所は「Pメイト」というマンガ同人誌の会を作っている。登録サークル数は、「三百〜四百。人数でいえば千人ぐらい」といった状況。つい「即売会の開催用？」と聞いてみたくもなる。

「いや、そうじゃなくて、ぼくはこの仕事をたんなる商いにしたくないだけですよ。なんらかの形の若者の運動の場、それと商売が一緒にできればと思ってやっているんです」

初期の頃の会員はすでに三十代後半、子持ちの女性もいるという。そして若い世代は十六歳前後。仲間の口コミや、即売会のカタログに載せる広告を見て電話をしてくる。

菅野さんによれば、マンガ同人誌が現在のような方向にハッキリと向かい出したのは昭和五十年頃ではないかという。

「以前は高くて使えなかったスクリーントーンをみんなが使い出した、ちょうど『銀河旋風ブライガー』なんかが流行していた頃。その後『キャプテン翼』が出て、そのパロディものが雪崩をうって増え出して、オリジナルをやってた女の子のサークルが特定のキャラをホモセクシュアルの世界に置きかえてパロディをやったり、違うキャラに乗り換えると、子どもたち同士で『あそこは転んだ』なんていう時代が来た」

それと同時に、同人誌印刷を引き受ける印刷所も倍々ゲームで増加していったという。

「今も増え続けてますけど、即売会も純粋な作品発表会ではなくなっていくわけです。即売会は、やはり夏休みとか冬休みにやることになりますから、そうすると印刷所にとってはある特定期間だけムチャクチャ忙しくて、あとは暇、という不都合なことになる。そこで印刷屋主導で即売会を、ということになったわけです」

その結果、規模の大きな即売会を印刷所が仕掛けようとすると一社ではサークルを集めきれず、七社連合とか、八社連合といった印刷所同士のつながりができ、この連合に入っていない印刷所で同人誌を作るサークルが締め出されたりということも生じてくる。参加を許可されてもブースの割り振りが不利だったり、連合に加わらない印刷所自体も搬入代、広告費、協力費といった名目で数十万円単位の費用を徴収されるといったこともあったらしい。

「うちの場合、八〜一六ページもの百部で二、三万円でできますが、こうした連合だと印刷代も何社かが示し合わせて取り決めしちゃうなんてこともあった。結局はサークルが反発して印刷所を換えたりということがあって、ムチャなことをする会社がだんだんなくなった、ともいえますね」

そして同人誌のなかに売っ子作家が誕生した。彼ら（ほとんど女性）は商業誌の連

載マンガやアニメ・ビデオの主人公を使ったホモ・パロディ（コメディ）を得意とし、その作品のほとんどは〈やおい本〉（山なし、落ちなし、意味もなしの略）と呼ばれ、なかにはなかなかそそるものがあるが基本的にはじつにたわいもない（実際、見ればほとんどがウンザリする?）。彼女たちは同人誌に〈ゲスト〉として招かれ、〈〆キリ〉に追われる。

同人誌側はどんな作家をゲストとして招けるかがその雑誌の格を、ひいては即売会での売れ行きを決めることになり、ますます人気作家を求めるようになる。一部のこうした人気作家が、稼いだ原稿料（しかもノンタックス）で「マンションを買った」という噂話が同人誌サークルの間に信憑性を持って伝わっている。事実、同人誌によっては、かなりの実入りがあるという。やりようによってはマニアを利用したおいしい商いだ。

「いや、彼女たちにも著作権がらみで悩んでますよ。だからまず、人前、親の前では死んでも同人誌の作家をやっていることを隠す、という子もいる。でも、いつの時代でもこうした体制（この場合、商業誌）に抵抗、反抗する民衆はいたんじゃありませんか。それに原作のキャラクターにホントに惚れ込まないと彼女たちは描かない。好きだから描くんです。うちにもプロになった子はいますが、けっしてお金のために描いたりはしていないし、金儲けで雑誌を作るサークルの子なんてうちにはいない」

と、菅野さんは〈作家〉といわれる女性たちを弁護するのだが……

いったいいくらの金が動いているのか

同人誌の即売会といえば、年二回、晴海で開かれる「コミケット」がすっかり有名になったが、サークル、印刷所、マニアの間でよく知られている即売会の企画会社に「赤ブーブー通信社」がある。この会社は、同人誌印刷専門の「曳航社」専務取締役の赤桐佳子さん（四十七歳）が経営する、日本で唯一の同人誌即売会の企画・開催を業務に掲げる法人（有限会社）だ。とくに三年前から始まった「ウイングマーケット」は有名だ。この即売会は完全に女性のサークルに限っての即売会で、作品も「キャプテン翼」「聖闘士星矢」「魔王伝」「銀河英雄伝説」「サムライトルーパー」もののパロディだけに限るとハッキリ嘔っていることで知られている。

「私自身は八年ほど前に同人誌専門の印刷会社に勤めたことがきっかけでこの世界に入りました。そこをやめて市川（千葉県）でやはり同人誌専門の『曳航社』をスタートさせたのが五年前。イベントの企画・開催を手がけたのは三年前からですね」

夜のダンス会に出かける前に、無理をいって会ってもらった赤桐さんは、終始にこやかにこちらの質問に答えてくれる。

「今やっているのはTRC（東京流通センター）を会場に二千（サークル）スペース、一万人ぐらいの観客が集まるイベントを月一回。それから千二百（サークル）スペー

1989年10月29日　東京流通センター

ス、観客八千人ぐらいが集まる『ウイングマーケット』をやってます。この八月に初めて大阪で千七百スペースのイベントを開催しましたけど、やっぱりあちらはまだ市場としては遅れてますね。大阪はアルバイトをする場所が東京に比べて少ないですから、子どもたちがあまりお金を持っていない、という事情もありますね。これから東京並みのマーケットに育てていくのが夢なんですけど」

　気になる赤桐さんの主催するイベントの収支をたずねてみた。まず収入は、「曳航社」の儲け、イベント入場料（参加グループの掲載されたカタログを買う）、そしてサークルの参加スペース料。カタログ一部四百円、参加料が一スペース三千二百円ほど。赤桐さんの方が負担するのは、警備会社の警備員派遣料、会場借賃、机・椅子など備品のリース料、スタッフ（約八十人）バイト代、カタログ制作経費など。さらにこれに「曳航社」社員十人、「赤ブーブー通信社」社員、嘱託三人の給料が出る。たとえばTRCで開催する「ウイングマーケト」の場合、会場代だけで一回百四十八万円ほどかかるが、「ほぼ月二回のペースでイベントをやってる」ことを考えれば、かなりの収入が予想できるが、赤桐さん自身は「いえいえ、私ひとりで食べていくのがやっと（彼女は独身である）」と謙遜する。

　参加サークルの方は、といえば、一サークルが作る本（当然「曳航社」利用が多い）は一種類五十冊から一万冊とグループによってさまざまである。印刷代は「五百部で三十八万円、千部で五十万円といったところ」で、販売価格は「八百円から千五百円ぐらまで」。参加サークルの「三分の一ぐらいは千円ちょっとぐらいの値段で売って」いるらしい。買い手たちも「五万、十万円とまとめ買いしていく子も珍しくない」とのこと。いったいひとつのイベントで合計いくらぐらいの金が動くものか見当がつかない（暇な方は計算をどうぞ）。

ホモパロディを描きまくるお嬢様？

「人気作家は同人誌ではオリジナルはまったく描きませんね。売れないですからね。社会生活をしたことのない人たちが現金をやり取りしていて、しかも当たれば飛ぶように売れてお金が入る。大人だって現金商売は面白いんですから、そりゃ楽しいし、面白いですよ。描くこと、本を作ることも面白いですけど、なんといっても現金が動く、これが魅力でしょうね」

　赤桐さんの方も、人気サークル、人気作家にいかに自分の主催するイベントに参加してもらうかが「勝負」だという。それにはやはりお金？

「私が頼む場合は、税金を払ってやってる商売ですからお金は動きますけど、サークルがゲストとして作家さんに原稿を依頼する場合はそんなことがあったら大変ですよ。お金のやり取りはいっさいありません。作家さんの方もそんなことをされたら怒っちゃいますよ。だからイベント会場は花束、チョコ、人形だらけ。あれ、みんな作家さんたちに対するお礼の意味があるんですよ。描いてもらえるかどうかはあくまで人間関係しだいです」

　なぜ作家に女性が多いのか、また、彼女たちはなぜプロをめざさないのだろうか。

「私の主催するイベントの参加サークルは九割が女性です。男の子はいつかビデオにいっちゃうし、根底には性の問題があるんだと思います。男の子向けのソフトなそういうビデオはないし、あったとしても女の子たちは恥ずかしくて手を出せない。その点、マンガは表現がうまければ本人たちの感性に見合ったセックスが描ける。昔から女の子たちの性というのは隠花植物のようなところがあるもの、それがうまくマンガとマッチするんじゃないかしら。それとプロになるとなにかと出版社側の規制が入って思い通り描けなくなるでしょ」

それにしても〈作家さん〉たちとサークルの間にお金のやり取りがない、というのもなんとも腑に落ちない。〈売れ線〉といわれる作家が二十歳過ぎになったら、どうやって食べていくのか。

「彼女たちは経済的に恵まれた子たちが多いですね。精神的な余裕も時間もある子たちですよ」

　ホモパロディを描きまくって楽しむお嬢様！

　さて、赤桐さんの今後の展開は、

「もっともっとマーケットの参加者を増やしていきたいですね。参加してこんな楽しいものはないし、子どもたちも仲間はできるし、いいことだと思ってます。今後はまだ市場として未熟な北海道や名古屋、静岡なんかにも進出していきたいですね」

　以上、レポートしてきたのは昔から商人が、「女子どもを狙え」と言ってきた原始的な商いの風景だ。結局は、甘ちゃんが食われる世界で、〈おたく〉は一般社会の代わりにこの風景のなかで社会勉強をしていることになる。

　この点、原宿マーケットにそっくりな構図が見える。いわゆる祭り商売。縁日商売。「バイ」である。そして、いつか祭りは終わるが、この「バイ」は日本人の精神構造が変わるときが来なければ終わりそうもない。

「ホンマかいな」というのが正直な感想だ。

高度消費社会に浮遊する天使たち

浅羽通明
「みえない大学本舗」主宰

七〇年代後半、サブカルチャーの質的向上により
アニメ、マンガ、SFなどの情報を共有することで
同類意識を持つ若者たちが出現した。
「おたく」――その発生前夜から大衆化した現在に至るまでを、
学校化社会というベクトルに照らし歴史的に考察する！

扉写真＝『ベルリン天使の詩』（フランス映画社）

「おたく」という言葉が初めて使われたのはマイナー・ロリコンマンガ雑誌、『漫画ブリッコ』誌の八三年六月号「『おたく』の研究①」であった。中森明夫のセンスによって、それまで、マニアとか熱狂的なファンとかネクラ族とか呼ばれていたマンガやアニメ、SF、コンピュータ、アイドル、鉄道などに没頭する若者の一群が、やや差別的ながら、的確な呼称を一括して与えられ、鮮やかにイメージづけられたのである。

それから六年。かの宮崎事件の渦中で「おたく」という言葉は突如、新聞、週刊誌上に浮上した。たとえば、『週刊読売』（一九八九年九月十日）は、「おたく族とは」と題する囲みを設けて、「アニメやパソコン、ビデオなどに没頭し、同好の仲間でも距離をとり、相手を名前で呼ばずに『おたく』と呼ぶ少年たちのこと。人間本来のコミュニケーションが苦手で、自分の世界に閉じこもりやすいと指摘されている」と解説している。

こうして「おたく」は、とりあえず八〇年代の新しい若者現象として私たちの前にある。では、「おたく」と呼ばれるような若者が、実際にどれだけ存在し、ほかの若者と比べてどの程度に特殊なのか、八〇年代の若者全体のなかで彼らはどのように位置づけられるのか？　八〇年代を測候するための基礎作業のひとつとして「おたく」を考えるにあたって、まず「おたく」的若者が、一定の層として存在することを、データによって確認するところから始めよう。

新人類は「おたく」だった◀

――「おたく」誕生前夜のサブカルチャー

マーケティング業界誌『消費と流通』誌の八六年春号掲載の論文「〝感的知性〟が優れた『新人類』」（三浦康英、松浦一郎）は、ODS企画調査部による全国六千人を対象とした生活意識調査（ODS―LSI調査）を基に八〇年代の若者を四種に分類している。いわく、

①ニュースタンダード派（推定構成比六〇%）

②感的知性派（推定構成比二〇%）

③ゲームズマン派（推定構成比一五%）

④内的モラトリアム派（推定構成比五%）

の四種である。

このうち、「豊かで余裕のある結婚生活」「豊かな老後の家庭生活」を人生目標として現実主義的、体制順応的に生きる多数派であるニュースタンダード派や、明日の青年実業家を夢みてゲームを楽しむようにビジネスに精進するゲームズマン派はひとまずおく。とりあえず、「おたく」が含まれそうなのは、②と④である。

まず、④の内向的モラトリアム派については、次のようにコメントされている。「パソコン、アニメ、新興宗教などの閉ざされ

た安心感の存在する世界を発見し、その世界に安住」し、「人とのコミュニケーションが苦手な人たち」「他人と接触する必要をあまり感じない若者たち」。これが、いわゆる「おたく」とほぼ重なることは明らかだろう。

面白いのは、彼らは「自分がひたりきっている世界のこと以外には、あまりエネルギーと金を費やさず、物財所有の欲求も小さい人たち」であるゆえに「企業にとっては、正面から対応してもあまり〝うまみ〟のない層」と断定されていることだ。新人類ブームと呼ばれる八〇年代若者論のなかで、「おたく」がほとんど注目されないできたのは、おそらくここに原因があるのだろう。すなわち新人類論は、何よりも内需拡大の巨大な市場、消費者の群れとしての若者をめぐって闘わされたのであったから。マーケティング業界にとって、「おたく」は市場とはなり難い若者たちとして把握されていたのである（これは、外見的に見ばえがしない「おたく」が、雑誌等で取り上げられなかった事情とパラレルである）。

だが、面白いのは、②の感的知性派——「新人類世代のイメージリーダー層であり」「大企業は、たとえ彼らを直接ターゲットとはしないにしても、彼らの影響力が他のマス層へどう波及してゆくかをしっかりと見張り、それを自分たちの商品、広告、宣伝訴求にうまく味つけとして生かしていくことが重要である」とされているタイプについてのコメントだ。④の内向的モラトリアム派と対照的に、マーケティングの見地から、要注目マークをつけられたこのタイプの特徴もまた、「おたく」を思わせないでもないのだ。すなわち、「あらゆるものをすべて等価値にみ」て「アイドル歌手、昔見たＴＶ番組の主人公、そして難解な論を立てる思想家を同列に扱って評している」などである。

この種の分類には、当然のことながら、人為的強引さがつきまとう。この場合、マーケティングという価値観による分類であることによって、「おたく」をほぼ④内向的モラトリアム派として規定することに成功した。だが②感的知性派にも、「おたく」が紛れ込んでいるように思える。ここで浮かび上がる疑問は、内向的モラトリアム派と感的知性派とは、実は隣り合わせで、紙一重の差しかないのではないかということだ。

論文「〝感的知性〟が優れた『新人類』」は、②の感的知性派を、「今日使われている狭義の新人類」と判断している。思えば、「おたく」の命名者中森明夫は、この論文が発表された八六年当時、まさに新人類＝感的知性派の旗手として、野々村文宏や田口賢司とともにメディアに登板していた。そして「おたく」の語は彼ら新人類によって使われ、彼らの間でこそ流布したのである。誰よりもまず、彼らが「おたく」のネーミングにピンときたのは、彼らが「おたく」に近い場所で生きていたこと、あるいは、彼ら自身が「おたく」だったことを意味する。中森が、「おたく」を命名した八三年当時、ちょうど感的知性派と内向的モラト

リアム派とは分離しつつあった。

すなわち、感的知性派＝新人類と、内向的モラトリアム派＝「おたく」とが、未分化だった時代があったのだ。それはおそらく七〇年代中期から八〇年代に入った直後の一時期であろう。橋本治の『桃尻娘』『帰ってきた桃尻娘』に登場する松村君——ホッケの『迷宮としての世界』を読んでいることを自慢する傍ら、少女マンガやロリコンについても蘊蓄を垂れる——には、当時の彼らの一典型が戯画化されていて興味深い。

そして、この、後に新人類と呼ばれることになる感的知性派と未分化であった原「おたく」の発生もまたそう古いものではない。それは七〇年代においてようやく日本社会に現われた新しい若者類型と思われる。では、なぜ七〇年代なのか？

◆◆◆◆◆◆◆◆ 「宇宙戦艦ヤマト」にみる地殻変動

七〇年代は、日本のヤングカルチャーの転換期であった。

「おたく」たちが没頭する対象としてよく例に挙がるジャンル——アニメ、SF、特撮、少女マンガ、アイドルなどが、若者たちのサブカルチャーとしてマスメディアによっていつのまにか公認されていったのがこの時期である。

この頃の週刊誌などの記事からは、それまでと明らかな断層を隔てて登場してきたサブカルチャーに対して、好奇心を寄せながらも理解に困難をきたし、時には見当違いの問題提起を試みたりしている大人文化の対応ぶりがはっきりとうかがえる。

たとえば筒井康隆や半村良といったSF作家に、芸能人ばりのファンクラブを組織して群がるSFファンたちへのとまどい（それ以前は作家のファンはいても、ファンクラブを組織するという発想はまず見られなかった）を隠せないトピック記事。また、少女マンガを愛読する男子一流大学生たちに取材した呆れ半分のキャンパス情報。皆そうだ。

だが、とくにアニメの場合には、週刊誌レベルの取り上げ方に、勃興しつつある若者文化を、なんとか受け止めようとして、見事にすれちがっている大人文化側のぶれが顕著に見られて興味深い。

大宅壮一文庫検索目録の「アニメ」の項目を見ると、アニメについての週刊誌そのほかの雑誌の記事は、六〇年代から七〇年代前半にかけて、一年に一本から多くて四本にとどまっている。それが、七七年に十七本、七八年に四十七本、七九年には八十本とピークに達し、八〇年には三十六本に減少し、以後は毎年、二十本前後で安定してゆく。これは、明らかに、この時期にアニメが子供だけのものであることを止め、若者たちのサブカルチャーと化しつつあった事態の反映だろう。そしてその象徴的なきっかけとなったのは、七七年の「宇宙戦艦ヤマト」の劇場公開であった。

「宇宙戦艦ヤマト」は、それまで一部の先駆的マニアを除いては、若者たちの間でも幼稚なものという認識が一般的であったTVアニメーションを、一挙に若者サブカル

チャーのステージに加えた点で画期的な作品であった。その新しさは作品が含む情報量が従来と段違いである点である。それまでのように一回放映分三十分の間にヒーローが悪を倒す読み切りドラマから脱し、全編を貫く壮大なSF的設定、いくつかの謎が最終回まで秘められるストーリーテリング、緻密に描き込まれたメカデザイン、思春期の青年を主人公としてヒロインを絡ませた人間ドラマなどを盛り込んだ新機軸は、たしかにアニメの視聴者の年齢を引き上げるに充分であったといえよう。

だが、そんな「ヤマト」も、当初TVシリーズとして七四年に放映された時点では、若者層のファンをつかむ以前に、従来からのアニメ視聴者であった子供たちには難し過ぎたせいか、視聴率が低迷し、二十六回で打ち切られてしまっている。しかし、その間につかんだ熱心な「ヤマト」ファン——その多くはSFファンやマンガマニアであったと思われる——のグループにより、再放送そして映画化の要望が七〇年代後半にかけて盛り上がり、ついに週刊誌メディアの耳目をそばだたせる鳴りもの入りの映画化が実現するわけだ。

良質の作品が、「アニメは子供のもの」という既成の思考枠に妨げられて、一部のマニアのみにまず注目され、しだいに若者たちの間に浸透が進み、それを背景に再び商業ベースに浮上するというパターンは、その後、「機動戦士ガンダム」「ルパン三世・カリオストロの城」などの作品をめぐって繰り返されることになる(「カリオストロの城」封切り当時、この作品が八六年に『ぴあ』誌の読者投票による映画オールタイムズ・ベスト1に選ばれ、監督宮崎駿が、ディズニーやスピルバーグと並べられる国民的アーティストと目されることになることなど一部マニア以外だれが予想したであろうか)。だが、「ヤマト」に野次馬的関心を寄せた大人のメディアは、「ヤマト」の軍国的思想の若者への浸透を憂える、といったまったく見当はずれのテーマしか論じられなかった。このすれちがいは、大人メディアによるアニメ報道には、その後も長くつきまとうことになる。週刊誌にアニメ関連の記事が増加した七〇年代末にも、取り上げられているのは、主に東映が鳴りもの入りで宣伝した「銀河鉄道999」や反核アニメ「風が吹くとき」であって、作品の質や情報量では「ヤマト」をはるかに凌ぐ、「カリオストロの城」や「ガンダム」に触れている記事はまずないのである。

アニメを捨てない若者たち
「おたく」雑誌の誕生

だが、そんな大人メディアの視点のぶれとは無縁のところで、アニメは着実に若者文化として定着してゆく。そうしたファン層の厚みは、七〇年代後半にそれまで企画されたことすらなかったアニメ専門誌の創刊を可能とするまでに拡大していった。七六年創刊の最初のアニメ雑誌『OUT』(みのり書房)が、「ヤマト」などのファンクラブの多大な協力と、投稿欄に紙幅をさいた読者主体の編集方針で成功したことは興

味深い。徳間書店が『OUT』に触発されて大手で初の専門誌『アニメージュ』を創刊するのは、その二年後の七八年のことである。

このような、大人メディアの目が届かないところで、マニアたちのパワフルな活動に支えられた若者サブカルチャーのゲシュタルト・チェンジが下から興り始めていたのは、アニメの分野だけではない。昭和三十四年以来、長く『SFマガジン』一誌のみであったSF雑誌が七〇年代初めから急増していた潜在的SFファン層を背景に、『奇想天外』(七六年創刊、奇想天外社)、『スターログ』(七八年創刊、ツルモトルーム)『SF宝石』(七九年創刊、光文社)『SFアドベンチャー』(八〇年創刊、徳間書店)、など数誌を数えるほどのシェアを獲得するのも同時期である。

マンガの分野においても、同様である。この時期に従来の少年マンガ、少女マンガの枠をはみ出た『マンガ少年』『PEKE』のようなマニア誌が登場し、また青年誌が『増刊ヤングコミック』『ビッグゴールド』など増刊号のかたちでマニアを対象とした編集を試みたり、『JUNE』のような少年愛テーマ専門の少女マンガ誌や、『だっくす』(後の『ぱふ』)のようなマンガ評論誌が創刊されている。

「ハッカー」を自称する没入的パソコン少年たちの個人史をルポした野田正彰の『コンピューター新人類の研究』は、「おたく」現象を正面から扱った珍しいノンフィクションである。これによれば、パソコン少年たちに趣味を問うと、アニメ、SF、マンガが揃って出てくる場合が多いとしている。一般的な「おたく」のイメージもこれらのマニアの姿が原型となっているといってよい。すなわち、後の「おたく」の主流が愛読する雑誌が、ほとんどこの時代に出揃っているのだ。ちなみに、パソコン雑誌の登場も『I/O』が七六年、『ASCII』が七七年に創刊されており、やはり同時期である。その後、これらの雑誌は皆、十代二十代のマニアたちの下から突き上げるようなエネルギーに支えられて創刊され、彼らの参加によって成長している。

それにしても、なぜこの時期だったのか?

ひとつには、七〇年代にアニメや少女マンガなど、それまで「お子さま向け」とされていたジャンルに著しい質の向上が見られたこともある。アニメならば「宇宙戦艦ヤマト」のほか、宮崎駿や富野由悠季らの活躍、少女マンガならば、萩尾望都、山岸涼子、大島弓子などの「24年組」の進出がその革新の中心にあった。これらのジャンルに偏見なく接して、その魅力を知った世代が、ファングループを増殖させて、アニメや少女マンガが高水準の作品を続々生み出しつつあることも知らず、それまでの「お子さま向け」ジャンルという固定観念にとらわれて、それらを専門に扱う若者向け商業雑誌が成り立つことなど夢にも思わなかった旧世代を突き上げたからである。

「おたく」への蔑視のひとつに、いい歳をして幼稚な趣味だというニュアンスが今も

ある。それは、アニメや少女マンガの革新以前のこの固定観念の名残と言えよう。
　だが、この説明だけでは、七〇年代後半の雑誌メディアの活況の意味としては不充分である。もし新しい良質のサブカルチャーを応援する新世代のエネルギーのみが問題ならば、新雑誌の中心には、芸術としてアニメを紹介し分析したり、質の高いマンガやSFを掲載する雑誌がブームの中心を占めたはずだ。だが、マニアの核となる層を捉えたのはけっしてそうした雑誌ではなかった。
　当時アニメの分野では、『OUT』や『ふぁんろーど』、SFでは、『SFイズム』や『SFの本』、マンガでは『だっくす』といった、その分野にある程度は通じている読者のみを対象としたミニ・マガジンが、マニア雑誌の頂点として読まれていた。これらのマニア誌の特徴は、『OUT』について先述したように、読者投稿を重視し、マニア向け情報や評論を記事の中心に据え、投稿読者と執筆者の境界をあいまいにした編集方針によって、少部数ながら、熱狂的読者をつかんだことであろう。これらはいわば、アニメ、SF、少女マンガといったジャンルの成熟とマニア層の充実を前提としたメタ・マガジンだったと考えられる。

のび太たちのユートピア

◀「情報」共有がつくる秘密結社

　メタ・マガジンを少部数ながら商業誌として成立させるだけのマニア層の充実とは何か？
　ここには、意外に大きな読者論的変化が潜んでいる。たとえば、マンガ作品やSF小説そのものでなくて、マンガやSFについての情報（近刊や既刊紹介から評論まで。さらには、作家や編集者の回顧談や交友録やファン活動の情報まで）が、それ自体で消費されるようになったこと。そして、サブカルチャーに関して、同じ情報を共有している者の間に、特別の同類意識が生まれたこと。
　これこそ、おそらくたんなるアニメやSFやマンガの愛好者の群れが、現在「おたく」と呼ばれている何かに向けて変貌する鍵となった変化である。
　それは、たとえば、七五年に始まったコミックマーケットが、当初、『ガロ』『COM』といった純文学風マンガ創作を試みるマンガ青年たちの文字通りの同人誌即売会から、二〜三年を経ずして、現在、最大の「おたく」の祭典と呼ばれるイベントへ発展していった変貌とおそらく軌を一にするものと思われる。
　同人たちの近況報告などはあるにしても、本質的にオリジナルな完結した作品を発表する場であり、同人たちが己の芸術を磨き、プロをめざす場であるのが従来の同人誌だとすれば、七〇年代末以降のコミックマー

ケット（以下コミケットと略す）で即売される同人誌は、既成のマンガやアニメのパロディや、そうした作品や作者、キャラクターへの思い入れを吐露したエッセイや、同人たちに絡む内輪ウケのギャグなどで満ち溢れていた。コミケットではさらに、コスチュームプレイと呼ばれる、アニメ等のキャラクターの仮装遊びなどが始まり、同人誌市を超えた祭典として発展してゆく。

ここには、オリジナル創作能力の衰退というだけではけっして説明できない、サブカルチャーの機能の転換が見られるのではないか?

コミケットに代表されるファン活動に熱中する「おたく」たちは、アニメやマンガなどの作品と、鑑賞する自我とを一対一で向き合わせている（それが近代的個人の一般的な芸術鑑賞の前提だったはずだが）とは限らない。また自らの内面を表現に結晶させようとして同人誌を作成しているとも思えない。

彼らが、「おたく」として活動する真の動機は、おそらく自分が愛好するアニメやらマンガやらSFやらを共に楽しんでいる仲間たちがいるという同類意識にある。劇場映画やライブはむろんのこと、ひとりTVを眺めていてもマンガや読書に没頭していても、彼らはかならずしも孤独ではない。そして、その同類意識は、そのジャンルの専門的知識や裏情報を共有していることで確認し合える。まるで秘密結社の合言葉のように。

読書とは、本質的には孤独な営みであったはずだ。「声を排除した読書は、自分の耳の存在を必要としなくなるとともに、他者の耳をまきこむような空間を消滅させてゆく。すなわち、自らの聴覚をはじめとする他の諸感覚を遮断することを通じて、「個」の内面に向かう読みを完成させてゆくのは、人びとがこうした読書の態度をもつようになってからのことである」『（読書空間の近代』佐藤健二、弘文堂）。こうした古典的な読書形式に幼くして馴染んでいたらしい紀田順一郎は、初めてミステリー・マニアの友人と知り合い、「徒党を組んで本を読む」ことがありうることに驚いたという。ミステリーやSFなど、作家と内面を交錯させるよりは、作家と共に思弁を楽しむ知的エンターテインメイトの場合、それらが永くマイナーであったこともあって情報を共有するマニアたちを集わせる傾向が強い。これらは、「個」の内面に向かう読みを完成させる方向よりは、読みを知的情報のレベルにとどめ蓄積させる方向を持つジャンルなのであろう。そうした場合には「個人個人の反応の総和」であるはずの「観客全体の集団的反応」が、フィードバックして個人の反応を規定する——W・ベンヤミンが映画について述べたこの循環構造が、読者においても成立するのだ。

たとえば、日本のSF翻訳の草分けのひとり伊藤典夫が、こう語っている。

「中高生時代、SFに凝っていたのは学校中で、ぼく一人。仲のいい友人もいないわけではないが、どこかで話がくいちがう。ところが東京に来てみると、話の合う人間

がやたらにいるではないか。そのとき、ぼくはファンダムくらい居心地よい世界はないと思ったものだ」(『SFスキャナー』『SFマガジン』132号)。

六一年に上京し、日本最初のSFファン・グループ「宇宙塵」の会合に出席し始めた頃の思い出だ。こうした思いは、その後、今日にいたるまで無数のマニアや「おたく」と呼ばれる若者たちによって体験されたことだろう。

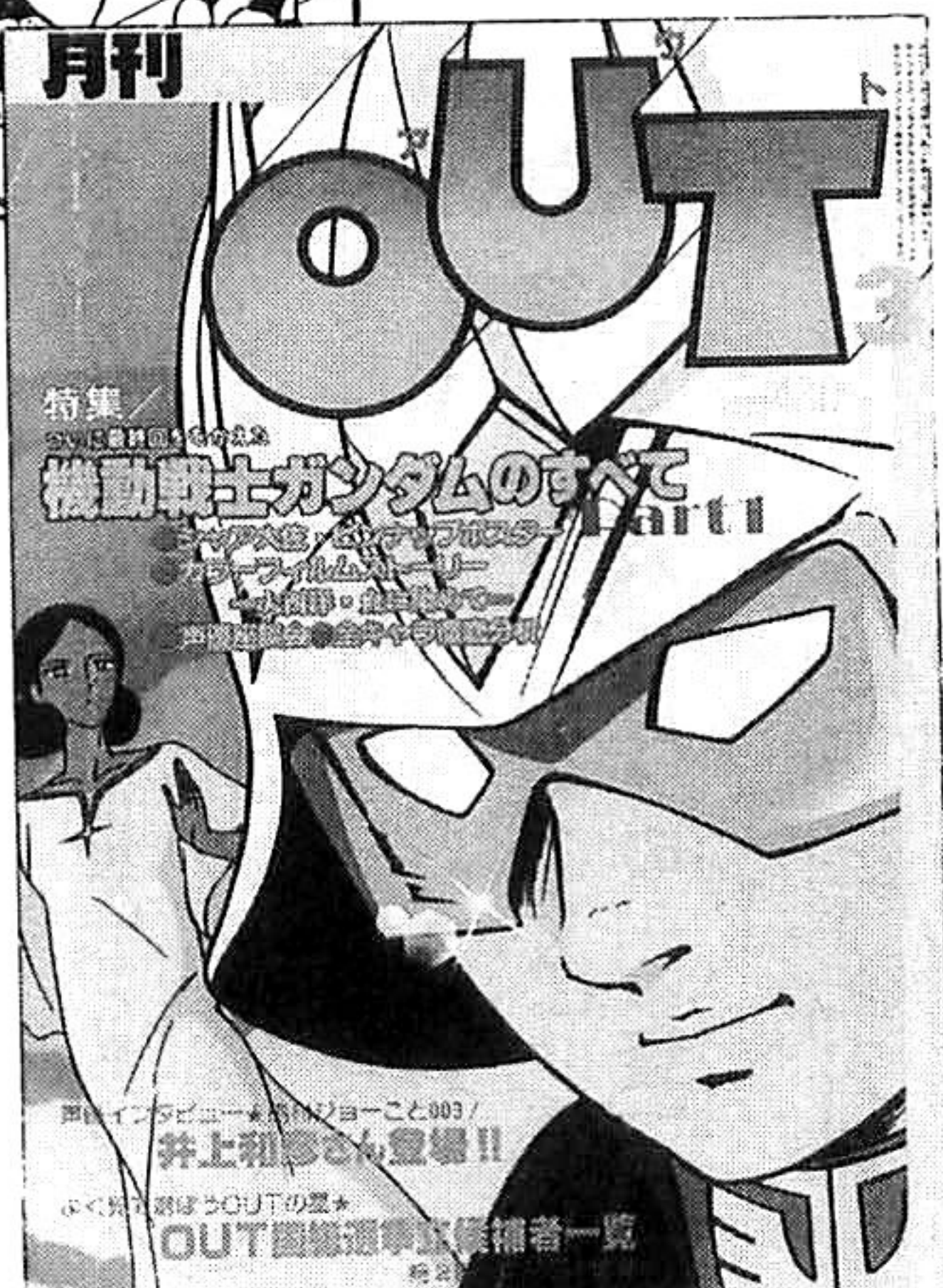
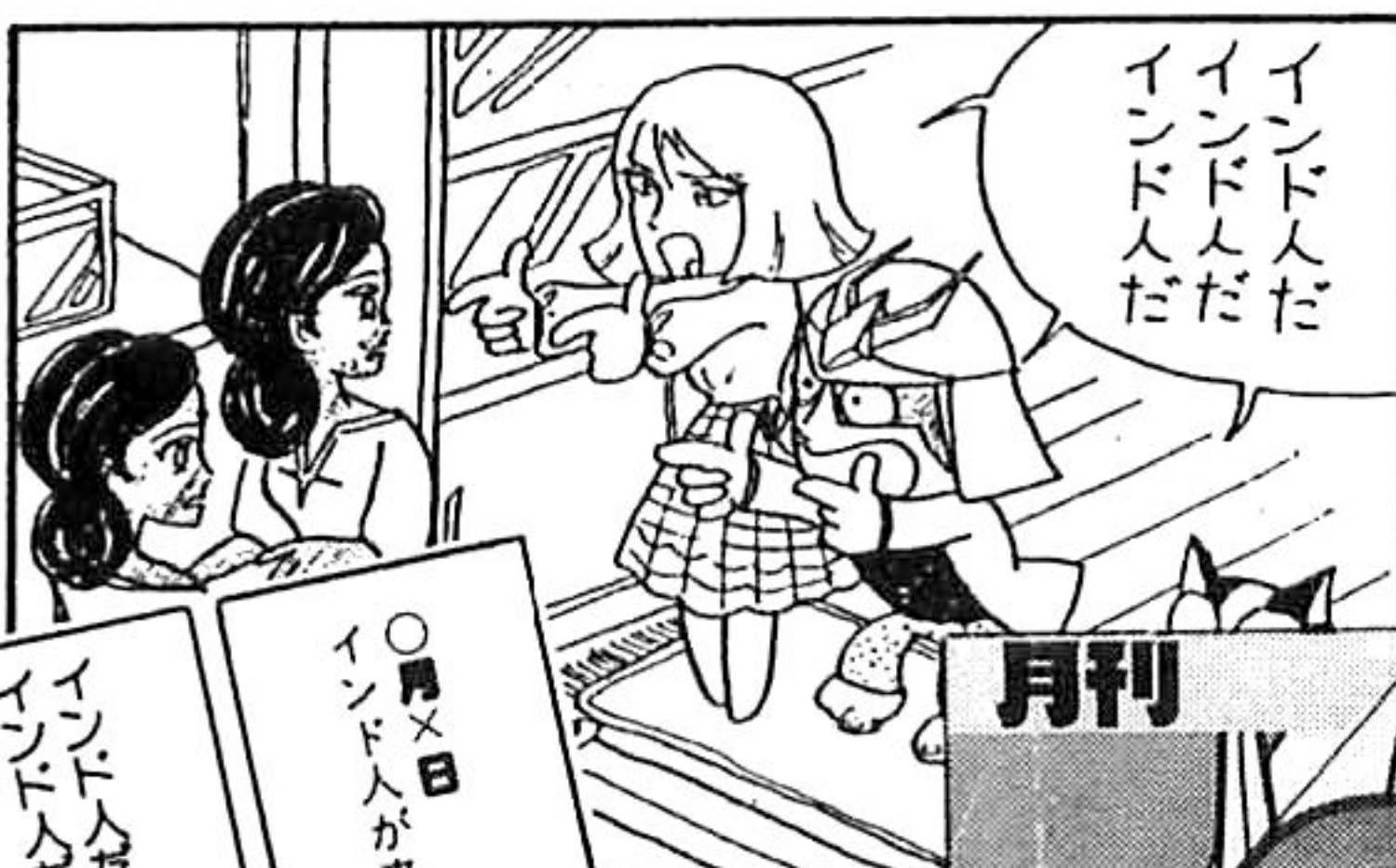
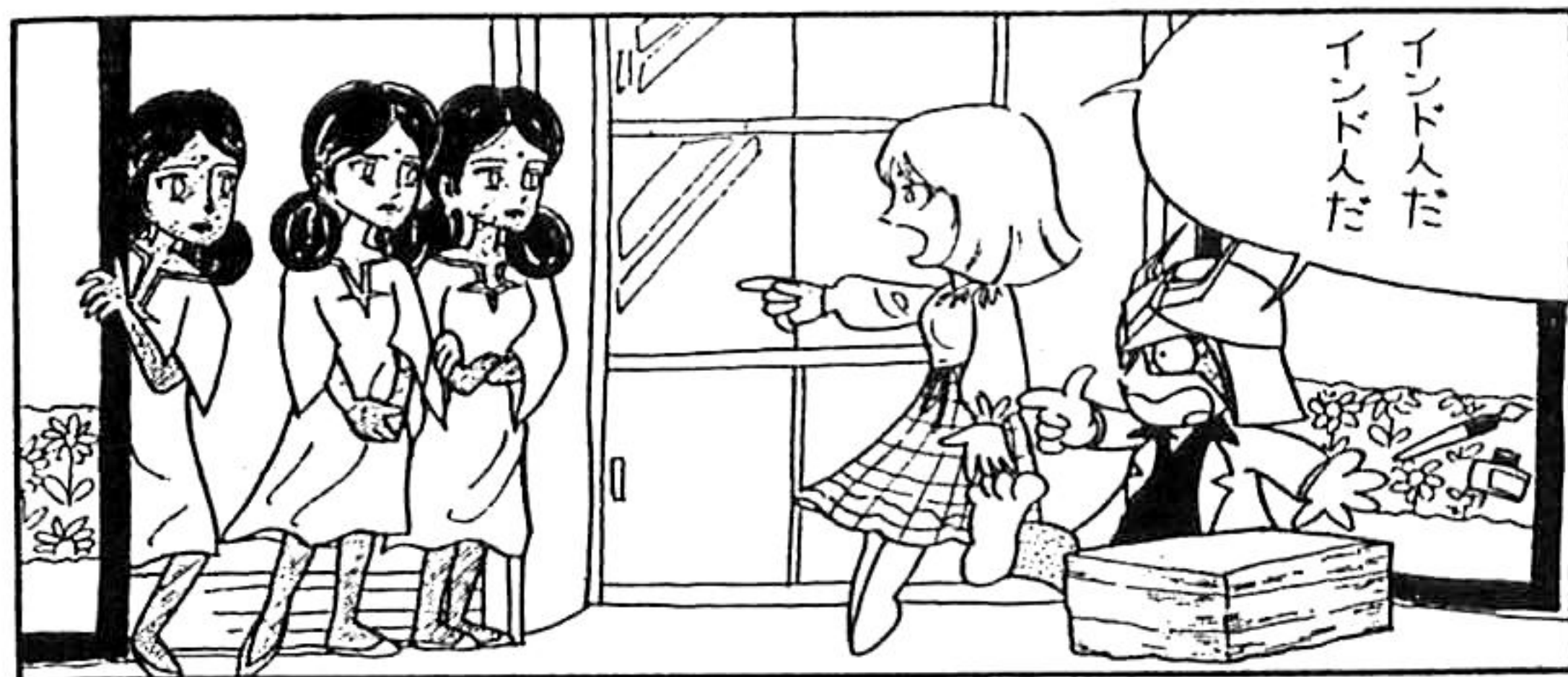
中高生時代と言えば、自我に目覚め、学校という同年齢の者ばかりが集められた小社会のなかで、自分独自のステイタスを求めて悩む時期だ。とくに、スポーツ能力や社交性で劣る者、または自我が強く自分は普通と違うという意識が強い者は、特別の趣味や知識に自分のアイデンティティを見つけようとするが、SFやアニメの専門的知識の価値などは、一般の生徒にはまず理解してもらえない。本来はそこで自分の価値を改めて客観視し、社会化のきっかけをつかむわけだが、もし、そうした特殊な知識や情報の価値が手放しで認められる社会があったらどうだろう? それはじつにドラえもんのポケットから出現したごときユートピアではないか。教室という社会で目立たずあるいは疎外されていた生徒が、読書やTVという孤独な内向的行為を経て、その書物やTVが蔵する情報を共有する仲間の間で十全に自我を認められる体験をする。これが、「徒党を組んで本を読む」「情報を共有する者同士の親近感」の基本パターンではないか? 先の伊藤典夫のエッセイに引用されているFancycropedia(ファンサイクロペディア)(アメリカのSF「おたく」辞典か?)におけるファンダム」の定義は、「ファンが、おのれの存在を自覚する世界」とある。この「自覚」が、ファン同士の同類意識に支えられていることは言うまでもない。

筒井、吾妻、「ガンダム」 おたく的パロディの「教養」

彼らの同人誌もまた、こうした同類意識の確認が大きな動機となって作成され、また読まれている。それは彼らの活動の大きな部分を占める「パロディ」という手法を見れば明らかだ。「パロディ」については、呉智英が『現代マンガの全体像』(情報センター出版局)で明晰に語っている。

「パロディが成立するためには、作者と読者の間に共通の教養が介在しなければならない。――(中略)――但、パロディに必要な教養は、必ずしも国文学の知識というような〝高尚〟なものであるとは限らない。歌謡曲に関するものであったり、怪獣映画に関するものであったり、いろいろな場合がありうるだろう」

この「教養」がどれだけ一般的であるかによって、パロディは、一般性ある教養を前提に、それ自体独立した作品として楽しまれるものから、少数の仲間が情報の共有を確認し合い連帯意識を高めるものまで段階的な享受のされかたを見せる。誰もが知っている芸能人や事件をネタとするTVのコメディアンのギャグ、若者が一般的に共有している流行がネタとなる『ぴあ』誌

左＝「ＯＵＴ」（80年9月号）より。東大阪市、池原兵衛の投稿
下＝パロディのネタ、「ガンダム」のシャアとララアが表紙の「ＯＵＴ」
吾妻ひでおのマンガ「不条理日記」より

の「はみだし」やかつての『ビックリハウス』誌のパロディ、そしてアニメやＳＦについてのマニアックな知識がなくては理解できない「おたく」たちのパロディを並べてみれば、この段階性がはっきりと見てとれよう。

　一例をあげよう。この三コママンガの面白さがあなたに理解できるであろうか？　これは、七〇年代末の『ＯＵＴ』誌に載った投稿作品である。まず、この構図全体は、当時、「おたく」的パロディに天才的冴えを見せてマニアの間で人気絶頂であったプロ漫画家吾妻ひでおの作品「不条理日記」の本歌取りである。原典（オリジナル）では、吾妻ひでお夫婦の家の玄関に、ターバンを巻いたインド人が三人訪れるのだが、この読者投稿では玄関で迎えるのはアニメ「機動戦士ガンダム」の登場人物で、敵味方に分かれて戦うという悲運の兄妹、シャアとセイラだ。そして訪れるインド人はシャアの恋人であるインド人のエスパー少女ララアなのだ。「ガンダム」のストーリー上、ララアは事

故死し、セイラとシャアは再会する。その設定をこのマンガは踏まえているのだ。さらに原典（オリジナル）の吾妻ひでおのマンガ自体パロディである。筒井康隆の「ふたりのインド人」という掌篇がそのまた原典（オリジナル）だ。これは突如ふたりの無言のインド人に押しかけられた夫婦の困惑を描く不条理ホラーである。吾妻のマンガは、恐慌をきたす側を夫婦からインド人にひっくりかえすことでギャグを成立させている。

じつにたった三コマのマンガを理解するのに、筒井康隆のマイナーな掌篇、吾妻ひでおのパロディ・マンガ、そしてアニメ「ガンダム」のストーリーといった、SF、マンガ、アニメにまたがる豊かな（？）「教養」が要求されている。まさしく「パロディは、その分野のなかでの作者と読者の知恵くらべという様相を帯びるし、教養を持たざるものを排除する性格を持つ」「いささか偏屈な知性に由来するもの」（呉智英　前掲書より）であることが実感できよう。そして、こうした遊戯が可能となるためには、作品をある程度突き放して見る冷静さが要求される。熱心なキリスト教信者には『聖書』のパロディはできないのだ。思えば、設定、キャラクターから声優、監督、作画監督、演出者などいくらでも情報を探求できるアニメ、一般人の知らない、ワープだのタイム・パラドックスだの、パラレル・ワールドだの膨大な情報の理解なくしては読めないSF、書き文字や背景や効果線などの約束事に慣れるまでは充分な鑑賞がおぼつかない少女マンガなどは、特定の情報体系（＝教養）の共有を喜び、一般人を排除する秘密結社めくエリート意識が満喫できる点で、じつによく「偏屈な知性」にフィットしたと考えられよう。

だが、こうした偏屈な知的遊戯を絶え間なく繰り返すことでようやく確かめられる教養＝共通感覚とはいかなるものか？　こうした、マイナーな情報の共有により、連帯を結びうる若者層は、いつ頃、いかなる社会的環境のなかから生まれてきたのか？

◀ガキ大将が滅び、ハカセくんが残った

——共同体社会から学校化社会へ

この問題に取り組むためには、七〇年代という原「おたく」が現われた転換期を、より広い社会的視野から検討する必要がある。

原「おたく」登場以前、たとえば六〇年代にあって、マニアックな趣味を持つ少年たちは周囲にいかに見られていただろうか？　怪獣キチガイとか、鉄道模型マニア、切手マニアの、「〜博士」とアダ名された少年たちである。彼らは、けっしてマニアであるゆえの蔑視はされなかったのではないか。むしろ、スポーツに秀でた者や成績が優れた者と並んで、ひとつでも誇れる技を持つ者として尊敬され、うらやましがら

れたのではないか？　それは、アニメやSFや少女マンガのように、いくつかの約束事のハードルを越えなければ、普通の者には楽しめないジャンルと違い、ある程度少年たちの間で共有されていた趣味が対象だったことが影響していよう。が、それだけだろうか？

　あくまで類型化していうのだが、六〇年代にはまだ、子供たちが、放課後、遊び呆けることができる空き地と時間があった。そこは日々ちゃんばらごっこが営まれる原っぱ空間だった。上下数年の歳の差のある子供たちが共に遊び、ガキ大将の下に、全員の個性が生かせるルールの模索とともに、相互に譲歩しつつ社会を創造する能力が訓練されていった。協働と闘争のルールを、日々の不断の遊び創造（クリエイト）の試行錯誤のなかで、それぞれが身につけてゆくことができた。マニア的趣味を持つ少年は、あるいはスポーツが苦手で、鉄腕アトムや正太郎の役はもらえなかったとしても、お茶の水博士の役は指定席だったかもしれない。協働のルールとは分業のルールなのだから。こうして、マニア少年たちは社会化のきっかけをつかむことができた。

　しかし、こうした遊び集団は、学校社会のみでは、きわめて形成されにくい。「学校は人々を年齢に応じて、集団に分類する」（イリイチ『脱学校の社会』東京創元新社）。異なる年齢の者の間では当然生じうるそれぞれの分に応じた協働への欲求が、そこでは退き、差異の少ない者同士が、それぞれのレゾン・デートルを模索して悩みもがく。皆が同じ向きに座り、一方向（前方）から聞こえてくる授業に耳目を集中できるよう身体を矯正することから始まる学校教育は、そもそも横との協働ではなく前方へ向かう競争をこそ原理としていた。だが戦後日本では、原っぱ空間と地域社会の日常が、社会全体の学校化に歯止めをかけ、子供たちは放課後と夏休みに、教室で汚染された近代の毒を中和してもらえた。その実態はたとえば橋本治『ぼくたちの近代史』に詳しい。

　しかし、それも高度経済成長に無茶なターボがかかる昭和四十年代までだった（都市部と地方ではある程度の時間差はある）。高度成長とは、ビルディングが空き地を潰し、残業とパートが団欒を破壊し、流通革命と幹線道路が小売店と地域共同体を解体して「豊かな日本」を築いてゆくことだったのである。

◆◆◆◆◆◆◆

「お手伝いなさい！」から「勉強しなさい！」へ

　こうして、学校化に拮抗できる自律性と有機性を保った地域社会が壊滅したあとに、七〇年代はやってきた。

「おたく」文化が独自のメディアを孕んで抬頭しつつあった七〇年代末、教育がある転機を迎えていたことは注目に値しよう。登校拒否児や校内暴力、家庭内暴力などの病理現象がマス・メディアの話題となったのもこの頃である。その波は、八〇年の一柳展也金属バット殺人事件と八三年の戸塚ヨットスクール事件で頂点に達し、八〇年

代中期の「いじめ」の季節につながってゆく。

さて、再び大宅壮一文庫目録によるならば、六〇年代後半から七〇年代初頭にかけて皆無に近かった学習塾に関する記事が、七三年に四件、七四年に二十三件、七五年に二十七件、七六年に四十二件、七七年には四十件と急増し、以後、十から二十件に安定する。ピークの七六年は文部省の「児童生徒の学校外学習に関する実態調査」が行なわれ、大都市圏では小学高学年生の三割、中学生の五割弱が塾通いをしていることが明らかになり、「乱塾時代」という流行語までできた年だ。

これらの大半は、有名私立高校もしくは中学への進学塾の乱立を取りあげたものである。これらの塾によって、放課後の時間は塗り潰され、生活すべての学校化は完成に近づいてゆく。

この学校化のプロセスは、また社会が子供たちを評価する価値が、偏差値モノカルチャーに一元化されてゆくプロセスであった。家族や地域の旦那衆が、成績の劣る子に、腕のよい職人や愛想よい商店主になる資質を見いだして、それを喜ぶといった多元的価値観による救いが失われてゆくプロセスであった。

社会学者藤竹暁が、「惜しみない愛情とは裏腹に親たちの失語症の悲劇はすすむ」と副題されたレポート、「『勉強しなさい』しか言えない親たち」を『諸君』に発表したのは、七八年十月である。親が自分の経験と仕事への誇りを背景に子供を躾け教育する自信が失われ、愛情は、「勉強しなさい」という繰り言と、限りなく物を買い与えることでしか示せない時代。同じ頃、かつて地域と結びついた家業の現場で子供を社会化してゆく訓練であった「お手伝い」が失われていった。『孤立化する子供たち』（深谷昌志　NHKブックス）は、八一年のデータであるが、食器を洗い戸締まりをする程度の「お手伝い」ですら、定期的にしている子は小学生で数％、中学生で男子一割、女子三割にすぎない。これは親の甘やかしにもよるのだろうが、より以上に家庭電化の完成が影響しているだろう。雑事がガスと電気によって駆逐されたとき、家庭は協働体であることを止めたのだった。消えていった「お手伝い」という小言に代わったのは、「勉強しなさい」であった。学校は、こうしてついに家庭をも制覇したのである。

子供部屋のテレビがつなぐ、新しい「リアル」

「お手伝い」をしない子供たちは、衣食住にかかる手間暇を知らない。熟練するまでは、包丁やホウキが思うように動いてくれないリアリティを知らない。「原っぱ」を知らない子供たちは、体を張った勝負やけんかのリアリティを知らない。すでに、彼らをめぐる環境世界は総体としてリアリティを希薄化させ始めていた。流通革命は、スーパーマーケットからコンビニエンス・ストアへと加速し、核家族用あるいはシングル用にパッキングされた食品類からはも

はや魚河岸も肥料臭い畑も透かし見ることができなくなった。ファーストフードやファミリーレストランでは、もはや生ゴミが出る調理場の気配は隠蔽されている。それ以前に、トイレの水洗化が、都市廃棄物の行方を視野の外へ追いやっていた。

大日本戦艦の司令室。「武運長久」の文字と日の丸が、彼らの心を支えた。
ゼネラルプロダクツ製作の8ミリ映画「愛国戦隊大日本」（『アニメック』第28号より）

いったんオフィス・ビルとアパートで覆いつくされた都市は、この頃、さらにコーティングをかけられる。まず、そのモデル地区とも言うべき渋谷が、ＰＡＲＣＯと１０９によって街丸ごとショーウインドウと化した。必需品と生活電化を分配し尽くした資本は、以後、生活の粉飾化、あげ底化に投入されてゆく。デザインとコピーにはじまるあらゆる流行が広告を発信源とするようになる。こうしていつしか広告業とその周辺のカタカナ稼業が、高学歴の若者の人気職業のトップに躍り出ていた。

そんなぴかぴかにコーティングされた都市のなかで子供たちは育った。勉強部屋と称される個室が東京の小学高学年生で三分の一以上の子供に与えられていると、福武書店『小学生ナウ』八一年九月掲載の「子供の持ち物」の調査は伝えている。そして、ＮＨＫ放送世論調査所が七七年十二月に行なった調査では、三分の一の親が中学生の我が子に専用のテレビを与えることを贅沢とは思わないという結果が出ている。

「おたく」たちがＳＦを愛読し、少女マンガを発見し、「宇宙戦艦ヤマト」や「機動戦士ガンダム」を熱烈に支持したのは、こうした個室のなかからであった。完成された知識を並列して詰め込まれる学校と塾。有機的な遊びと闘争のルールを生み出せない子供社会。協働も対話も希薄で「勉強しなさい」と「今度～を買ってあげる」で結ばれた家庭。生産と流通と生活臭が隠蔽された街頭。電化によって生活の手応えが希薄化し、学校化と消費資本主義によって世界がモノと情報としてばらばらに並置されたとき、世界は有機的リアリティを喪失し、ただの情報の束と化す。たんなる情報としてならば、現実よりもフィクションのほうが質・量ともに優位である。勉強部屋の少年少女たちにとって、本やアニメのＳＦワールドにパックされた情報――わかりやすく説明されるその世界の地理歴史に政治、精緻に描き込まれた複雑な人間関係やキャラクターの個性、ＳＦメカのディテールま

で――は、とっくに現実が与える情報を質的量的に圧倒していた。

こうした、「もうひとつの現実」の出現はけっして新しい話ではない。ふたたび佐藤健二『読書空間の近代』から引用しよう。

「柳田国男は『明治大正史世相篇』において、屋根の変化と紙・ガラスの導入による明るさの増大とがからみあいながら展開した家のなかの火の機能的・空間的な分裂は、家々の成員たちに小さなそれぞれの居場所を成立させたと論じ、つぎのようにつけくわえた。

『家の若人らが用のない時刻に、退いて本を読んでいたのもまたその同じ片隅であった。彼らは追い追いに家長も知らぬことを知り、また考えるようになってきて、心の小座敷もまた小さく別れたのである』」。

このとき、若人たちの心のなかで、家長のいる現実と読書空間とは同じ重さで存在し始めていた。だが、七〇年代に起こった事態はさらに複雑だった。初期の「おたく」たちは、一家に一台、TVが普及し、それまで仏壇＝祖霊が統べていたかもしれぬ団欒の新しい司祭の座についた転換期に生まれている。そして彼らの思春期は先に見たように子供部屋に二台目のTVが点く転換期であった。親子電話や家庭用ビデオデッキの普及も、やはり七〇年代後半からである。心の小座敷が小さく別れたとき柳田が考察した若人たちが自分と同じ本を読む全国の文学青年を意識したかは知らぬ。だが、子供部屋のTVの前に座った中高生たちにとって、残業で遅い父親やキッチンで冷凍食品を解凍している母親やおあいそ程度にしか口をきいたことのない教室の隣の席の友人よりも、同じ時間（平日の夕方）に勉強部屋のTVで同じ「ヤマト」や「ガンダム」を観ている全国のアニメマニアの同世代のほうがはるかに身近に感じられたのである。日常の人間関係が希薄化したとき、サブカルチャーのリアリティを媒体として、十代の対人的距離感覚が、思わぬ変動をきたしつつあった。

マニア雑誌への投稿をきっかけに、全国規模のサークルがたちまち出来上がったり、コミケットやSF大会といったイベントが、膨大な数の若者で埋め尽くされるのも、やはりこのTVの前で、あるいは読書する勉強部屋ですでに感じていた新しい対人的距離感の実現にほかならないのではないか。そこに生まれる連帯というか同類意識は、少なくとも希薄化した日常よりははるかにリアリティがあったのである。

相手の「人格」ではなく「知識」と話す

「おたく」というネーミングの由来であるといわれる同好の士どうし「おたく」で呼び合うという風俗も、こうして突然発生した新しい人間関係へのとまどいのなかで生まれたらしい。コミケットで、隣り合ったサークルどうしが、あるいはSF大会の懇親合宿で初対面どうしが、互いを呼び合う呼称でとまどったのだ。学校を中心とする互いに名前を知り合っている距離圏外の、しかし同じマニアどうしという同類意識の

ある相手に対しては、どうしても新しい呼称を用いる必然があった。思えば、「君、僕」という呼称も、高杉晋作の奇兵隊において、四民平等制の下、従来の呼称が不適当と見えたとき、漢学塾で使われていた呼称を採用したのが初めという。

それにしても、なぜ「おたく」なのか？　この点については、中野収が八六年に早くも『新人類語』（ごま書房）で「オタク」という項目を設けて論じている。これを引用して見ると、

「『オタクのご主人』『オタクの娘さん』『オタクの新製品』『オタクの部長』など、旧人類の用例を見ればわかるように、『オタクの○○は〈オタク〉に所属する』。目の前にいる個人よりも、その個人を支えているような、個人を超えた何かを、個人を介して会話の相手に選んでいるのが〈オタク〉なのだ。〈オタク族〉も同様である。彼らにとっても、目の前にいるパソコン少年よりは、彼のパソコン知識そのもののほうに興味があるのだから。目の前の『アナタ』や『キミ』は二の次で、『オタク』の知識が自分と比較してどうなのかが『オタク族』の重要な関心なのである」。

ここで、断わっておくが、いわゆる「おたく」とされる若者たちのすべてが互いを「おたく」と呼び合っているわけではない。とくに「おたく」という語が彼らの間で、差別的ニュアンスで用いられ始めた八五年頃以降、実際に「おたく」と呼び合う「おたく」など皆無になった。それ以前でも、「おたく」で呼び合ったのはごく一部と思われる。しかし、彼らを総称するネーミングは「おたく」以外になかったのだ。それはひとつに「おたく」で呼び合っていた連中が、とくに「おたく」的だったこと、また「おたく」という語のエッセンスが、彼ら全体の性格の表現としてきわめてマッチしていたことが理由であろう。そして、そのエッセンスとは、中野収が読み解いたように、相互に人間を相手にするというより、相手の知識・情報に向かって話す、ところにある。

小林信彦は、『時代観察者の冒険』（新潮社）の巻頭、「情報公害について」という時評で、映画「スター・ウォーズ」が七七年に全米でヒットしてから、翌年日本で封切られるまでに起こった情報収集熱について語っている。この映画をめぐって、深夜放送や若者雑誌で、熱狂的な座談会が企画され、名場面やストーリーが紹介され、場面解説がなされ、登場人物やロボットの特性も詳解され、小、中、高校生から三十歳くらいまでの人々がそれに夢中になった。

しかし、

「『スター・ウォーズ』に関するあらゆる情報を集め尽くした少年が、では、勇んで公開された映画を観に行ったのかというと、どうも、そうではないらしいのだ。私の娘なども、あれほど熱狂していたのに、映画館にかけつけるわけでもなく、いまや『さらば宇宙戦艦ヤマト』の情報を仕込むために、試験の前夜、三時までラジオを聞いている』。「彼らは、一本の映画に接するまえに、あらゆる情報（音楽、ストーリー、名

場面）を仕込み、その映画を〈知って〉しまうのである。従ってじっさいに作品に接することは、仕込んだ情報の〈確認〉〈裏づけ〉に過ぎない」。『スター・ウォーズ』をめぐる大騒ぎは、情報社会が行きつく一つの姿を暗示していると私には思われる。情報が先行して作品そのものの出来や質の検討はどこかへ吹っとんでしまう」。

これは、七八年七月十七日『東京新聞（夕刊）』に社会時評として掲載された。まさに「おたく」文化が沸騰し始めた時代である。「スター・ウォーズ」の情報収集熱を支えた若者の中心は初期の「おたく」たちだった。小林信彦の言う「作品そのものの出来や質の検討」が議論されたなら、そこには各人の個性が、人格が反映されよう。お互いが「おたく」でなく名前で呼ばれる関係が生まれたかもしれない。しかし、「情報が先行」すると、「熱狂的賛美や――（中略）――感情的反発」（小林）はあっても、お互いは、持てる情報量が会話に加われる基準に達しているか、でまずチェックされる。すなわち、「おたく」として相手を対象化する関係が生まれるのだ。

ルポライターの朝倉喬司氏から面白い事実を聞いたことがある。朝倉氏の学生時代、学生運動の活動家には人を「おたく」と呼ぶ癖のある者がけっこういたというのだ。それは、学習会で幅をきかせる理論家タイプがほとんどで、デモやゲバルトで活躍する行動家にはいなかったという。おそらく、彼らは相手の人格ではなく、その持てる理論と会話するタイプだったのだろう。

彼らは当時、「頭がいい」理論家して尊敬され、実際、高校時代まで成績抜群の秀才だったと思われる。知識・情報の収集と、理論操作に長けた優等生。彼は「完成品」（イリイチ）としてのカリキュラムを消化させられる学校システムにもっともよく洗脳された者にほかならない。そこには経験から言葉を立ち上がらせる知性は乏しい。だが、六〇年代の大学生たちが物心ついた日には、まだ家庭にテレビはなく、原っぱとガキ大将の経験世界があった。乱暴に言えば、そこを核として彼らはその知識や理論に、革命的とか文学的とかの価値付けをすることができたのだ。

だが、ＴＶと塾が原っぱにとって代わったその後の世代には、経験や人生もまた、完成品としてメディアを通して供給される知識や情報と化した。全生活が学校化されたのだからそれも当然のことである。そして、「おたく」活動家から、「革命」が脱臭され、原「おたく」が誕生したのだ。

「ずっと楽しく暮らしていたいっちゃ」

――情報に戯れ続けるモラトリアム

全生活の学校化、偏差値モノカルチャーの下では、すべての知識は「完成品」であり、ペーパーテストの正解として等価である。科学法則も公式も文学も思想も芸術も

歴史も、善悪・美醜といった価値観ぬきで、ただ正誤によってのみ判断される情報の羅列と化す。初期の「おたく」にはこうした情報の羅列に親しんで育った優等生たちが多かった。

「おたく」がサブカルチャーに向かうときの視点は、この学校秀才の視点と似ている。「おたく」たちは、むろんそれぞれ好きな作品や作家を持つが、そうでない作品等についても「おたく」しているジャンルに含まれる以上は「フォロー」し「おさえて」おくことが必要だと考えている。たとえば、七九年創刊のアイドル「おたく」雑誌『よい子の歌謡曲』に始まるアイドル「おたく」の世界では、かつて恋人の代用として消費されていると思われたアイドル歌手たちが、切手収集か昆虫採集のようにデータとしてコレクトされてゆく。そこではよりマイナーなアイドルまで「フォロー」すること自体に意味がある。

こうした、あるジャンルの情報のすべてが等距離に鳥瞰できる位置に自らのスタンスを定め、脱価値的態度を気取るのは、また、評論家やマスコミ人に特有のポーズでもあった。きわめて初期の「おたく」と言えるだろうミステリー・マニアや映画やSFのファンが好む「ベスト10選び」という遊びは、あるジャンルの作品全体に対するこうしたスタンスの象徴と言えよう。

このスタンスは、要するに「傍観者」の立場である。それはよく言えば冷静で中立的で客観的であるが、また冷笑的で没価値的で無責任でもある。「おたく」のパロディがこのような情報への冷めたスタンスの産物であることは前にも触れたが、ここで顕著な例をあげてみたい。

「愛国戦隊大日本」という自主制作映画がある。大阪芸術大学の学生中心の「ゼネラル・プロダクツ」というサークルが撮った、アニメ、特撮、SF「おたく」たちのカルト・ムービーのひとつだ。これは「秘密戦隊ゴレンジャー」など東映幼年向けTV特撮番組のパロディである。内容は五人のヒーローが変身し合体して悪の組織が繰り出す怪人を倒すという番組のパターンを借り、悪の組織は魔城クレムリンを司令部とするレッドベアー、繰り出される敵はハラショマンを率いるミンスク仮面。立ち向かうのは、カミカゼ、スキヤキ、ハラキリ、テンプラ、ゲイシャからなる愛国戦隊大日本とし、「もしも日本が弱ければ／ロシアはたちまち攻めてくる／家は焼け畑はコルホーズ／君はシベリア送りだろう～」といった主題歌までつけた抱腹絶倒の作品だ。むろんこれはソ連批判でもソ連脅威論批判でもない。何かの批判や風刺に奉仕するパロディではなく、ただ情報の組み合わせのおかしみがあるだけである。

膨大な情報の蓄積と共有のみに生きる没価値の世代だけがこうしたパロディを生み出しうる。情報を序列化し秩序づける価値が失われたとき、彼らの関心を集める基準は、情報の異形さか希少さである。ソ連侵略もそうだし、最近では「おたく」は天皇ネタのパロディを好んだ。人肉嗜食の佐川君や逆噴射の片桐機長、中核派などもその

異形ゆえに好まれる。あるいは、ウルトラセブン欠番十二話「遊星より愛をこめて」――ケロイドに覆われた宇宙人が登場し被爆者団体からクレームがつき再放送できない――も、異形さと希少さからコレクターアイテムとなる。『ラジオライフ』誌をにぎわす警察無線傍受遊びなども、実利とも反体制とも関係ない、たんに聞けないはずのことが聞けるゆえの関心なのだ。

要するにこれらは皆、変わっていて珍しいから面白がられるわけで、なんら思想的意味づけはない。いわば「おたく」の世界には、価値はなく差異のみがあるのだ。あたかも、M・フーコーが『言葉と物』で論じた博物学の世界観――中世的秩序と近代科学的宇宙像のはざまに生まれた脱価値的パースペクティブに似て。試験問題が難易度と配点のみで差異づけられるように。あるいは彼らこそ、もっとも徹底したポストモダニストだったのかもしれない。

「永遠の今」にまどろむ知的傍観者たち

学校化社会による汎正解化によって、「おたく」は世界の傍観者(オブザーバー)と化した。彼の眼からはすべてが俯瞰されるが、彼自身はすでに世界のなかにはいない。そう『ベルリン天使の詩』の天使たちのように。社会の当事者であることを自覚する協働の場であった家庭と地域が、学校と化して久しいのだ。「おたく」は「おたく自身の姿をも俯瞰し、パロディ化する。ロリコン青年を嘲笑するマンガを掲載した同人誌は多い。ほかならぬ「おたく」であった中森明夫によってネーミングされた「おたく」という言葉自体、差別語というよりも自嘲語だったのではないか？　彼らは自嘲により、自分だけは自覚できている⇩最悪の「おたく」ではない、という安心を得るために使った。「おたく」は「おたく」としての当事者性さえも引き受けようとしない。いつでもどこでも当事者とはならない傍観者である彼らは、認識するのみであるから傷つかず、経験せず、成長しない。

思えば、これは近代的インテリの原型ではなかったか？　世の中の当事者となることから逃避して、結婚と就職から逃げ回るインテリ青年代助を、書生門野が羨望する。「僕もあんな風に一日中、本を読んだり、音楽を聞きに行ったりして暮らしていたいな」(『それから』夏目漱石)。高度成長と学校化の徹底より、八〇年代は膨大な代助を生んだのだ。

「おたく」的感性が豊かなアニメ監督押井守に、八四年公開された「うる星やつら2／ビューティフル・ドリーマー」がある。この物語では学園祭の前日で時間が循環し始めてしまい、幾度夜が明けても学園祭の多忙な前日がやってくる。これはじつは主人公の少女ラムの願望の現実化だった。彼女の願望とは「ダーリンやお父さまやお母さまやテンちゃんや、終太郎やメガネさんたちと、ずうっと、ずうっと楽しく暮らしていきたいっちゃ」というものであり、そ

れは要するに「今と同じ」、今が永遠に続いてほしいというものである。学園祭をコミケットその他のイベントに置き換えれば、これは、同類たちと一緒に永遠に世界の傍観者席に座っていたいというインテリの、そして「おたく」たちの願望そのものにほかならない。

完成品として提供される情報に囲まれて、「永遠の今」にまどろむ若者たち。だが、これは「おたく」に限ったことではあるまい。「おたく」文化がいっせいに開花した七〇年代後半、ヤング・カタログ誌のパイオニア『ポパイ』が創刊されている。それは、メンズ・ブランドから音楽・映画、ついには異性とのつきあい方までが完成品として情報マニュアル化される時代の幕開けでもあった。論文「〝感的知性〟が優れた『新人類』」が「ニュースタンダード派」と呼んだ八〇年代の若者の多数派も、やはり、「おたく」の同世代なのである。消費社会と学校社会に育まれた者のうち、思春期にやや内向し、それを知的プライドで埋め合わせる方向へ進んだ者が原「おたく」となった。そこで対人的、ことに異性の眼差しに向けて外向していった者はカタログ文化の享受者となってゆく。同類にのみ知的に理解されるSFやアニメの情報と、異性一般に感性的に了解されるファッションや店の情報。どちらも高度な情報環境を生きていることには変わりはない。

大衆消費おたくの氾濫

学校化の影響を強くこうむった優等生たちが、七〇年代末に創始した「おたく」文化は八〇年代中期に入って、著しい層の拡大を見せるとともに、質的変化も生じてくる。ひとつには、初期の「おたく」たちが二十代となって、クリエイター、プランナー、エディターとして、メディアの送り手の側に進出していった。これにより、従来、「おたく」たちが同人誌などでサブカルチャーをベースに展開してきた活動、パロディや用語辞典や資料インデックスなどが、それ自体、雑誌やムックの記事として商品化されるようになる。そしてその完成品を享受する二次的「おたく」が生じる。論文「〝感的知性〟が優れた『新人類』」が言う「内向的モラトリアム派」と「感的知性派」との分離もこのあたりの変動と関連づけられよう。二次的「おたく」は、自ら主体的に情報の収集や整理や読み換えを試行錯誤してゆくプロセスが弱い分、原「おたく」よりも知的クリエイティブ能力の訓練に欠け、絶え間ない情報をただ享受するのみの受動的マニアへとレベルダウンする。アニメセルに殺到するコレクターや内容よりもCM抜きで全話収録したコレクションを誇るビデオ完録マニアなどはその典型であろう。原「おたく」でも、アクティブに活動し、その好奇心をヴァイタルに新しい分野に広げてゆく者は「感的知性派」へと脱皮し、少年期にいつまでも留まろうとする者は「内向的モラトリアム派」として淀んでいった。

八〇年代中期以降の「おたく」現象の変

容でもうひとつの顕著なのは、少女「おたく」の激増である。現在、コミケットの参加者の八〇%が「キャプテン翼」「聖闘士星矢」などのアニメ・パロディに熱中する少女たちである。八二年頃はわずかだが男性のほうが多かった。いわゆるロリコンを中心とした同人誌がブームだった時代である。それ以前、七〇年代は少女マンガ・ファンの少女が九割を占めていた。しかし、コミケットの参加者の総数を考え合わせると、総数七百人だった第一回の九割から、八二年頃は一万五千人の半数、そして現在は十数万人の八割となり、少女たちの急増ぶりが伺えよう。さらにコミケット以外の同種のイベントはほとんど少女たちで埋め尽くされている。それに比べて、男性「おたく」たちは、八二年当時からさほど増えていない。

　この差をどう考えるかであるが、ひとつには、男女の労働条件という社会的背景の反映が大きいと思われる。八〇年代前後にかなりの層を成していたロリコンなどの男性「おたく」たちは、「感的知性派」としてクリエイティブな業界に入らなくとも、折りしも労働需要が急増していたコンピュータ業界などに吸収され、ある程度その個性に見あった形で就職して、「おたく」的活動の一線から遠ざかっていった。そうでなくとも男性であれば、就職によりなんらかの部署を与えられ、社会化の機会を得る可能性が高い。

　これに対して、本来、男性ほど偏執狂的な情報への知的没頭を見せず、自ら「ミーハー」を自称する場合が多いように、一種「追っかけ」や「親衛隊」に似た熱狂をサブカルチャーに対して見せる少女「おたく」たちは、女の子同士の社交の場として「おたく」的イベントやサークルを生かしつつある。彼女らの場合、就職や結婚に関わらず、「おたく」的活動や人間関係が続く場合が多い。それは現在の男性中心社会では、就職しても職場に自分のアイデンティティを見つけられない若い女性たちの現状の反映と考えられよう。

　消費社会と学校化のなかで、膨大な若者たちが、十年以上にわたるモラトリアムを享受する社会。男性「おたく」の就職による社会化や女性「おたく」の増加を見ると、ここにこそ、「おたく」を生んだ母体があることが見えてくる。

　モラトリアムを許容する規範なき豊かなこの社会が続く限り、若者文化は「おたく」性と無縁ではありえない。

　しかし、溢れる商品を追うことから、それを用いての表現と参加を模索するような若者たちの最近の傾向――バンドや演劇へのアマチュア的志向など――またパソコンネットなどのメディアの浸透を見ても、「おたく」文化の内実は変貌していかざるをえないだろう。その可能性を予測することは困難であるが、「おたく」が、ある社会史的必然である以上、若者文化のそして彼らの担う社会の将来が、ポスト「おたく」という視点抜きではもはや語りえないことだけは、どうやら確かなようである。

筆者紹介

●**成沢大輔**なりさわ・だいすけ
'65年東京都生まれ。エロ本の弱小編集プロダクションを経て、フリーライター兼編集者。現在『ファミコン必勝本』(小社)で執筆中、『コミック版ゼルダの伝説』(小社)などゲームコミックも手がける。

●**古橋健二**ふるはし・けんじ
'59年東京都生まれ。明治大学政治経済学部卒。フリーライター。今回、「アイドリアンの取材は、感動の連続だった!!」と語る。共著に『ザ・中学教師』『大学の事情』(別冊宝島70、90号)などがある。おたくの磁場にハマった一人。

●**永江朗**ながえ・あきら
'58年北海道生まれ。法政大学文学部哲学科卒。渋谷西武カンカンポア、浅草ROXのリブロなどの書店勤務を経て、現在フリー。『新文化』などで出版業界のルポを行なうほか、SM雑誌で連載。

●**松田融児**まつだ・ゆうじ
'64年東京都生まれ。青山学院大学法学部在籍中。月刊『宝島』のライターを経て、現在オートバイ雑誌のライター兼編集者。おたくライターの増殖を嘆く昨今。

●**米沢嘉博**よねざわ・よしひろ
'53年熊本県生まれ。コミックマーケット代表。評論家。著書『2B弾と銀玉戦争の日々』(絶版)『マンガ批評宣言』(編著・亜紀書房)、少女マンガ家インタビュー集『スピーチバルーンパレード』(河出書房新社)ほか。

●**中森明夫**なかもり・あきお
'60年三重県生まれ。明大中野高校中退。同人誌『東京おとなクラブ』発行を経て、ライターに。著書『東京トンガリキッズ』(小社刊)『おしゃれ泥棒』(マガジンハウス)ほか。

●**土本亜理子**つちもと・ありこ
'57年東京都生まれ。雑誌編集者を経て現在フリーライター。今回は無理やりロリコンの取材を強制され「これは編集者によるレイプだ」との名言を残す。共著に『三十五歳から知っておきたい老親ケア』(日経ホーム出版社)。

●**藤田尚**ふじた・ひさし
'54年秋田県生まれ。早稲田大学卒。米沢嘉博氏などとともに同人『迷宮』を経てコミックマーケット創成期に関わる。現在、『週刊宝石』にマンガ評論、『SFマガジン』に映画評を連載。

●**上野千鶴子**うえの・ちづこ
'48年富山県生まれ。京都大学文学部卒。現在、京都精華大学助教授。著書に『女は世界を救えるか』『女という快楽』(いずれも勁草書房)『女遊び』(学陽書房)『セクシィギャルの大研究』(光文社)『スカートの下の劇場』(河出書房新社)など。

●**千野光郎**せんの・みつろう
'59年神奈川県生まれ。フリーライター。幻想文学評論などを主に執筆。

●**岩上安身**いわかみ・やすみ
'59年東京都生まれ。早稲田大学社会科学部卒。『文藝春秋』『Number』『エスクァイヤ』などでルポライターとして活躍中。共著書に『天安門への返信』(小社)など。

●**桝山寛**ますやま・ひろし
'58年東京都生まれ。慶応大学卒。現在、音、映像と活字、コンピュータを統合した新しいメディアのディレクターを目指す。編著に『TVゲーム』(UPU)、共著に『電脳都市感覚』(NTT出版)、ファミコンソフトには『オトッキー』などがある。

●**河上亮一**かわかみ・りょういち
'43年東京都生まれ。東京大学経済学部卒。現役の中学校教師。共著に『文化としての学校』(現代書館)、『ザ・中学教師』『ザ・中学教師［プロ教師へのステップ］編』『ザ・中学教師［親を粉砕するやりかた］編』(別冊宝島70、78、95号)。

●**みうらじゅん**
'58年京都府生まれ。武蔵野美術大学デザイン科卒。漫画家。牛、ハニワ、カエルなどのキャラクターで独自の世界を描き、またそれらのグッズのコレクターでもある。『みうらジャン』(パルコ出版)『見ぐるしいほど愛されたい』(講談社)ほか著書多数。

●**朝倉喬司**あさくら・きょうじ
'43年岐阜県生まれ。早稲田大学文学部中退。犯罪評論家、ルポライターとして活躍。さまざまな事件を追い続けている。『犯罪風土記III』(秀英書房)ほか著書多数。

●**井筒三郎**いづつ・さぶろう
'52年東京都生まれ。高校中退後長らく隠居生活を送る。共著書『レトリックの本』『珍国語』『みんなの文章教室』『精神病を知る本』(別冊宝島25、31、34、53号)。

●**小浜逸郎**こはま・いつお
'47年神奈川県生まれ。横浜国立大学工学部卒。現在『ておりあ』主宰。著書『学校の現象学のために』『方法としての子ども』『可能性としての家族』『男が裁くアグネス論争』(いずれも大和書房)。

●**河内秀俊**かわうち・ひでとし
'53年山形県生まれ。早稲田大学第二文学部卒。サラリーマン生活を経て、三十歳にしてルポライターとなる。現在、ビジネス関連の記事を中心に週刊誌等で活動中。

●**浅羽通明**あさば・みちあき
'59年神奈川県生まれ。早稲田大学法学部卒。「みえない大学本舗」主宰。今回は「おたくのすぐ隣りを生きてきた、自らの世代性を時代の中で位置づける作業だった」と語る。著書に『ニセ学生マニュアル・逆襲編』(徳間書店)ほかがある。

別冊宝島104号

おたくの本

1989年12月24日発行
1996年9月1日　第28刷

編集人▶石井慎二　発行人▶蓮見清一
発行所▶株式会社 宝島社©
〒102東京都千代田区一番町25
電話［営業部］03-3234-4621［編集部］03-3234-3692 郵便振替 00170-1-170829㈱宝島社
印刷所…東京書籍印刷株式会社　Printed in Japan
ISBN4-7966-9104-9

同時代の知的フィールドワークマガジン

別冊宝島

1 全都市カタログ

都市生活者にとって必要なものをユニークな視点から徹底的に追求した知的シティ・カタログ。

2 新版・道具としての英語

学校英語とは全く異なった視点から、生きた英語世界に読者を案内する〝革命的英語教科書〟。

3 BODYの本

からだとの対話で自分を知り、自然の環の一部として人間を考える東洋の英知に基づく身体論。

4 おんなの事典

女が自立して生きるための、女たちによる、女たちのための、男たちのための、女の本！

5 女と男

性の本質とは？結婚とは？役割分担とは？切実なテーマを新鮮で大胆な問題意識で探る！

6 性格の本

もうひとりの自分に出会うためのマニュアル

自分はどこから来てどこへ行くのか——。性格を手がかりに現代人のアイデンティティを探る。

7 仕事の本

仕事を通しての人間関係の回復を切望する現代人に贈る画期的な仕事論。

8 道具の本

ライフルからのこぎりまで、冒険と遊びのための道具を体系的に網羅した道具の百科事典。

9 女のからだ

女のセクシャリティグラフティ

女のからだに関する具体的な最新の知識を織り込み、女がのびやかに生きるための方法を考える。

10 都市探検入門

未知の都市探検作戦を豊富な体験に基づいて伝授する画期的マニュアル。

11 みんなのライフ&ワークカタログ

99人の仕事の現実を無味乾燥な職業案内でなく、生身の人間が語る本音でつづられた仕事論。

12 ライス・ブック

こめと日本文化のかかわり方、こめから見た日本史など、こめ文化論を縦横無尽に展開。

13 マンガ論争

のらくろ3世代からクロス・オーバー世代まで、それぞれの甘くほろ苦い同時代のノスタルジー。

14 道具としての英語・会話編

英語の核になる850語のベイシック・イングリッシュと、状況創造型学習法による英会話の本。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

15 夢の本

ユングの方法を武器に夢の不思議に挑む。コンプレックスから自分を解放するためのマニュアル。

16 精神世界マップ

人類の歴史とともに古いオカルト＝隠れた知の系譜に、未来を生きる立場から光をあて総展望する。

17 決定版・知的トレーニングの技術

絶版

知力を自己鍛練する作業＝職人的手仕事の積み重ねを、段階的に記述し体系化した知の錬金術！

18 現代思想のキーワード

科学の知から神話や魔術の知の領分まで、文明転換期の知の流儀を理解するための思想用語辞典。

19 文章スタイル・ブック

ちょっとしゃれて書くための
初級修辞学講座

流行作家の文体から新聞・雑誌・広告コピーまで、ちょっとしゃれて書くための初級修辞学講座。

20 センス・パワー

センス・エリートになるための
［感性トレーニングの技術］

感性の党派性が火花を散らす！センス・エリートになるための［感性トレーニングの技術］

21 街を耕す本

伝統的な生活技術と知恵、季節とともに生きる技術を実践的に、かつ実用的に集めた保存板。

22 アジア・太平洋［発想する旅のガイドブック］

環太平洋に広がる島々と半島に、日本人の源流を求めて、国境を越えた旅、第三の旅に出かける。

23 アウトドア学教程・技術編

安全で快適なアウトドア・ライフを送るためのベーシック・テクニックを豊富なビジュアルで解説。

24 道具としての英語・読み方編

英語を読むのが苦手だと思っている人に捧げる、ムダなく苦労なく英語が読める画期的手引書！

25 レトリックの本

文章に生命を吹きこめ！極悪文を恐れるな！いま、もっとも過激で新しい発想の作文術の本！

26 メディアのつくり方

すぐに役立つ編集・印刷ハンドブック

編集技術から製本まで、ミニメディア作りの全工程を徹底的にときあかした完全マニュアル！

27 機械オンチに捧げるパソコン・ブック

機械・電気が苦手でもコンピュータは使えるのだ。文化系の頭脳がコンピュータを裸にする！

28 新しい道具の本

ちょっと変わった分類法を使った宝島流道具のスーパーマーケット。道具たちの地図を塗りかえる一冊。

29 道具としての英語・テキスト編

200を越えるバラエティに富んだ文章で、英語と友達になるための新しい英文スタイルブック。

30 映像メディアのつくり方

映画、ビデオを中心とした映像作品のつくり方が具体的に理解でき実際に応用できるマニュアル。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

31 珍国語

教わる側にはショックを、教えられる側には笑いと共感の渦を巻きおこす国語狂科書。

32 答えられないあなたのために 科学読本

身近な不思議の数々から科学技術の最先端まで、愉快で納得できる科学技術質問箱。

33 発想トレーニングの技術

リラックスして発想するための実践的ガイダンス

しんどい「主体的発想」からの解放めざして！リラックスして発想するための実践的ガイダンス。

34 みんなの文章教室

書くべき原体験を何ももたない世代に送る、ちょっと風変わりな文章を書くためのマニュアル集。

35 もっとしなやかに生きるための 東洋体育の本

身体に聞いて自分でつくる健康法

しなやかな心とからだを育てるために。からだに聞いて自分でつくる健康法の具体的レッスン集！

36 アメリカを読む本

多民族の混沌とした文化、ビジネス、政治、アート、アメリカをもっと知るためのエッセイ＆ガイド。

37 会社の本

会社という謎に満ちた不思議世界を旅するための旅行ガイドブック。会社ツアーの案内書！

38 タブーと常識に挑戦する 日本史読本

歴史は進歩しない。変化するだけだ。タブーと常識に挑戦し、日本史を書きかえた大胆知的な本。

39 朝鮮・韓国を知る本

隣の国が見えてくる！

隣邦でありながら、視野外におかれがちな朝鮮・韓国を、等身大のサイズで理解するための本。

40 道具としての英語・やり直し編

英語をやり直すための新しい発想と方法！使える英語をものにする総合的自己学習マニュアル！

41 脳力トレーニングの技術

脳を「体育」してやろう！爆発的潜在力を秘めた脳のパワーを全開するための体系的な訓練法！

42 10日間のハングル

気になるコトバのいちばん優しい入門書

無理ない10日間のカリキュラムで学ぶ、ハングルの最もやさしい入門書。カセットテープ別売。

43 道具としての英語 しくみ編

ここが分かれば英語は分かる！英語攻略の核心点である〝しくみ〟をわかりやすく伝授する本。

44 わかりたいあなたのための 現代思想・入門

サルトルからデリダ・ドゥルーズまで
知の最前線の完全見取図

現代思想の問題とは何か？サルトルからデリダ・ドゥルーズまで、知の最前線の完全見取図！

45 人間・宇宙・精神まで 進化論を愉しむ本

大博物時代から現代進化論の最先端までを完全収録！

これ一冊で万華鏡のように変化にとんだ進化論の全貌をつかむことができる！

46 東京できごと史

1945〜1985

闇市からポストモダンまで、40年間の東京の様々な事件をコラム形式で綴る、新東京史。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

48 自信をもちたいあなたのための
イメージ生産の技術
イメージがつかめない、つくれない、伝わらない、伝えられない人に贈るワークブック

イメージのソフトウェア66のプログラムを、超具体的にマニュアル化。

47 柳田国男から山崎正和まで
保守反動思想家に学ぶ本

柳田国男から山崎正和まで、テーマ別編集で、ポスト近代と保守思想の最前線を探る！

50 初めてのトレーニング・ペーパー形式
ハングルの練習問題
主要単語と実践的な例文がマスターできる

初心者でもすぐ始められ、また心得のある人は自分の実力が確認できる。カセットテープ別売。

49
道具としての英語 基礎の基礎

〝メアリーポピンズ〟をガチガチ学校英語となめらかな訳で対照、英語の構造を立体的に示す。

52 わかりたいあなたのための
現代思想・入門II 日本編
吉本隆明からポスト・モダンまで 時代の知の完全見取図

日本の思想はどう変わったのか？吉本隆明からポスト・モダンまで時代の知の完全見取図！

51
東京の正体！
あるいは「知識／権力の系譜学」にして近代の言説による「東京経験案内」

近代百年の文学を通して作られる「東京という経験」の系図！「新しい」都市であり続けた東京！

54
ジャパゆきさん物語

ジャパゆきさんをめぐるさまざまな物語を、現地取材、インタビュー、手記などによって全公開！

53
精神病を知る本
「狂気と理性」をめぐるあなたのまなざしが変わる！

精神病とは何か？精神医学の知の体系に批判を加え、人間の「狂気と理性」について考察する。

56
ヤクザという生き方

極道の力の源泉は市民社会の視野の外にある！都市の底に棲む男たちの生き様とその実態に迫る！

55 学校が合わない親と子のための
学校に行かない進学ガイド

今の学校はいやだ！どうしていいか悩んでいる親と子のための実際に使えて役に立つ情報ソース！

58
国鉄に生きてきた
鉄路を愛した男たちの自画像

国鉄解体によって私たちは何を失ったのか？鉄路を愛してきた男たちが自らの肉声で描く自画像！

57
道具としての英語 表現編

これまでの英語理解を一変させる〝英文四つの型〟論で、英語が自由自在に話せて書ける！

60
収容所社会・ソ連に生きる
ナマの声で綴るいまロシア人であることの悲劇

ソビエト体制下の普通の人々の生活を通して明らかにされる、いまロシア人であることの悲劇！

59
思想の測量術
あるいは近代の言説による「記号経験案内」にして「知識/権力の系譜学」

現代思想への断乎たる異議申し立ての書。フーコーの「言葉と物」の偉業の日本版とも言える作業。

62
自民党という知恵
日本的政治力の研究

自民党とはどんな政党なのか？人事・政策・組織の三つの軸から、日本的保守政治の核心をえぐる。

61
道具としての英語 言いまわし編

鮮度100%の生きた英語で、アメリカ英語のキマリ文句をマスター！英語の表現力を豊かにする！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

80 道具としての英語
胸いっぱいの形容詞！

5000の形容詞を読みやすいコラムで紹介。同時代の英語を読み、人と違う言いまわしができる本。

79 世紀末キッズのための
SFワンダーランド

20世紀最後のカルチャートレンドSFで遊ぶ！サイバーパンクを始めとした〝SFの現場報告〟。

82 わかりたいあなたのための
経済学・入門

経済学の誕生と展開、基礎理論を分かりやすく説きほぐし、90年代への展望を探る画期的な入門書。

81 推進か？ 廃炉か？
決定版・原発大論争！

電力会社の内部資料に、反原発派の論客が〝安全性〟〝放射能〟〝経済性〟など20の対立点で総反撃！

84 楽屋裏のテレビジョン
ブラウン管の向こう側のすったもんだ！

テレビの国のすったもんだをオールロケ！TV雑誌では絶対に読めないブラウン管の裏側の狂詩曲。

83 当世死に方事情
死とお葬式とお墓をめぐる日本人の現在

〈死〉という窓からニッポン人とその社会の変貌をみつめる、ちょっと変わった生態ウォッチング！

86 競馬ぶっちぎり読本
大外強襲の大迫力

馬とレースに関する話題、競馬に関わる人々の話題、今いちばん気になる話題など競馬の話題が26本。

85 わかりたいあなたのための
フェミニズム・入門
フェミニズムの理論の見取図と世界各国の状況がわかる本

フェミニズム理論の見取図及び世界における理論と運動の状況まで、フェミニズムの現在がわかる本！

88 現代文学で遊ぶ本
現代文学をわがままに読み
勝手に楽しむためのやり方！

日本編・作家51人の処方箋、海外編・42か国の文学事情など現代文学があなたの〝遊び道具〟になる！

87 ファッション狂騒曲

華麗なる世界、ファッション業界に生きる人々の生活と意見、そして真実！

90 大学の事情

〝冬の時代〟の苦心のあれこれから大学教師という変な種族の扱い方まで、こんなもんです素顔の大学。

89 軍部！
銃口で韓国を支配した強大な組織
その驚くべき真相

栄光の人から疑惑の人へと転落した全斗煥大統領。全斗煥の軍部内組織『一心會』とは何か？

92 うわさの本
都市に乱舞する異事奇聞・怪談を
読み解く試み！

語られた物語と語りのネットワークの検証をとおして、都市のもうひとつの貌に肉迫する！

91 道具としての英語
単語パワーアップ編

漢字の「へん」「つくり」と同様に英単語を71の語根の意味から覚えて単語力を200％パワーアップ！

94 もっと知りたいあなたのための
天皇制・入門

天皇制研究の最新成果に6つの視座からアプローチ。2000冊完璧リスト付。天皇制の全てがわかる本。

93 プロ野球の悩み
野球狂のための脱プロ野球読本

グラウンドの外から、プレイの裏側から野球を観戦。これがプロ野球の新しい愉しみ方だ！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

96 口語訳・論語
現実を生きるための書

高度化する資本主義社会に、指標なくさまよう現代人の目からウロコを落す紀元前5世紀のマントラ。

95 ザ・中学教師［親を粉砕するやりかた］編

現場の教師が体験した〝恐るべき親たち〟の生態！すべての教師に捧げる痛快〔親退治〕

98 高校野球の真実
熱気倍増の甲子園ウォッチング！

ゲームの意外性、祝祭の高揚感、欲望とカネの渦巻く最もニッポン的なスポーツ〝甲子園〟を全解剖！

97 わかりたいあなたのための 現代写真・入門
写真の過去・現在・未来を読むガイドブック！

写真の系譜をたどり、多様な写真表現を見わたす。写真は何をどのように表現してきたのか？

100 映画の見方が変わる本

今まで誰も言わなかった、言えなかった映画の秘境探険！映画に隠された「闇」を読み解く！

99 超プロレス主義！
格闘王たちのバトルロイヤル

もっとも感動を与えてくれる格闘技戦と、もっとも魅力ある格闘家について徹底追求した１冊！

102 欠陥英和辞典の研究

日本でいちばん売れている英和辞典はダメ辞書だ！日本語、英語双方の観点から精査し、検証する。

101 地球環境・読本
あるいは地球の病について
あなたが間違って信じていること

「地球を守れ！」の大合唱のなかで信じ込まされている〝常識〟を、第一線の論客が徹底的に打ち破る!!

104 おたくの本

「おたく」は高度消費社会を読み解くキーワードだ。ロリコン、やおい、コミケなどの知られざる生態。

103 気は挑戦する

気はデカルト以来の心身二元論をくつがえし、自然科学のパラダイムをも変える新しいエネルギーだ。

106 日本が多民族国家になる日

日本に移り住んだ彼らの現場を直視して単一民族幻想が崩壊するこの国の近未来を照射する！

105 中国・危機の読み方

中国ウォッチャーたちが明かす、中国の危機を読み解くための新しい視点の数々！

108 ザ・中学教師〔ダメ教師殲滅作戦〕編

金八教師、熱血教師、ダメ女教師など無能教師の群れにプロ教師軍団が宣戦を布告した!!

107 女がわからない！

男には理解できなくなってきた、[女]の現在をめぐるフィールドワーク。

110 80年代の正体！

80年代はどんな時代だったのか？ハッキリ言って「スカ」だった。この本は「現在」につけるクスリです!!

109 競馬ダントツ読本

競馬のホンネがここにある！ズバリ的中の痛快感！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

112 男が危ない!? 「女の時代」のなかで孤立無援の男たち。「男」の語られ方がいま、あらためて問われている!	**111 新版・学校に行かない進学ガイド** 塾、正規でない学校、自主夜間中学、国内・海外留学などいますぐ役に立つ最新・徹底ガイド。
114 いまどきの神サマ ＵＦＯ、おまじない、超能力、占い、ハルマゲドン、前世戦士……オカルトのメンタリティを暴露!	**113 英語辞書大論争!** 欠陥の指摘は本当だったのか?伝統と権威を敵に回して勝ち目はあるのか?「論争戦」観戦の手引き。
116 宇宙論が楽しくなる本 アインシュタインからホーキングの最新理論まで現代宇宙論の完全見取図!	**115 天下国家の語り方** 日本と世界、政治と経済をめぐる「神話」の検証!「常識」を根底から揺るがす大地震!!
118 非常事態のソ連 ソ連人によるソ連社会の病状報告! ソ連全土を襲う経済恐慌の嵐、社会秩序の混乱、民衆の政治不信!ソ連の生活現場からの痛切な叫び。	**117 変なニッポン** ガイジンが好きな、そう思われているこの国! 海外で受け入れられるニッポン現象を合わせ鏡にして、ジパングの現在を発見!
120 プロレスに捧げるバラード 漂泊する芸能者、異形の神々、人類最古にして最高の文化としてのプロレス……	**119 誤解しているあなたのための 新釈どうぶつ読本** 動物は浮気もすれば、子殺しもする。動物の未知の世界を読み解く最新理論!
122 道具としての英語 英語の発想/日本語の発想 日本人なら誰でもわかるが、英語で表現できない言葉にこだわり、日本語と英語の発想の違いを探る。	**121 競馬おいこみ読本** ターフを駆ける馬、ターフに賭ける人、ターフを翔ける夢、ターフに欠ける物語、すべてがこの本に。
124 セックスというお仕事 女にとって風俗産業とは何か?はじめての女だけによるセックス産業をめぐるフィールド・ワーク!!	**123 科学論争を愉しむ本** 科学はもう法廷の裁判官ではなくなった! エイズ論争、脳死論争などの論争の構図を描き、論争の内情を探り科学の正体を暴く!
126 江戸の真実 誰も挑まなかった近世日本のわかり方 明治よりもエネルギッシュで昭和よりも豊かで平成よりもダイナミックな江戸の姿がいまここに甦る。	**125 当世ぎゃんぶる読本** やめられない人たちの懲りない日々 裏ワザ師からフツーの人までギャンブル・アドベンチャーたちの天国と地獄!

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※価格はすべて税込みです。

別冊宝島

128 道具としての英語 暗記しないで覚える英単語

丸暗記の苦労をいっさいしないで「単語の力」と「英語の力」が同時に身につく、究極の学習法。

127 謎の島・台湾

不思議議の島・台湾を通して、いま東アジアの変な資本主義が見えてくる！ いま台湾に興奮するワケ！

130 スポーツ科学・読本

最新理論から体力トレーニングの技術まで

生理学や物理学などの最新成果を楽しみながら、自分で実際に活用し、未知のパワーをひきだす本！

129 ザ・中学教師 子どもが変だ！

子どもはもはや、あなたの知っている子どもではない!!

大衆消費社会はいったいどのような子どもを生み出したのか？ 学校にはいま、こんな子どもがいる！

132 競馬ボロボロ読本

激走、激走、また激走！

ボロ勝ちの人もボロ負けの人もこの本を読め！ 競馬読本シリーズ、どと一の第5弾！

131 ライターの事情

ボーダレス化した「書く仕事」の現場を追う！

書いて稼ぐ人びとの生活と意見をたずねて、高度情報社会の足元に迫り来る液状化現象をさぐる！

134 編集の学校

知的生産能力を全開させる超・具体的な完全学習プログラム！ 新シリーズ「使える本」第1弾！

133 裸の自衛隊！

自衛官そのものに迫ることで初めて明らかになった、世界第三位の軍隊の驚くべき真実の数々！

136 闘う男！

アナクロニズムの逆襲

ケンカの現場からその考察に至るまで、一冊まるごとケンカの本！ 天下御免のラジカル・ファイト！

135 ニッポンと戦争

われわれは湾岸戦争をどう語ったのか？

ラジカルな平和主義から新保守主義まで、湾岸戦争をめぐってたれ流されたあらゆる論議を検証する。

138 宇宙論が怪しくなる本

現代宇宙論はどこまで信用できるのか！

宇宙論ブームの昨今。でもこの本はあなたの疑問に答えません。もっと宇宙論がわからなくなる本です。

137 研究する人生

「理系」の彼らは何をしているのか？

科学技術立国・日本の繁栄を黙々と支えてきた人びとの情熱、喜び、愛、不安、苦しみ、そして人生。

140 トランスフォーメーション・ワークブック

20日間で自分を変える自己改造メソッド

この本はあなたが自分で書き込みながら、隠れていた自分に気づき、自己変容していくための道具です。

139 恋をしない女たち

愛がわからない時代の、私たちの恋愛さがし

ダイヤルQ2で出会い、パソコン通信で不倫するフツーの女の子たちの愛の物語！

142 道具としての英語 暗記しないで使える英熟語

熟語を使いこなして、もっと豊かに表現するための「丸暗記主義反対！」の学習法。

141 巨人列伝

われわれを撹乱するケタはずれな大物たちの、とんでもない生き方に見る人間性の研究。

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621 ※定価はすべて税込みです。

映画宝島

異人たちのハリウッド

「民族」というキーワードで映画の見方が変わる/
別冊宝島編集部・編/定価1100円

出自と差別という問題から目をそむけたアメリカ映画論なんてみんなインチキだ！映画で見るアメリカ民族ガイド！

よいパソコン悪いパソコン

'92年前期版
大庭俊介＋PUG・著/定価1300円

パソコン最新情報&92年の話題満載！あなた自身の「ベストパソコン」を探せ!!パソコン選びはこれで決まり!!

ザ・ジャパニーズ・パワーゲーム

アメリカのどこが、なぜダメなのか？
ウイリアム・J・ホルスタイン・著
田原総一朗・監訳/定価2200円

この本はなぜアメリカで反感を買ったのか!?抵抗を感じながらも否応なく引き込まれる日本踏査リポート！

ジャズ・ウェスト・コースト

50年代ＬＡのジャズ・シーン
ロバート・ゴードン・著
上田篤・後藤誠・訳/定価2200円

日本人の聴き方は間違っている！新証言＋名盤・隠れ名盤の解説で綴る、50年代ウェスト・コースト・ジャズ史！

喜納昌吉チャンプルーブック

ハイサイ＋宝島編集部・編
定価1700円

喜納昌吉を通すと、リアルな沖縄、そして世界が見える。さあ～唄え～踊れ。永遠なる祭りは、あなたを無限の彼方へ。

このミステリーがすごい！

'92年版
別冊宝島編集部・編/定価490円

地味だった翻訳もの、読む本がない！とお嘆きの皆様、多様化するミステリー作品の中に、あなた好みの本がある。

マフィアの帝国

ファブリジオ・カルビ・著/
小林修・訳/定価1980円

いま、厚いヴェールに包まれたシチリア・マフィアの聖域が暴かれる！内側から描かれた迫真のノンフィクション!!

我ら家なき者

ホームレスと"冷たいアメリカ"
ステファニー・ホリーマン・写真/ビクトリア・アーウィン・文
ロバート・M・ヘイズ・序/関元・訳/定価1980円

数百万のアメリカ流民はなぜ生まれたのか？写真と文で報告される現代アメリカの病巣。衝撃のレポート!!

大川隆法の霊言

神理百問百答
米本和広・島田裕巳・著/定価980円

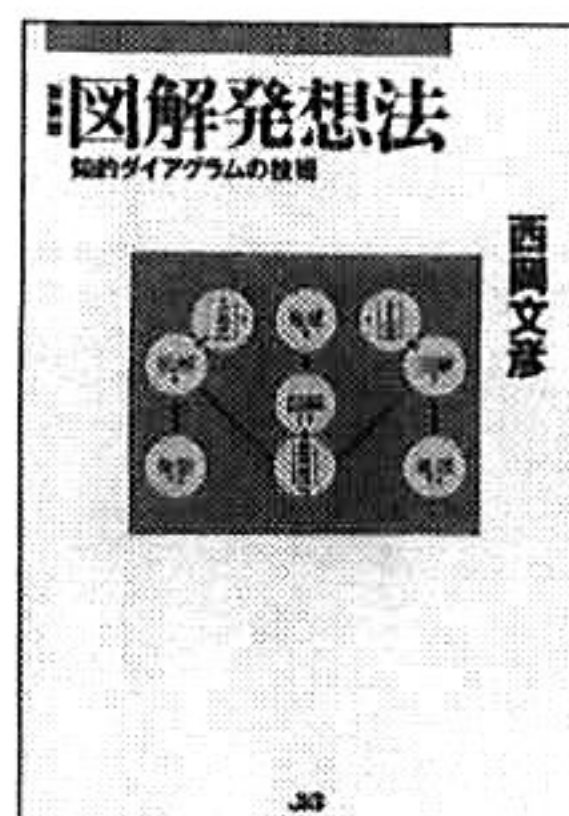
「幸福の科学」につけるクスリ。宗教にキョーミなくても大丈夫！信者も思わず笑う本。大川隆法主宰先生徹底解剖！

ベリンダの冒険

馬で駆けたスペイン～パリ1700マイル
ベリンダ・ブレイスウェイト・著
海都洋子・訳/定価1400円

21歳のベリンダは今日も乾いたスペインの大地を行く。目指すはパリ…。英国のノンフィクション・ベストセラー！

書店にない場合は当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621※定価はすべて税込みです。

“視覚の時代”の斬新な発想法！

新装版
図解発想法
知的ダイアグラムの技術
西岡文彦・著／定価1600円

視覚的な材料を駆使する知的ノウハウを体系化した手引き書！難解な哲学書の読解から広告企画の立案まで活用できる!!

編集的発想
〈知とイメージ〉をレイアウトする
西岡文彦・著／定価1300円

組み合わせ、編み出す工夫の中に創造性を発揮するための総合入門書。発想の技術書、創造力を刺激する読書論としても有用。

別冊宝島134
編集の学校
知的生産能力を全開させる
超・具体的な完全学習法プログラム／
別冊宝島編集部・編／定価1010円

企画力をつけたい、イマジネーションを広げたい、クリエイティブな仕事がしたい…。そんな人はこの学校で学びなさい！

「やりがい」の構造
自分的価値の発見術・実現術
西岡文彦・著／定価1030円

本当の「やりがい」を発見し、真の自己実現を果たす「方法」をはじめて明かす画期的な相談相手本！具体的に役に立つ!!

THE CD-ROM WORLD
マルチメディアの時代がやって来た／
GTV・制作／HIPPON SUPER／・編集
定価1200円

人間の素晴らしさを、どうやってマシンに、メディアに置き換えるか? 21世紀を迎えようとする今、贈る世界最先端レポート。

モニター上の冒険
SCANNING ADVENTURE
渡辺浩弐・著／定価1300円

現代の電脳ビジネスマン達のために、近未来メディア・シーンを解き明かしてみせる、新スタイルのビジネス書！

ISLAND BOOKS
能力トレーニングの技術
脳のパワーを全開にするための体系的な訓練法／
佐藤正弥・津村 喬・共著／定価1400円

身体としての脳を鍛えるためには脳の「体育」が必要である！自分でできる能力訓練の実際！人間の脳を「体育」する本。

ISLAND BOOKS
イメージ生産の技術
西岡文彦・著／定価1400円

イメージがつかめない、つくれない、伝わらない、伝えられない人に贈るワークブック！イメージ生産をマニュアル化した本。

書店にない場合は、書店にご注文になるか当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621※定価はすべて税込みです。

"現場"から―別冊宝島のルポルタージュ

定価各1010円(税込)

別冊宝島83

当世死に方事情

死と葬式とお墓をめぐる日本人の現在!

日本人の死に方が変わった!死という窓からニッポン人とその社会の変貌をみつめる、ちょっと変わった生態ウォッチング!

別冊宝島147

我らがバブルの日々

「ギャンブル資本主義」最前線からの証言!

バブルとともに生き、バブルとともに眠る企業戦士とアウトローたちの金とノルマと女とベンツの物語!!

別冊宝島133

裸の自衛隊!

おかしくてやがて悲しき、世界第三位の軍隊の実態

戦うべき敵もいなけりゃ守るべきものもない、こんな軍隊に誰がした!?実態を知らずして自衛隊を論ずるなかれ。

別冊宝島131

ライターの事情

ボーダレス化した「書く仕事」の現場を追う!

あらゆるメディアを根幹で支える「書く」という営み。「書く仕事」から高度情報社会の足元に迫り来る液状化現象をさぐる。

別冊宝島139

恋をしない女たち

愛がわからない時代の、私たちの恋愛さがし

ダイヤルQ² で出会い、バリ島のビーチで抱き合い、パソコン通信で不倫する、フツーの女の子たちの愛の物語!

別冊宝島124

セックスというお仕事

女が見た女を売る女たち

女にとって「セックス産業」って何?総勢20人の女性探査隊による、初の風俗探検記!

別冊宝島120

プロレスに捧げるバラード

神に選ばれし無頼感たちの物語!

プロレスは人類最古にして最も神聖なる文化(スポーツ)だ!流血と抗争を繰り返し、旅から旅へ、レスラーたちは今日も行く!

別冊宝島114

いまどきの神サマ

退屈な世紀末、人びとは何を祈る?

オウム真理教入信日記!東大卒の仏陀、大川隆法の正体!宗教・オカルト・精神世界ブームの最前線での従軍体験(フィールド・ワーク)!

別冊宝島112

男が危ない!?

「男が立たない」時代の男たち!あなたは「男」を続けられますか?

男らしさという価値観の変化にとり残され、女の時代の中で孤立無援の男たち。男の語られ方が今、あらためて問われている。

別冊宝島107

女がわからない!

男には理解できなくなってきた「女」の現在をめぐるフィールドワーク!

女について、これまで誰も語らなかったことがいっぱいある!女について、いろんな男が考えたこと。

書店にない場合はご注文になるか当社までお問い合わせ下さい。☎03-3234-4621

別冊宝島バックナンバー常設店一覧

東京

〔千代田区〕三省堂書店神田本店／書泉ブックマート／書泉グランデ／東京堂書店／丸善お茶の水店／岩波BSC／いずみ書店南口店／前田書林／BM市ケ谷／山脇ブックガーデン／パイオニアブックス／旭屋水道橋店／プレスセンター丸善／飯田橋書店／ブックス松田屋飯田橋店／改造社国際ビル店／明正堂秋葉原店／法政大学市ケ谷生協店／麹町書店／山王書房〔中央区〕八重洲ブックセンター／近藤書店本店／旭屋銀座店／福家書店／教文館〔港区〕モノレール山下書店／書原新橋店／文鳥堂新橋店／新橋駅書店／青山BC六本木店／誠志堂東日ビル店／イグレグ書房／金松堂／文鳥堂赤坂店／流水書房共同通信店／アシーネ芝公園／リーブルダール／流水書房青山店／福家書店高輪店〔新宿区〕紀伊國屋本店／西武新宿ブックセンター／新星堂新宿NSビル店／福家書店新宿センタービル店／福家書店野村ビル店／啓文堂／風書房／ぶっくらんど／芳林堂書店高田馬場店／ソーブン堂書店高田馬場店／いちかわ書店／ラムラ芳進堂／文鳥堂飯田橋店／ブックスサカイ深夜プラス1／早大生協コーププラザ店／早大生協文学部店／丸正バラエティブックス／オーブックス／三省堂高田馬場店／未来堂書店／ブックス高田馬場／鈴木書房／ブックスミヤ／ヒマラヤ書店／工学院大学生協／あゆみブックス早稲田店／三省堂新宿西口店／三省堂サウスブックポート／雄峰堂北新宿店〔文京区〕東大生協本郷書籍部〔台東区〕明正堂中通店／リブロ浅草／明正堂丸井上野店〔墨田区〕リブロ錦糸町／ブックストアー談錦糸町店〔品川区〕明屋五反田店／リブロ大森／文星堂大崎ニューシティ店／アイブックス目黒店／浜田山書房目黒店／芳林堂大井町店／三省堂大井町店／博文堂大井町店〔目黒区〕恭文堂／三省堂自由ヶ丘店／東大駒場生協／ブックス中川〔大田区〕栄松堂蒲田店／ACT4／アクトブックスサンカマタ／いけだ書店大森／龍文堂駅ビル店〔世田谷区〕博文堂書店／ブックメイツ経堂店／近藤書店／サンマーク書店／アイブックス祖師谷店〔渋谷区〕三省堂渋谷店／紀伊國屋渋谷店／大盛堂／旭屋渋谷店／放文社／全国書房／リブロ渋谷／ブックストア談原宿店／金港堂／青山学院大学生協〔中野区〕オーブックス沼袋店／明屋／はた書店／雄峰堂書店新井薬師店／青林堂／あかつき書店東中野店〔杉並区〕新正堂下井草／現代書店／書原杉並店／書楽／新星堂荻窪店／ブックセンター荻窪／八重洲BC荻窪ルミネ店／積文館荻窪店／明大和泉生協／サンブックス浜田山／浜田山書房桜上水店／ブックガーデン／西荻パームガーデン／高円寺文庫センター／湘南堂／今野書店／信愛書店〔練馬区〕青山堂／リブロ光ヶ丘／雄峰堂上石神井店／JBB練馬店〔豊島区〕リブロ池袋／パルコ三省堂／旭屋池袋店／芳林堂書店池袋店／書原椎名町店／武蔵書店／新栄堂本店／新栄堂アルパ店／成文堂巣鴨駅前店／寿楽洞東急ハンズ店〔板橋区〕文教堂西台店／ブックタウン／博文堂書店大山店〔北区〕日鳥書房／日鳥書房アピレ店／昭和堂〔足立区〕文教堂竹ノ塚店／近代書店／良文堂あやせ店〔葛飾区〕詩泉堂／文教堂青戸店〔江戸川区〕弘栄堂書店小岩店／あゆみブックス瑞江店／明和書店〔武蔵野市〕弘栄堂／パルコBC吉祥寺店／紀伊國屋東急店／陽光ブックス〔三鷹市〕東西書房／三省堂三鷹店〔小金井市〕東西書房小金井店／かごや／文教堂小金井店／文教堂新小金井店〔調布市〕パルコBC調布店／真光書店／真光書店南口店／かもしだ書店〔府中市〕啓文堂府中店／啓文堂中河原店〔国分寺市〕三成堂国分寺店〔国立市〕東西書店／増田書店〔田無市〕田無書店〔保谷市〕正育堂本店〔小平市〕文教堂小平店／文教堂新小平店／一橋大生協店／朋文堂書店〔東村山市〕文教堂東村山店／丸山書房／あゆみbooks東村山店〔立川市〕オリオン書房本店／オリオン書房ウィル店／BCリブレ若葉町店〔日野市〕啓文堂書店高幡店／啓文堂書店豊田店／三成堂豊田店〔八王子市〕くまざわ書店／三成堂／啓文堂八王子店／文教堂めじろ台店／中央大学生協／啓文堂高尾店／ブックダム／パル三成堂めじろ台店〔福生市〕文教堂福生店／ブックスタマ〔青梅市〕ブックスタマ千ヶ瀬店／ブックス西東京〔多摩市〕啓文堂多摩センター店／くまざわ書店桜ヶ丘店／東西書房聖蹟桜ヶ丘〔町田市〕有隣堂町田店／文教堂鶴川店／山下書店／久美堂小田急店／久美堂東急ハンズ店／福家書店／文教堂南成瀬店／文教堂小川店／久美堂旭町店〔昭島市〕ブックスイケダモリタウン店〔稲城市〕住吉書房稲城長沼店〔瑞穂町〕ブックス武蔵瑞穂店〔羽村町〕ブックスタマ小作店

神奈川

〔横浜市〕有隣堂イセザキ店／有隣堂西口ダイヤモンド店／有隣堂東口ルミネ店／横浜そごうブックセンター／ジョイナス栄松堂／丸善ブックメイツ横浜店／神奈川大学生協／横浜書店／文教堂青葉台南口店／キディランド横浜関内店／ブックスシーガル／ブックスキタミ港南台店／大蔵書店／浜書房バーズ店／浜書房サンモール店／ブックスキタミ網島店／有隣堂戸塚店／戸田書店能見台店／横浜市立大学生協／関東学院大学生協／天一書房綱島店／横浜国立大学生協／慶応義塾大学生協日吉店／アーバン文華堂／文教堂栄上郷店／文教堂東戸塚店／文教堂三ッ境店／文教堂弥生台店／文教堂戸塚南店／文教堂すすき野店／文教堂横浜本牧店／天一書房鴨居店〔川崎市〕住吉書房小杉店／有隣堂川崎アゼリア店／文教堂溝ノ口店／大塚書店百合ヶ丘駅ビル店／リブロ川崎／有隣堂BE店／丸善ブックメイツ／文教堂麻生店／文教堂上作店〔横須賀市〕平坂書房WALK店／平坂書房駅前店／リブロ横須賀／平坂書房本店〔藤沢市〕リブロ藤沢／コスタブックセンター／有隣堂藤沢店／文教堂六会店／文教堂辻堂店／ブックセンターよむよむ藤沢湘南店〔鎌倉市〕島森書店／島森書店大船店／目耕堂／文教堂鎌倉店〔茅ヶ崎市〕川上書店ルミネ店／ブックセンターよむよむ茅ヶ崎店〔平塚市〕文教堂四之宮店〔伊勢原市〕稲元書店／伊勢原書店〔秦野市〕内田屋書房秦野店／伊勢原書店秦野店／伊勢原書店渋沢店〔小田原市〕伊勢治書店／文教堂小田原店／ブックス・カネコ〔相模原市〕文教堂星ヶ丘店／ブックスアミ／文教堂相模大野店／ブックメイツ相模原店／文教堂相模台店〔大和市〕ブックスオオトリ大和店／文教堂高座渋谷店〔厚木市〕有隣堂厚木店／石村集文堂駅ビル店／内田屋書房本店〔座間市〕ワコー書店相武台店〔城山町〕文教堂城山店／伊勢原書店城山店〔葉山町〕文教堂葉山店〔大磯町〕文教堂平塚店

千葉

〔千葉市〕パルコ改造社／中島書店／セントラルプラザ多田屋／キディランド／千葉大学生協／文教堂小倉台店〔市川市〕アイブックス／大杉書店／くまざわ書店本八幡店／BCパティオ〔船橋市〕三省堂西船橋店／リブロ船橋／旭屋船橋店／弘栄堂／パルコ芳林堂津田沼店／文教堂金杉店／ときわ書房〔習志野市〕多田屋ブックス津田沼〔松戸市〕辰正堂駅ビル店／堀江良文堂／ユーカリ書林／オークスBCきよしケ丘〔柏市〕新星堂／世紀堂／スカイプラザアサノ〔市原市〕文教堂市原店〔佐倉市〕ブックマートさくら〔浦安市〕文教堂浦安駅店〔八千代市〕文教堂八千代台店

埼玉

〔浦和市〕須原屋／須原屋コルソ店／一清堂／埼玉大生協／岩淵書店〔大宮市〕押田謙文堂／新栄堂／ブックセンター押田／三省堂ブックポート〔与野市〕文楽書房〔蕨市〕須原屋蕨店〔上尾市〕ロダン合格堂／明林堂上尾店〔朝霞市〕東武ブックス朝霞台店〔新座市〕ブックスキャメル／タナブックス〔志木市〕新星堂〔川越市〕マインブック／いけだ書店〔所沢市〕芳林堂／白樺書房／早稲田書房／パルコBC新所沢店／いけだ書店／ブックランドタンデム1／文教堂所沢店／B.Cよむよむ西狭山ケ丘店〔狭山市〕文教堂狭山店〔入間市〕文教堂入間店〔大井町〕ブックピア〔坂戸市〕雄峰堂坂戸店〔越谷市〕住吉書房南越谷店〔春日部市〕文教堂春日部店／酒井書店中央店〔秩父市〕時習堂〔川口市〕文教堂東川口店／岩淵書店芝店〔東松山市〕ブックス富士見〔熊谷市〕須原屋熊谷店〔草加市〕竹島書店／高砂ブックス〔八潮市〕竹島書店〔三郷市〕竹島書店〔日高市〕B.Cひまわり

北関東

〔宇都宮市〕amsブックセンター／新星堂〔小山市〕進駸堂駅ビル店〔前橋市〕煥乎堂／リブロ前橋／文真堂問屋町店／文真堂本店／文真堂下小出店〔高崎市〕戸田書店高崎店／高崎新星堂／サカヰ書店／ATOZ荒縄店〔太田市〕文真堂新井店〔藤岡市〕戸田書店藤岡店〔水戸市〕川又書店／川又書店駅前店／ツルヤBC／リブロ水戸／AtoZ水戸店〔土浦市〕白石書店駅ビル店〔牛久市〕ブックランドカスミ牛久〔勝田市〕武石書店〔つくば市〕友朋堂／リブロつくば／筑波大学丸善〔鹿島町〕文教堂鹿島店〔岩井市〕文教堂岩井店〔潮来市〕文教堂潮来店〔日立市〕B.B伊勢甚日立店

北海道

〔札幌市〕富貴堂東急店／旭屋札幌店／弘栄堂札幌駅店／弘栄堂地下鉄店／明正堂そごう店／北大学生書房クラーク店／北大学生書房教養店／リーブルなにわ／紀伊國屋札幌店／明正堂12号店／本の店岩本北野店／本の店岩本平岸店／五番館西武書籍／明正堂石狩街道店／本の店岩本琴似店／本の店岩本新道店／ビブロス新琴似店／蔦屋清田店〔函館市〕西武ブックセンター／魁文舎ブックセンター／ブックハウス大文堂／森文化堂〔旭川市〕三省堂／旭川富貴堂本店〔苫小牧市〕旭屋苫小牧店〔帯広市〕信正堂藤丸店／ザ・本屋さんパレット店／ザ・本屋さん東店〔釧路市〕釧路BC〔室蘭市〕室蘭工大〔小樽市〕ビブロス小樽朝里店〔広島町〕ブックプラザ北広島店〔江別市〕ブックプラザ江別

東北

〔青森市〕成田本店／成田サンロード店／いけだ書店／成田本店つくだ店〔弘前市〕紀伊國屋弘前店／今泉本店／弘前大学文京店〔盛岡市〕東山堂ブックセンター／岩手大学生協〔秋田市〕あぷみ書房／秋田大学生協／キャッスルブックセンター〔山形市〕八文字屋／船山書店／山形大学生協／こまつ書店〔仙台市〕金港堂ブックセンター／金港堂泉店／丸善141店／アイエ本店／アイエ駅前店／八重洲書房／丸善／高山書店／高山書店東一店／ブックスなにわ／東北大生協文系店／東北大生協理薬店／東北大生協工学部店／東北大生協教養店／ブックスみやぎ〔福島市〕岩瀬書店コルニエツタヤ店／博向堂〔会津若松市〕会津ブックセンター〔郡山市〕東北書店／郡山ブックストアー

中部・北陸

〔甲府市〕リブロ甲府／朗月堂書店／文教堂甲府店〔伊那市〕ニシザワ書籍部〔松本市〕松本駅改造社／ブックスロクサン／鶴林堂／パルコブックセンター／信州大松本生協〔長野市〕平安堂長野店／平安堂吉田店／平安堂長野大橋店／長谷川書店／改造社〔須坂市〕平安堂須坂店〔岐阜市〕自由書房本店／自由書房パルコ店／岐阜大学生協／自由書房鷺山店／大洞堂岐阜東店〔美濃加茂市〕丸圭書店／三洋堂みのかも店〔多治見市〕三洋堂多治見店〔大垣市〕大洞堂ブック258店〔関市〕三洋堂関店〔瑞浪市〕三洋堂瑞浪〔金沢市〕うつのみや片町店／金沢大生協／福音館／北国書林香林坊本店／大和ブックセンター〔野々市町〕王様の本本店〔新潟市〕紀伊國屋新潟店／北光社／セゾン・ド・文信堂／萬松堂／新潟大生協／文信堂書店とやの店／日軽戸田書店／ブックマン〔長岡市〕ブックスアシタバ／ブックセンター長岡／覚張書店／貴光堂〔上越市〕JBB平安堂上越店〔三条市〕ブックスササハラ〔富山市〕清明堂書店／

東海

瀬川書店／清明堂マリエ店／booksなかだ本店／booksなかだ豊田店／booksなかだ奥田店／文苑堂根塚店〔高岡市〕文苑堂本店〔福井市〕福井大生協〔敦賀市〕千田書店
〔一宮市〕カルコスブック／文泉堂／文正堂昭和店〔春日井市〕勝川三洋堂／至誠堂アオキ〔小牧市〕三洋堂〔尾張旭市〕ブックスかまくら102〔安城市〕竹内書店〔岡崎市〕サン書房〔刈谷市〕ブックセンター名豊／三洋堂刈谷店／愛知教育大学生協書籍部〔西尾市〕三愛堂〔豊橋市〕精文館書店／豊川堂〔豊田市〕三洋堂若林店／三洋堂梅坪店／豊田精文館〔津市〕別所書店南郊店／別所書店11ビル店／三重大学生協〔松阪市〕別所書店船江店〔四日市市〕白揚本店／シェトウ白揚〔鈴鹿市〕シェトウ白揚スズカ〔静岡市〕江崎書店／静岡谷島屋／戸田書店SBS屋店／吉見書店／戸田書店曲金店〔沼津市〕宝塚マルサン書店／吉野屋雑誌店〔函南町〕戸田書店函南店〔富士市〕戸田書店〔富士宮市〕戸田書店〔清水市〕戸田書店本店〔焼津市〕戸田書店／谷島屋大富店〔藤枝市〕藤枝江崎書店／戸田書店〔吉田町〕TANAKA BOOKS〔袋井市〕戸田書店〔浜松市〕山本書店有楽街店／山本書店ニチイ店／谷島屋書店メイワンビル店／谷島屋なかざわ店／戸田書店幸店／エイチビー

名古屋

〔北区〕名鉄栄進堂／サンヨーB&D〔東区〕谷口正文館〔昭和区〕アスコ書苑／杁中三洋堂本店〔瑞穂区〕新端有隣堂〔中村区〕三省堂名古屋店／近鉄星野〔中区〕パルコブックセンター名古屋店／丸善ブックメイツ／丸善／福文堂〔千種区〕ちくさ正文館／池下三洋堂／ウニタ書店／名古屋大生協南部／名古屋大生協北部〔名東区〕白樺書房／ポランの広場〔天白区〕ヴィレッジバンガード／大洋書店天白店〔熱田区〕泰文堂日比野店〔緑区〕三洋堂鳴海店

大阪

〔中央区〕ヒバリヤナンバ店／ナンバブックセンター／旭屋ナンバ店／髙島屋書籍・鉢の木／心斎橋アセンス／ブックスダイトー／丸善松坂屋店〔北区〕旭屋書店堂島地下街店／ヒバリヤ朝日ビル店／紀伊國屋梅田店／旭屋本店／清風堂／旭屋書店梅田地下街店／リブロ梅田／大栄書店〔阿倍野区〕ユーゴー書店／旭屋アベノ店／福家ベルタ店〔淀川区〕ブックストア談新大阪店〔都島区〕駸々堂京橋店／大阪書店／博文堂京橋〔吹田市〕関西大学生協／文学館南千里店〔池田市〕らんぷや／アシーネ池田店〔箕面市〕大阪外語大生協／ブックセンターOS〔豊中市〕佐々木創文堂／緑風堂／大阪大学生協豊中店／ブックスRIZA〔茨木市〕和作屋書店〔堺市〕旭屋堺東店／ブックスファミリア〔東大阪市〕フタバ長瀬店／経法大書店／栗林レッド店／ヒバリヤ本社／近畿大学生協／ヒバリヤロンモール店〔八尾市〕リブロ八尾／ミヤコ書店／西川書店〔富田林市〕ジャスコ金剛店／ブックス・オリオン〔枚方市〕水嶋くずは店／水嶋枚方店／学運堂／ブックフォーラムくずは〔泉佐野市〕ブックス・パル／イワキ泉佐野店〔羽曳野市〕ブックスファミリア羽曳野店〔和泉市〕アシーネ光明池店〔寝屋川市〕水嶋寝屋川店

関西

〔京都市〕洛陽書店／洛陽女子大／同志社大生協今出川店／アオキ書店／大垣書店／立命館大生協／丸山書店高野店／リーブル京都烏丸店／丸山書店千中店／リーブル京都本店／ヤサカメイト／春琴堂／リーブル京都銀閣寺店／京都大学生協中央店／ブックプラザ優／京都駸々堂京宝店／京都駸々堂三条店／オーム社河原町店／京都書院ヴァージョンB／ふたば書房河原町店／オーム社外大／サン書房／ブックストアー談京都店／ジュンク堂京都店／アバンティBC／いのしし堂／ふたば書房山科店／マルヤマ書店山科店／ブックス新京都／オーム社竹田店／キャップ桃山店〔城陽市〕オレンジポート城陽店〔田辺町〕同志社大生協田辺店〔宇治市〕駸々堂トライアングル／キャップ宇治店／ブックセンター万葉店〔八幡市〕ビブロス八幡店〔亀岡市〕ビブロス亀岡店／ブックイン
〔神戸市〕ジャパンブックス／甲南大生協／南天荘メイン六甲店／神戸大学生協学館店／神戸大学生協LANSBOX店／ジュンク堂サンパル店／ジュンク堂センター街店／流泉書房三宮店／コーベブックスさんちか店／日東館書林／海文堂／コーベブックスサンコウベ店／ブックフォーラムメトロこうべ店／ブックフォーラムジョイプラザ店／すま書房／神戸市外国語大生協／流泉書房パティオ店／ジュンク堂学園都市店／ビブロス須磨友ケ丘店／ブックフォーラム西神中央店／アシーネオーパ店〔西宮市〕ビブロス西宮店／関西学院大生協／ヤングタウンなるお〔加古川市〕ブックフォーラム加古川店／新興書房加古川店〔明石市〕トッパンセールズ〔尼崎市〕リブロ塚新／タイムブック〔姫路市〕誠心堂本店／誠心堂書店辻井店／ブックスサンヨー田寺店／〔奈良市〕駸々堂奈良大丸店〔大和郡山市〕啓林堂郡山店／水嶋奈良店〔生駒市〕ジャパンブックス南〔和歌山市〕宮井平安堂／イワキ狐島〔大津市〕リブロ大津／ビワコタワーBC／ブックス丸山瀬田店〔近江八幡市〕マイブック中村／ブックス八幡〔長浜市〕書店Aアカデミー

中国・四国

〔岡山市〕紀伊國屋岡山店／細謹舎／丸善岡山店／泰山堂鹿田店／泰山堂本店／黎明書院／飛行船北方店／AZ岡南店／ビブロス岡山〔倉敷市〕BS啓文社／飛行船ライブ倉敷店／三友書房〔広島市〕紀伊國屋広島店／金正堂／ニシヤ書店／広文館本通り店／パル金正堂可部店／ブックスラフォーレ／井口ブックセンター／啓文社コア店／フタバ図書八丁堀店〔廿日市市〕啓文社廿日市店〔東広島市〕ブックセンターアオイ八本松店〔福山市〕啓文社福山店／BC啓文社／サントーク広文館／啓文社コア店／啓文社キャスパ店／ビブロス福山木之庄店／啓文社サンピア店〔出雲市〕BCタケダ〔松江市〕今井書店本店／ブックセンター今井／BC今井学園通り店〔米子市〕今井書店米原店／今井書店本通り店／今井書店皆生店〔鳥取市〕富士書店本店／定有堂／鳥取BC／ブックランド富士書店湖山駅前店／ブックランド富士書店吉成店／ブックランド富士書店田園町店／鳥取大学生協〔山口市〕文栄堂山口大学前店／五十部誠文堂〔下関市〕ブックス中野〔宇部市〕ブックワールド〔高松市〕宮脇本店／宮脇円座店／宮脇築港店〔高知市〕富士書店〔徳島市〕アダムと島書房／BC平惣／阿波屋書店／小山助学館バイパス店〔津山市〕津山BC本店／津山BC駅前店〔松山市〕紀伊國屋松山店／明屋本店／明屋大街道店／明屋城北店／丸三書店／愛媛大学生協／松山大学生協

九州

〔福岡市〕九州大学生協理系／明林堂箱崎店／紀伊國屋福岡店／積文館新天町／りーぶる天神／アニマート原／黒木書店片江店／福岡金文堂大橋駅／福家書店福岡店／明林堂野芥店／アニマート長住〔那珂川町〕アニマート那珂川〔北九州市〕福家書店北九州店／金栄堂／ナガリ書店／ブックセンター金山堂守恒店／小倉ブックセンター／明屋小倉店／北九州大学生協／旭屋北九州店／八幡井筒屋BC／九州工業大学生協／グリーンバレー／カルパーク平野／白石書店本城店〔久留米市〕たがみ書店／エマックスたがみ／ブックあんとく〔粕屋町〕仲原ブックセンター〔大牟田市〕麒麟書店田隈店／明林堂南大牟田店〔三橋町〕Book Cityやまと〔田川市〕ブックステーション〔飯塚市〕ブックステーション〔長崎市〕ステラ好文堂／遊ING長崎本店／好文堂新大工町店／スペースエム城栄店〔佐賀市〕積文館ディトス店／積文館佐賀松原店／金華堂本店／北バイパス金華堂／明林堂佐賀北店／明林堂南佐賀店／明林堂嘉瀬田店〔熊本市〕紀伊國屋熊本店／まるぶん／明林堂武蔵ケ丘店／明林堂北部店／明林堂長嶺店／明林堂竜田口店〔鹿児島市〕春苑堂本店／鹿児島大中央生協／ブックスみすみ南港店／春苑堂ブックプラザ／ブックセンターふこく〔大分市〕ブックタウン・カク／明屋書店大分本店／パルコBC／本の開書堂〔中津市〕明屋中津店〔別府市〕明林堂別府本店／明林堂鶴見店／明林堂青山店〔延岡市〕明屋延岡浜町店〔宮崎市〕中央田中書店／明屋浮ノ城店／明屋宮崎店／りーぶる宮崎〔清武町〕見開読タナカ〔那覇市〕球陽堂／OBB末吉店／文教図書パレット店〔浦添市〕OBB牧港店／沖縄宮脇書店〔宜野湾市〕田園書房宜野湾店／宮脇書店〔沖縄市〕宮脇書店美里店〔西原町〕琉球大学生協／西原球陽堂書房〔北谷町〕OBBバンビー店

小社へのご注文は、定価に送料260円をそえて現金書留か郵便振替(郵便為替も可)にて下記までご送金下さい。
〒102 東京都千代田区一番町25　宝島社通信販売係 ☎03(3221)1994 振替＝00170-1-170829(株)宝島社

見えない時代を照らし出す!

我ら家なき者

ホームレスと"冷たいアメリカ"

ステファニー・ホリーマン・写真
ビクトリア・アーウィン・文
ロバート・M・ヘイズ・序/関元・訳
定価1980円

数百万のアメリカ流民はなぜ生まれたか？職を失い、家を追われて漂流する同胞をアメリカは切り捨てるのか!?

マフィアの帝国

ファブリジオ・カルビ・著
小林修・訳
定価1980円

ファミリーのボスが「沈黙の掟」を破って語った闇の世界！いま、厚いヴェールに包まれたシチリア・マフィアの聖域が暴かれる。

みんな、やせることに失敗している

森川那智子・著/定価1100円

あなたはなぜ、いつもダイエットに失敗してるの？ダイエットを続けていれば、絶対にやせられるの？ダイエットに傷ついたあなたへの21章。

天使の王国

「おたく」の倫理のために

浅羽通明・著
定価1500円

言葉が失われ、身体が稀薄化し、そして「欲望」が見えなくなった！高度消費社会の「現在」を読み解く、「おたく」世代の思想家の誕生！

ビジネスマンの精神病棟

浅野誠・著/定価1400円

日本の繁栄を支えてきたサムライたちの人生はなぜ挫折したのか!?心病める12人の無器用な男たちの人生の軌跡を描く「愛と冒険」の物語！

洗脳体験

二澤雅喜・島田裕巳・著
定価1250円

あなたの親しい隣人たちが泣きわめき、踊り狂い、抱きあって「ちがう自分」に変わっていく「自己開発セミナー」潜入体験記！サイコ・ノンフィクション。

ベリンダの冒険

馬で駆けたスペイン〜パリ1700マイル

ベリンダ・ブレイスウェイト・著
海都洋子・訳/定価1400円

21歳のベリンダは今日も乾いたスペインの大地を行く。めざすはパリ。現代のおとぎ話と大評判になった英国のノンフィクション・ベストセラー。

モダン・マナーズ

自分流に生きるための常識を超えた処方箋

P・J・オローク・著
渋谷太郎・訳/定価1950円

有名人との交際術から、デート、結婚、人生の幕の引き方まで。A・ビアスの再来と評されるP・J・オロークが笑いとばす世紀末マナー読本！

書店にない場合は、書店にご注文になるか当社までお問い合わせ下さい。※定価は全て税込みです。

おたくの本

PART❶ おたくの現場

◐ゲーマー超人伝説
異能戦士たちの聖戦！

◐アイドリアン
C級アイドルに人生を捧げた聖職者！

◐アクション・バンダー
汚れなき無差別テロ！

◐カメラ小僧
パンチラと生写真に賭けた青春！

◐俺たちのデコチャリ
子どもたちの神殿！

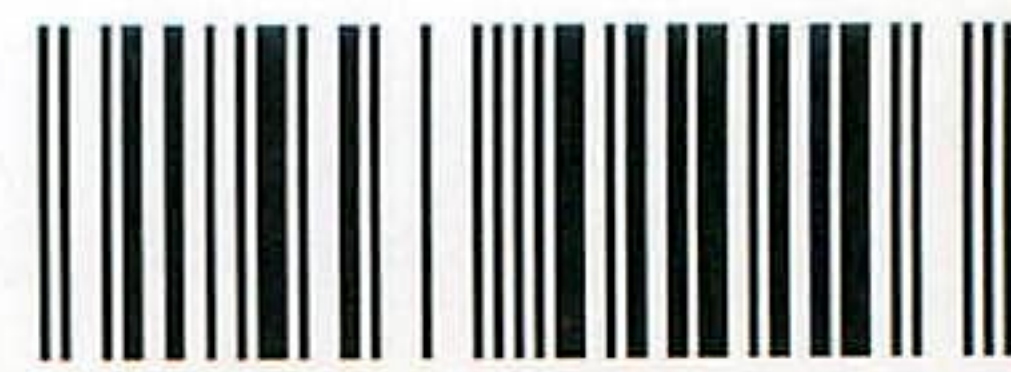
◐コミケット
世界最大のマンガの祭典！

◐僕が「おたく」の名付け親になった事情

PART❷ おたくという第三の性

◐ロリコン、二次コン、人形愛
仮空の美少女に託された共同幻想！

◐やおい族
美少年ホモマンガに群がる永遠の少女たち！

◐ロリコンとやおい族に未来はあるのか!?

9784796691048
ISBN4-7966-9104-9
C9436 P1010E
1919436010103
雑誌65988-57
定価1010円(本体981円)